

長崎県文化財調査報告書第214集

都市計画道路池田沖田線街路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

Ⅱ

竹松遺跡

2017

長崎県教育委員会

巻頭写真



SC01完掘状況(北から)



C区全景(南東から)

序 文

本書は、都市計画道路池田沖田線街路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として平成26年度(2014)に実施した竹松遺跡の発掘調査報告書です。

長崎県教育委員会では、都市計画道路池田沖田線街路改築工事について、建設計画当初から可能な限り埋蔵文化財の保存に努めるべく、その取扱いについて県央振興局都市計画課と数回に渡り協議を行ってきました。その結果記録保存を前提とした発掘調査を実施する運びとなった次第です。

今回の調査では多くの遺構、遺物が出土しました。中でも弥生時代後期の住居跡からガラス小玉が181個出土し、また中世後半から近世初めの水田跡、畝状遺構などの生産遺構が検出されました。こうした遺構、遺物は当時の竹松遺跡周辺の地域社会を復原する上で極めて重要な歴史資料です。

埋蔵文化財は、地域の歴史を知るうえで欠かすことのできない文化遺産であり、生の教育教材でもあります。本書に収録された資料が永く保存され、文化財に対する愛護思想の普及、また学校教育、生涯学習及び学術研究の分野においても役立つことを願うものです。

本書を刊行するにあたり、県央振興局都市計画課、発掘作業に従事した方々をはじめ多大なご尽力をいただきました関係各位に対し厚く御礼申しあげます。

平成29年3月

長崎県教育委員会教育長
池 松 誠 二

例 言

1. 本書は、都市計画道路池田沖田線街路改築工事に伴う埋蔵文化財調査報告書である。調査は長崎県県央振興局都市計画課から依頼を受け、長崎県教育庁新幹線文化財調査事務所が平成25年度から29年度までの計画で実施している。
2. 本書は平成26年度に発掘調査を実施した竹松遺跡TAK201408調査区の資料を収録した。
3. 竹松遺跡201408調査区は、長崎県大村市竹松町1042番1他に所在する。発掘調査面積は2,900㎡。調査期間は平成26年7月1日～平成27年1月14日まで実施した。発掘調査担当は文化財保護主事山梨千晶、文化財調査員中川潤次である。尚事前の範囲確認調査は平成25年12月3日～12月26日まで長崎県教育庁新幹線文化財調査事務所文化財保護主事山梨千晶、文化財調査員新井実和が実施した。範囲確認調査面積は86㎡である。
4. 本書に掲載した遺物実測図と遺物写真の縮尺は不統一である。
5. 遺構実測図は、竹松遺跡特定埋蔵文化財発掘調査共同企業体、国際文化財株式会社、本荘剛志、佐藤洋、二川目直人、川口洋次郎、星野賢一、株式会社三基、古賀朋緒が中心となり1/10、1/20、1/100を基本として実施した。遺物実測図は中川潤次、久田ひとみ、久保田由佳、整理作業員の協力を得た。また一部剥片石器、石鏃等の遺物実測、デジタルトレースは株式会社九州文化財研究所に委託した。
6. 堆積土層の土色は「新版 標準土色帖」農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修を使用し、すべて目測で実施した。
7. 本書で使用した方位は座標北である。
8. 本書で使用した遺構写真は山梨千晶、中川潤次。遺物写真は新井実和が実施した。なお遺物の写真撮影について長崎県立大村城南高等学校林隆広教諭より指導助言を頂いた。
9. 植物珪酸体分析、花粉分析は株式会社古環境研究所に依頼した。
10. ガラス小玉の蛍光X線分析、レントゲン分析、顕微鏡写真は、長崎県埋蔵文化財センター主任文化財保護主事片多雅樹、文化財調査員今西亮太の指導の下、長崎県埋蔵文化財センター精密分析室で実施した。またガラス小玉の製作技法、色調、素材等については九州大学附属図書館付設教材開発センター谷澤亜里学術研究員から指導、助言を得た。
11. 石材の鑑定は長崎大学教育学部数理情報講座地理学教室隅田祥光准教授の指導、助言を得た。
12. 本書の執筆は山梨千晶、鮫島葵、片多雅樹、中川潤次が行い、編集は新井実和の協力を得て中川潤次が行った。第Ⅰ章第1節(3)、第4節、第Ⅲ章第1節(1)、第2節(1)は山梨が行い、第Ⅳ章第2節は鮫島葵、片多雅樹、第3節は片多が、その他は中川が行った。
13. 遺跡、遺構の略号は次の通りである。TAK:竹松遺跡 SP:柱穴 SK:土坑 SC:竪穴住居跡 SD:溝 SN:水田、畑 NR:自然流路 TP:試掘坑
14. 竹松遺跡201408調査区から出土した遺物、実測図面、写真等の記録資料は大村市久原2丁目1491に所在する長崎県教育庁新幹線文化財調査事務所久原現場事務所に保管している。
15. 遺跡調査番号は「TAK201408」である。
16. 報告書作成にあたり、長崎県考古学会副会長宮崎貴夫、大分県埋蔵文化財センター小柳和宏

竹田市教育委員会、日田市教育委員会、熊本県教育委員会宮崎敬士、中津市教育委員会、豊後大野市教育委員会、福岡県豊前市埋蔵文化財センター坂梨祐子、福岡県上毛町教育委員会塩浜浩之、平戸市文化交流課北島聖美、南島原市教育委員会、雲仙市教育委員会をはじめ多くの方々からご指導、ご教示を頂いた。記して謝意を申し上げます。

本書の作成にあたり以下の文献を土器等の編年の基礎資料として用いた。

縄文土器:水ノ江和同『九州縄文文化の研究』雄山閣2012

弥生土器:柳田康雄『九州弥生文化の研究』学生社2002

甕棺 :橋口達也『甕棺と弥生時代年代論』雄山閣2005

土師器 :柳田康雄「九州土師器の編年」『九州弥生文化の研究』学生社(初出1991)2002

須恵器 :舟山良一編『牛頸窯跡群 総括報告書』大野城市文化財報告書第77集2008

貿易陶磁:山本信夫『大宰府条坊XV』(太宰府市の文化財第49集)太宰府市教育委員会2000

瓦質土器:荻野繁春『解説 東播産須恵器系陶器の編年』私家版1988

石鍋 :木戸雅寿「石鍋の生産と流通について」1993(中世土器研究会編1993『中近世土器の基礎研究9』所収)

凡 例

遺構、土器、石器、金属器の実測図は全てデジタルトレースで実施した。各遺構、遺物の縮尺線種、レイヤーは以下の通りである。

《縮尺・線種・レイヤーについて》

【土器】(S=1/3)

1外形線:0.3mm 2稜線:0.2mm 3断面線:0.5mm 4断面見通し:0.3mm 5破断面:0.3mm

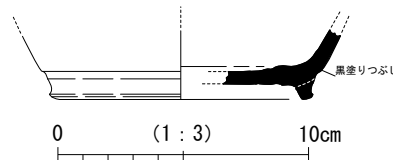
6中心線:0.3mm 7推定線:0.3mm 8成形線:0.1mm 9指圧痕:0.1mm

断面と見通し線間を5mm空ける。

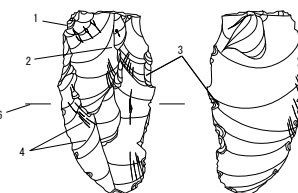
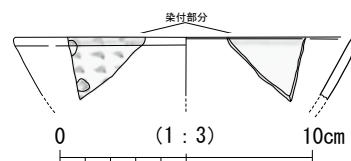
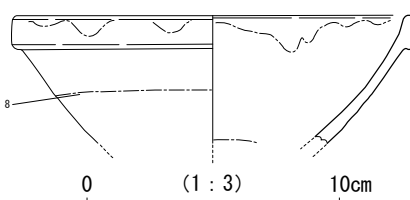
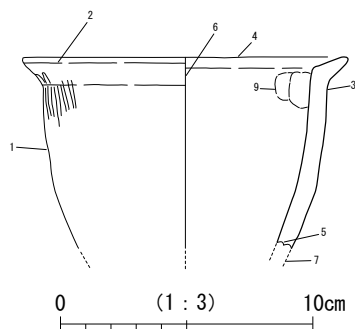
稜線は器の外からうちに向かい長さを変える。線間隔は3mmとする。

陶磁器など施釉の表現のあるものは、釉薬を一点鎖線で表す。

須恵器の場合は断面を黒く塗りつぶす。



[網掛け] 塗布された範囲には、パターンスウォッチの「ベーシック_点」内「10dpi 10%」を40%縮小。

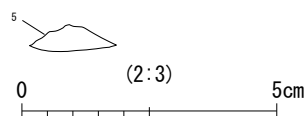


【石器】石鏃 (S=2/3)、その他 (S=1/3. S=1/2)

[石鏃] (S=2/3)

1外輪線:0.18mm 2稜線:0.1mm 3剥離線:0.1mm

4リング・フィッシャー:0.06mm 5断面線:0.18mm 6断面指示線:0.1mm



[石器] (S=1/3)

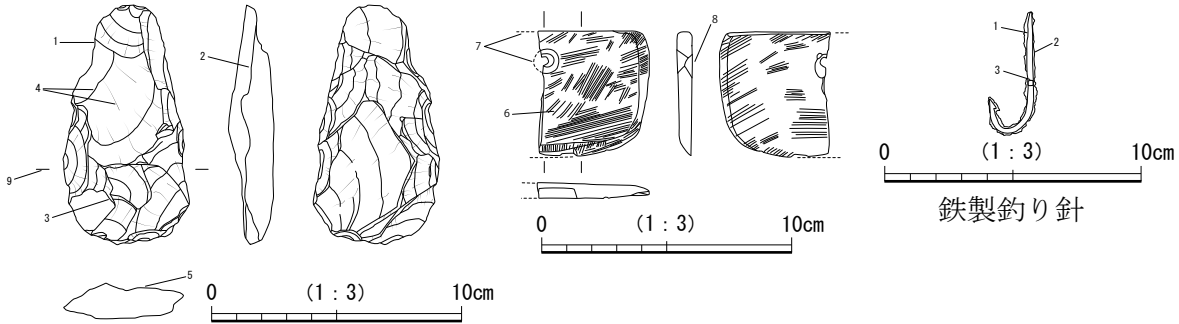
1外輪線:0.36mm 2稜線:0.2mm 3剥離線:0.2mm

4リング・フィッシャー:0.12mm 5断面線:0.36mm 6成形線:0.12mm

7推定線:0.2mm(破線) 8:見通し線:0.2mm 9断面指示線:0.2mm

[鉄製品] (S=1/3)

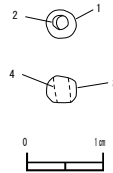
1外形線:0.3mm 2断面線:0.4mm 3稜線(鋳):0.2mm



【ガラス玉】

1平面外形:0.125mm 2稜線:0.07mm

3側面外形:0.125 mm 4側面穿孔:0.07 mm



【遺構】

[平面]

1上端:仕上がり0.15mm相当 2中・下端:仕上がり0.1mm相当 3遺物・礫等外形:仕上がり0.15mm相当

4遺物・礫等稜線:仕上がり0.1mm相当 5ケバ:0.1mm(可変線幅プロファイル4・先細り線)

6セクションポイント:仕上がり0.1mm相当

[断面]

7断面線:仕上がり0.3mm相当 8断面上端:仕上がり0.15mm相当 9土層線:仕上がり0.1mm相当

10礫・遺物等外形:仕上がり0.2mm相当 11レベル線:仕上がり0.1mm相当

[その他]

12見通し線:仕上がり0.1mm相当 13スケール:各線仕上がり0.2mm相当 14方位記号:0.2mm

[斜線及び地山部分へのライントーン]

パターンスウォッチの「ベーシック_ライン」内「10dpi 10%」を40%縮小。

【テキスト】

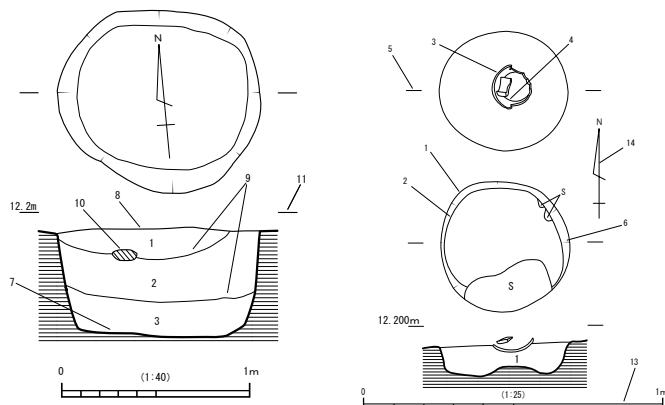
[図面上に記入するテキスト]

縮小後2.5pt相当

・S=1/3 …… 8pt

・S=1/2 …… 5pt

・S=2/3 …… 4pt



竹松遺跡(都市計画道路)

目 次

中扉
巻頭
序文
例言
凡例

第 I 章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
(1) 都市計画道路池田沖田線の概要	1
(2) 範囲確認調査の経過	2
(3) 範囲確認調査出土遺構、遺物	4
A. 土器	7
B. 石器	8
第2節 調査組織	10
第3節 調査の方法	11
第4節 調査の経過(調査日誌)	14
第 II 章 遺跡の環境	19
第1節 地理的、歴史的環境	19
(1) 遺跡の位置と地理的環境	19
(2) 周辺の遺跡と歴史的環境	19
第 III 章 各遺構の調査	23
第1節 遺跡の概要	23
(1) 基本層序について	23
第2節 各遺構、遺物について	26
(1) 遺構、遺物の概要	26
(2) SC01について	27
① SC01出土遺物について	30
A. 弥生土器	31
B. 縄文土器	31
C. 石器	35

(3) SC02について	39
① SC02出土遺物について	41
(4) SN01(SN01-1～7)、SN03(SN03-1～4)の概要	42
① 水田跡について(SN01-1～7)(SN03-1～4)	42
② 水田跡からの出土遺物について	48
A. SN01-1	48
B. SN01-2	49
C. SN01-3	50
D. SN01-4	50
E. SN01-7	51
F. SN03-2	52
G. SN03-3	52
H. SN03-4	53
③ 水路(SD01、02)について	53
④ SD01、02出土遺物について	55
⑤ 畦畔について	57
(5) SN02について	57
① SN02出土遺物について	59
(6) SD05について	60
① SD05出土遺物について	62
(7) SK01～20について	64
① SK01	64
② SK02	64
③ SK03	65
④ SK04	65
⑤ SK05	65
⑥ SK06	66
⑦ SK07	66
⑧ SK08	66
⑨ SK09	67
⑩ SK10	67
⑪ SK11	67
⑫ SK12	68
⑬ SK13	68
⑭ SK14	68
⑮ SK15	69
⑯ SK16	69
⑰ SK17	69
⑱ SK18	69
⑲ SK19	70
⑳ SK20	70
(8) SP001～256について	71
① SP111	71
② SP123	71
③ SP124	72
④ SP156	73
⑤ SP157	73
⑥ SP158	74
⑦ SP159	74
⑧ SP255	74
⑨ SP006、011、014	75
(9) NR01～03について	79

第Ⅳ章 自然科学分析	84
第1節 植物珪酸体分析	84
Ⅰ. 竹松遺跡における植物珪酸体分析(その1)	84
Ⅱ. 竹松遺跡における花粉分析	88
Ⅲ. 竹松遺跡における植物珪酸体分析(その2)	93
第2節 ガラス小玉分析 竹松遺跡出土ガラス玉の科学的調査	99
第3節 原の辻遺跡出土ガラス製品の成分分析	102
第4節 ガラス製品の分析についてまとめ	104

第Ⅴ章 まとめ	125
第1節 住居跡の立地と隣接する集落	125
(1) 住居跡の立地と隣接する集落 -弥生時代-	125
(2) 張り出し住居について	127
(3) 住居跡出土のガラス小玉について	137
(4) 弥生鉄製釣針(青銅製を含む)について	138
(5) 長崎県内の水田について	140

挿図目次

第1図 池田沖田線都市計画道路計画図 (長崎県ホームページより)	1	第14図 SC01遺構平、断面実測図(1/80)	28
第2図 竹松遺跡範囲確認調査試掘坑配置図 (TP:試掘坑)(1/2,000)	3	第15図 ガラス小玉採取方法(略図)	28、138
第3図 TP土層断面図(TP2、3、5、6)(1/60)	5	第16図 SC01出土土器実測図(弥生土器、 縄文土器)(1/3)	32
第4図 TP土層断面図(TP9、12、13、14)(1/60)	6	第17図 SC01出土土器実測図(縄文土器) (1/3)	33
第5図 TP土層断面図(TP15、17)(1/60)	7	第18図 SC01出土石器実測図 その1(1/3)(2/3)	36
第6図 範囲確認調査出土土器実測図(1/3)	8	第19図 SC01出土石器実測図その2(1/3)	37
第7図 範囲確認調査 出土石器実測図(1/3)(2/3)	9	第20図 SC02遺構平、断面実測図(1/80)	39
第8図 グリッド割図(1/600)	12	第21図 SC02出土遺物実測図(1/3)	41
第9図 本調査範囲位置図(1/15,000)	13	第22図 東壁土層断面図(1/100)	43
第10図 遺跡分布図(1/50,000)	18	第23図 SD01、SN01(1~7)平面図(1/200)	45
第11図 基本土層図(1/100)	23	第24図 SN03(1~4)平面図(1/200)	46
第12図 遺構配置図(C、D区)(1/400)	24	第25図 SN01南北ベルト土層断面図(1/40)	47
第13図 遺構配置図(A、B、E区)(1/400)	25	第26図 SN01-1出土土器実測図(1/3)	48

第27図 SN01-2出土土器実測図(1/3)	49	第63図 SK20実測図(1/40)	70
第28図 SN01-3出土土器実測図(1/3)	50	第64図 SK20出土土器実測図(1/3)	70
第29図 SN01-4出土土器実測図(1/3)	51	第65図 SP111実測図(1/40)	71
第30図 SN01-7出土土器実測図(1/3)	51	第66図 SP111出土土器実測図(1/3)	71
第31図 SN03-2出土土器実測図(1/3)	52	第67図 SP123実測図(1/40)	71
第32図 SN03-3出土土器実測図(1/3)	52	第68図 SP123出土土器実測図(1/3)	72
第33図 SN03-4出土土器実測図(1/3)	53	第69図 SP124実測図(1/40)	72
第34図 北側土層断面図(1/80)	55	第70図 SP124出土土器実測図(1/3)	72
第35図 SD02土層断面図(1/40)	55	第71図 SP156実測図(1/40)	73
第36図 SD01出土遺物実測図(1/3)	56	第72図 SP156出土土器実測図(1/3)	73
第37図 SD02出土土器実測図(1/3)	56	第73図 SP157実測図(1/40)	73
第38図 SN02平、断面図 C区南壁土層断面図 (1/80)	58	第74図 SP157出土土器実測図(1/3)	73
第39図 SN02出土土器実測図(1/3)	59	第75図 SP158実測図(1/40)	74
第40図 SD05遺構平、断面図(1/80)	61	第76図 SP158出土土器実測図(1/3)	74
第41図 SD05出土遺物実測図(1/3) (2/3)	63	第77図 SP159実測図(1/40)	74
第42図 SK01実測図(1/40)	64	第78図 SP159出土土器実測図(1/3)	74
第43図 SK02実測図(1/40)	64	第79図 SP255実測図(1/40)	75
第44図 SK03実測図(1/40)	65	第80図 SP255出土土器実測図(1/3)	75
第45図 SK04実測図(1/40)	65	第81図 SP006、011、014 実測図(1/40)	75
第46図 SK05実測図(1/40)	65	第82図 NR01出土遺物実測図(1/3)	79
第47図 SK06実測図(1/40)	66	第83図 NR02出土土器実測図(1/3)	81
第48図 SK07実測図(1/40)	66	第84図 NR03出土遺物実測図(1/3)	82
第49図 SK08実測図(1/40)	66	第85図 2114紺色スペクトル	105
第50図 SK08出土土器実測図(1/3)	66	第86図 2105淡青色スペクトル	105
第51図 SK09実測図(1/40)	67	第87図 ガラス小玉実測図 (1/1)	106
第52図 SK10実測図(1/40)	67	第88図 ガラス小玉散布図(淡青色)	123
第53図 SK10出土土器実測図(1/3)	67	第89図 ガラス小玉散布図(紺色)	123
第54図 SK11実測図(1/40)	67	第90図 直径厚さ別グラフ(淡青色)	124
第55図 SK12実測図(1/40)	68	第91図 直径厚さ別グラフ(紺色)	124
第56図 SK13実測図(1/40)	68	第92図 竹松遺跡遺構配置図	126
第57図 SK14実測図(1/40)	68	第93図 上唐原久保畑遺跡張り出し住居跡	128
第58図 SK14出土土器実測図(1/3)	68	第94図 久路土日中遺跡、久路土下川辺遺跡 張り出し住居跡	128
第59図 SK16実測図(1/40)	69	第95図 峠遺跡、長野尾登遺跡張り出し住居跡	129
第60図 SK17実測図(1/40)	69	第96図 鹿道原遺跡張り出し住居跡	130
第61図 SK18実測図(1/40)	69	第97図 祇園原遺跡張り出し住居跡	130
第62図 SK19実測図(1/40)	70	第98図 来求里Ⅲ遺跡張り出し住居跡	131

第99図 高野遺跡張り出し住居跡	131	第106図 弥生時代釣針一覧(1/3)	139
第100図 脇遺跡張り出し住居跡	132	第107図 釣針の部位名称	139
第101図 大分県内の張り出し住居跡	133	第108図 水田遺構平面図その1 (原の辻、四反田、石走遺跡)	143
第102図 高原遺跡1区1号張り出し住居跡	134	第109図 水田遺構平面図その2 (里田原、竹松遺跡)	144
第103図 佃遺跡87区SB-1張り出し住居跡	134	第110図 水田遺構平面図その3(竹松遺跡)	145
第104-1図 小野原遺跡群張り出し住居跡	134	第111図 水田遺構平面図その4(竹松遺跡)	146
第104-2図 小野原遺跡群張り出し住居跡	135		
第105図 王子遺跡張り出し住居跡	136		

図版目次

巻頭写真 上 SC01完掘状況(北から) 下 C区全景(南東から)

図版1 調査地航空写真	2	図版26 遺構掘削状況	17
図版2 作業風景	4	図版27 遺物検出	17
図版3 作業風景	4	図版28 遺構掘削状況	17
図版4 TP2北壁断面	5	図版29 遺構掘削状況	17
図版5 TP3北壁断面	5	図版30 遺構掘削状況	17
図版6 TP5北壁断面	5	図版31 遺構掘削作業	17
図版7 TP6北壁断面	5	図版32 遺構掘削状況	17
図版8 TP9北壁断面	6	図版33 遺跡全景(南から)	26
図版9 TP12北壁断面	6	図版34 遺跡全景(南東から)	26
図版10 TP13北壁断面	6	図版35 SC01検出状況(南から)	27
図版11 TP14北壁断面	6	図版36 SC01検出状況(北から)	27
図版12 TP15北壁断面	7	図版37 SC01遺構検出状況(北から)	29
図版13 TP17北壁断面	7	図版38 SC01床面検出状況(北から)	29
図版14 範囲確認調査出土遺物	9	図版39 SC01土層ベルト設置状況(北から)	30
図版15 実測作業風景	11	図版40 床面検出状況(西から)	30
図版16 写真撮影	11	図版41 土坑半截状況	30
図版17 ガラス小玉検出作業	11	図版42 床面検出状況(西から)	30
図版18 遺構掘削	11	図版43 SP01	30
図版19 SD01遺構掘削	11	図版44 SP02	30
図版20 SC01完掘状況	11	図版45 SP03	30
図版21 トレンチ掘削作業	17	図版46 SP04	30
図版22 トレンチ掘削作業	17	図版47 周壁溝	30
図版23 トレンチ掘削作業	17	図版48 SC01掘削状況	30
図版24 遺構掘削状況	17	図版49 ガラス小玉出土状況	30
図版25 遺構掘削状況	17	図版50 ガラス小玉出土状況	30

図版51 台付甕出土状況	30	図版88 SD02出土土器	56
図版52 釣針出土状況	30	図版89東西畦畔1芯材検出状況(西から)	57
図版53 SC01出土土器	34	図版90東西畦畔1芯材検出状況(西から)	57
図版54 SC01出土石器	38	図版91 SN03-4完掘状況	57
図版55 SC02検出状況(東から)	39	図版92 SN01-7白磁出土状況	57
図版56 SC02完掘状況(東から)	40	図版93 SN02畝状遺構	58
図版57 炉跡検出状況	40	図版94土壌サンプル採取地	58
図版58 SC02内SK01半截状況(西から)	40	図版95 SN02出土遺物	59
図版59 炉内骨片検出状況	40	図版96 SD05完掘状況	60
図版60 SC02とSD05切合い関係(西から)	40	図版97 SD05出土遺物	62
図版61 SC02出土遺物	41	図版98 SK01完掘状況	64
図版62東側トレンチ断面水路(SD01)検出状況	42	図版99 SK02完掘状況	64
図版63 東側トレンチ断面畦畔検出状況	42	図版100 SK03完掘状況	65
図版64 東側トレンチ断面畦畔検出状況	42	図版101 SK04完掘状況	65
図版65 東側トレンチ断面畦畔検出状況	42	図版102 SK05完掘状況	65
図版66 SN01水田面検出状況(第1面真上から)	44	図版103 SK06完掘状況	66
図版67 SN03水田面検出状況(第2面北から)	44	図版104 SK07完掘状況	66
図版68 SN01-1足跡	44	図版105 SK08完掘状況	66
図版69 SN01-1足跡	44	図版106 SK08出土土器	66
図版70 SN01-2足跡	44	図版107 SK09完掘状況	67
図版71 SN01-1～5南北ベルト土層断面(第1面)	47	図版108 SK10完掘状況	67
図版72 SN01-1出土土器	49	図版109 SK10出土土器	67
図版73 SN01-2出土土器	50	図版110 SK11完掘状況	67
図版74 SN01-3出土土器	50	図版111 SK12完掘状況	68
図版75 SN01-4出土土器	51	図版112 SK13完掘状況	68
図版76 SN01-7出土土器	52	図版113 SK14完掘状況	68
図版77 SN03-2出土土器	52	図版114 SK14出土土器	68
図版78 SN03-3出土土器	52	図版115 SK16半截状況	69
図版79 SN03-4出土土器	53	図版116 SK17半截状況	69
図版80 SD01完掘状況(北から)	54	図版117 SK18半截状況	69
図版81 SD02完掘状況(北から)	54	図版118 SK19完掘状況	70
図版82 SD01断面南面(南から)	55	図版119 SK20出土土器	70
図版83 SD02断面南面(南から)	55	図版120 SP111出土土器	71
図版84 SN03-1水口?	55	図版121 SP123出土土器	71
図版85 SN03-2水口?	55	図版122 SP124出土土器	72
図版86 SN03-2水口?	55	図版123 SP156出土土器	73
図版87 SD01出土遺物	56	図版124 SP156遺物検出状況	73

図版125 SP156半截状況	73	図版136-7 顕微鏡写真	113
図版126 SP157出土土器	73	図版137 ガラス小玉分析作業風景(1)	113
図版127 SP158出土土器	74	図版138 ガラス小玉分析作業風景(2)	113
図版128 SP159出土土器	74	図版139 ガラス小玉分析作業風景(3)	113
図版129 SP255遺物検出状況	75	図版140 ガラス小玉分析作業風景(4)	113
図版130 SP255完掘状況	75	図版141 ガラス小玉2105	114
図版131 SP255出土土器	75	図版142 ガラス小玉2282	114
図版132 NR01出土遺物	80	図版143 指導風景(1)	118
図版133 NR02出土土器	81	図版144 指導風景(2)	118
図版134 NR03出土遺物	83	図版145 分析作業風景(1)	118
図版135 原の辻遺跡大原地区K2(甕棺墓)		図版146 分析作業風景(2)	118
出土トンボ玉顕微鏡写真	104	図版147 分析作業風景(3)	118
図版136-1 顕微鏡写真	107	図版148 分析作業風景(4)	118
図版136-2 顕微鏡写真	108	図版149 分析作業風景(5)	118
図版136-3 顕微鏡写真	109	図版150 分析作業風景(6)	118
図版136-4 顕微鏡写真	110	図版151 竹松遺跡(TAK201408調査区)SC01出土	
図版136-5 顕微鏡写真	111	鉄製釣針のレントゲン写真	139
図版136-6 顕微鏡写真	112	図版152 SC01出土鉄製釣針	139

表目次

第1表 SC01出土土器観察	35	第16表 SD02出土土器観察表	56
第2表 SC01出土石器観察	37	第17表 SN02出土土器観察表	60
第3表 SC02出土土器観察	41	第18表 SN02出土石器観察表	60
第4表 SC02出土石器観察	41	第19表 SD05出土土器観察表	64
第5表 水田観察表	47	第20表 SD05出土石器観察表	64
第6表 SN01-1出土土器観察表	49	第21表 SK08出土土器観察表	66
第7表 SN01-2出土土器観察	50	第22表 SK10出土土器観察表	67
第8表 SN01-3出土土器観察	50	第23表 SK14出土土器観察表	68
第9表 SN01-4出土土器観察	51	第24表 SK20出土土器観察表	70
第10表 SN01-7出土土器観察表	52	第25表 土坑一覧	70
第11表 SN03-2出土土器観察表	52	第26表 SP111出土土器観察	71
第12表 SN03-3出土土器観察表	52	第27表 SP123出土土器観察	72
第13表 SN03-4出土土器観察表	53	第28表 SP124出土土器観察	72
第14表 SD01出土土器観察表	56	第29表 SP156出土土器観察	73
第15表 SD01出土石器観察表	56	第30表 SP157出土土器観察	73

第31表 SP158出土土器観察	74	第40-1表 ガラス小玉測定一覧表	115
第32表 SP159出土土器観察	74	第40-2表 ガラス小玉測定一覧表	116
第33表 SP255出土土器観察	75	第40-3表 ガラス小玉測定一覧表	117
第34-1表 柱穴一覧	76	第40-4表 ガラス小玉測定一覧表	118
第34-2表 柱穴一覧	77	第41表 淡青色直径別一覧表	119
第34-3表 柱穴一覧	78	第42-1表 紺色直径別一覧表	120
第35表 NR01出土土器観察表	80	第42-2表 紺色直径別一覧表	121
第36表 NR01出土石器観察表	80	第42-3表 紺色直径別一覧表	122
第37表 NR02出土土器観察表	81	第43表 SC01ガラス小玉出土場所個数一覧	138
第38表 NR03出土土器観察表	83	第44表 弥生時代釣針一覧	140
第39表 NR03出土石器観察表	83		

第I章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

(1) 都市計画道路池田沖田線の概要

大村市の中心市街地以南における幹線道路は、国道34号のみであり、慢性的な交通混雑が発生している。また池田沖田線の建設予定地周辺では、市街化が進んでおり、狭小幅員の道路網の市街地が形成している状況にある。こうした状況を解消するため当該路線を整備することにより、久原池田線、富の原鬼橋線、国道444号とのネットワークまた長崎自動車道大村IC、九州新幹線西九州ルート新大村駅、長崎空港とのアクセスを容易にし、緊急時における円滑な交通の確保を図る。更にそのバイパス機能により混雑している国道34号の渋滞緩和に寄与し、ひいては災害上危険な市街地の解消につながることを目的として平成15年8月22日に都市計画道路「池田沖田線」延長3,420mが決定された。工事は2工区に分かれ小路口工区延長1,450m(平成20年度～26年度)予定。竹松工区延長1,970mの(平成22年度～33年度)予定である。尚、小路口工区は平成27年3月に供用開始となった。



第1図 池田沖田線都市計画道路計画図（長崎県ホームページより）

(2) 範囲確認調査の経過

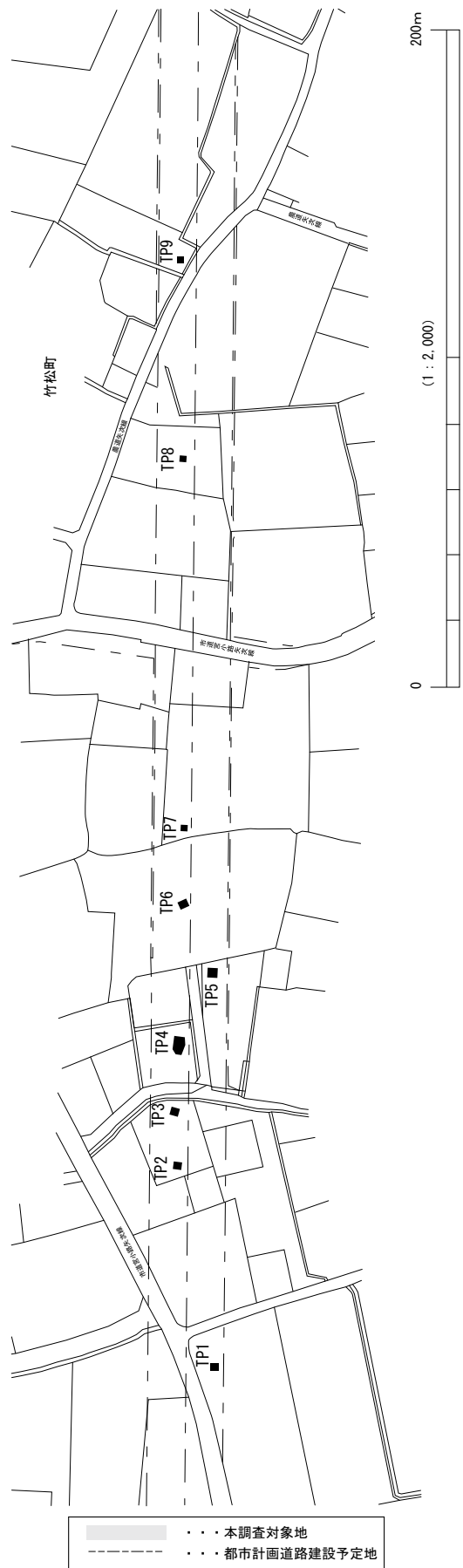
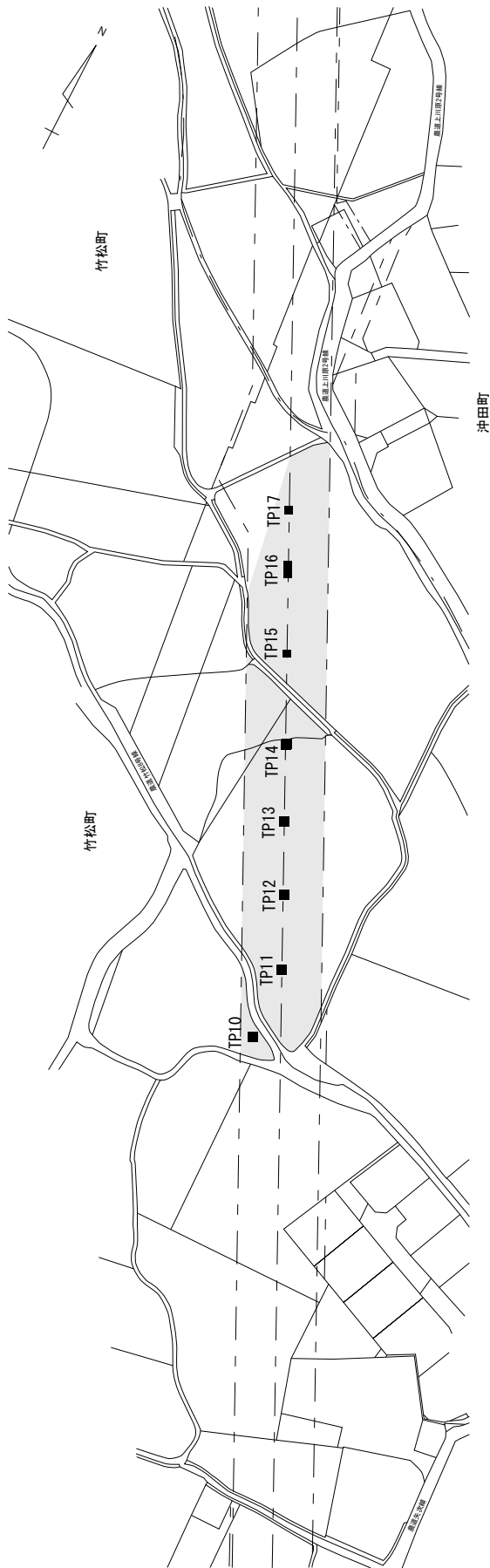
都市計画道路池田沖田線建設予定地内は、周知の文化財包蔵地が存在しているため、埋蔵文化財の取扱いについて県央振興局都市計画課との事前協議を必要とした。

平成24年5月24日、工事に先立ち長崎県教育委員会学芸文化課は、県央振興局都市計画課と「竹松遺跡及び道路建設予定地内の埋蔵文化財の取扱い」について事前の打ち合わせを実施した。県教育委員会は周知の埋蔵文化財包蔵地である竹松遺跡の重要性を説くと共に路線計画が変更できない場合は記録保存の方法で対処する旨を通知した。更に竹松遺跡の範囲確認調査の具体的方法も説明した。用地買収が完了した箇所から、20m間隔で2×2mの試掘坑を設定する予定である事、立ち退き宅地跡及び地形の状況などから設定箇所が変化する事、また現地下見の結果から本調査になった場合大規模な調査が予想される事を通知した。

竹松遺跡は、平成25年12月3日～12月26日まで範囲確認調査を実施した。調査区は長さ約600m、幅28mを対象箇所とした。試掘坑は17箇所設置し(TP1～17)、規模は2m×2mで調査面積は86㎡である(第2図)。遺構及び遺物の出土はTP1、6、10～17で柱穴、土坑、流路を確認した。また遺物についてはTP1、5～7、10～17で縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、黒曜石剥片が出土した。こうした状況からTP10～17周辺を記録保存対象地として県央振興局都市計画課に回答した。本調査は2,900㎡で、平成26年7月1日～平成27年1月14日まで実施した。



図版1 調査地航空写真（写真中央が建設中の都市計画道路。中央左手は新幹線の路線、右手は郡川）



■■■ 本調査対象地
 - - - 都市計画道路建設予定地

第2図 竹松遺跡範囲確認調査試掘坑配置図(TP:試掘坑) (1/2,000)

(3) 範囲確認調査出土遺構、遺物

遺構はTP1、6、10～17で確認した。TP1、6、10～14でピット、TP11～14で土坑、TP15～17で流路を確認している。TP1、6、10のピットには遺物が伴っておらず、時期は不明である。TP6、10のピットについては木の根等の攪乱の可能性もある。TP11～14のピット及び土坑は調査期間との関係で試掘坑断面での確認のため伴う遺物は不明であった。TP15～17の流路からは中世の輸入白磁碗が出土した。遺物の時期、遺構の位置からこの流路は隣接する新幹線路線調査区で検出されている流路の続きと考えられる。

遺物はTP1、5～7、10～17で縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、黒曜石剥片等が出土した。

TP1では弥生土器、土師器を中心に出土している。TP5～7は第Ⅲ層を中心に弥生土器、土師器等が出土したがいずれも小片で磨滅したものもあり、周辺からの流れ込みの可能性が高い。調査範囲南半では第Ⅱ、Ⅲ層から遺物が出土しているが、第Ⅲ層の出土量をもっとも多かった。

TP10以北の調査範囲北半ではいずれの試掘坑からも弥生土器、土師器、須恵器等が出土した。TP13では縄文土器が出土しているが、第Ⅱ層からの出土で平安時代の須恵器が共伴している。周辺からの流れ込みと考えられ、調査区の近隣に縄文時代の遺構や包含層が存在することが想定できる。TP14では第Ⅴ層(第Ⅵ層の可能性あり)で須恵器が出土しているが、今回の調査では上層からの混入かどうか確認できなかった。TP15～17では中世の輸入陶磁白磁が出土した。調査範囲北半では第Ⅱ層からの遺物出土をもっとも多く、第Ⅲ層以下で出土量が激減する。

今回の調査では調査範囲の南半と北半で遺跡の様相が大きく変わることが確認された。特に遺物量の多い北側では、隣接する新幹線路線調査区でも多くの遺物遺構が検出されている。今回の調査範囲の東側には周囲の水田よりも一段高い宅地が存在する。周辺の道路はこの宅地の地表レベルから北に向かって緩い下り坂になっており、宅地部分が小丘陵となっていたことがうかがえる。TP10は宅地のすぐに西側に位置するが、試掘坑壁面の観察からTP11以北とくらべ第Ⅱ、Ⅲ層が削平を受けていると考えられ、宅地部分の小丘陵から伸びた舌状の尾根が水田造成に伴って削平されているものと思われる。試掘坑の堆積状況からTP13周辺で旧地形の地表面に近づいているものと思われる。(山梨)



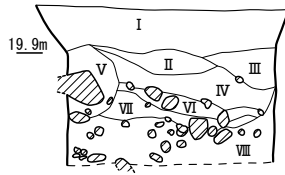
図版2 作業風景



図版3 作業風景

TPの写真、土層断面図は、実測遺物が出土した10箇所を掲載した。

TP2 北壁

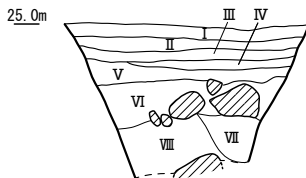


- I. 造成土 (Hue 7.5YR 1.7/1)
- II. 暗褐色 (Hue 10YR 3/4) 粘質土
- III. 褐色 (Hue 10YR 4/4) 粘質土 カクラン
- IV. 極暗褐色 (Hue 7.5YR 2/3) 粘質土
- V. 極暗赤褐色 (Hue 5YR 2/3) 粘質土
- VI. 極暗褐色 (Hue 7.5YR 2/3) 粘質土
- VII. 暗褐色 (Hue 10YR 3/3) 粘質土
- VIII. 褐色 (Hue 10YR 4/4) 砂質土



図版4 TP2北壁断面

TP3 北壁

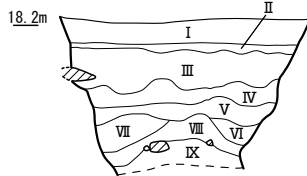


- I. 耕作土
- II. 黒褐色 (Hue 10YR 3/1) 粘質土
- III. 黒褐色 (Hue 10YR 3/1) 粘質土
- IV. 黒褐色 (Hue 10YR 2/2) 粘質土
- V. 黒色 (Hue 10YR 2/1) 粘質土
- VI. 黒～黒褐色 (Hue 10YR2/1～2/2) 粘質土
- VII. 黒褐～にぶい黄褐色 (Hue 10YR 3/1～5/4) 粘質土
- VIII. 黄褐色 (Hue 10YR 5/6) 粘質土



図版5 TP3北壁断面

TP5 北壁

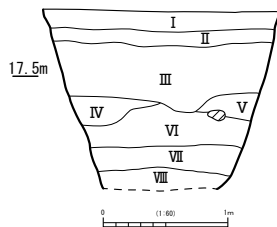


- I. 耕作土
- II. 極暗赤褐色 (Hue 2.5YR 2/2) 粘質土
- III. 黒色 (Hue 10YR 1.7/1) シルト
- IV. 褐色～黒褐色 (Hue 10YR 4/6～3/2) 粘質土 (シルト～粘土)
- V. 褐色 (Hue 10YR 4/6) 粘質土 (シルト～粘土)
- VI. にぶい黄褐色 (Hue 10YR 4/3) 粘質土 (シルト～粘土)
- VII. 褐色 (Hue 10YR 4/4) 粘質土 (シルト～粘土)
- VIII. 黒褐色 (Hue 2.5Y 3/2) シルト
- IX. オリーブ褐色～灰色 (Hue 2.5Y 4/3～5Y 4/1) 砂質土



図版6 TP5北壁断面

TP6 北壁



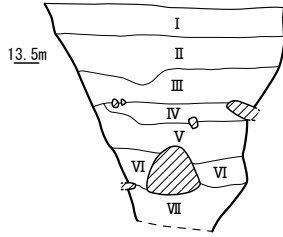
- I. 耕作土
- II. 黒褐色 (Hue 10YR2/2) 粘質土
- III. 黒色 (Hue 10YR2/1) 粘質土
- IV. 黒色 (Hue 10YR2/1) 粘質土
- V. にぶい黄褐色 (Hue 10YR4/3) 粘質土
- VI. 褐色 (Hue 10YR4/4) 粘質土
- VII. 黒褐色 (Hue 2.5Y3/2) 砂質土
- VIII. オリーブ褐色～灰色 (Hue 2.5Y4/3～5Y4/1) 砂質土 砂層



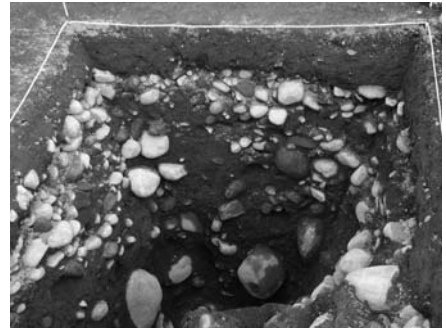
図版7 TP6北壁断面

第3図 TP土層断面図 (TP2、3、5、6) (1/60)

TP9 北壁

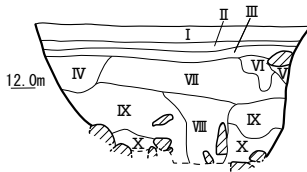


- I. 耕作土
- II. 黒褐色 (Hue 10YR3/2~3/1) 砂質土 礫層
- III. 灰黄褐色~褐灰色 (Hue 10YR4/2~4/1) 粘質土
- IV. 黒褐色~褐灰色 (Hue 10YR3/1~4/1) 粘質土
- V. 黄褐色 (Hue 10YR5/6) 粘質土 (10YR3/1 黒褐色) 酸化土
- VI. 黒褐色 (Hue 10YR3/2) 砂質土 (シルト~細砂)
- VII. 灰黄褐色 (Hue 10YR4/2~5/2) シルト



図版8 TP9北壁断面

TP12 北壁

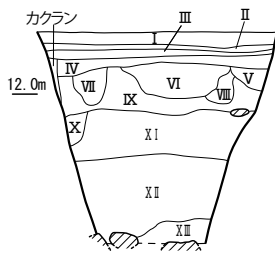


- I. 耕作土
- II. 褐灰色 (Hue 10YR4/1) 粘質土 床土
- III. 灰黄褐色 (Hue 10YR4/2) 粘質土
- IV. 暗褐~黒褐色 (Hue 10YR3/3~3/2) 粘質土 遺構埋土
- V. 灰黄褐~黒褐色 (Hue 10YR4/2~3/2) 粘質土 遺構埋土
- VI. 灰黄褐~にぶい黄褐色 (Hue 10YR4/2~4/3) 粘質土 遺構埋土
- VII. 褐色 (Hue 10YR4/4) 粘質土
- VIII. にぶい黄褐~黒褐色 (Hue 10YR5/4~3/2) 粗砂土 遺構埋土
- IX. 黒褐色 (Hue 10YR3/2~2/2) 粘質土
- X. 黒褐~暗褐色 (Hue 10YR3/2~3/3) 粘質土



図版9 TP12北壁断面

TP13 北壁

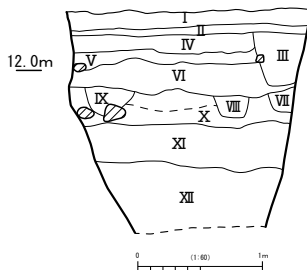


- I. 耕作土
- II. 褐灰色 (Hue 10YR4/1) 粘質土 水田床土
- III. 褐灰~黄褐色 (Hue 10YR4/1~5/6) 粘質土
- IV. 褐灰~黒褐色 (Hue 10YR4/1~3/1) 粘質土
- V. 黒褐~灰黄褐色 (Hue 10YR3/2~4/2) 粘質土 遺構埋土
- VI. 灰黄褐色 (Hue 10YR4/2) 粘質土 遺構埋土
- VII. 灰黄褐~褐灰色 (Hue 10YR4/2~5/1) 粘質土 遺構埋土
- VIII. 褐灰~灰黄褐色 (Hue 10YR5/1~5/2) 粘質土 遺構埋土
- IX. にぶい黄褐~黒褐色 (Hue 10YR5/4~3/2) 粗砂土
- X. 灰黄褐~にぶい黄褐色 (Hue 10YR4/2~5/4) 粘質土 遺構埋土
- XI. 黒褐色 (Hue 10YR3/2) 粘質土
- XII. 黒褐~にぶい黄褐色 (Hue 10YR3/2~4/3) 粘質土
- XIII. 黒褐色 (Hue 10YR3/2~3/1) 粘質土



図版10 TP13北壁断面

TP14 北壁



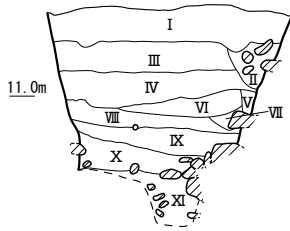
- I. 耕作土
- II. 黒褐~褐灰色 (Hue 10YR3/1~4/1) 造成土か
- III. 灰黄褐~黒褐色 (Hue 10YR5/2~3/2) 粘質土
- IV. 黒褐色 (Hue 10YR3/1~2/2) 粘質土
- V. 褐灰色 (Hue 10YR4/1) 粘質土
- VI. 褐灰色 (Hue 10YR4/1~5/1) 粘質土
- VII. 黒褐~灰黄褐色 (Hue 10YR3/2~4/2) 粘質土 遺構埋土
- VIII. 灰黄褐色 (Hue 10YR4/2) 粘質土 遺構埋土
- IX. 灰黄褐色 (Hue 10YR4/2) 粘質土 遺構埋土
- X. 灰黄褐色 (Hue 10YR5/2~4/2) 粘質土 上部(破線部)がやや暗い
- XI. 黒褐~灰黄褐色 (Hue 10YR3/2~4/2) 粘質土
- XII. 灰黄褐色~黒褐色 (Hue 10YR4/2~3/1) 粘質土



図版11 TP14北壁断面

第4図 TP土層断面図 (TP9、12、13、14) (1/60)

TP15 北壁

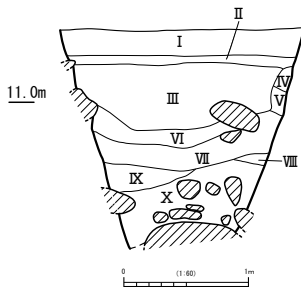


- I. 耕作土
- II. 褐色 (Hue 10YR4/4) 粘質土
- III. 褐色 (Hue 10YR4/6) 粘質土
- IV. 褐色 (Hue 7.5YR4/3~4/4) 粘質土
- V. 黒褐色 (Hue 10YR3/2) 砂質土
- VI. 暗褐色 (Hue 10YR3/3) 砂質土
- VII. 暗褐色 (Hue 10YR3/3) 粘質土
- VIII. 灰黄褐色 (Hue 10YR4/2) 粘質土
- IX. 暗褐色 (Hue 7.5YR3/4) 砂質土
- X. 黒褐色 (Hue 10YR3/2) 砂質土
- XI. 褐色 (Hue 7.5YR4/3) 砂質土

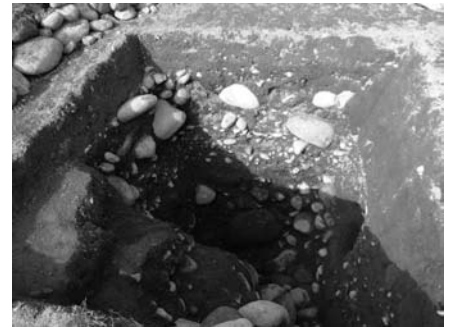


図版12 TP15北壁断面

TP17 北壁



- I. 耕作土
- II. 黒褐色 (Hue 10YR3/2) 粘質土
- III. 黒褐色 (Hue 10YR3/1~3/2) 粘質土 カクランか
- IV. 褐灰~灰黄褐色 (Hue 10YR4/1~6/2) 微砂~細砂
- V. 褐灰~灰黄褐色 (Hue 10YR5/1~4/2) 細~微砂
- VI. 黄灰色 (Hue 2.5Y4/1) 細砂~シルト
- VII. 灰黄褐~褐灰色 (Hue 10YR4/2~4/1) 微~細砂
- VIII. 黄灰色 (Hue 2.5Y4/1) シルト~微砂
- IX. 黄灰~褐灰色 (Hue 2.5Y4/1~10YR4/1) 細~粗砂
層下部に酸化鉄が沈着
- X. 黒褐色 (Hue 10YR3/1) 細~粗砂



図版13 TP17北壁断面

第5図 TP土層断面図 (TP15、17) (1/60)

以下TPごとに出土遺物の説明を行う。

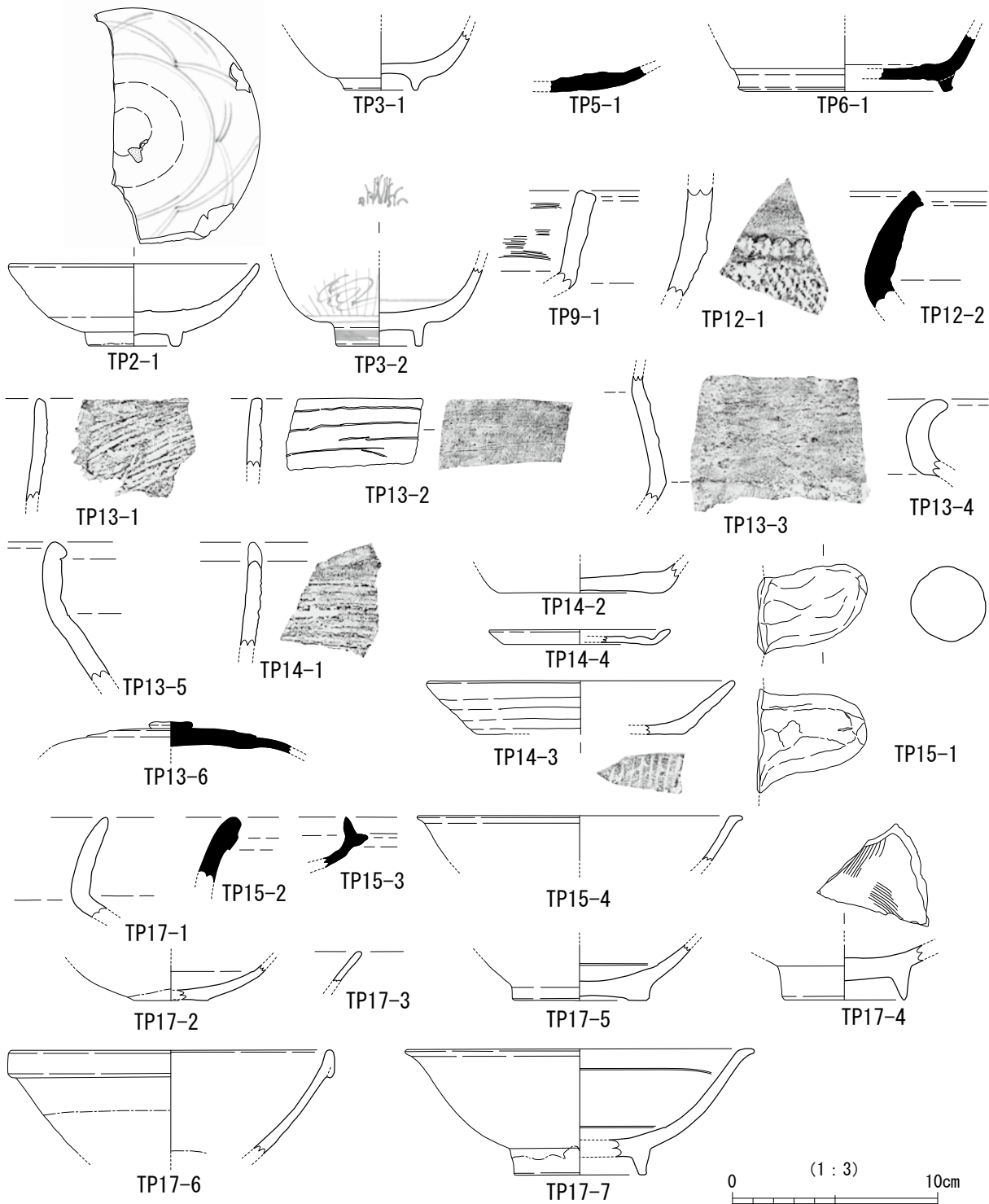
A. 土器

TP2-1~TP3-1、2は近世陶磁器の碗である。TP2-1、TP3-2は肥前系、TP3-1は京焼か。TP5-1は坏身底部片、TP6-1は須恵器高台付坏身で高台部~体部片である。TP9-1は瓦質の香炉?の口縁部片である。丁寧な仕上げで内面に僅かにハケ目が残る。TP12-1は縄文時代晩期の組織痕土器の胴部片である。胎土に角閃石、雲母を含む。TP12-2は須恵器壺口縁部片である。内面は自然釉がかかる。古墳時代後期頃の所産であろう。TP13-1~3は縄文時代晩期の深鉢口縁部である。TP13-1は外面に斜め方向に粗い貝殻条痕を施す。TP13-2は外面に細い沈線を3条施す。丁寧な作りである。TP13-3は粗製の深鉢口縁部である。口縁端部は欠損しているが器厚はやや薄い。外面に貝殻条痕が残る。TP13-4は弥生土器壺の口縁部で外反が強い。後期前半頃か。TP13-5は弥生土器甕の口縁部で立ち上がりはやや直線的である。弥生時代後期前半頃か。TP13-6は須恵器坏蓋片である。つまみは低い円形で天井部はやや窪む。8世紀前半頃か。TP14-1は縄文時代晩期の深鉢で波状口縁部片である。外面は粗い貝殻条痕を施す。TP14-2は土師器坏底部片で糸切り痕が残る。TP14-3は土師器坏の底部から口縁部片である。口縁部への立ち上がりは直線的で端部は丸く仕上げている。TP14-4は土師器カワラケで底部は糸切り痕が残る。TP15-1は土師器甕把手で古墳時代後期頃か。TP15-2は須恵器甕口縁部片である。TP15-3は須恵器坏身で6世紀後半頃である。TP15-4は白磁碗の口縁部片である。11世紀後半~12世紀中頃であろう。TP17-1は弥生時代後期の甕口縁部片である。全体的に粗い作りである。TP17-2は白磁皿底部片で糸切り痕を残す。TP17-3は高麗の無釉陶器?、青磁?の皿口縁部片である。TP17-4~7は白磁碗である。TP17-4、5は底部で、TP17-4は高台の形状は細く尖る。TP17-5は浅い割り出しを施している。TP17-6、

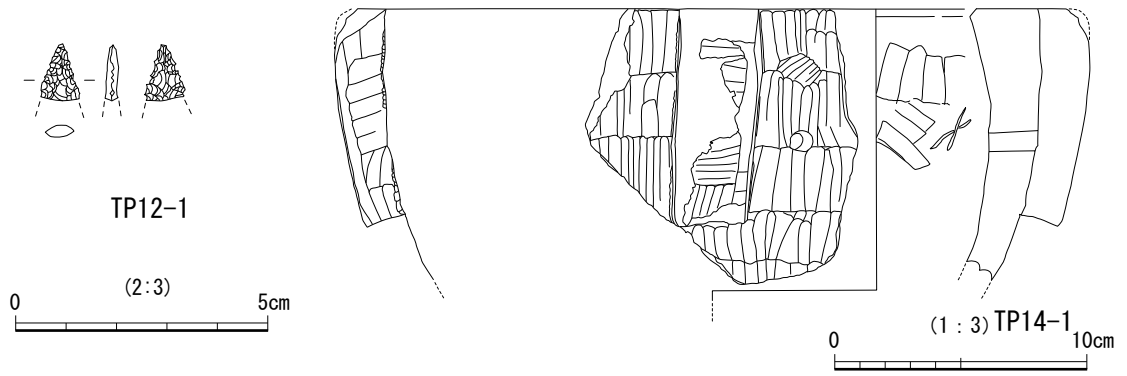
7は口縁部片である。TP17-6は玉縁口縁を呈し、TP17-7は高台付の碗である。いずれも12世紀後半～13世紀前半頃の所産であろう。

B. 石器

TP12-1は黒曜石製石鏃で鏃の尖端部片である。腰岳産で縄文時代晩期頃の所産か。TP14-1は滑石製の石鍋片である。口縁部及び胴部片で断面長方形瘤状把手が残る。穿孔も1箇所確認でき、内外面に削り痕が残る。11世紀前半～中頃であろう。



第6図 範囲確認調査出土土器実測図(1/3)



第7図 範囲確認調査出土石器実測図(1/3) (2/3)



図版14 範囲確認調査出土遺物

第2節 調査組織

総括 長崎県教育庁 新幹線文化財発掘調査事務所
所長 古門 雅高（平成26年～）
課長 杉原 敦史（平成26年～）
庶務 課長 田尻 清秀（平成27年度） 課長 小島 克孝（平成28年度）
係長 村川 逸朗（平成27年度） 係長 中尾 篤志（平成28年度）
主任主事 浜口 広史（平成26年～28年度）
主事 水口 真理子（平成28年度）
嘱託 八木 優希 石田 麻木子

発掘調査担当

文化財保護主事 山梨 千晶
文化財調査員 中川 潤次

国際文化財株式会社

現場代理人 川口 洋次郎
施行管理 星野 賢一
主任調査員 佐藤 洋
調査員 本荘 剛志

株式会社三基

調査員 古賀 朋緒

整理、報告書作業担当

文化財調査員 中川 潤次 新井 実和

整理作業員

横田愛子 宮崎寛光 大谷内美智代 永野朱美 谷中加恵 佐藤法子 長池澄子 黒木聡子 中里文子 中瀬多恵子 松尾幸弘 金子ちぐさ 瀬尾滝子

久田ひとみ 久保田由佳の協力を得た。

第3節 調査の方法

竹松遺跡の範囲確認調査を実施した際に遺構、遺物の出土状況から本調査面積を2,900㎡と確定した。これを基にして調査費用、調査日数、調査員、作業員等の人数を勘案し調査計画を策定した。遺跡内の排土処理は遺跡範囲内での反転作業とし調査区はA～E区とした。

調査区の土層断面は、用地境との間に一定の幅をもたせた所とし、堆積土層断面図を記録した。

発掘区は消滅後も復原できるように、平面直角座標第Ⅰ系を使用し4級基準点測量を世界測地系で実施した。グリッドは20mピッチで設定し、北西交点を基準にX座標の百の位、十の位、Y座標の百の位、十の位を順に並べグリッド名とし、例えばX座標-6262.000、Y座標42536.000の場合は「2653」グリッドとした。竹松遺跡はX座標-4810.000～-4940.000、Y座標41750.000～41810.000から遺跡の復原は可能である。

遺構検出作業は重機による表土掘削作業の後は、人力による掘削作業を行った。人力掘削では、削る道具と掘る道具を区別し検出作業に注意を払った。

遺構検出は、検出時、掘削途中、遺物出土状況、完掘と慎重に各段階を踏まえ記録保存を実施した。

実測図作成は、全体図を1/100、個別遺構は1/20を基本とした。

写真撮影は遺構検出の各段階で行い撮影方向を記した。カメラは6×7判マミヤRZ670PROⅡ、35mmはニコンF3、FM10、デジタルカメラはSONYDSC—HX300を使用した。フィルムは6×7判は白黒、リバーサル、35mmは白黒、リバーサル、デジタルカメラは20M(5184×3888)サイズで撮影した。遺物の取り上げは重要遺物と思われるものは座標を記録しながら取り上げ作業を行った。



図版15 実測作業風景



図版16 写真撮影



図版17 ガラス小玉検出作業



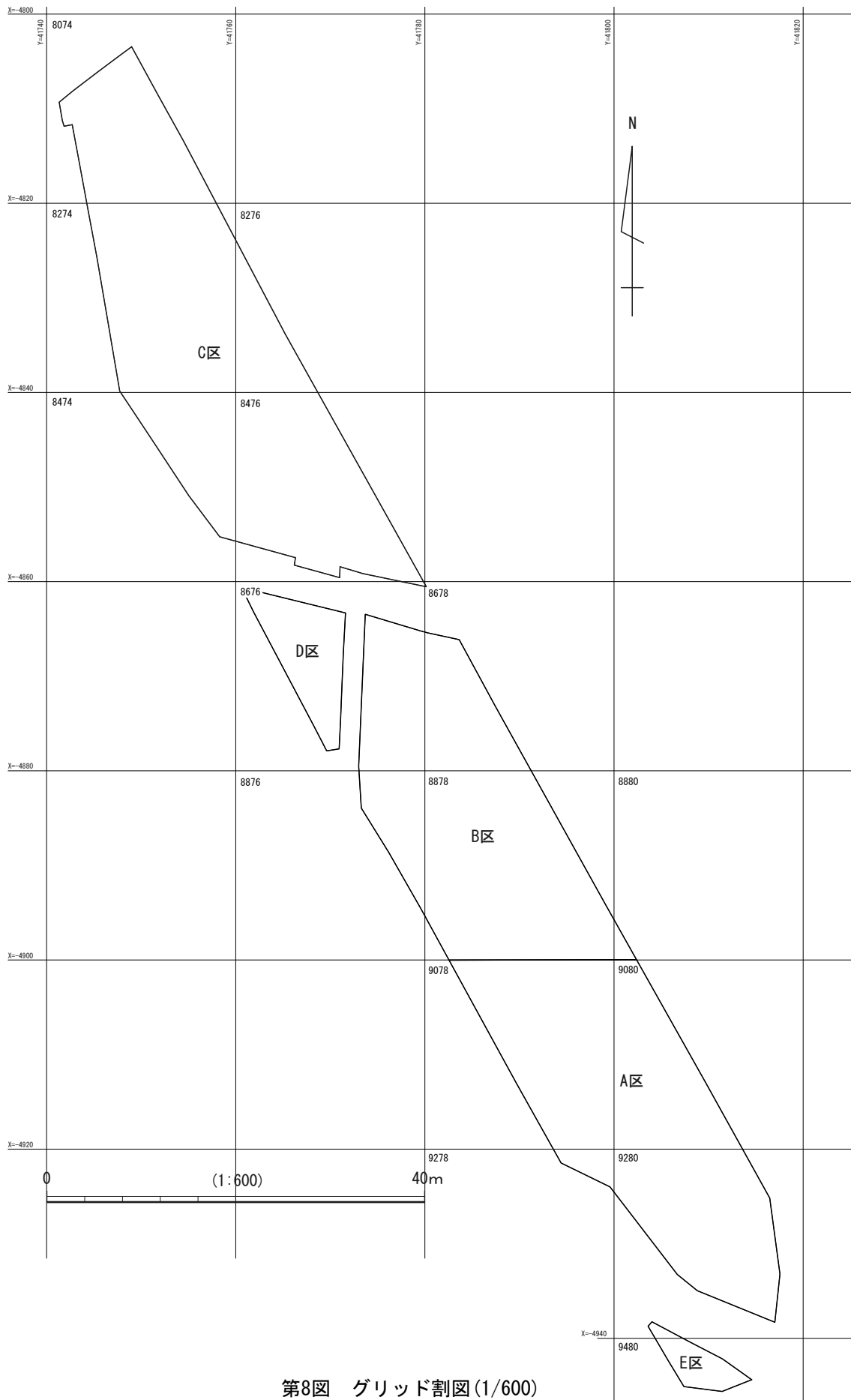
図版18 遺構掘削



図版19 SD01遺構掘削



図版20 SC01完掘状況



第8図 グリッド割図(1/600)



第9図 本調査範囲位置図(1/15,000)

第4節 調査の経過(調査日誌)

平成26年7月1日(火)～7月4日(金)調査準備

調査準備

平成26年7月7日(月)～7月11日(金)

国際文化財(株)、(株)三基、委託業者と委託内容、労働安全衛生等についての全体打ち合わせ会議。調査区内の環境整備。

平成26年7月14日(月)～7月18日(金)調査準備、表土除去

周辺地権者への挨拶回り。17日から作業員雇用開始。A区から表土除去作業開始。

平成26年7月21日(月)～7月25日(金)表土除去、トレンチ掘削

22日A区の表土除去作業終了。東側にトレンチを設定し、掘削を開始する。ベルトコンベアーを中央部に設置する。基本土層を確認する。黒曜石を少量出土する。

平成26年7月28日(月)～8月1日(金)トレンチ掘削、包含層掘削

東トレンチ掘削29日にはほぼ完了する。その後清掃し写真撮影の準備をし撮影終了。30日高温予報のため午後の作業は中止する。A区南側9078、9080、9278、9280グリッドから第Ⅱ層の掘削作業を開始する。台風養生を行う。

平成26年8月4日(月)～8月8日(金)包含層掘削続行

4、5日は天候不順のため作業中止する。6日から第Ⅱ、Ⅲ層の掘削続行。第Ⅳ層上面で遺構を確認する。盆休みに備え養生を行う。

平成26年8月11日(月)～8月15日(金)盆休み

今週は盆休みのため作業中止。

平成26年8月18日(月)～8月22日(金)遺構検出、包含層掘削

9078、9080、9280グリッド第Ⅲ層の掘削続行。9078グリッド掘削。9078、9080グリッドは遺構検出作業を開始する。今週は天候不順日が多く作業にならなかった。

平成26年8月25日(月)～8月29日(金)遺構掘削、実測

A区北西9078グリッドで住居跡を検出する。B区東側トレンチ、A区からの延長を掘削開始。A区9080、9278、9280グリッド第Ⅳ層掘削。柱穴、土坑、住居跡の遺構を確認する。遺構は検出写真撮影後、半截し掘削作業に入る。SC01は十字にベルトを設定し掘削を開始する。SC01内覆土は全て土のう袋に入れ後日水洗する。ガラス小玉2個覆土から出土。SC01は出土遺物から弥生時代後期前半頃の所産か。縄文時代晩期の土器も混入している。流れ込みか。

平成26年9月1日(月)～9月5日(金)遺構掘削、遺構検出、実測

9080、9280グリッドは第Ⅴ層掘削。9078、9278グリッドは遺構検出。SC01は床面、壁面検出。北側に張り出した方形部分は住居跡の一部である事を堆積土層から確認する。ガラス小玉3個出土する。土層ベルト断面写真、実測、遺物出土等の記録作業に入る。その後ベルト掘削、床面精査を開始。9078、9080、9278グリッドは第Ⅴ層掘削。SC01床面検出状況写真撮影を完了する。

平成26年9月8日(月)～9月12日(金)遺構掘削、遺構検出、実測

9078、9080グリッド第Ⅴ層掘削。SC01床面掘削。9278、9280グリッド写真撮影準備し撮影完了。SC01床面土坑、柱状況写真撮影。9278、9280グリッド完了検査終了。活水女子大学下川教授来訪。8878、9078、9080グリッド第Ⅳ層掘削及び遺構検出。SC01床面実測その後床面掘削。ガラス小玉2個出土。

平成26年9月15日(月)～9月19日(金)遺構掘削、遺構検出、実測、写真撮影

SC01床面掘削続行その後掘方掘削開始。B区東トレンチ清掃後写真撮影終了、実測開始。9278、9280グリッド埋戻し完了。C区環境整備。A区中央部分完了検査。

平成26年9月22日(月)～9月26日(金)遺構掘削、遺構検出、実測、写真撮影

SC01完掘写真撮影終了。その後実測を開始する。C区の表土掘削を開始する。8878、9078グリッド第Ⅳ層掘削。B区東側トレンチ土層断面図作成。C区東トレンチ掘削開始。SP123から11世紀末から12世紀初め頃の土師器塚が出土した。8876、8878グリッド内のピット群記録作業後に写真撮影を終了する。

平成26年9月29日(月)～10月3日(金)遺構掘削、遺構検出、実測、写真撮影

C区東側トレンチ、写真撮影終了。8876、8878グリッド第Ⅲ、Ⅳ層遺構掘削及び図化作業。8476グリッド表土除去作業。C区8074、8274、8276グリッド表土剥ぎ。週末は台風接近のため現場内養生を実施する。

平成26年10月6日(月)～10月10日(金)遺構掘削、遺構検出、実測、写真撮影

B、C区の第Ⅲ、Ⅳ層の遺構掘削、検出、実測作業。C区8274、8276グリッドの水田面検出作業。精査後実測開始。C区南側8476グリッドでは畝状遺構を検出する。今のところ時期不明。清掃後写真撮影。

B区8876、8878グリッドピット群完掘撮影。C区(水田跡)来週空撮予定。週末台風予測のため養生を行う。

平成26年10月13日(月)～10月17日(金)遺構掘削、遺構検出、実測、写真撮影

C区空撮前清掃作業。8878東グリッド第Ⅲ層下面、8876、8878西グリッド第Ⅳ層下面遺構再検出及び遺構掘削後、写真、実測作業。15日空撮実施。C区8074、8474、8476グリッド水田面精査(足跡検出作業)。その後写真撮影及び実測作業。B区完了検査後重機による下層確認作業。E区環境整備。水田耕作土掘削作業実施、出土遺物は中世の遺物が多い。

平成26年10月20日(月)～10月24日(金)遺構掘削、遺構検出、実測、写真撮影

8876、8878グリッド第Ⅴ層掘削。8074、8274、8276グリッドの第1水田面の全景撮影。2面目の確認のため東西畦畔に沿ってトレンチを設定し掘削を開始する。並行して実測、地形測量を行う。下層に水田を確認する。第1水田面に伴う水路をSD01、第2水田面に伴う水路をSD02とした。畝状遺構SN02の拡張部の検出作業。

平成26年10月27日(月)～10月31日(金)遺構掘削、遺構検出、実測、写真撮影

C区水田跡SN01の北側壁面土層実測。SD01検出作業及び一部掘削作業、中世～近世陶磁器が出土する。検出作業写真撮影実施。SN02土壌サンプル採取する。8876、8878グリッド下層確認。SD01、02掘削開始。SC01内のガラス小玉を出すため覆土をふるいにかける。

8876、8878グリッド下層確認後清掃、完了検査準備。

平成26年11月3日(月)～11月7日(金)遺構掘削、遺構検出、実測、写真撮影

C区水田跡のSD01の全景写真、土層ベルト写真撮影及び実測。SN01に伴う畦畔の写真撮影。E区9480グリッド掘削、遺構検出開始。B区中央部第Ⅲ層土壌サンプル採取。SN01畦畔掘削、芯材である人頭大及び拳大の石の除去。SN01土壌サンプル採取。SD02の検出及び空撮前の清掃作業。

平成26年11月10日(月)～11月14日(金)遺構掘削、遺構検出、実測、写真撮影

E区9480グリッド礫層検出SD03を掘削中にガラス片が出土したため遺構検出は中止する。D区8676、8673グリッド第Ⅲ層上面遺構検出作業。B区北側表土剥ぎその後第Ⅲ層上面から検出を開始する。第2水田面の空撮前清掃。11日SN03、SD02の空撮実施、南、西壁土層断面、完掘状況撮影、その後分層し実測。第2面目の水田、水路の掘削、SN03-4の完掘撮影。第2面目の水田は4枚検出した。SN03(自然流路)掘削。D区SD04掘削(SD04はSD05と繋がったため後にSD05とした)。

平成26年11月17日(月)～11月21日(金)遺構掘削、遺構検出、実測、写真撮影

8074、8274、8276、8474、8476グリッド空撮前清掃。B区北側第Ⅲ層掘削。第Ⅲ層中精査。遺物出土状況写真撮影。D区西壁面実測。SD04(SD05)完掘状況写真撮影。E区完了検査後埋戻し開始。第3回目空撮実施。C区水田第2面実測終了。その後下層は重機による確認。B区8676、8678グリッド第Ⅳ層上面検出作業。柱穴10基、SC02を検出する。D区のSD04の延長の溝(SD05)を検出。SC02とSD05が切り合っており新旧関係を確認する。

平成26年11月24日(月)～11月28日(金)遺構掘削、遺構検出、実測、写真撮影

24日(祝日)25日雨のため作業中止。B区遺構検出面清掃、D区NR01掘削。E区埋戻し。C区北側完了検査。B区SC02、SD05検出写真撮影。

平成26年12月1日(月)～12月5日(金)遺構掘削、遺構検出、実測、写真撮影

B区SD05、SC02掘削続行切り合い関係はSD05がSC02を切っていることを確認する。D区NR01掘削SD05は土層ベルトを残し掘削続行、その後土層断面写真撮影、実測作業を行う。今週は天候不順でなかなか作業が進まなかった。

平成26年12月8日(月)～12月12日(金)遺構掘削、遺構検出、実測、写真撮影

SD05完掘写真撮影、その後実測開始。SC02床面検出写真撮影、その後精査及び掘削、実測。C区南側完了検査。第Ⅲ層土壌サンプル採取。SD05、SC02完掘写真撮影。D区完掘写真撮影。

平成26年12月15日(月)～12月19日(金)遺構掘削、遺構検出、実測、写真撮影

B区8676、8678グリッド第Ⅳ層掘削、第Ⅴ層上面検出作業、第Ⅴ層掘削作業を実施する。X=-4880ライン、B区西壁断面写真撮影後実測。B区調査区進入路部分の表土除去作業開始。第Ⅲ層掘削、第Ⅳ層上面遺構検出作業。

平成26年12月22日(月)～12月26日(金)遺構掘削、遺構検出、実測、写真撮影

B区第Ⅳ、Ⅴ層下面遺構検出、掘削実測作業。遺物取り上げ写真撮影。24日SC01の覆土ふるい作業でガラス小玉100個を超える。B区北8676、8678、8876、8878グリッド清掃後完掘写真撮影終了。B区北完了検査後埋戻し開始。本日で作業員稼働終了。閉所式。図面等整理を実施。

平成27年1月5日(月)～1月9日(金) 図面整理、撤収準備

図面整理、撤収準備

平成27年1月12日(月)～1月14日(水) 図面整理、撤収準備

図面整理、撤収準備を行いすべての作業を終了する。

(山梨)



図版21 トレンチ掘削作業



図版22 トレンチ掘削作業



図版23 トレンチ掘削作業



図版24 遺構掘削状況



図版25 遺構掘削状況



図版26 遺構掘削状況



図版27 遺物検出



図版28 遺構掘削状況



図版29 遺構掘削状況



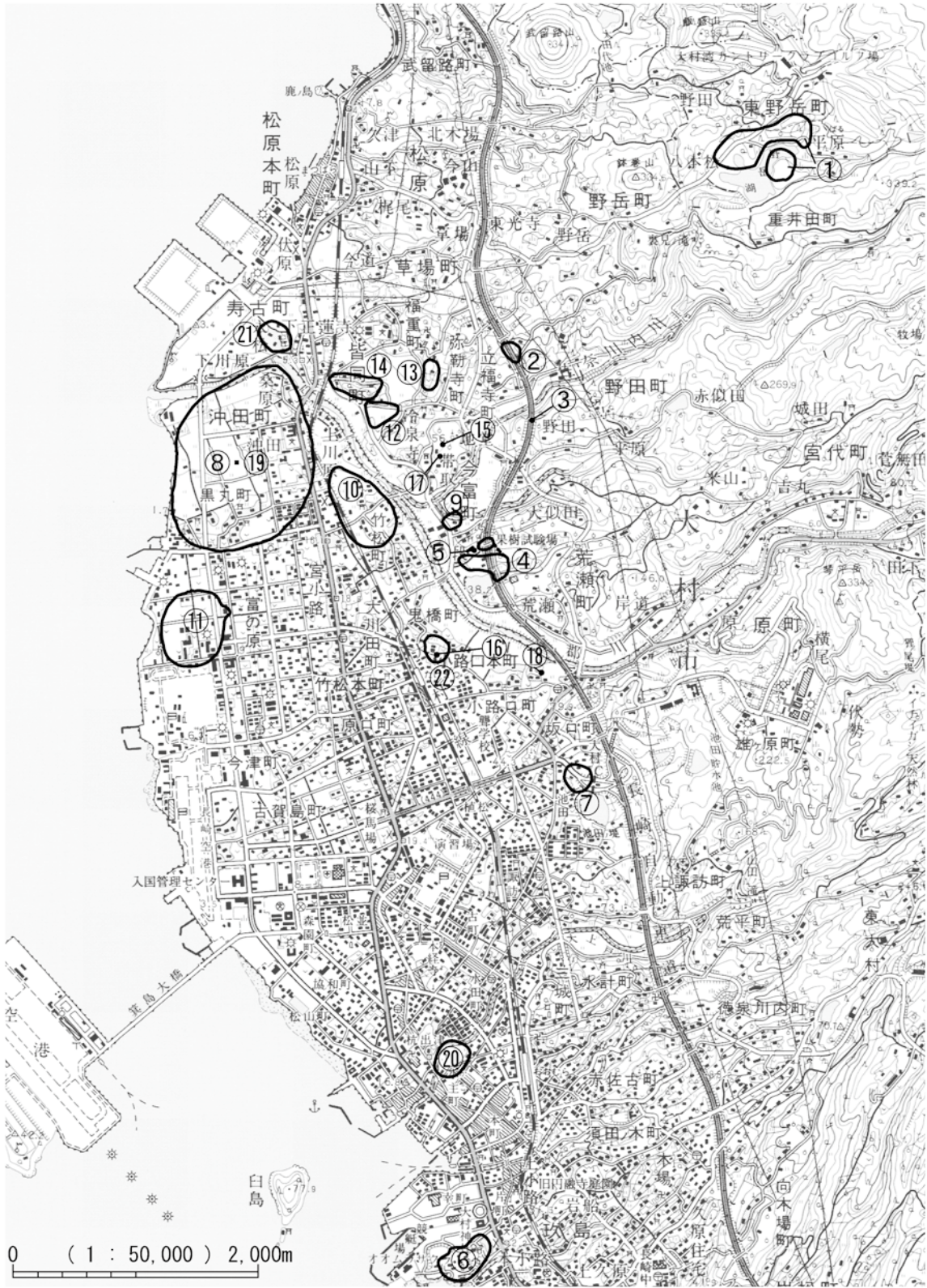
図版30 遺構掘削状況



図版31 遺構掘削作業



図版32 遺構掘削状況



- | | | |
|----------|-----------|---------|
| ①野岳遺跡 | ⑨岩名遺跡 | ⑰地堂古墳 |
| ②野田の久保遺跡 | ⑩竹松遺跡 | ⑱上小路口古墳 |
| ③野田古墳 | ⑪富の原遺跡 | ⑲沖田黒丸条里 |
| ④野田A遺跡 | ⑫冷泉遺跡 | ⑳大上戸川条里 |
| ⑤葛城遺跡 | ⑬稗田遺跡 | ㉑好武城跡 |
| ⑥玖島城跡 | ⑭今富城跡 | ㉒小路口遺跡 |
| ⑦嶽ノ下A遺跡 | ⑮黄金山古墳 | |
| ⑧黒丸遺跡 | ⑯小路口鬼の穴古墳 | |

第10図 遺跡分布図(1/50,000)

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 地理的、歴史的環境

(1) 遺跡の位置と地理的環境

長崎県本土部のほぼ中央に位置する大村市は、東に多良山系、西に大村湾を望み、郡川、大上戸川が形成した扇状地上に広がる街である。郡川は、郡岳(こおりだけ)、経ヶ岳(きょうがたけ)、多良岳(たらだけ)、五家原岳(ごかはらだけ)の西斜面を水源とし大村湾へ注ぐ二級河川である。その源流は「黒木溪谷」と呼ばれ、多良岳県立自然公園の一部となっている。また多良山系の中で経ヶ岳は標高1,075.5mで、標高1,000m以上の山としては日本最西端に位置する。こうした山々が水源となった郡川は、山裾に深い谷を刻んで流れ下り田下町で南東方向から流れくる南ノ川内川と合流、今富町で北東方向から流れてくる佐奈川内川と合流する。寿古町、沖田町の境を流れ大村湾へ注ぐ。こうした郡川の流路が南北約6km、東西2.5kmに及ぶ大村扇状地を形成した。

扇状地上では水田、畑作、果樹園等の多くの生産活動が行われ、特に梨、ブドウ、イチゴ等の生産が盛んで「フルーツの里」として県内外に知られた地域でもある。竹松遺跡は大村市竹松町1042番1他に所在する。

(2) 周辺の遺跡と歴史的環境

竹松遺跡の周辺域には旧石器時代から近世まで多くの遺跡が確認されている。これらの遺跡分布から大村扇状地及びその周辺域は、各時代の人々の生産活動から生活域として利用していたことが継続的な発掘調査から解明されつつある。

大村扇状地では(2015年段階)旧石器時代の遺跡は確認されていないが、周辺域の標高40~270m付近では①野岳遺跡、②野田の久保遺跡、③野田古墳、④野田A遺跡、⑤葛城遺跡などが分布する。いずれもナイフ形石器、台状石器、角錐状石器、細石器を伴う後期旧石器時代の遺跡である。石材は腰岳、牟田系黒曜石が使用されている。

大村市内では109箇所の縄文時代の遺跡が確認されている(長崎県遺跡地図1994)。この中で細石刃核が多数採取された野岳遺跡は後期旧石器時代末の遺跡として著名である。早期末~前期の条痕文土器に伴う低湿地型貯蔵穴を検出した⑥玖島城跡、後期末の円形堅穴状遺構2基を検出した⑦嶽ノ下A遺跡、後期末~弥生時代中期の黒川式から刻目突帯文期の遺物がまとまって出土し、堅穴遺構1基、低湿地型貯蔵穴、埋甕などを検出した⑧黒丸遺跡、黒川式土器及び扁平打製石斧がまとまって出土した早期、晩期の⑨岩名遺跡、孔列文土器が出土した晩期の野田の久保遺跡が位置する。

縄文時代早期後葉頃(塞ノ神式~条痕文土器段階)になって徐々に低地への進出が始まり、大村扇状地に人々の生産活動の痕跡が認められるようになる。後期末から晩期にかけて堅穴住居跡が確認された嶽ノ下A遺跡、黒丸遺跡、⑩竹松遺跡がある。黒丸遺跡では堅穴住居跡内で石組みみ炉が検出され、また弥生時代早期の低湿地型貯蔵穴(ドングリ貯蔵穴)が62基発見されている。

大村扇状地における弥生時代の遺跡は弥生時代早期~終末の黒丸遺跡、縄文時代から近世にかけての複合遺跡で、特に弥生時代の遺構が主体をなす竹松遺跡、中期初頭~後期前半の⑪富の原遺跡、後期の岩名遺跡、後期~終末の⑫冷泉遺跡、前期後半~中期中頃・弥生時代終末の⑬稗田遺跡を挙げることができる。

黒丸遺跡は縄文時代晩期終末から中、近世まで続く大村湾岸域最大の拠点集落である。この遺跡では大陸系磨製石器の石包丁(擦り切り技法)、抉りのある柱状石斧、鋤、堅杵、膝柄、弓、ヤス、丸木船を模した舟形木製品が出土している。また黒丸遺跡沖田地区では中期の矢板列も検出されているが、初期水田に伴う遺構は未だ発見には至っていない。

富の原遺跡は大村扇状地の末端で大村湾沿岸に接する遺跡である。昭和55年(1980)工事中に成人甕棺が偶然発見され、中から副葬品として鉄戈が出土した。昭和56年～61年にかけて富の原遺跡の範囲確認調査が実施された。この中で弥生時代の墓域を2箇所(A地点、B地点)確認した。甕棺墓の周辺には多くの石棺墓が分布し、異なる墓制は共存しないという考え方があったが、平成4年の調査で石棺墓の中から供献された弥生土器が発見されその共存関係が確かめられた。A地点の墓地は中期末～後期初頭、B地点の墓地は中期初頭～後期前半と長い。その他の小規模な墓地群も確認されている。墓地は10基前後を群としていることから血縁関係を有する集団の墓域であることが考えられている。A、B両地点から鉄戈3本と鉄剣1本が出土している。また数本の環濠が巡っている事から西九州では数少ない環濠集落である事も注目される。集落の形成は中期初頭から始まり、中期中頃に環濠が掘られ、中期後半頃には埋没している。後期前半には富の原遺跡は廃絶する。

竹松遺跡は縄文時代から近世にかけての複合遺跡で、特に弥生時代と古代が主体をなす。大規模な面的調査から弥生時代中期末～終末までの円形、方形竪穴住居跡群、石棺墓、甕棺墓が発見された。居住区域と墓域との位置関係から集落単位ごとの占有墓域が看取できそうである。岩名遺跡は弥生時代後期前半の成人、小児甕棺墓を検出した。住居跡などは検出されていない。

冷泉遺跡は弥生時代終末期～古墳時代初頭の遺跡である。遺構は円形、方形竪穴住居跡、石棺墓、配石墓が検出されている。3号石棺墓付近からは舶載鏡片(破鏡)が出土している。

稗田遺跡は⑭**今富城跡**の西側に位置する。弥生時代前期後半～中期中頃、弥生時代終末～古墳、中近世までの遺跡である。弥生時代前期、中期の竪穴住居跡、古墳中期の竪穴住居跡を検出した。古墳時代の竪穴住居跡から出土した土師器は須恵器を伴わない時期のものである。

大村市内における古墳時代の遺跡は58箇所程が確認されている(2013年段階)。

冷泉遺跡は弥生時代から古墳時代初頭まで継続する遺跡で竪穴住居跡、箱式石棺等が検出された。6号竪穴住居跡から出土した甕、高坏等から庄内系の土器の範疇で4世紀初頭頃の時期が考えられる。また2号竪穴住居跡からは5箇所の炉跡が検出され壁体の外周が5cm程比熱した状況から鍛冶に関する工房跡と想定されている。⑮**黄金山古墳**は郡川中流域の標高45m、冷泉遺跡から東へ200m程の低丘陵上に位置する。規模等は不明であるが石室構造は竪穴系横口式石室が変容したもので石棺系横口式石室と考えられている。出土遺物は古式土師器、鉄鏃、刀剣、鉄槍、人骨等が出土した。出土した土師器甕、高坏、壺等から4世紀末～5世紀前半頃の築造と考えられている。⑯**小路口鬼の穴古墳**、小路口遺跡から北北西に100m程に位置する。内部主体は南に開口する両袖複室の横穴式石室である。墳丘はやや不整形ではあるが直径20m程、高さは約3mの円墳であると考えられている。出土遺物は羨道入口南外側で須恵器甕片が出土した。また横穴式石室の構築方法から6世紀後半～7世紀初頭頃と推測される。⑰**地堂古墳**は黄金山古墳の南100m程の標高30mの独立丘陵の西側斜面に位置する。内部主体は複室の横穴式石室で小路口鬼の穴古墳の石室構造と類似する事から同時期頃の築造と思われる。⑱**上小路口古墳**は小路口遺跡の東800m程に位置する。畑の中に奥壁の一部が残存する。南に開口する横穴式

石室である。

古墳の築造場所を概観するとすでに前期から平野部及び丘陵頂上部に築造が開始され、中、後期には丘陵上、斜面等に群集墳が築造されていく様相が見られる。こうした様相は古い共同体の分解に伴って成立した家父長的家族の家父長層であろう。家父長的家族は扇状地から低丘陵へと生産活動を広げ、地域の中で古墳を築造するまでに成長した。その背景は鉄製品の普及拡散であろう。10基前後を群とする群集墳が各地域に形成されるのはこうした背景があると思われる。

古代の遺跡もまた多く分布している。肥前国は11郡から構成されており(肥前国風土記、和名抄、延喜式)竹松遺跡は彼杵郡に位置する。彼杵郡は「肥前国風土記」では4郷(浮穴郷うきあな)、周賀郷(すか)、彼杵郷、大村郷)の下郡、「和名抄」では2郷(大村郷、彼杵郷)の小郡となっている。下郡とは4～7里(1里は50戸、200戸～350戸)、小郡とは2～3里(100戸～150戸)の家しか存在しない極めて生産活動が小規模な地域であることが判断できる。その生産活動を示す遺跡が郡川河口域に広がる⑩**沖田黒丸条里**及び大上戸川流域の⑪**大上戸川条里**である。沖田、黒丸条里は約80坪数(95ha)が認められ、大上戸川条里は約16坪数(19ha)が確認できている。

こうした条里生産遺跡が存在し古代官道(西海道)が通る地域に郡衙の存在が想定できる。彼杵郡衙が所在する場所については諸説あるが郡川河口域を想定している意見は多い。2011年～2016年度まで発掘調査した竹松遺跡では郡衙の所在を思わせる出土遺物、石帯、土馬、瓦塔、紡錘車(「木」「都」刻書あり)、墨書土器(有家)、硯、金属権、権状石製品等が出土しているが、郡衙を思わせる遺構の存在は検出されていない。

竹松遺跡201504調査区から、ほぼ南北方向に沿った平安末頃(11世紀後半)の倉庫群8軒が発見されている。総柱建物(2間×4間、2間×3間)、側柱建物(1間×6間)、柵列、その他竪穴住居等を検出した。こうした倉庫群は周辺域から収穫される生産物その他を収納管理する倉庫群と考えられる。現在この遺跡は保存されている(倉庫群、竪穴住居等)。

また2012、2013、2014年度の調査では1辺が108mの区画溝を検出した。溝は真北に沿って南北方向に構築され、区画溝内部からは掘立柱建物6棟(総柱建物等2間×3間等、2面庇建物、側柱建物2間×5間等)、土塁が検出された。こうした状況から1町区画の居館跡であることが想定される。出土した貿易陶磁器、土師器、石鍋等から存続時期は12世紀後半～14世紀初頭が考えられている。古代末から中世にかけての郡川下流域一帯の様相が復原できる極めて重要な遺構である。

また西九州では初めてとなる「カムイヤキ」が出土した。「カムイヤキ」は鹿児島県徳之島伊仙町に所在する。11世紀後半から14世紀前半まで操業した類須恵器で、器種は壺、甕、鉢、碗、水注が中心である。体、胴部にはへら描波状文が施され朝鮮半島系無釉陶器に製作技法が類似する。「カムイヤキ」製品の分布は沖縄から鹿児島までの南西諸島、南九州一帯で確認されている。またこの地域では西彼杵半島産の石鍋が供伴する。長崎県大村市で確認されたことから九州本島西回りの交易ルートが存在したことを如実に物語る。弥生時代より沖縄諸島から西北九州に南海産の貝輪が運ばれてきた海上交易ルートが中世になっても存続していることを裏付けたことは極めて重要な意味をもつ。

中、近世の遺跡は寺社、城跡、水田遺構が所在する。⑫**好武城跡**は郡川下流域右岸に位置している。平城で周りは水田に囲まれ旧地形等は不明である。この城跡は郡衙推定地としての可能性も考えられており、古代～中世の多くの遺物が出土しており戦国期の遺物出土は少ない。

郡川中流域右岸、標高30mの独立丘陵上に今富城跡が位置する。国鉄大村線建設時に西側斜面をかなり土取りされ、また戦時中は高射砲を設置したため地形がかなり変化しているが不定形の広い曲輪を有する連郭式の形状である。

以上二つの城跡は大村氏が築造したものである。ところで大村氏の出自については諸説あるが、「橋中村文書」に「肥前国藤津郡能古見庄大草野村北方」と見えることからここを拠点とした地方豪族と考えられている。藤津郡から彼杵郡大村に拠点を徐々に移し始めたのは、鎌倉末頃(瀬野説)、貞治5年(1366)頃(久田松説)、16世紀頃(外山説)と諸説ある。いずれにせよ彼杵大村に本拠地を移すが鹿島藤津郡にも所領、居城は存在していた。しかし千葉氏、有馬氏、龍造寺隆信らの領土侵攻に伴い鹿島藤津郡の所領を完全に失う事となった。その後大村氏は彼杵郡を主所領とする大名家として幕末まで続く。

竹松遺跡では5箇所から中世末～近世の水田遺構が検出されている。いずれも水路(土堤又は溝畦)、畦畔、水田面が確認され、水田構造が判断できる資料を得る事ができた事は、中、近世の地域社会を考える上で極めて重要な発見であった。

参考文献

『大村市史』第一巻 自然・原始・古代編

『大村市史』第二巻 中世編

『大村市史』第三巻 近世編

大村市教育委員会『富の原遺跡』大村市文化財調査報告書第12集 1987

黒丸遺跡調査会『黒丸遺跡』 1980

『有明海をめぐる弥生時代集落と交流』長崎県考古学会・肥後考古学会合同大会 2012

吉村靖徳『権衡に関する一考察』九州歴史資料館研究紀要20 1995

新里亮人『徳之島カムイヤギ古窯産製品の流通とその特質』先史学・考古学論究IV 2003

木下尚子『南島貝文化の研究』貝の道の考古学 1996

第三章 各遺構の調査

第1節 遺跡の概要

(1) 基本層序について

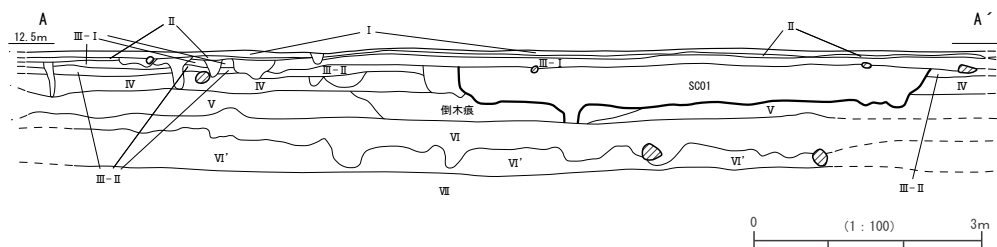
層位は地区ごとにやや異なる堆積をみせている。これは旧地形や周辺の水田化に伴う削平の影響を受けてのことと思われる。C、E区の堆積は攪乱や旧河道の影響で安定しておらず、A、B区の堆積を当調査の基本土層とし本項で説明する。A、B区で確認された基本土層は以下のとおりである。

- I層 現耕作土
- II層 褐灰～明黄褐色粘質土 酸化鉄の沈着顕著 床土か
- III層 黒褐色粘質土 縄文時代晩期から古代末～中世の遺物包含層
細分が難しかったが、遺構の中にはIII層途中から掘り込まれたものもあるため、可能な部分は遺構上端を基準にIII-I、III-II層に細分している
- IV層 黒褐～にぶい黄褐色粘質土 縄文時代早期から晩期の遺物包含層
倒木痕による攪乱がみられる 調査区の中で色調が変化しており、B区中央部ではにぶい黄褐色を呈する
- V層 黒褐～褐色弱粘質土 縄文時代早期の遺物をわずかに含む
倒木痕による攪乱多い
- VI層 黒褐色弱粘質土 白色砂礫を多く含み、しまり非常に強い
部分的に砂礫の含みが多くしまりもより強い(VI'層)
- VII層 礫層(基盤礫層か)

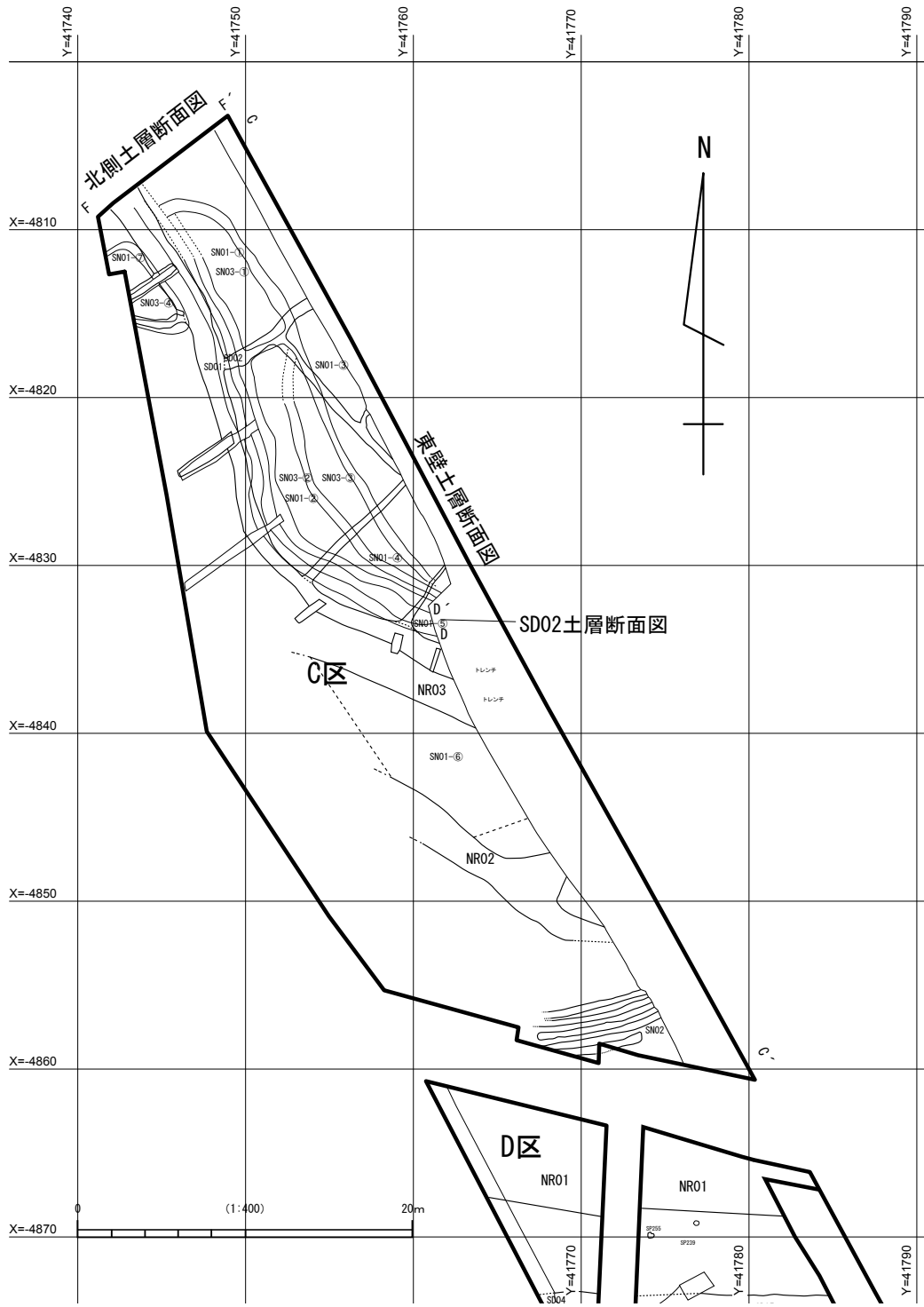
C区は現耕作土下で洪水砂により埋没した水田、畝状遺構を確認した。それら生産遺構下部ではほとんどが礫で埋没した複数の自然流路を確認している。

D区は上記基本土層の第IV層までが削平された状態であると考えられる。

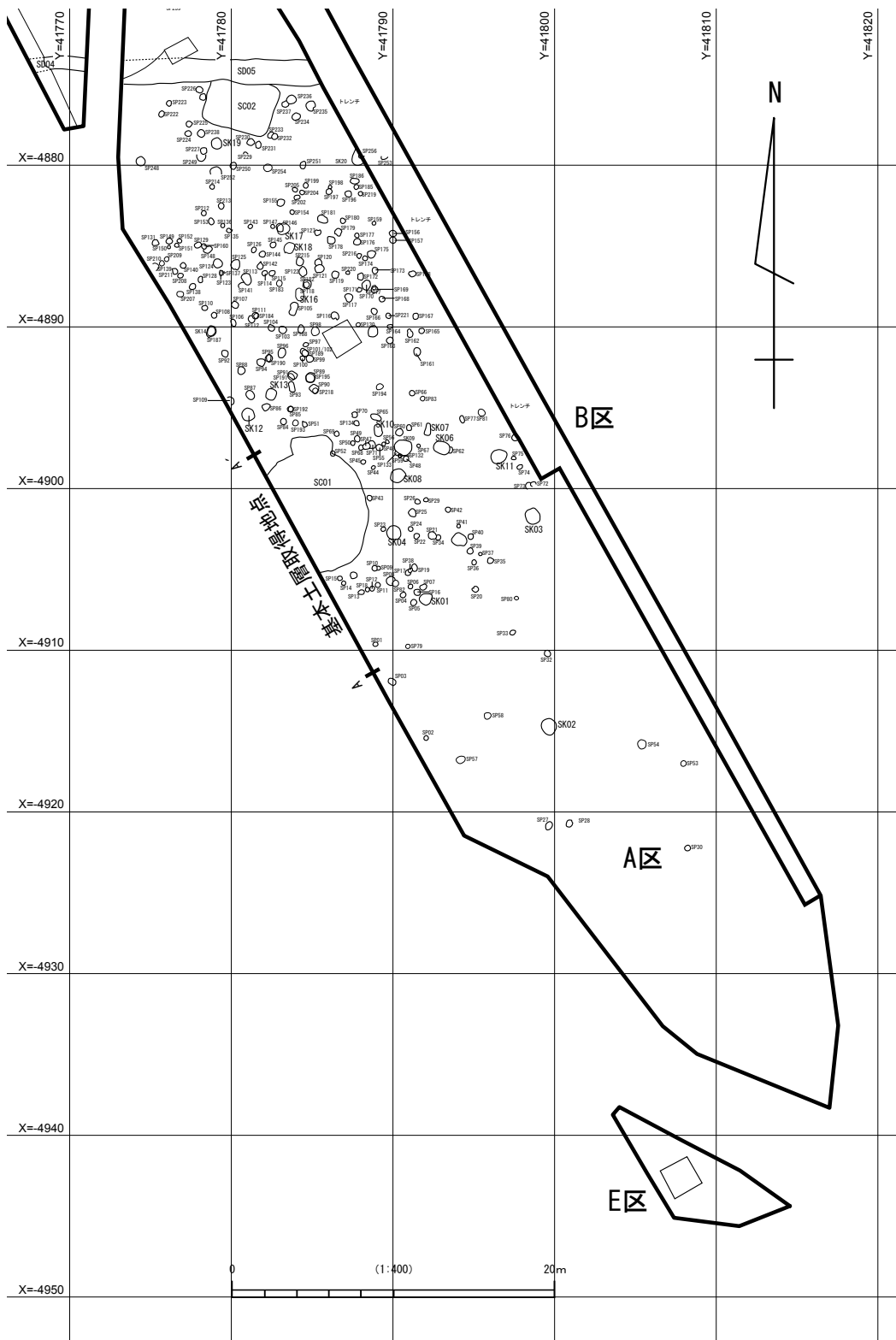
E区は第II層相当の酸化鉄が沈着する土層の下部に近世までの遺物を含む黒～黒褐色粘質土、攪乱を受けた状態の第VI層、第VII層の順で堆積する。(山梨)



第11図 基本土層図(1/100)



第12図 遺構配置図(C、D区) (1/400)



第13図 遺構配置図(A、B、E区) (1/400)

第2節 各遺構、遺物について

(1) 遺構、遺物の概要

遺構はB区を中心に、遺構面2面でピット253基、土坑19基、溝1条、竪穴住居跡2軒を確認した。またC区では水田2面11枚(第1面7枚、第2面4枚)と畝状遺構4条を検出した。堆積の違いによりA、B区の遺構面とは整合できない。基本層序から第Ⅲ層が長期間の遺物を含む包含層であるため、遺物が出土しなかったピットと土坑のほとんどは時期を確定できていない。また掘立柱建物と認識できるようなピットの配列を確認することはできなかった。

縄文時代の遺物は第Ⅳ層を中心に早期の押型文土器が、第Ⅲ層下部から第Ⅳ層で晩期の遺物が出土している。同時期と認識される遺構は確認できていない。

弥生時代の遺物、遺構は後期前半～中頃を中心に確認している。包含層からは弥生土器片のほか、石包丁の未成品、磨製石斧等の石製品が出土した。遺構は弥生時代後期前半から中頃の竪穴住居跡2軒を確認している。SC01は平面プランが円形で径約7.3m、北側に張り出し部を有し、ほぼ全面に貼床が確認できた。床面で周壁溝1条、土坑3基、ピット4基を確認した、弥生後期前半～中頃の土器、石器が出土し、特筆すべき遺物として、鉄製釣針1個、ガラス小玉181個が出土した。SC02は平面プランが長辺約4.3m、短辺約3.2mの隅丸長方形を呈する。住居の北側はSD05により切られている。床面で周壁溝、土坑1基、中央付近に炉跡を確認した。炉内からは動物、魚等の骨片が出土した。SD05は幅約2m、深さ約0.8mで断面逆台形状を呈する。D区のSD04と一連の溝で、上半が削平を受けている。

古代～中世の遺物は第Ⅲ-I、第Ⅱ層から出土したものが多。またB区のSP123、SP156、SP158、C区の自然流路からも古代末の遺物が出土している。SP123は土師器の小皿複数枚が重ねられた状態で出土したが、残存状態が悪く柱穴かどうかなどその性格は確認できなかった。

C区では現耕作土下に洪水による砂礫層が堆積し、その下部で水田(SN01)と畝状遺構(SN02)を確認した。水田面で近世の陶磁器片が出土しており、砂礫層に乱れないためともに江戸時代の遺構であると考えられる。水田は水路(SD01)と畦畔により7枚の小区画に分けられる。畦畔は円礫を芯材にして粘質土を盛った構造となっている。SN01の下部では時期不明の水田面(SN03)を確認した。SN03もSN01同様に水路(SD02)と石を芯材にした畦畔により4枚の小区画に細分できる。周囲は水田面と同レベルで自然流路を埋める礫層が露出しており、狭小な区画を耕作地としていたことがうかがえる。

(山梨)



図版33 遺跡全景(南から)



図版34 遺跡全景(南東から)

(2) SC01について

第Ⅲ-Ⅱ層の黒褐色粘質土上面からの検出である。検出時は平面プランの一部が調査区外ではあったが、円形と短い長方形が組み合わされた形状を呈していた事から住居跡と判断した。また検出時に出土した土器から弥生時代後期頃との所見を得た。掘削に先駆け、住居跡西側にトレンチを設定し堆積状況を確認した後に掘削を始めることにした。堆積状況は床面まで0.20m程で、黒褐色粘質土の覆土を確認した。

隣接する調査区から同時期の住居跡が数軒検出されており、床面及び覆土からガラス小玉が数個～十数個出土していた。この事からSC01の覆土は全て採取し後日ふるいにかけることにした。

採取の方法は北側から時計周りに①～④と分け、覆土、床面、掘り方、張り出し部、周溝、土坑、柱穴で細分した(第15図)。

掘削方法は、土層ベルトを南北方向に長軸をとり、住居の円形部分で土層ベルトを東西方向に短軸を設定した。これを基準に掘削を行うこととし、数回に分け床面までの掘削を行った。また出土遺物はその場に残し出土状況を保つように心がけた。こうして掘削を実施した結果以下の状況が確認された。

平面プラン北側に長軸2.58m、短軸1.1m、深さ0.16～0.21mの長方形の張り出し部と長軸7.3m、短軸4.78m+の円形を組み合わせた住居跡で床面までの残存高は0.20～0.22mを測る。住居跡内の施設としては周壁溝、土坑、柱穴がある。周壁溝は幅0.40～0.55m、深さ0.22～0.32mを測り全周する。やや南側が深く断面形状はU字形を呈する。張り出し部には周壁溝はない。

土坑は中央で3基(SK01、02、03)を検出した。しかしSK02は僅かな窪みしかなく、立ち上りも判然としない状況であった。SK01の平面プランは長軸0.84m、短軸0.80m、深さ0.21mの円形を呈する。SK03は長軸1.0m、短軸0.64m、深さ0.18mを測る楕円形の平面プランを呈する。土坑内は炭化物、焼土痕を含む土層堆積状況からみて炉跡と考えられるがSK01は土層の堆積状況及び床、壁面の焼土痕が残っていないため炉跡以外の機能(食糧貯蔵等?)が考えられる。柱穴は4箇所確認し(SP01～04)いずれも掘り方の平面プランは0.44m～0.6m程の円形、楕円形で、柱痕は直径0.20～0.22m、深さ0.32～0.50mを測る。柱穴はSK01、03を取り巻くように配置している。SP01～02間の距離(芯々)は1.6m、SP02～03間の距離(芯々)は1.7m、SP03～04間の距離(芯々)は1.76mである。この柱穴配置から調査区外の柱穴構築場所の推定を行うと中央土坑をとり囲むような配置である。

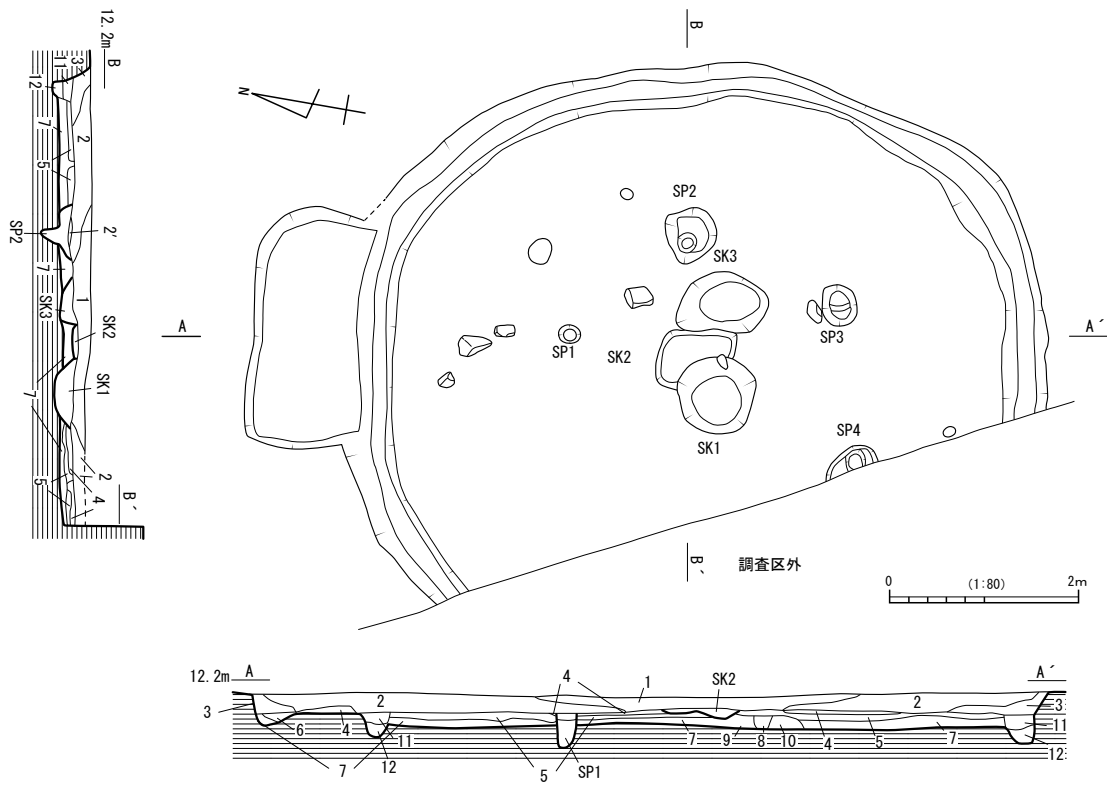
床面は掘り方から8cm程黒色弱粘質土を敷き、その上に鈍い黄褐色粘質土を5～8cmで土固め、更に暗褐色粘質土を5cm程土固めて貼床を構築している。遺物は全て破片細片等で、住居内全体から散発的に出土する状況から考えて廃絶住居跡と推定できる。全体的に残存状況は良好で多くの情報が得られた。



図版35 SC01検出状況(南から)

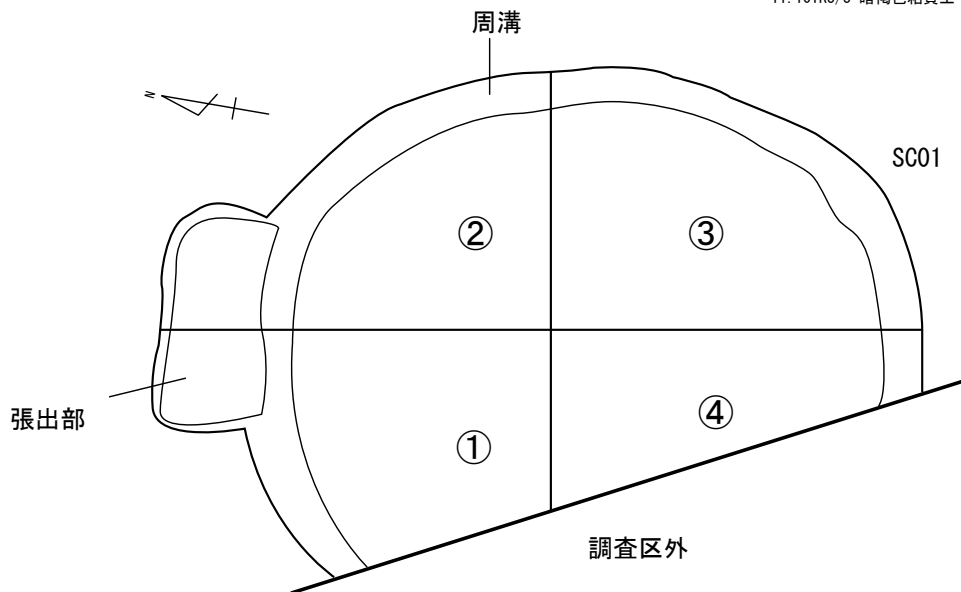


図版36 SC01検出状況(北から)



第14図 SC01遺構平、断面実測図(1/80)

- 1. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (炭化物含む)
- 2. 10YR2/2 黒褐色弱粘質土
- 3. 10YR3/3 暗褐色弱粘質土 (地山ブロック含む)
- 4. 10YR3/3 暗褐色粘質土 (10mm大の小礫 炭化物含む)
- 5. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土 (炭 褐色ブロック含む)
- 6. 10YR2/2 黒褐色弱粘質土
- 7. 10YR2/3 黒褐色弱粘質土
- 8. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土
- 9. 10YR4/4 褐色砂質土と10YR3/3暗褐色粘質土の混土
- 10. 10YR5/8 黄褐色砂質土
- 11. 10YR3/3 暗褐色粘質土



第15図 ガラス小玉採取方法(略図)

※北側から時計回りに①～④と分け、覆土、床面、掘方、張り出し部、周溝、土坑、柱穴で細分した。



図版37 SC01遺構検出状況(北から)



図版38 SC01床面検出状況(北から)



図版39 SC01土層ベルト設置状況(北から)



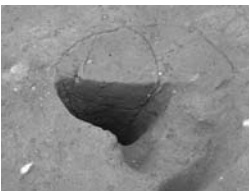
図版40 床面検出状況(西から)



図版41 土坑半截状況



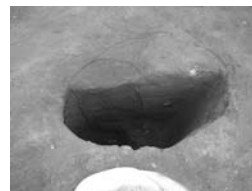
図版42 床面検出状況(西から)



図版43 SP01



図版44 SP02



図版45 SP03



図版46 SP04



図版47 周壁溝



図版48 SC01掘削状況



図版49 ガラス小玉出土状況



図版50 ガラス小玉出土状況



図版51 台付甕出土状況



図版52 釣針出土状況

① SC01出土遺物について

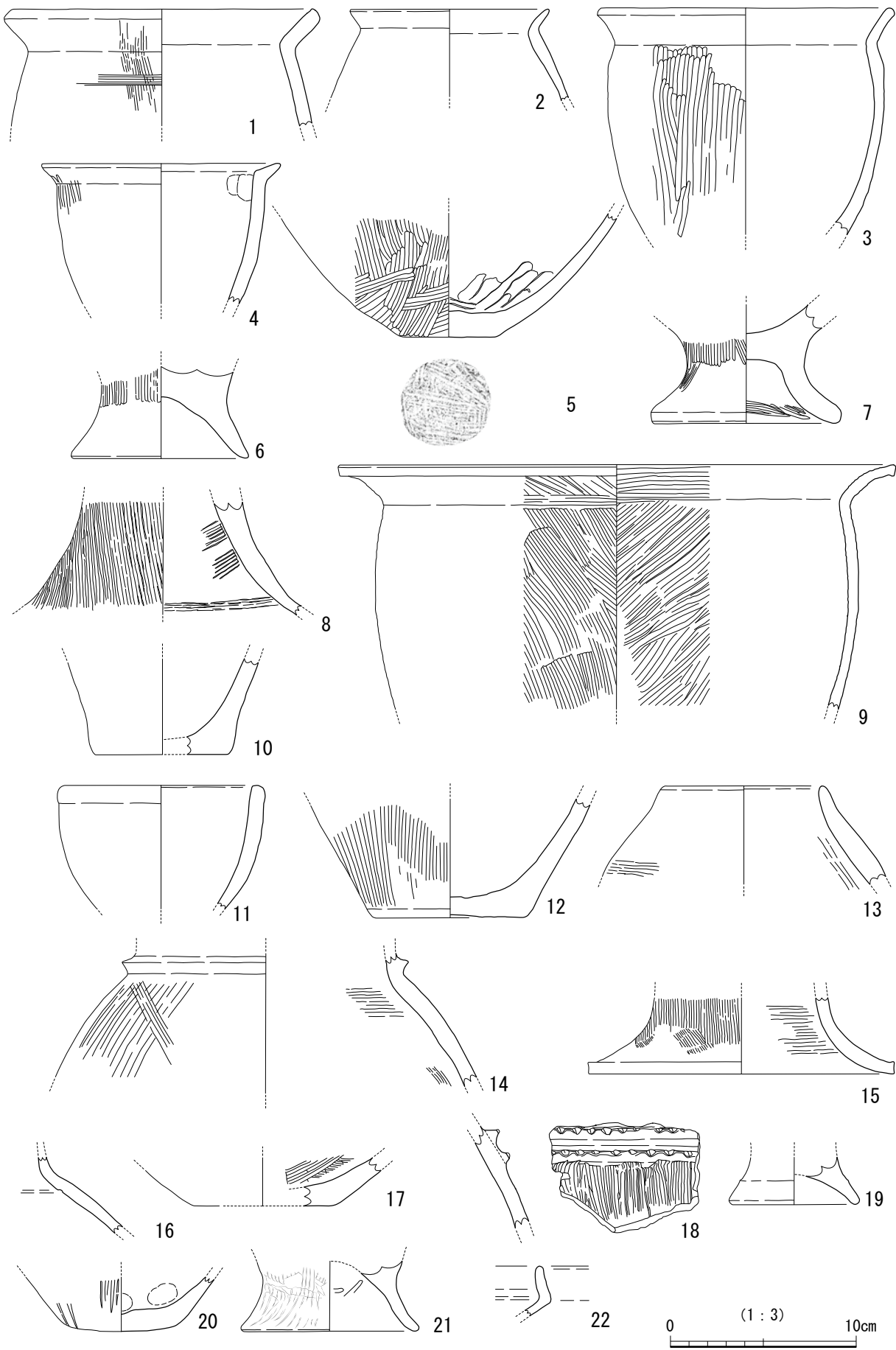
出土遺物は覆土及び床面、周壁溝から出土した。完形品はなく、いずれも破片、細片が中心である。器種は台付甕、甕、壺、器台、砥石、鉄製釣針、ガラス小玉等が出土した。床面及び床面近くから弥生時代後期前半～中頃の土器、覆土から縄文時代早期の連珠押型文土器、晩期の黒色磨研、条痕文土器等が出土した。以下出土遺物の説明を行う。鉄製釣針は「まとめ」、ガラス小玉は「自然科学分析」の項で説明する。

A. 弥生土器

1~4は甕口縁部~胴部にかけての破片である。1はくの字形の口縁を呈する甕で、口縁端部外側は丸く仕上げられている。胴部外面は縦方向のハケ目調整後、横方向にハケ目調整を施している。弥生時代後期前半~中頃であろう。2は短く外反する口縁部で端部は丸く仕上げる。胴部は粗い縦方向のハケ目調整を施す。3は緩やかなくの字形の口縁を呈する小形の甕で口縁端部は丸く仕上げている。胴部は縦方向にハケ目調整を施し、一部ススの付着がある。全体的に丁寧な作りである。弥生時代後期前半頃の所産か。4は短く外反しくの字形口縁を呈する小形の甕である。口縁端部は丸く仕上げられ、胴部外面は比熱を受けススの付着と薄い剥離痕が目立つ。5は壺の底部~胴部片である。底部の直径は5cmと小さく、底部~胴部全体に丁寧なハケ目調整を施す。弥生時代後期前半~中頃であろう。6~8は台付甕の脚台部である。6は脚の開きは緩やかに外反する。端部は丸い。7は脚の開きはやや強く外反する。脚端部は厚く丸い。8は脚台部の径が15cm以上あるやや大形の脚部である。脚端部は欠損している。内面は斜め方向に当て具痕、外面はハケ目調整を施している。4、6~9は甕の口縁部~胴部にかけての破片である。口縁部はくの字形を呈し、器厚は全体に薄い。内外面は斜め方向にハケ目調整を行う。全体的に丁寧な作りである。10は甕の底部で平底である。11は小形の鉢口縁部~胴部片である。口縁端部は丸く仕上げられている。器厚はやや厚い。12は甕の底部~胴部片である。底部はやや浅く内側に窪む。外面は縦方向にハケ目調整を施す。13は壺の口縁部~胴部片である。口縁端部は丸く仕上げられ、外面は僅かにハケ目調整が残る。14は三角貼付突帯を口頸部に付け、内外面にハケ目調整を施している。15は器台で脚は大きく外反する。内外面はハケ目調整を施している。16は甕口頸部~胴部片である。胴部はハケ目調整を施す。17、20は甕又は壺の底部片である。17は内面に斜め方向のハケ目調整を施す。20は底部片で僅かに凸レンズ状を呈する。18は壺胴部片で2条の三角刻目突帯を有す。19、21は台付甕の脚部である。19はやや内湾気味に開き、端部は丸い。21はやや外反気味に開く。

B. 縄文土器

22は晩期の精製土器で浅鉢口縁部片である。23~26、54は早期の連珠押型文である。23~25は鉢胴部片、26は口縁部片で口縁部内側に縦方向に刻みと波状文を施す。27は楕円押型文、28は晩期の多重沈線文土器で内外面に沈線を施す。胴部片である。29~32、35、53は晩期の刻目突帯文土器で胴部片である。33は晩期の条痕文土器で胎土に雲母を含む胴部片で焼成は良好である。34、37~39、52は黒色磨研土器で浅鉢の口縁部片ある。36は晩期の凹文突帯土器で胴部片である。40は晩期のリボン状突起を有する口縁部片である。41、42はくの字形口縁部片で42は磨研土器である。43は晩期の彩文土器である。44は晩期の精製土器で浅鉢口縁部片である。丁寧な作りである。45は晩期の条痕文土器で鉢胴部片である。46は無頸壺で口縁部片である。外面は丹塗りを施しており丁寧な作りである。47、48は晩期の磨研土器である。47は口縁部片で、穿孔が1箇所確認できる。48は底部片で外面に磨き痕が残る。49、50は浅鉢の口縁部片である。51は網代圧痕を呈する胴部片である。



第16図 SC01出土土器実測図(弥生土器、縄文土器) (1/3)



第17図 SC01出土土器実測図(縄文土器) (1/3)



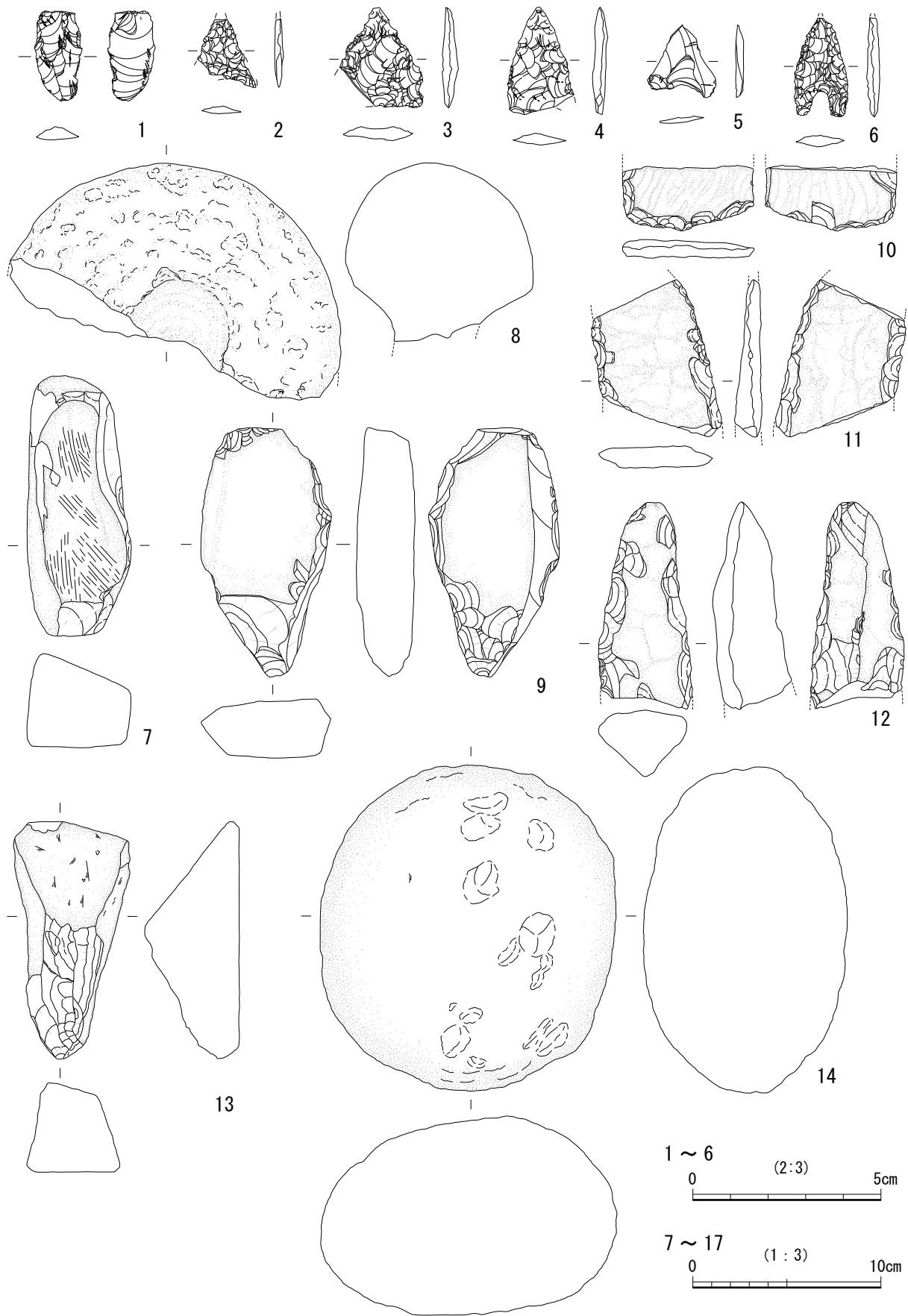
图版53 SC01出土土器

第1表 SC01出土土器観察表

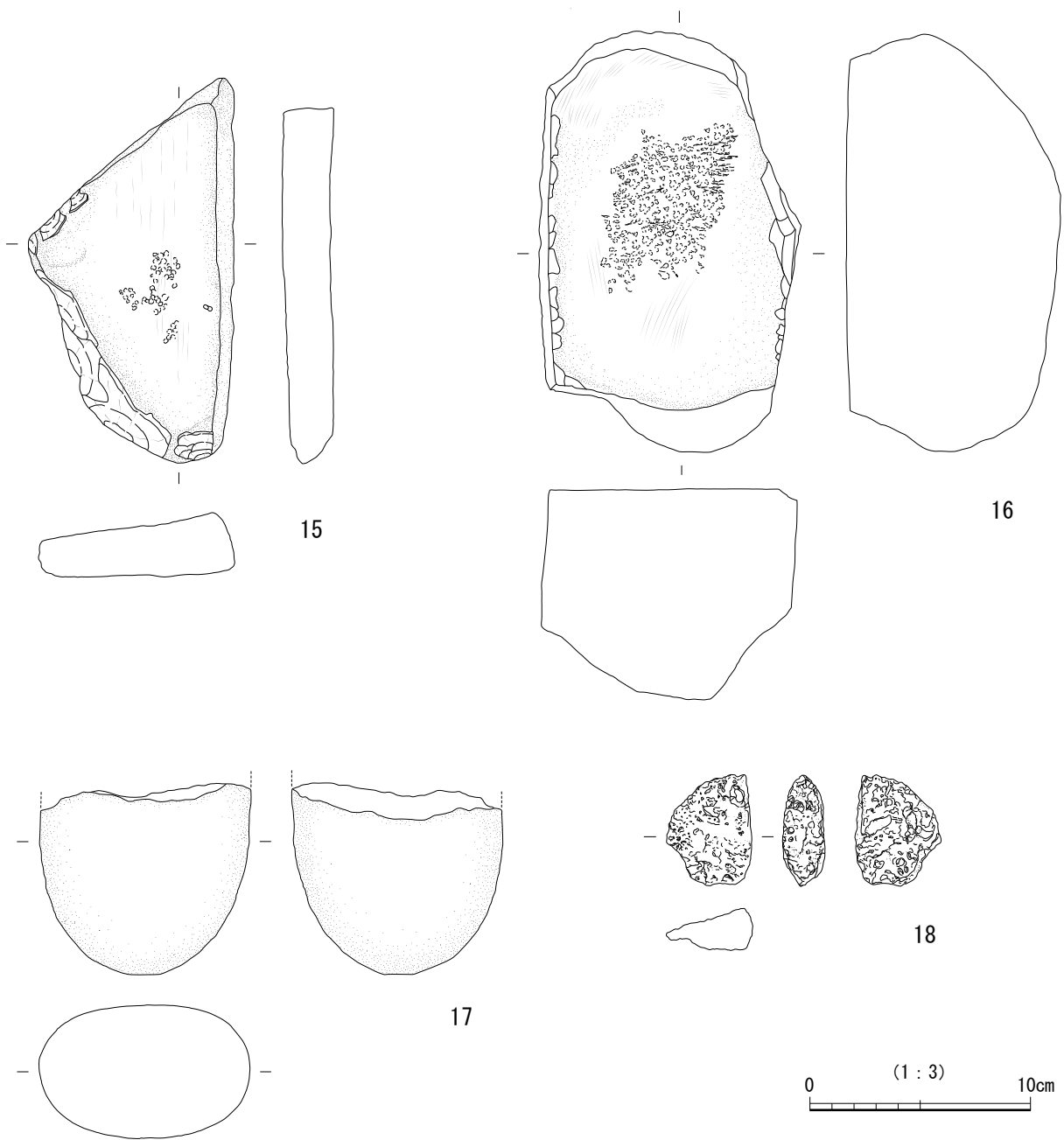
番号	器種	時代	口径 cm	器高 ()は推定値	底径	色調		胎土	焼成	備考
						内面	外面			
1	壺口縁～胴部	弥生後前期～中頃	(16.2)	6.2+		5YR 4/6 赤褐色	5YR 4/6 赤褐色	1mm程度の砂	良好	
2	壺口縁～胴部	弥生後前期～中頃	(10.6)	4.9+		10YR 5/3 にぶい黄褐	10YR 4/3 にぶい黄褐	2mm程度の砂	やや粗い	口縁部短く やや外反する「くの字」 胴部内外面にハケ目
3	壺口縁～胴部	弥生後前期～中頃	(15.6)	12.1+		7.5YR 3/3 暗褐	7.5YR 4/2灰褐	雲母、角閃石	良好	
4	壺口縁～胴部	弥生後前期～中頃	(12.8)	7.5+		2.5YR 4/2 灰赤色	10YR 4/2 褐灰色	1mm程度の砂粒	良好	小型壺 外面に火熱を受けた剝離痕が目立つ 一部煤が付着
5	壺底部～胴部	弥生後前期～中頃		6.6+	5.0	10YR 5/4 にぶい黄褐色	10YR 5/4 にぶい黄褐色	細かい砂粒	良好	外面全体にハケ目調整
6	台付壺	弥生後期		4.9+	9.4	5YR 4/6 赤褐色	5YR 4/6 赤褐色	砂粒	良好	仕上げはナデ調整、脚の開きはゆるやかに外反
7	台付壺	弥生後期		6.3+	9.8	10YR 7/4 にぶい黄橙	10YR 7/4 にぶい黄橙	細かい砂粒	良好	脚部1/2が残存、脚部はハチ形に開き端部は丸く厚い、内外面ハケ目調整
8	台付壺	弥生後期				10YR 8/4 浅黄橙	10YR 8/4 浅黄橙	1mm程の砂粒	良好	外面ハケ目、内面叩き痕
9	壺口縁部～胴部	弥生後期	(29.8)	13.1+		7.5YR 4/2 灰褐	7.5YR 2/1 黒	長石、角閃石	良好	
10	壺底部	弥生後期		5.1+	(7.0)	10YR 7/4 にぶい黄褐	10YR 5/1 褐灰色	多くの砂粒	良好	
11	鉢口縁部～胴部	弥生後期	(10.0)	6.6+		10YR 3/4 暗褐色	10YR 5/3 にぶい黄褐	砂粒	良好	内面に煤付着
12	壺底部	弥生後期		6.3+	(8.0)	7.5YR 3/4 暗褐色	7.5YR 6/1 褐灰色	多くの砂粒	良好	外面縦方向のハケ目 一部煤付
13	壺口縁部	弥生後期	(8.4)	5.2+		10YR 8/4 浅黄橙	10YR 8/4 浅黄橙	1mm程の砂粒	良好	口縁部ナデ調整、胴部ハケ目調整
14	壺貼付突帯	弥生後期				10YR 8/4 浅黄橙	10YR 8/4 浅黄橙	多くの砂粒	良好	頸部に三角突帯 内外面ハケ調整
15	器台脚部	弥生後期～終末		4.0+	(16.4)	10YR 8/4 浅黄橙	10YR 8/4 浅黄橙	1mm程の砂粒	良好	内外面ハケ調整
16	壺口頸部	弥生後期				10YR 2/3 黒褐色	7.5YR 7/4 にぶい橙	細かい砂粒	良好	内外面にハケ目 外面一部に煤付着
17	壺又は壺底部	弥生後期		2.5+	(7.4)	10YR 6/3 にぶい黄橙	10YR 7/4 にぶい黄橙		良好	内面ハケ目あり
18	二条貼付刻目突帯	弥生後期				7.5YR7/4にぶい橙	7.5 Y R8/3浅黄橙	2mm次の赤色粒子、石英、長石	良好	
19	台付壺	弥生後期		2.5+	(6.6)	7.5YR 7/6 橙	7.5YR 7/6 橙		良好	
20	壺又は壺底部	弥生後期		2.9+	(5.6)	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	角閃石、長石、白色粒子混じる	良好	後期前半 高三瀬
21	台付壺	弥生後期		3.8+	(9.0)	7.5YR 6/6 橙	7.5YR 6/6 橙		良好	台付壺 底部
22	浅鉢口縁部	縄文晩期		2.6+		10YR 8/3 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	石英、長石、角閃石、赤色粒子	良好	複合口縁部片
23	連珠押型文	縄文早期				7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR5/3にぶい褐	角閃石、長石、石英、雲母	良好	
24	連珠押型文	縄文早期				7.5YR6/6 橙	7.5YR4/2 灰褐	角閃石、長石、石英、雲母	良好	
25	連珠押型文	縄文早期				7.5YR6/6 橙	7.5YR 7/6 橙		良好	
26	連珠押型文	縄文早期		7.0+		10YR 3/1 黒褐色	10YR 5/4にぶい黄褐色		良好	
27	楕円押型文	縄文早期				10YR 3/1 黒褐色	10YR 3/1 黒褐色		良好	楕円押型文
28	多重沈線文	縄文晩期				10YR 5/2灰黄褐	10YR5/4 にぶい黄褐	石英、長石、角閃石	良好	内外面に沈線あり 胴部片
29	刻目突帯文	縄文晩期		2.6+		2.5Y3/2 黒褐	10YR6/3 にぶい黄橙	石英、長石、雲母	良好	口縁部
30	刻目突帯文	縄文晩期				2.5Y7/3 浅黄	2.5Y 5/1黄灰		良好	2mm次の白色粒子、雲母
31	刻目突帯文	縄文晩期				7.5YR 6/4 にぶい橙	7.5YR 4/2灰褐	細かい砂粒	良好	
32	刻目突帯文	縄文晩期		2.0+		7.5YR 4/3 褐	7.5YR 5/3 にぶい褐		良好	
33	条痕文	縄文晩期				7.5YR 5/3 にぶい褐	10YR 4/4 褐		良好	胎土に雲母を含む
34	黒色磨研浅鉢	縄文晩期		1.6+		10YR3/1 黒褐	10YR 4/1 褐灰		良好	浅鉢 口縁部
35	刻目突帯文	縄文晩期				10YR4/2灰黄褐	10YR5/3にぶい黄褐	石英、長石、雲母	やや良好	
36	凹文突帯	縄文晩期				10YR8/4浅黄橙	10YR6/2灰白	石英、長石、雲母	良好	
37	黒色磨研浅鉢	縄文晩期		2.0+		5Y 3/1オリーブ	5Y 3/1 オリーブ黒	石英、長石、雲母、赤色粒子	良好	
38	黒色磨研浅鉢	縄文晩期		4.2+		10YR 6/3 にぶい黄橙	2.5Y4/1 黄灰		良好	
39	黒色磨研浅鉢	縄文晩期		1.9+		10YR 3/1 黒褐色	10YR 3/1 黒褐色	石英、長石、雲母、赤色粒子	やや良好	
40	リボン状突起	縄文晩期		2.8+		10YR 7/4にぶい橙	2.5Y7/4 浅黄		良好	
41	くの字型口縁	縄文晩期				7.5YR 7/4 にぶい橙	10YR 8/2 灰白	石英、長石、角閃石、赤色粒子	良好	
42	くの字型磨研	縄文晩期		4.4+		7.5YR 5/3 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐		良好	口唇部に丹塗り
43	彩文土器	縄文晩期				10YR 6/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙		良好	
44	精製土器口縁	縄文晩期		2.9+		5YR 6/6 橙	10YR 7/2 にぶい黄橙		良好	
45	条痕文土器鉢	縄文晩期				2.5Y 5/4 黄褐	2.5Y 5/2 暗灰黄	角閃石、長石、白色粒子混じる	良好	
46	無頸壺	縄文晩期		3.0+		上:5YR6/8橙下:7.5YR8/3浅黄橙	10YR 4/1褐灰	石英、長石、角閃石	良好	外面丹塗り
47	磨研土器	縄文晩期		2.9+		10YR3/1 黒褐	10YR 5/3 にぶい黄褐		良好	穿孔あり
48	磨研土器	縄文晩期				2.5YR 5/6明黄褐	5YR 5/6 明赤褐	石英、長石、角閃石、赤色粒子	良好	丹塗り 底部
49	浅鉢口縁	縄文晩期		2.0+		2.5Y 6/2灰黄	2.5Y 5/2 暗灰黄		良好	
50	浅鉢口縁	縄文晩期		2.2+		10YR 8/3 浅黄橙	10YR 6/2灰黄褐	石英、角閃石、長石	良好	
51	網痕土器	縄文晩期				5Y 3/2 オリーブ黒	2.5Y 3/2 黒褐	石英、長石	良好	
52	黒色磨研浅鉢	縄文晩期		1.6+		2.5Y 5/2 暗灰黄	2.5Y 5/2 暗灰黄		良好	
53	刻目突帯	縄文晩期				10YR5/6 黄褐	10YR5/3にぶい黄褐		良好	
54	連珠押型文	縄文早期				10YR 6/6明黄褐	2.5Y 5/3 黄褐		良好	

C. 石器

1は黒曜石の剥片で腰岳産である。周溝覆土からの出土である。2～6は石鏃である。4はサヌカイトで他は黒曜石である。2、5は凹基無茎鏃、3、4は平基式三角鏃、6はやや縦長の円脚鏃で先端部が僅かに欠損する。7はSC01内のSK01覆土からの出土で砥石である。石材はデイサイトである。8は7と同じくSC01内のSK01覆土からの出土である。安山岩?で直径18cm、厚さ10cm程の円礫の石製品で半分が欠損する。中央部の両面が直径6cm、深さ3cm程削り込まれている。また外形面は擦れた痕跡を残す。9は周溝から出土した砥石で石材は安山岩である。10は薄手の打製石斧の先端部片で石材は凝灰岩である。11は打製石器で両側面を刃部に加工している。石材はデイサイトである。12は打製石片で一部欠損する。石材は安山岩である。13は砥石で石材は安山岩である。14は円形に加工された石製品か。中央部に窪みを施すと8と同類の石製品になる可能性がある。床面直上からの出土で石材は安山岩である。15、16は床面直上からの出土である。15は砥石か16は平坦面を上に向けた状態で出土した台座石である。石材は凝灰岩である。17は擦り石で半分欠損する。石材は安山岩である。18は軽石である。製品か。



第18図 SC01出土石器実測図その1 (1/3) (2/3)



第19図 SC01出土石器実測図その2(1/3)

第2表 SC01出土石器観察表(長さ、幅、厚さmm、重さg)

番号	器種	時代	長さ	幅	厚さ	重量	材質	備考
1	剥片	縄文	36.0	19.0	6.5	3.4	黒曜石	完形
2	石鏃	縄文	18.0	15.5	2.5	0.48	黒曜石	先端部・片脚欠損、脚部の側縁欠損
3	石鏃	縄文	26.2	22.0	4.2	1.66	黒曜石	片脚欠損 平基無茎鏃
4	石鏃	縄文	28.5	17.5	4.0	1.4	サヌカイト	片脚欠損
5	石鏃	縄文	19.0	18.0	2.5	0.43	黒曜石	石鏃未成品 調整は表面の基部のみに施される
6	石鏃	縄文	26.0	14.0	3.5	1.15	黒曜石	先端部をわずかに欠損する
7	礫石	縄文	138.0	55.0	57.0	615.0	デイサイト	
8	くぼみ石	縄文	176.0+	125.0+	100.0+	1885.0+	安山岩?	表面はきめが粗くデコボコしている
9	礫石?	縄文	132.0	69.0	31.0	390.0	安山岩	
10	扁平打製石斧片	縄文	34.0+	70.0+	10.0+	30.61+	凝灰岩	
11	打製石斧	縄文	84.0+	69.0+	14.0+	75.0+	デイサイト	ブームラン型か?
12	打製石斧	縄文	110.0+	50.0+	42.0+	205.0+	安山岩	
13	礫石	縄文	125.0	62.0	50.0	390.0	安山岩	
14	円形石	縄文	173.0	157.0	108.0	3690.0	安山岩	
15	砥石か?	弥生	174.0	93.0	29.0	570.0	安山岩	用途不明
16	磨製台座	弥生	191.0	120.0	97.0	3175.0	凝灰岩	
17	磨り石	弥生	86.0+	96.0+	60.0+	755.0+	安山岩	半欠片
18	礫石製品?	弥生	50.0	39.0	19.0	7.11	礫石	浮きを利用か?



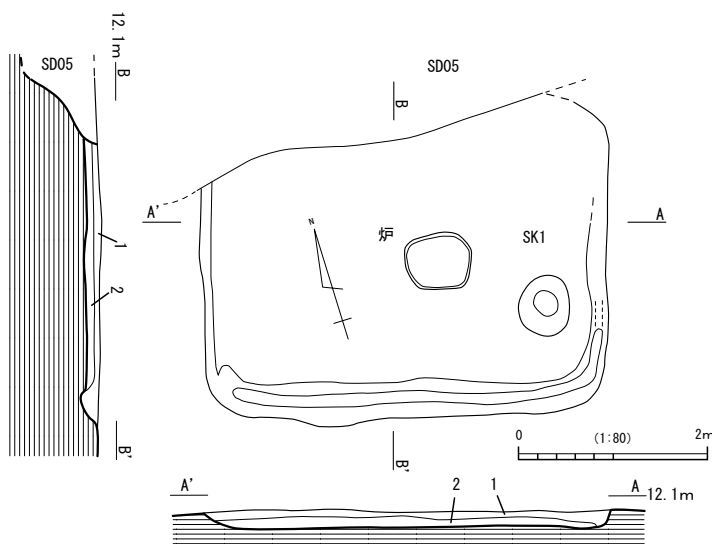
图版54 SC01出土石器

(3) SC02について

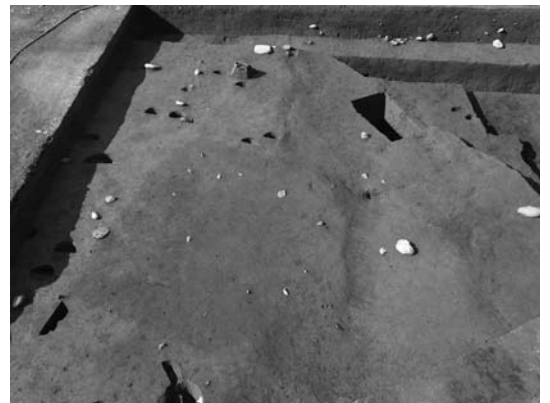
SC01から北へ20mの所に位置する。遺構検出時に長方形と東西方向に伸びる平面プランを確認した。長方形の平面プランから住居跡と判断し、東西方向に伸びる平面プランの幅、長さから溝と判断した。しかし住居跡、溝は切り合い関係を示しているため再度重複部分の遺構検出を実施したが判然としなかった。そこで重複部分に土層ベルトを設定し判断をすることにした。結果SD05がSC02を切っており新旧関係が明らかとなった(第40図)。

住居跡内の掘削は東西方向に長軸の土層ベルトを南北方向に短軸の土層ベルトを設定し(十字形)掘削を実施した。検出時に出土した土器から弥生時代後期前半頃の住居跡と所見を得ていたため、SC01と同様にガラス小玉が出土する可能性が考えられた。そこで遺構内の覆土は全て採取し、後日ふるいにかけることにした。住居跡内の覆土の採取方法はSC01と同じである。

長軸(東西方向)4.3m、短軸(南北方向)2.9m+、深さ0.18mを測り平面プランは隅丸長方形を呈する。中央に長軸0.7m、短軸0.58m、深さ0.2mを測る炉跡が所在する。炉跡の平面プランは楕円形を呈し、炉内には魚、動物?と思われる骨小細片が多く出土した。住居跡の南では幅0.4m、深さ0.15m、東では幅0.20m、深さ0.10mの周壁溝を設置している。南東端には長軸0.64m、短軸0.54m、深さ0.3mの室内土坑が所在する。この中からは遺物等は出土しなかった。住居跡床面直上及び掘り方床面の検出結果から柱穴の所在は確認できなかった。



1. 10YR3/2 黒褐色粘質土
2. 10YR3/4 暗褐色粘質土

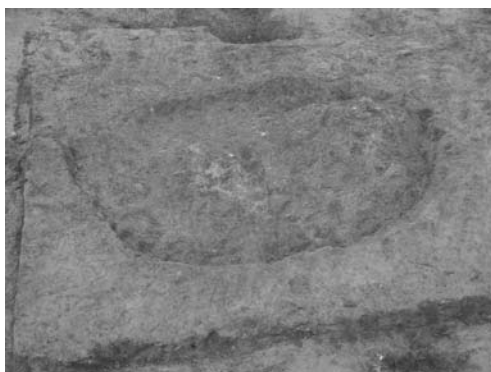


図版55 SC02検出状況(東から)

第 20 図 SC02 遺構平、断面実測図 (1/80)



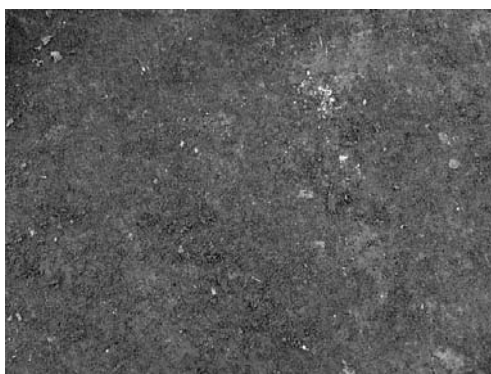
図版56 SC02完掘状況(東から)



図版57 炉跡検出状況



図版58 SC02内SK01半截状況(西から)



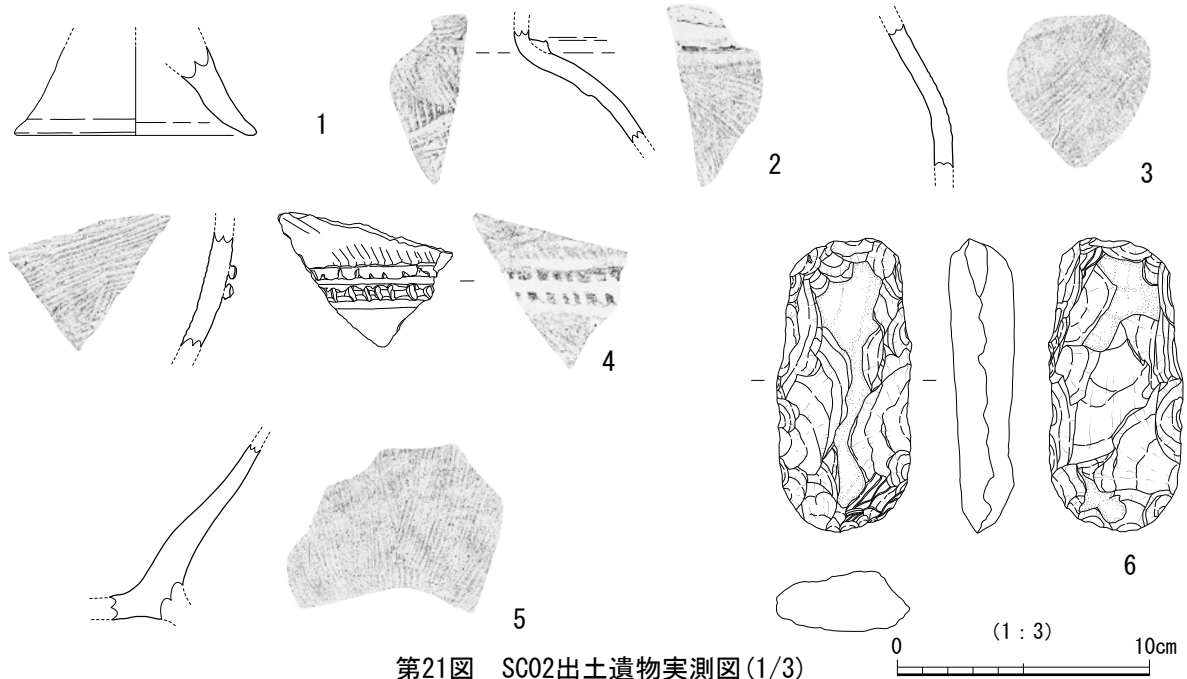
図版59 炉内骨片検出状況



図版60 SC02とSD05切合い関係(西から)

① SC02出土遺物について

遺物は床面及び覆土からの出土である。1は台付甕の脚台部で脚部が緩やかに外反する。脚端部は丸く仕上げられている。2は壺の頸部～胴部片である。頸部で三角突帯が1条巡る。外面はハケ目調整を行い、丹塗りを施している。3は壺の胴部で外面は丹塗りを施している。4は壺の胴部で2条の刻目突帯を有し、丹塗りを施す。内外面にハケ目調整を行う。5は高坏坏部である。外面は縦方向にハケ目調整を施す。6は石斧未成品で石材はデイサイトである。



第21図 SC02出土遺物実測図(1/3)



図版61 SC02出土遺物

第3表 SC02出土土器観察表

番号	器種	時代	口径		器高		底径		色調		胎土	焼成	備考
			cm	()は推定値	cm	()は推定値	cm	()は推定値	内面	外面			
1	弥生台付甕	弥生後期			3.5+	(9.4)			5YR 6/6 橙	7.5YR 5/3 にぶい褐	白色粒子、角閃石、石英	良好	脚部
2	弥生壺頸部～胴部	弥生後期							2.5Y 5/8 明赤褐	10YR 7/4 にぶい黄橙	角閃石、雲母、長石	良好	丹塗り
3	弥生壺胴部	弥生後期							10R 4/6 赤	2.5Y 3/1 黒褐	雲母	良好	胴部 外面丹塗り
4	弥生壺胴部	弥生後期							2.5YR 5/8明赤褐	10YR 7/4 にぶい黄橙	白色粒子 長石	良好	丹塗り 二条突帯
5	弥生高坏	弥生後期							5YR 5/4にぶい赤褐	5YR 4/1 褐灰	結晶菱岩・長石・石英を含む	良好	坏部

第4表 SC02出土石器観察表(長さ、幅、厚さmm、重さg)

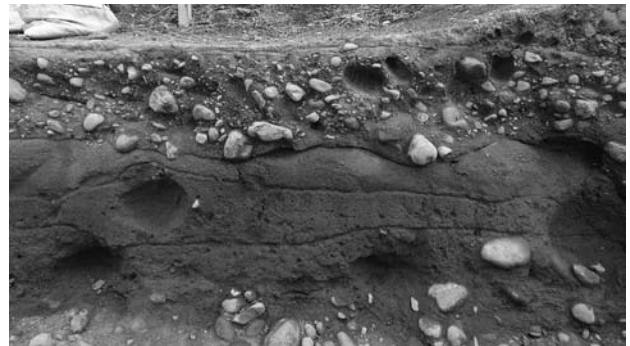
番号	器種	時代	長さ	幅	厚さ	重量	材質	備考
6	打製石斧	縄文	116.0	53.0	26.0	210.0	デイサイト	

(4) SN01(SN01-1～7)、SN03(SN03-1～4)の概要

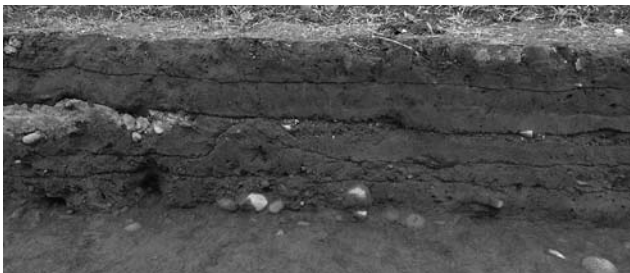
C区の試掘調査TP11～17までの間で第Ⅱ層からやや多くの輸入白磁が出土した。よって古代末～中世頃の遺構が所在する可能性が示唆された。そこでC区の調査を開始するにあたり再度堆積土層の確認をするため、東側に幅1m程のトレンチを設定した。その結果、第Ⅰ層 耕作土、第Ⅱ層 礫層(自然流路)、第Ⅲ層 砂層、第Ⅳ層 褐灰色弱粘質土(水田耕作土)、第Ⅴ層 礫層(自然流路)を確認した。土層の断面観察から第Ⅳ層の褐灰色弱粘質土で畦畔及び水路(後日認識)を確認した(第22図)。こうした状況から第Ⅲ層上面までを重機で掘削する事とし、その後は人力掘削で遺構検出を実施することにした。遺構検出の結果2面11枚の水田、畦畔、水路のセット関係を検出した。以下個別遺構の詳細を説明する。



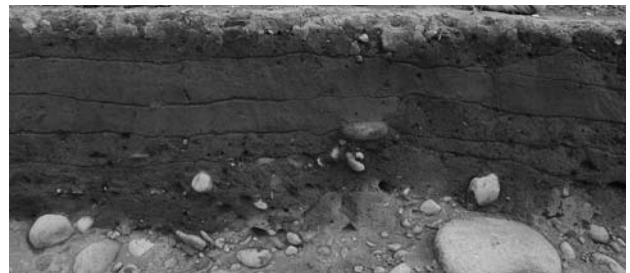
図版62 東側トレンチ断面水路(SD01)検出状況



図版63 東側トレンチ断面畦畔検出状況



図版64 東側トレンチ断面畦畔検出状況



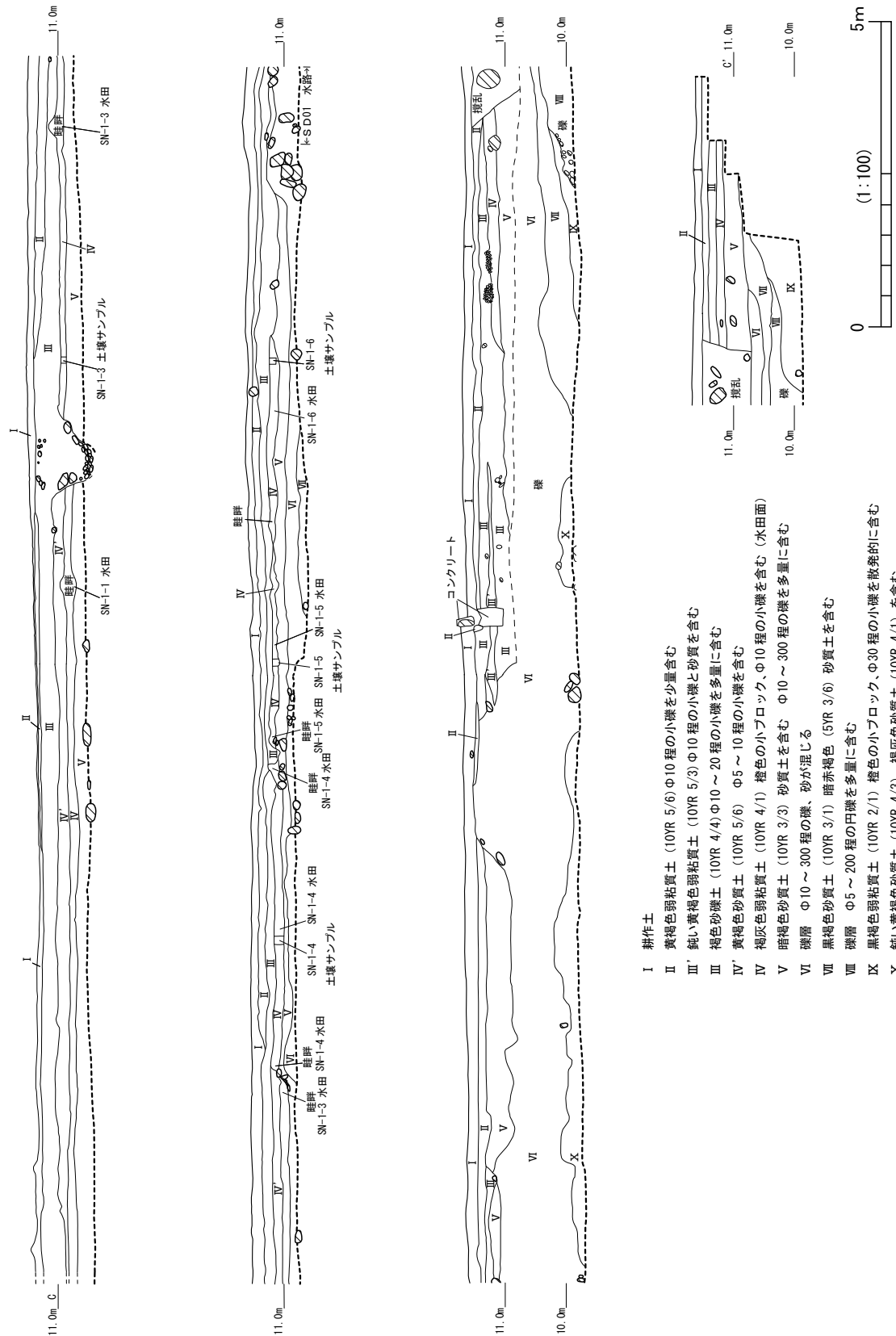
図版65 東側トレンチ断面畦畔検出状況

① 水田跡について(SN01-1～7)(SN03-1～4)

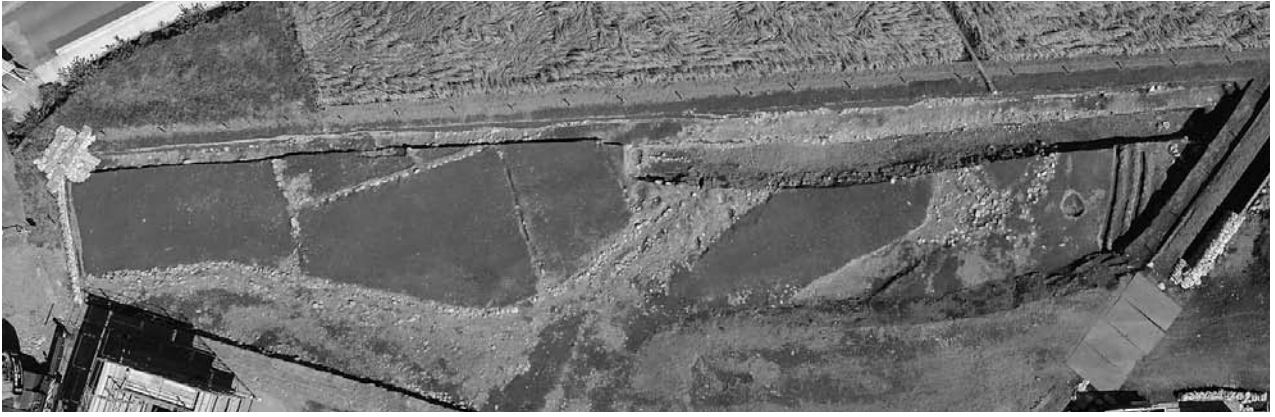
水田跡はC区北端から中央部までに第1面が7枚(SN01-1～7)、第2面が4枚(SN03-1～4)を検出した。第1面の遺構検出時点で畦畔の方向及び規模が明確に検出できたため水田面の土層堆積状況確認のためSN01-1～5水田までに南北土層ベルトを設定し、それに直行する方向で東西土層ベルトを設定した(第23図)。畦畔、水田形状、足跡、遺物の出土状況及び土層堆積状況を確認するためである。水田耕作土上面には10～18cm程の砂層が堆積していた。砂層を除去後に水田耕作土上面で足跡及び牛馬の足跡?を検出した。しかしながら方向などは判然としなかった。水田検出面の形状は東側が調査区外であるため判然としないが、SN01-1は方形か、2は台形、3は長方形か、4は台形か、5は台形か、6は台形か、7は台形か、いずれも水路に沿って、築造された水田である。水田耕作土の厚さは10～16cmを測る。褐灰色弱粘質土で砂を含む土質である。水田耕作土上面の比高差は南側のSN01-5からSN01-1まで0.36mである。水路に沿っていることから考えてSN01-5が標高11.08m、SN01-4が標高11.00m、SN01-2が標高10.90m、SN01-1が標高10.72mを測る。SN01-5水田からSN01-1水田までの南北方向の標高は10～18cm程の高低をつけて水の流れを調整できるように構築している(第25図)。

第1水田面の記録終了後に南北土層ベルト、東西土層ベルトを生かしその下面に遺構の有無確認の

ためトレンチを設定した。その結果、第2面の水田(SN03-1~4)、水路(SD02)、畦畔を検出した(第24図)。水田は4枚検出しSN01-1、2、4、7の下面で確認した。いずれも第1面の水田面積よりも小さく形状は不整形を呈する。



第22図 東壁土層断面図(1/100)



図版66 SN01水田面検出状況(第1面真上から)



図版67 SN03水田面検出状況(第2面北から)



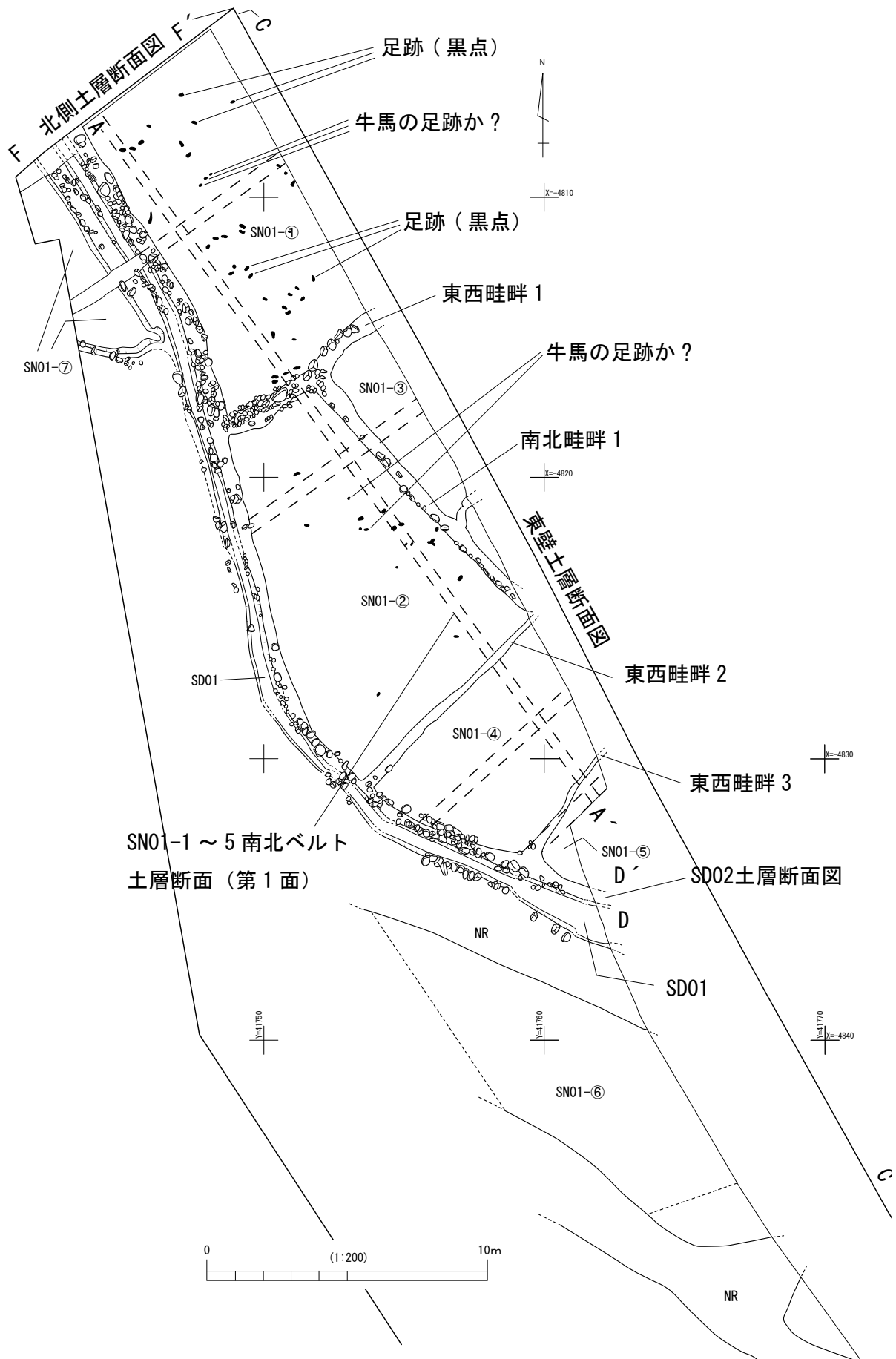
図版68 SN01-1足跡



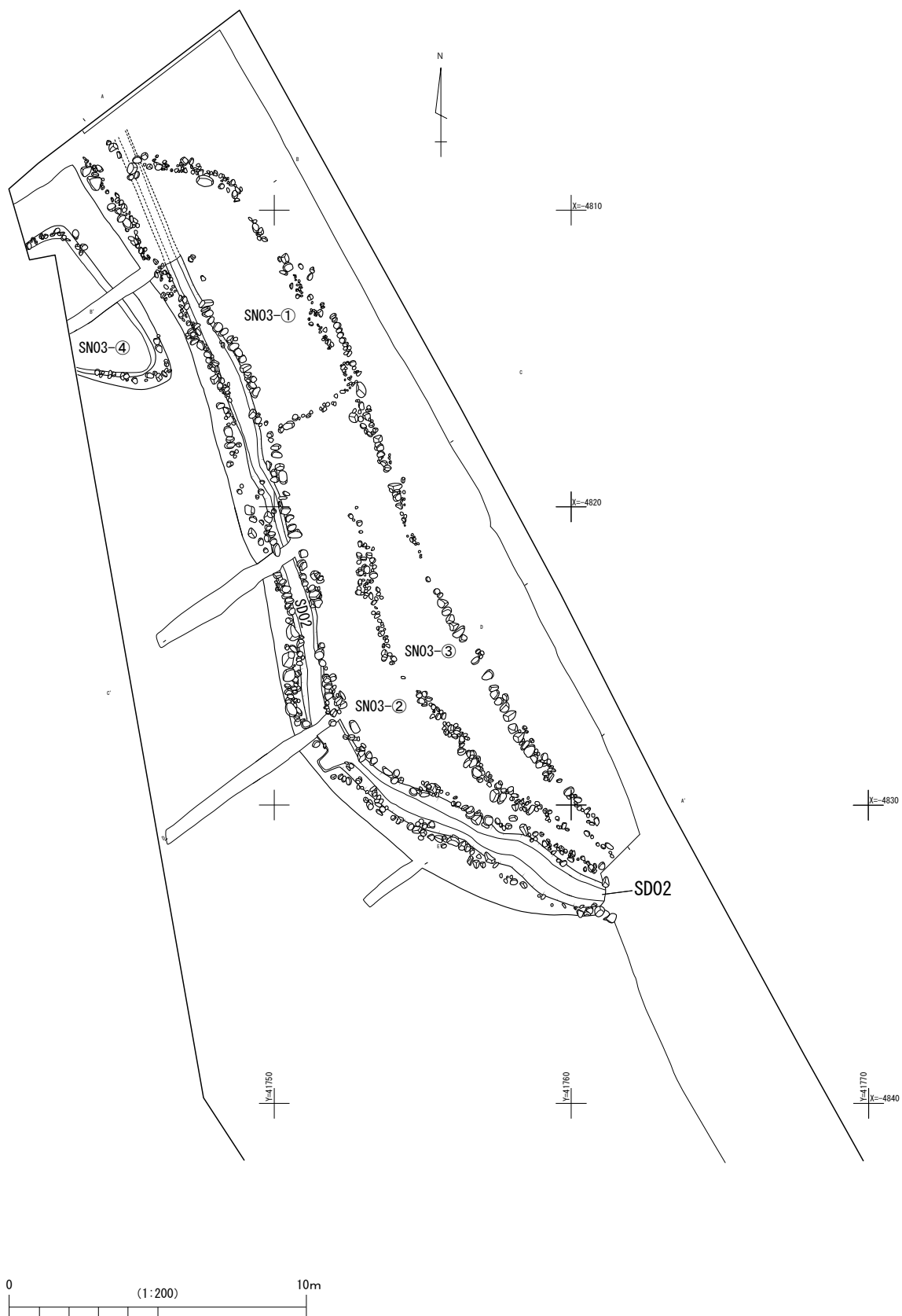
図版69 SN01-1足跡



図版70 SN01-2足跡



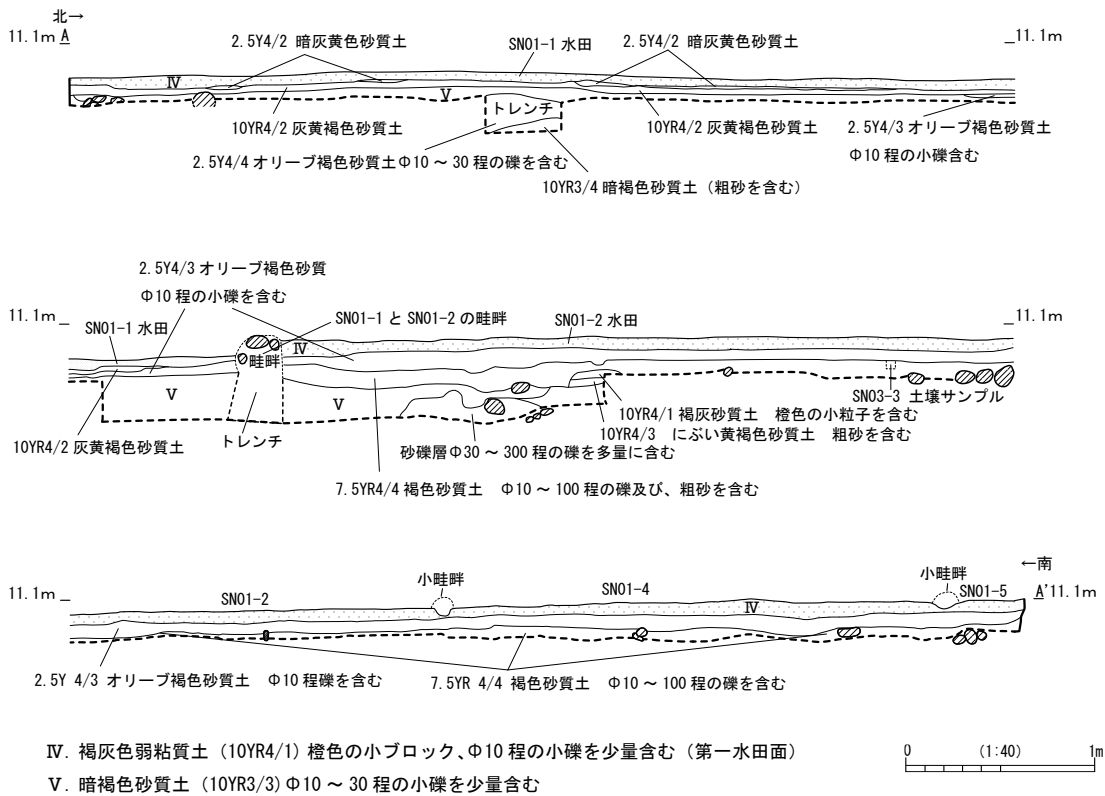
第23図 SD01、SN01 (1~7) 平面図(1/200)



第24図 SN03(1~4)平面図(1/200)



図版71 SN01-1~5南北ベルト土層断面(第1面)



第25図 SN01南北ベルト土層断面図(1/40)

第5表 水田観察表

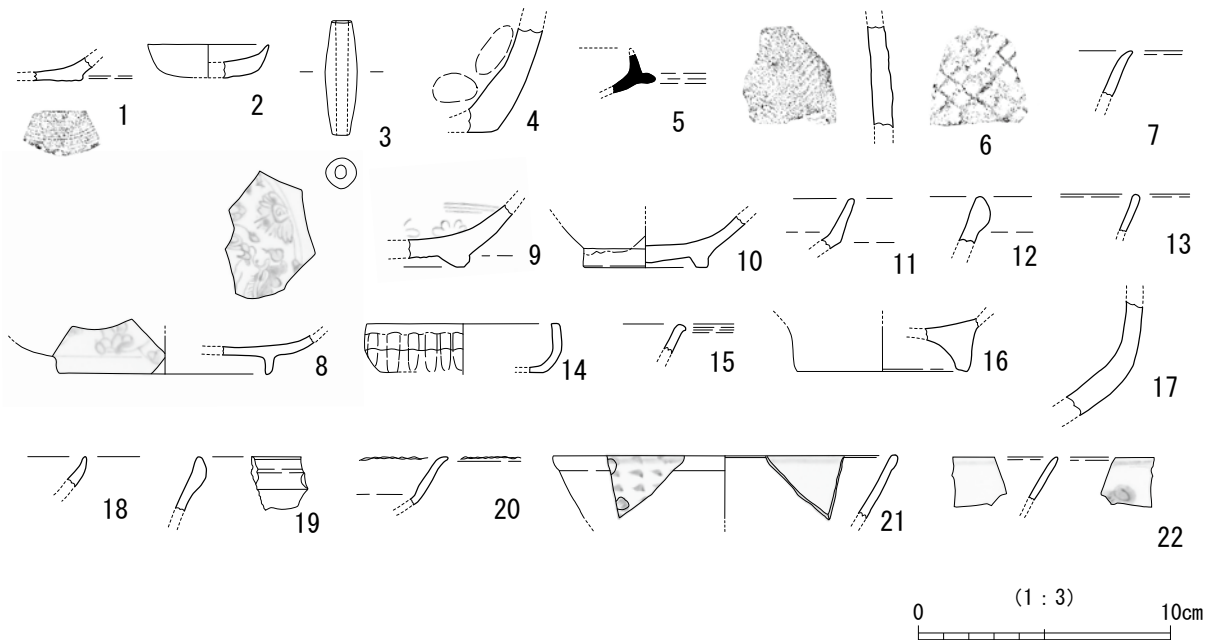
遺構名	水田形状	長軸 (北西~南東方向)	短軸(北東~南西)	耕作土の深さ	水田面積 備考
SN01-1 第1面	長方形+	11.6m+	60.m+	10~14cm	27.6m ² +
SN01-2 第1面	台形	11.4m	8.2m、4m	14~18cm	67.2m ² +
SN01-3 第1面	三角形?	10.0m+	2.4m+	12~18cm	12m ² +
SN01-4 第1面	台形	5.2m	8m、4.6m+	10.~18cm	32.76m ² +
SN01-5 第1面	台形?	2.4m+	3.8m+	12~14cm	2.96m ² +
SN01-6 第1面	台形?	10.8m+	6.0m+	—	61.56m ² +
SN01-7 第1面	台形?	6.0m	2.8m+	12~15cm	21.60m ² +
SN03-1 第2面	不整形	9.2m+	2.4m	8~20cm	18.96m ² +
SN03-2 第2面	三日月形	17.0m(直線で)	1.6m	14~30cm	27m ²
SN03-3 第2面	不整三日月形	15.4m(直線で)	2.0m	8~14cm	7.5m ²
SN03-4 第2面	不整形	5.1m	1.8m+	11~16cm	6.72m ² +

② 水田跡からの出土遺物について

出土遺物は耕作土からの出土である。第1面は7枚(SN01-1、SN01-2、SN01-3、SN01-4、SN01-5、SN01-6、SN01-7)の水田から出土した。器種は弥生土器甕底部、糸切り土師器皿、土錘、瓦質土器、須恵器高坏、白磁碗、青磁碗、輪花皿、明染付、高麗青磁、肥前系陶器等が出土した。第2面からは弥生土器甕、土錘、土師器壺、白磁、青磁、瓦器等が出土した。しかしながら図示出来る遺物が出土した第1水田面はSN01-1、SN01-2、SN01-3、SN01-4、SN01-7の5枚、第2水田面はSN03-2、SN03-3、SN03-4の3枚である。以下順に説明する。

A. SN01-1

1、2は土師器カワラケで、2はミニチュア土器である。1は糸切り痕が残る底部片である。3は土錘の完形品である。4は瓦質土器鉢の底部～胴部片である。内面に指圧痕が残る。5は須恵器坏身で6世紀後半頃である。6は瓦質土器の鉢？胴部片である。軟質で内面はハケ目調整、外面は格子の叩き目を施す。7は白磁碗口縁部片で端部はやや反る。8、21、22は明染付である。8は皿？で高台～体部片である。内外面に花絵を施す。21、22は口縁部片でいずれも碗で15～16世紀頃の所産であろう。9は高麗青磁碗で高台～体部片である。内面に花卉の象嵌が入る。14世紀後半～15世紀代か。10は青磁碗で高台～体部片である。雑な作りである。11は白磁の皿？口縁部片である。12は玉縁口縁を呈する華南産白磁で11世紀後半～12世紀前半頃であろう。13は青磁口縁部片で内外面に施釉を施す。14は白磁の合子身で型押し成形により花卉状に作られている。15は白磁の皿か、中鉢の口縁部であろう。端部は短く反る。16は李朝の紛青沙器で碗の高台部である。16世紀後半頃か。17は青磁の鉢体部である。内外面に施釉を施す。18、19は白磁の碗口縁部である。19は玉縁口縁を呈する。11世紀後半～12世紀前半頃であろう。20は青磁の輪花皿口縁部である。



第26図 SN01-1出土土器実測図(1/3)



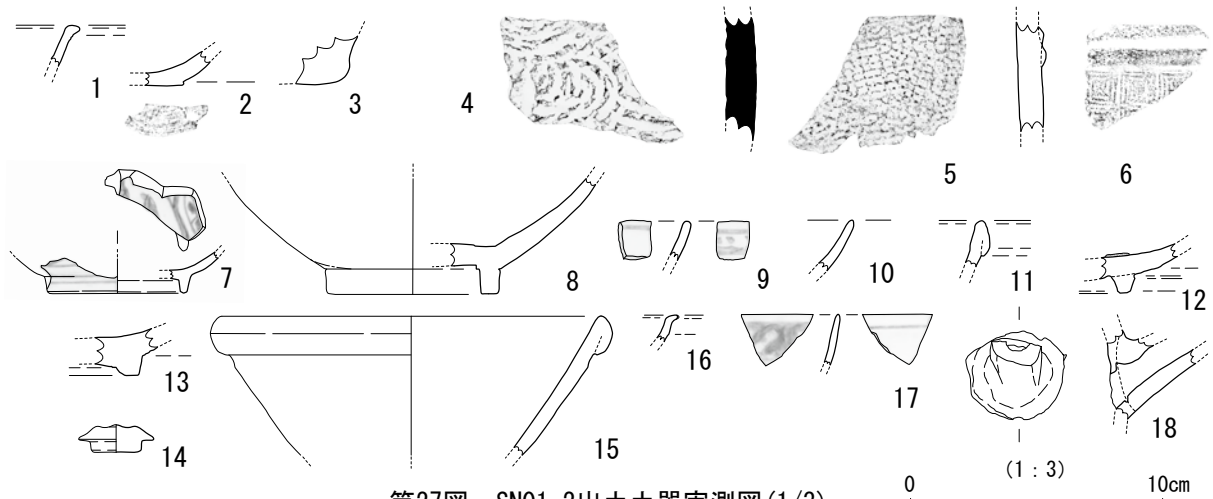
図版72 SN01-1出土土器

第6表 SN01-1出土土器観察表

番号	器種	時代	口径 cm	器高 ()は推定値	底径 ()は推定値	色調		胎土	焼成	備考
						内面	外面			
1	土師器カワラケ皿	中世				10YR 5/3 にぶい黄褐色	10YR 5/3 にぶい黄褐色	細砂粒含む	やや軟質	底部 糸切り
2	土師器小皿ミニチュア	中世	(4.8)	1.3	(3.8)	7.5YR 8/6 浅黄褐色	7.5YR 8/6 浅黄褐色	細砂粒含む	良好	軟質
3	土師	中世?				5YR 3/6 暗赤褐色	5YR 3/6 暗赤褐色	細砂粒含む	良好	長さ:4.5cm 幅:1.2cm 孔:0.4cm
4	瓦質土器鉢	中世?		4.0+		7.5Y 5/1 灰色	7.5Y 5/1 灰色	細砂粒含む	良好	やや硬質 内面指圧痕 回転ナデ
5	須恵器坏身	6c後半				N5/ 灰色	N5/ 灰色	細砂粒含む	良好	
6	瓦質土器鉢?	中世				7.5Y 8/1 灰色	10YR 7/3 にぶい黄褐色	2~3mm程の砂粒	良好	軟質 外面:格子叩き 内面:ハケ目調整
7	白磁碗	古代~中世		1.8+		2.5Y 8/1 灰白色	2.5Y 8/1 灰白色	細砂粒含む	良好	口縁部
8	明染付高台付皿?	15c~16c		1.5+	(8.2)	7.5GY 8/1 明緑灰色	7.5GY 8/1 明緑灰色	細砂粒含む	良好	底部
9	高麗青磁片	古代~中世		2.4+		2.5GY 6/1 オリーブ灰色	2.5GY 6/1 オリーブ灰色	細粒含む	良好	縁
10	青磁碗	古代~中世		2.0+	4.8	10Y 4/2 オリーブ灰色	10Y 7/1 灰白色	僅かに細粒含む	良好	底部
11	白磁口縁部片	古代~中世		2.0+		2.5GY 7/1明オリーブ灰色	2.5GY 7/1明オリーブ灰色	細砂粒含む	良好	皿
12	白磁碗玉縁口縁	11c後半~12c前半		1.8+		2.5GY 7/1明オリーブ灰色	2.5GY 7/1明オリーブ灰色	砂粒を含む	良好	同安溪系白磁
13	青磁碗	古代~中世		1.5+		10Y 5/2 オリーブ灰色	10Y 5/2 オリーブ灰色	細砂粒含む	良好	内外面施釉
14	白磁舎子身	古代~中世	(7.6)	1.9	(6.4)	2.5Y 8/2 灰白色	2.5Y 8/2 灰白色	細砂粒含む	良好	
15	白磁口縁	古代~中世		1.4+		5Y 8/1 灰白色	5Y 8/1 灰白色	細砂粒含む	良好	皿?中鉢?
16	茅粉青沙器 高台	15c後半頃か		2.1+	6.8	2.5Y 8/2 灰白色	2.5Y 8/2 灰白色	細砂粒含む	やや軟質	碗 高台全体に施釉
17	青磁鉢	古代~中世				10Y 6/2 オリーブ灰色	10Y 6/2 オリーブ灰色	細砂粒含む	良好	内・外面施釉
18	白磁碗	古代~中世	(6.6)	1.2+		5Y 8/1 灰白色	5Y 8/1 灰白色	細砂粒含む	良好	口縁部片
19	白磁碗	11c後半~12c前半		2.0+		5Y 7/2 灰白	5Y 7/2 灰白		良好	玉縁口縁
20	青磁輪花皿	古代~中世		1.5+		5GY 7/1 明オリーブ灰色	5GY 7/1 明オリーブ灰色	細砂粒含む	良好	口縁部片
21	明染付口縁部片	15c頃~16c	(13.6)	2.5+		5GY 8/1	5GY 8/1	細砂粒含む	良好	口縁部片
22	明染付口縁部片	15c頃~16c		1.7+		10Y 8/1 灰白色	10Y 8/1 灰白色	細砂粒を含む	良好	口縁部片

B. SN01-2

1は白磁碗の口縁部片である。2は土師器カワラケ底部で糸切り痕が残る。3は弥生土器甕底部片である。4は土師器カワラケ底部で糸切り痕が残る。5は須恵器甕胴部片で内面は同心円叩き、外面は格子叩きである。6は土師質火鉢? 胴部片である。外面は火舎スタンプを施し、内面はハケ目調整を行う。7、9は明染付である。7は碗の高台~体部片、9は皿である。15世紀~16世紀頃の所産か。8は龍泉窯系白磁碗の高台~体部片である。内面は輪状に釉を搔きとる。10は白磁の碗か皿の口縁部片である。11は白磁碗で玉縁口縁を呈する。11世紀後半~12世紀前半頃であろう。12は青磁碗底部~体部片である。13は白磁の高台部片である。14は白磁蓋のつまみ。15は白磁玉縁口縁~体部片で福建産と考えられる。時期は11世紀末~12世紀前半頃であろう。16は白磁皿口縁部片である。17は明染付で碗口縁部片である。16世紀頃であろう。18は須恵器質土器? 陶器? の注ぎ口片である。



第27図 SN01-2出土土器実測図(1/3)

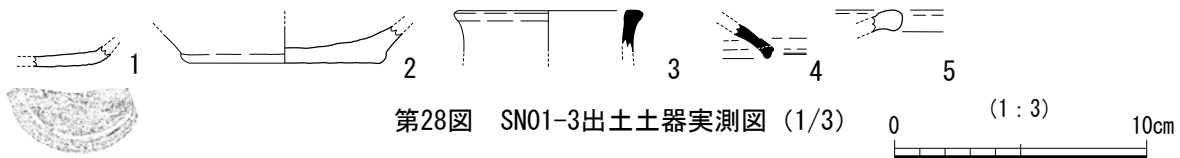


図版73 SN01-2出土土器
第7表 SN01-2出土土器観察表

番号	器種	時代	口径 cm	器高 ()は推定値	底径	色調		胎土	焼成	備考
						内面	外面			
1	白磁碗	古代~中世		1.6+		10Y 8/1 灰白色	10Y 8/1 灰白色	細砂粒を含む	良好	口縁部片
2	土師器底部	中世		1.3+		5R 5/6 明赤褐色	5R 5/6 明赤褐色	砂粒を含む	やや軟質	カワラケの底部 糸切り痕 内面ナデ
3	弥生器底部	弥生				2.5YR 4/8 赤褐色	2.5YR 4/8 赤褐色	砂粒を多く含む	軟質で良好	
4	土師器カワラケ皿	中世				10YR 6/3 にふい黄褐色	10YR 7/4 にふい黄褐色	細砂粒を含む	軟質で良好	底部僅かに糸切り痕
5	須恵器蓋片	古墳				10Y 5/1 灰色	10Y 5/1 灰色	細砂粒を含む	良好	内面:同心円タタキ 外面:格子タタキ
6	瓦質土器火鉢?胴部片	中世				10YR 4/1 補灰色	10YR 5/6 黄褐色	砂粒を多く含む	やや軟質	2条の突帯 火舎スタンプ 内面:ハケ調整
7	明染付碗	15c~16c		1.6+	(5.4)	N 8/ 灰白色	N 8/ 灰白色	細砂粒を含む	良好	
8	白磁碗	12c後半		4.5+	(6.8)	10Y 6/2 オリーブ灰	2.5GY 6/1	細砂粒を含む	良好	龍泉窯系 内底面の軸を輪状に掻きとる 雑な施釉
9	明染付	中世		1.5+		10GY 明緑灰	10GY 明緑灰	細砂粒を含む	良好	口縁部片
10	白磁碗?皿?	中世		1.9+		N 8/ 灰白色	N 8/ 灰白色	細砂粒を含む	良好	口縁部片
11	玉縁口縁白磁碗	11c末~12c前半		1.3+		5Y 7/2 灰白色	5Y 7/2 灰白色	細砂粒を含む	良好	福建産白磁
12	青磁碗底部~体部片	中世		2.0+		2.5GY 6/1 オリーブ灰色	2.5GY 6/1 オリーブ灰色	細砂粒を含む	良好	高台裏まで施釉
13	白磁碗高台部	中世		1.8+		10Y 8/1 灰白	10Y 8/1 灰白	細砂粒を含む	良好	貼付け高台
14	白磁蓋つまみ	中世				10Y 6/1 灰色	10Y 6/1 灰色	細砂粒を含む	良好	つまみの径:3.0cm
15	白磁碗玉縁口縁	11c末~12c前半	(15.0)	5.5+		5Y 7/2 灰白色	5Y 7/2 灰白色	細砂粒を含む	良好	福建産白磁
16	白磁口縁皿	中世		1.0+		7.5Y 7/1 灰白色	7.5Y 7/1 灰白色	極めて精微	良好で硬質	口縁部片
17	明染付碗口縁部	16c頃	(9.4)	2.0+		2.5GY 7/2 明オリーブ灰色	2.5GY 7/2 明オリーブ灰色	細砂粒を含む	良好	口縁部片
18	土瓶注ぎ口	近世		2.0+		10Y 4/1 灰色	10Y 4/1 灰色	細砂粒を含む	良好	陶器?

C. SN01-3

1、2は土師器カワラケ底部片で糸切り痕を残す。3、4は須恵器で3は壺口縁部片、4は蓋端部片でいずれも小片である。5は肥前系陶器で碗の口縁端部片である。



第28図 SN01-3出土土器実測図 (1/3)



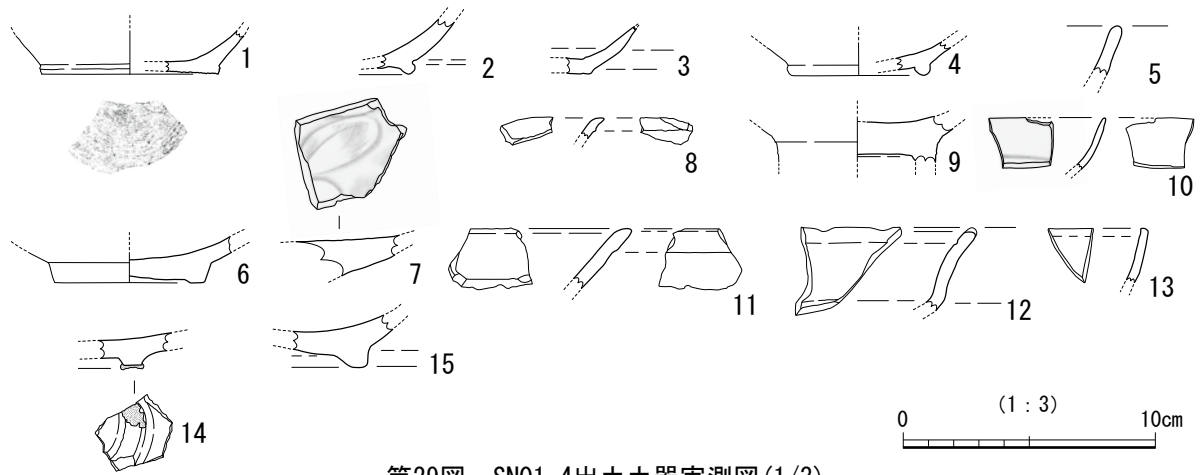
図版74 SN01-3出土土器

第8表 SN01-3出土土器観察表

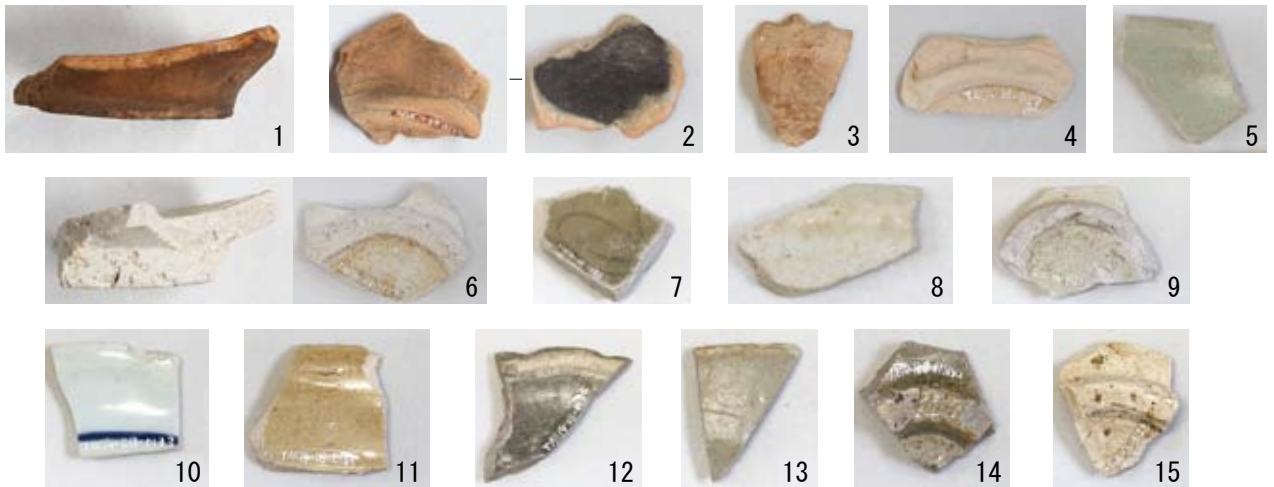
番号	器種	時代	口径 cm	器高 ()は推定値	底径	色調		胎土	焼成	備考
						内面	外面			
1	土師器カワラケ	中世				7.5YR 8/3 淺黄橙	7.5YR 8/3 淺黄橙	細砂粒を含む	良好	底部糸切り痕 内面:ナデ調整
2	土師器カワラケ	中世		1.4+	(7.6)	7.5YR 7/6 橙色	7.5YR 7/6 橙色	砂粒を多く含む	軟質で良好	カワラケ皿の破片 底部糸切り痕 胴部ナデ調整
3	壺口縁部	古墳	(3.2)	1.6+		5Y 6/1 灰色	5Y 6/1 灰色	細砂粒を含む	良好	口縁部片 回転ナデ調整
4	須恵器蓋片	古墳		1.3+		N 6/ 灰色	N 6/ 灰色	細砂粒を含む	良好	1条の浅い沈線 全体はナデ調整
5	肥前陶器碗	近世				2.5YR 5/4 にふい赤褐色	2.5Y 8/3 淺黄橙	細粒を含み精微	良好	口縁部片

D. SN01-4

1は土師器カワラケ底部~体部片である。底部は糸切り痕を残す。2、4は土師器高台付坏で高台部~体部片である。4は貼り付け高台である。3は土師器で小形の坏である。5は青磁碗口縁部片で7は碗底部片で内面は劃花文を施す。12世紀後半頃であろう。6、8、9は白磁で8は皿?口縁部片である。6、9は白磁碗底部~体部片である。6は削り出し高台である。10は明染付で碗か皿の口縁部である。16世紀頃であろう。11、13は白磁碗口縁部片である。12は青磁輪花皿口縁部片である。14は青磁碗底部片である。15は白磁底部片である。



第29図 SN01-4出土土器実測図(1/3)



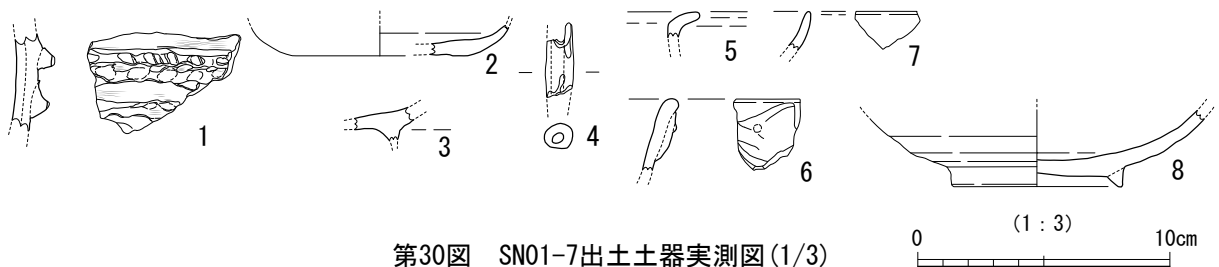
図版75 SN01-4出土土器

第9表 SN01-4出土土器観察表

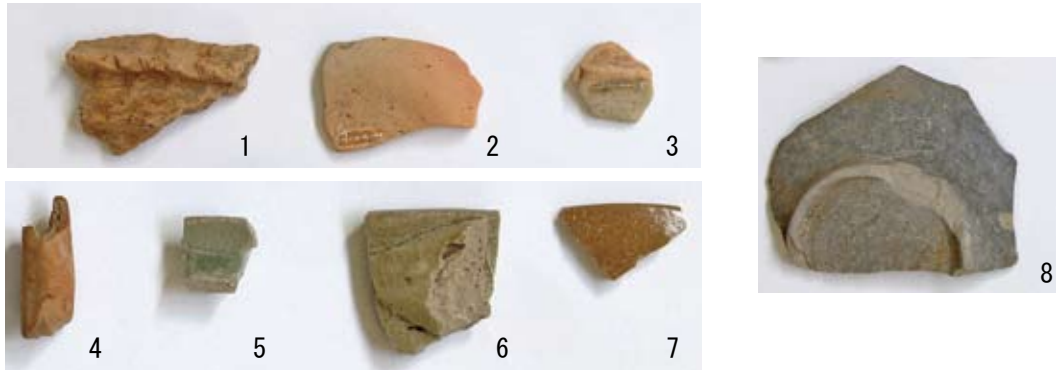
番号	器種	時代	口径 cm	器高 ()は推定値	底径	色調		胎土	焼成	備考
						内面	外面			
1	土師器カワラケ	中世	1.7+	(7.0)	7.5Y 6/6	橙色	7.5Y 3/1 黒褐色	細砂粒を含む	良好	糸切り
2	土師器高台付坏	古代	2.2+		10YR 1.7	黒色	5YR 6/6 にふい橙	砂粒を含む	良好	やや軟質 黒色土器A類 高台は貼り付け 底部糸切り痕
3	土師小鉢	古代	1.8+	(4.0)	7.5YR 7/4	にふい橙	7.5YR 7/4 にふい橙		良好	へら切り
4	土師高台付坏	中世	1.3+	(5.0)	7.5YR 8/2	灰白	7.5YR 8/2 灰白		良好	貼り付け高台
5	青磁碗	中世	1.9+		10Y 6/2	オリブ灰	10Y 6/2 オリブ灰		良好	口縁部片
6	白磁碗	中世	1.8+	(5.9)	5Y 7/2	灰白	5Y 7/2 灰白		良好	底部
7	青磁碗	12c後半頃			7.5Y 5/2	灰オリブ	7.5Y 5/2 灰オリブ		良好	内面劃花文
8	白磁皿	中世			2.5Y 7/1	灰白	2.5Y 7/1 灰白		良好	口縁部片
9	白磁碗	中世			7.5Y 7/1	灰白	5Y 8/1 灰白		良好	底部のふちなし
10	明楽碗・皿?	16c頃か	2.0+		2.56Y 7/1	明オリブ	2.56Y 7/1 明オリブ		良好	口縁部片
11	白磁碗	中世	2.4+		2.56Y 7/3	浅黄	2.56Y 7/3 浅黄		良好	口縁部片
12	青磁輪花皿	中世	3.3+		10Y 5/1	灰	10Y 5/1 灰		良好	口縁部片
13	白磁鉢	中世	2.1+		5Y 7/2	灰白	10YR 6/6 弱黄緑		良好	口縁部片
14	青磁碗	中世			7.5Y 8/2	灰オリブ	7.5Y 8/2 灰オリブ		良好	底部
15	白磁	中世			5Y 8/1	灰白色	5Y 8/1 灰白色	砂粒を含む	良好	底部

E. SN01-7

1は弥生時代後期の2条刻目三角突帯を有する壺胴部片である。2は土師器カワラケ底部～体部片で底部は糸切り痕が残る。3は土師器高台付坏で内面はやや黒色を呈する事から黒色土器A類の可能性はある。4は土錘で一部欠損する。5は青磁香炉?口縁部片である。6は青磁碗口縁部片である。7は肥前系磁器で近世か。8は高台付瓦器碗で底部～体部片である。



第30図 SN01-7出土土器実測図(1/3)



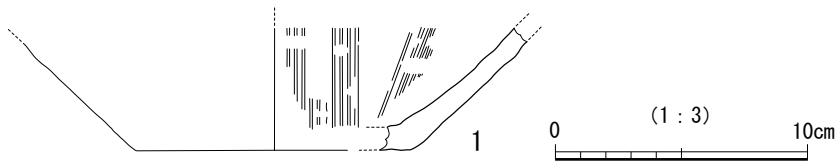
図版76 SN01-7出土土器

第10表 SN01-7出土土器観察表

番号	器種	時代	口径 cm	器高 ()は推定値	底径	色調		胎土	焼成	備考
						内面	外面			
1	弥生釜	弥生後期				7.5YR 7/3 にふい橙	7.5YR 7/3 にふい橙	雲母 赤色粒子	良好	刻目二重突帯 三角形
2	土師器カワラケ	中世	1.2+	(7.0)		7.5YR 7/4 にふい橙	7.5YR 7/4 にふい橙	赤色粒子を含まず	不良	糸切り
3	土師器高台付杯	高台付底部				7.5YR 5/4 浅黄橙	5Y 5/1 灰	雲母を含む	良好	底部片 内面黒色土器?
4	土師土種	中世				5YR 6/6 橙	5YR 6/6 橙		不良	長さ2.9+cm 幅1.1+cm 孔0.5+cm
5	青磁香炉?	中世				2.5G 6/1 オリーブ灰	2.5G 6/1 オリーブ灰		良好	口縁部片
6	青磁碗	中世	2.8+			5Y 5/2 灰オリーブ	5Y 5/2 灰オリーブ		良好	口縁部片
7	肥前系陶磁器	近世	1.5+			10YR 5/4 にふい黄褐	10YR 5/4 にふい黄褐		良好	口縁部片
8	瓦器高台付	中世	3.0+	(6.6)	N5/1 灰	N5/1 灰			良好	底部、体部片

F. SN03-2

1は瓦質土器のすり鉢で底部～体部片である。



第31図 SN03-2出土土器実測図(1/3)



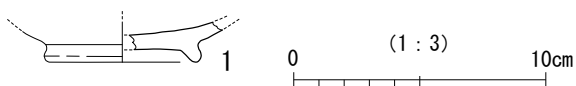
図版77 SN03-2出土土器

第11表 SN03-2出土土器観察表

番号	器種	時代	口径 cm	器高 ()は推定値	底径	色調		胎土	焼成	備考
						内面	外面			
1	瓦質?すり鉢	中世	4.8+	(11.0)		5Y 4/1 灰	5Y 5/1 灰			底部～体部片

G. SN03-3

1は高台付碗の底部～体部片である。黒色土器A類である。



第32図 SN03-3出土土器実測図(1/3)



図版78 SN03-3出土土器

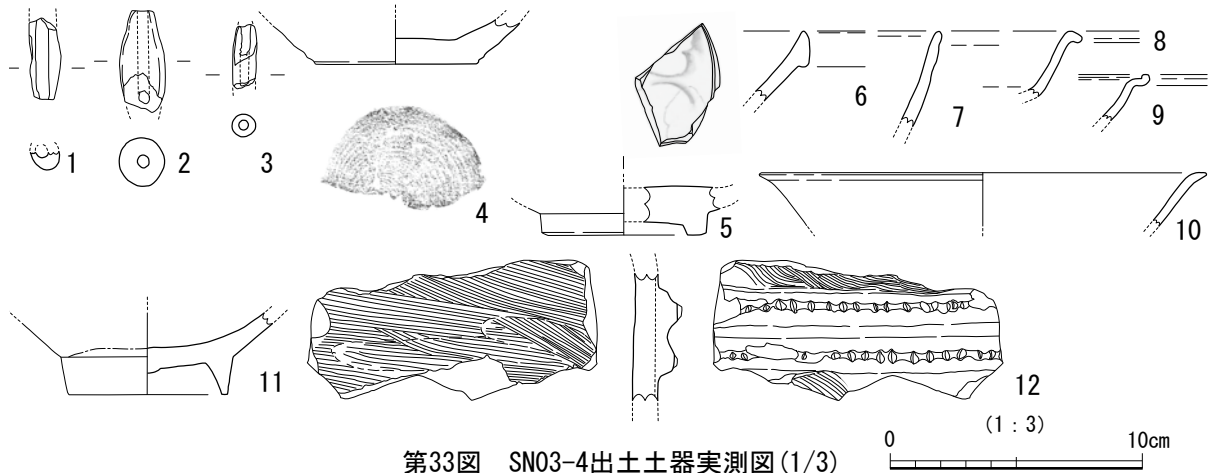
第12表 SN03-3出土土器観察表

番号	器種	時代	口径 cm	器高 ()は推定値	底径	色調		胎土	焼成	備考
						内面	外面			
1	黒色土器碗	中世	1.6+	(5.8)		7.5YR 7/1 明褐灰	7.5YR 4/1 褐灰	雲母	良	黒色土器A類 底部～体部片

H. SN03-4

1~3は土錘で2は古墳時代の土錘である。1と3は内外面に丹塗りが施されている。4は土師器碗である。底部~体部片である。底部は糸切り痕が残る。5は青磁碗底部で削り出し高台である。

6は白磁碗で玉縁口縁を呈する。7は白磁碗口縁部である。8は青磁の小鉢口縁部片である。9は白磁小鉢口縁部片である。10は白磁碗口縁部片である。11は白磁碗底部で高台片である。12は弥生時代後期の壺胴部片で2条刻目三角突帯を有す。



第33図 SN03-4出土土器実測図(1/3)



図版79 SN03-4出土土器

第13表 SN03-4出土土器観察表

番号	器種	時代	口径 cm ()は推定値	器高 cm	底径 cm	色調		胎土	焼成	備考
						内面	外面			
1	土錘	中世				10R 6/4 にぶい赤橙	10R 4/6 赤		不良	内外に朱塗り 長さ:3.2+cm 幅:1.3+cm 孔:0.5cm
2	土錘	古墳				7.5YR 7/4 にぶい橙	7.5YR 7/4 にぶい橙		良好	端部欠損 長さ:4.0+cm 幅:1.8+cm 孔:0.4+cm
3	土錘	中世				5YR 6/6 橙	5YR 6/6 橙		不良	朱塗り 長さ:2.5+cm 幅:0.9+cm 孔:0.4+cm
4	土師器碗	中世初頭		1.7+	(6.4)	10YR 5/1 褐灰			良好	底部糸切り
5	青磁碗	中世		2.7+	(6.0)	5Y 6/3 オリーブ黄			良好	龍糸煮
6	白磁碗	中世		2.7+		5Y 7/2 灰白	5Y 7/2 灰白		良好	口縁部 玉縁
7	白磁碗	中世		3.8+		5Y 6/2 灰オリーブ			良好	口縁部
8	青磁小鉢	中世		2.6+		5Y 6/2 灰オリーブ	5Y 6/2 灰オリーブ		良好	
9	白磁小鉢	中世		1.8+		2.5Y 6/2 灰黄	2.5Y 6/2 灰黄		良好	
10	白磁碗	中世	(17.0)	2.1+		10Y 8/1 灰白			良好	
11	白磁碗	中世		3.2+	(6.4)	2.5Y 8/3 淡黄	2.5Y 8/3 淡黄		良好	高台付
12	弥生壺	弥生後期				7.5YR 7/4 にぶい橙	7.5YR 8/2 灰白	赤色粒子、雲母	良好	ハケ調整 2条刻目三角突帯

③ 水路(SD01、02)について

第1水田面の検出が終了する時点で西側に堆積する礫層の中に、水田に接する人頭大及びそれを上回る礫が人工的に二本平行に並べられている様相が部分的に見られた。そこで水路か否かの判断をするため北側にトレンチを設定し断面観察をすることにした(第34図、図版82)。結果はSD01主体部と土堤(溝畔)が検出され水田に伴う水路と確認できた。水路は南北方向に緩やかにS字を描くように構築した様相を掴むことが出来た。土層断面観察からの法量は幅0.82m、深さ0.28~0.30m。東側土堤(溝畔)上端幅0.44m、下端0.80m、高さ0.26m。西側土堤(溝畔)上端幅0.50m、下端0.66m、高さ0.26mを測る。

土堤(溝畔)の芯材は人頭大及びそれを上回る礫で、暗褐色弱粘質土を混ぜながら構築されている。水路内底部に堆積している砂層状況から水路内の水嵩は0.15m程が考えられる。

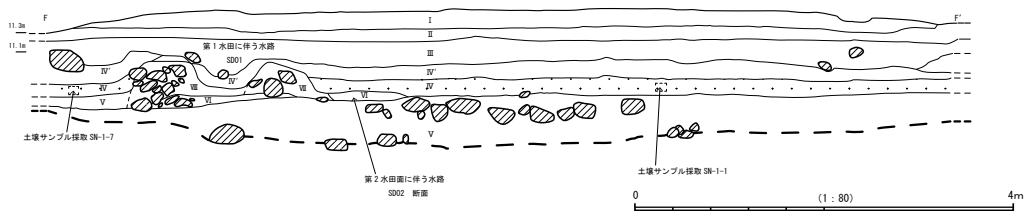
第2面に伴う水路SD02は、SD01の東側に沿って構築されている。SD02土層断面(第35図)から構築規模等を考えてみたい。南側端トレンチの断面から法量を測定すると、上端幅0.84m、下端幅0.41m、深さ(中心)0.37m、溝底部砂堆積の高さ0.14mを測る。水路はSD01に沿うよう北方向に流れ、北側に行くにつれて水路主体部、土堤(溝畔)が判然とせず芯材である石材等が散乱した状況が目立つ。しかしながら僅かに痕跡が北側土層断面から確認できた。法量は上端幅0.84m、下端幅0.62m、深さ(中心)0.10m、を測る。構築順はSD02が最初に構築され、その後SD01が構築される。北側土層断面観察から土層の堆積状況を考えるとSD02はSD01より1層下に構築されていることが確認できる(第34図)。水口については判然としなかったが、第2水田に伴うSD02の検出の際に土堤(溝畔)の一部に円礫がない所を検出した。円礫がその場所だけ外された様相を呈している事から水口かもしれない。



図版80 SD01完掘状況(北から)



図版81 SD02完掘状況(北から)

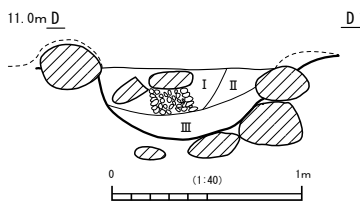


- I 耕作土
- II 黄褐色弱粘質土 (10YR5/6) Φ10程の小礫を少量含む
- III 褐色砂礫土 (10YR4/4) Φ10~20程の小礫を多量に含む
- IV' 黄褐色砂質土 (10YR5/6) Φ5~10程の小礫を含む
- IV 褐灰色弱粘質土 (10YR4/1) 橙色の小ブロック、Φ10程の小礫を少量含む (水田西)
- V 暗褐色砂質土 (10YR3/3) Φ10~300程の礫を多量に含む
- VI 灰黄褐色砂質土 (10YR5/2) Φ10小礫を少量含む
- VII 暗褐色弱粘質土 (10YR3/4) 砂質を含む
- VIII 暗褐色弱粘質土 (10YR3/4) 砂質を含む。やや粘質強い

第34図 北側土層断面図 (1/80)



図版82 SD01断面南面 (南から)



- I. 小礫層 Φ10~30程の小礫及び粗砂を含む。
- II. 10YR3/3 暗褐色砂質土
- III. 10YR3/4 暗褐色から黄褐色砂質土 (粗砂含む)

第35図 SD02土層断面図 (1/40)



図版83 SD02断面南面 (南から)



図版84 SN03-1水口?



図版85 SN03-2水口?

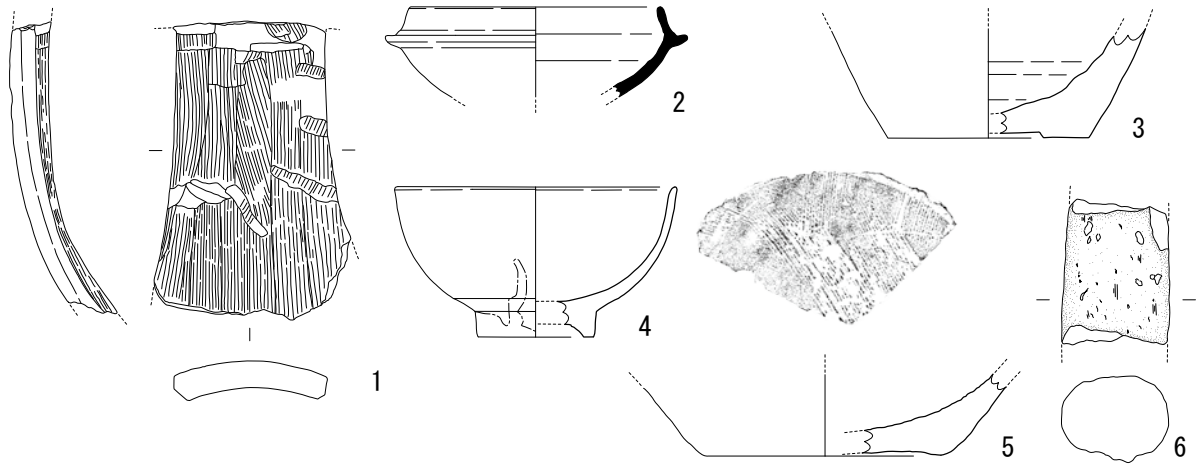


図版86 SN03-2水口?

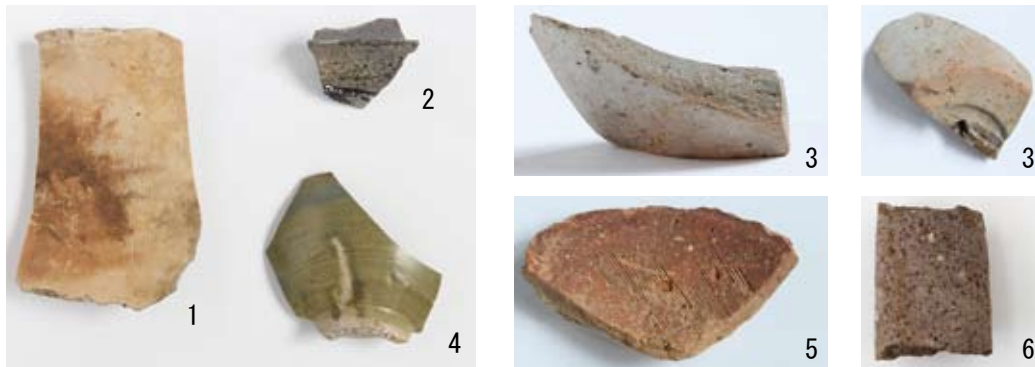
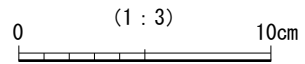
④ SD01、02出土遺物について

SD01の1は弥生時代後期器台片である。外面は縦方向のハケ目調整を施す。2は須恵器坏身の口縁部片である。時期は6世紀後半頃である。3は中国産陶器壺底部片である。4は肥前系の碗である。5はすり鉢底部片である。近世の所産か。6は縄文の石棒片である。

SD02の1は青磁碗の底部内面には「金玉満堂」の「玉」の字のスタンプがわかる。高台は削り出し高台である。2は須恵器高台付坏の高台部片である。



第36図 SD01出土遺物実測図(1/3)



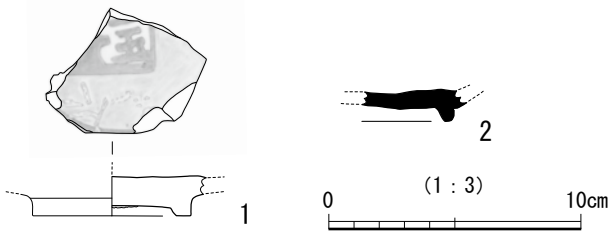
図版87 SD01 出土遺物

第14表 SD01出土土器観察表

番号	器種	時代	口径 cm	器高 ()は推定値	底径	色調		胎土	焼成	備考
						内面	外面			
1	弥生器台	弥生後期		11.7+		10YR 8/3 浅黄緑	10YR 8/3 浅黄緑	やや大きな砂粒を含む	良好	脚部
2	須恵器杯身	6C末	(9.9)	3.5+		5Y 5/1 灰	N5 /灰		良好	脚部 立ち上がり部
3	瓦質土器鉢	中世	4.3+	(8.0)		10YR 7/1 灰白	10YR 7/1 灰白	粗めの砂粒	良好	底部 中国産陶器臺底部片
4	磁器小碗	近世	(11.0)	5.9	4.6	7.5Y 5/3 灰オリーブ	2.5Y 5/6黄緑		良好	口縁~底部
5	すり鉢	近世?	3.2+	(9.2)		2.5YR 5/6 明赤褐	7.5R 8/6 浅黄緑	粗い	良好	底部 瓦質土器?

第15表 SD01出土土器観察表(長さ、幅、厚さmm、重さg)

番号	器種	時代	長さ	幅	厚さ	重量	材質	備考
6	石棒?	縄文	58.0+	42.0+	34.0+	105.0+		



第37図 SD02出土土器実測図(1/3)



図版88 SD02出土土器

第16表 SD02出土土器観察表

番号	器種	時代	口径 cm	器高 ()は推定値	底径	色調		胎土	焼成	備考
						内面	外面			
1	青磁碗	古代~中世			(6.2)					底部
2	須恵器杯身	古代				7.5Y 7/1 灰白		長石		底部

⑤ 畦畔について

東西方向の畦畔が3本(北から東西畦畔1、2、3)(第23図)、南北方向の畦畔1本(南北畦畔1)(第23図)を検出した。東西方向の畦畔1、2、3は直線的で、ほぼ平行に構築されている。南北畦畔1は東西畦畔1、2の間を直線的に結ぶ。芯材は円礫で構築され、規模は人頭大をやや上回る円礫を根石とし、拳大から人頭大の礫を間に詰めて褐灰色弱粘質土と10mm程度の小礫を混ぜながら畦畔を構築している。構築規模は、東西畦畔1は幅0.60m、長さ約6.3mを測る。東西畦畔2は幅0.34~0.40m、長さ8.2mを測る。東西畦畔3は幅0.14~0.34m、長さ約4.2mを測る。南北畦畔1は幅0.50~0.70m、長さ約11mを測る。東西畦畔2、3については構築時に芯材である石材を固定する溝を掘り根石を置いた状況が見られた。溝は東西畦畔2が幅0.24~0.36m、深さ0.05mを測る。東西畦畔3が幅0.14~0.40m深さ0.05mを測る。東西畦畔1についてはSN01-1とSN01-2との境がやや段差がありその段差を利用して東西畦畔1を構築している。



図版89 東西畦畔1芯材検出状況(西から)



図版90 東西畦畔1芯材検出状況(西から)



図版91 SN03-4完掘状況



図版92 SN01-7白磁出土状況

(5) SN02について

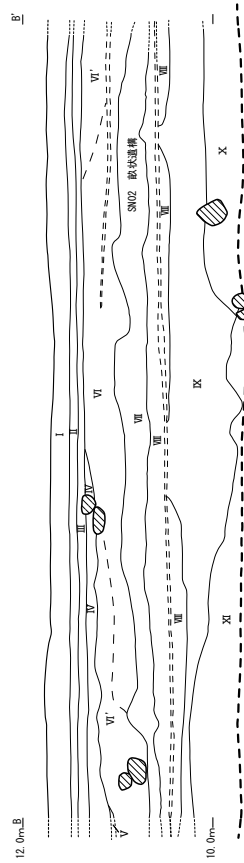
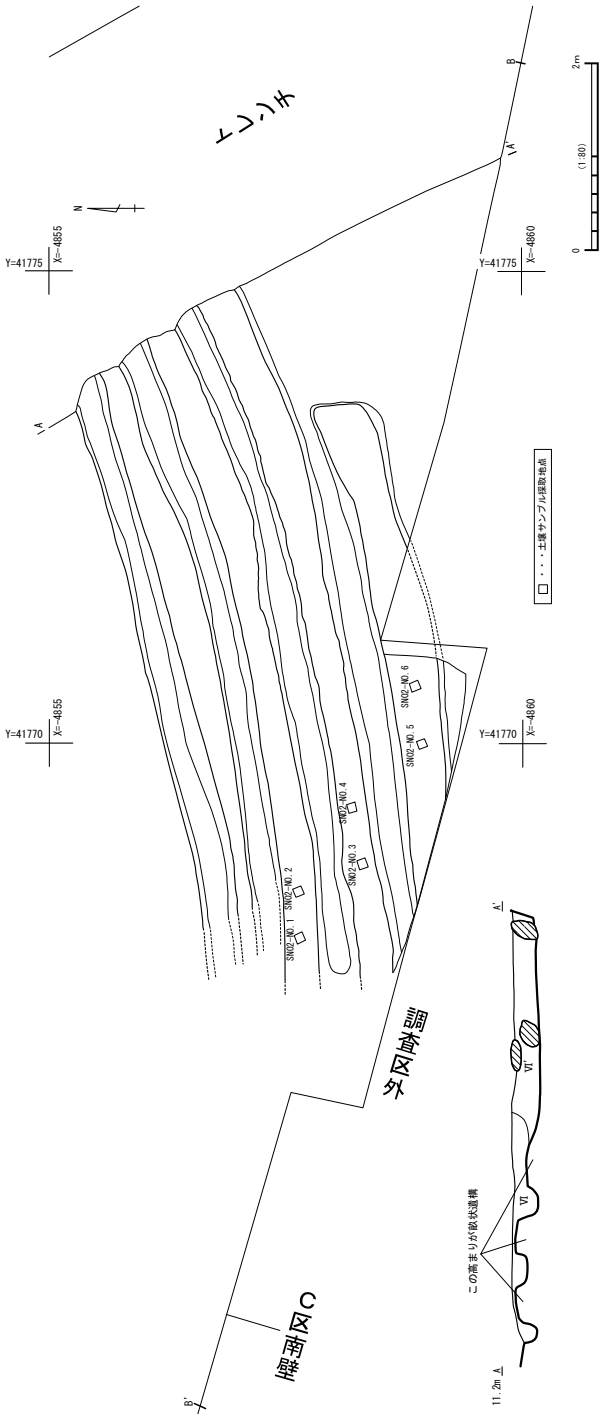
SN02は畝状遺構である。C区南側端で4条の畝を検出した。長さ約5+~7.4m+、幅約0.4~0.5m、高さ約0.18~0.20mを測る。土壌サンプルは6箇所採取し、その内の1箇所を植物珪酸体分析を行った。イネが検出され、密度は800個/gと低い値であった。しかしながらその近辺で陸稲が行われていた可能性は消極的ではあるが考えられる。



図版93 SN02畝状遺構



図版94 土壌サンプル採取地



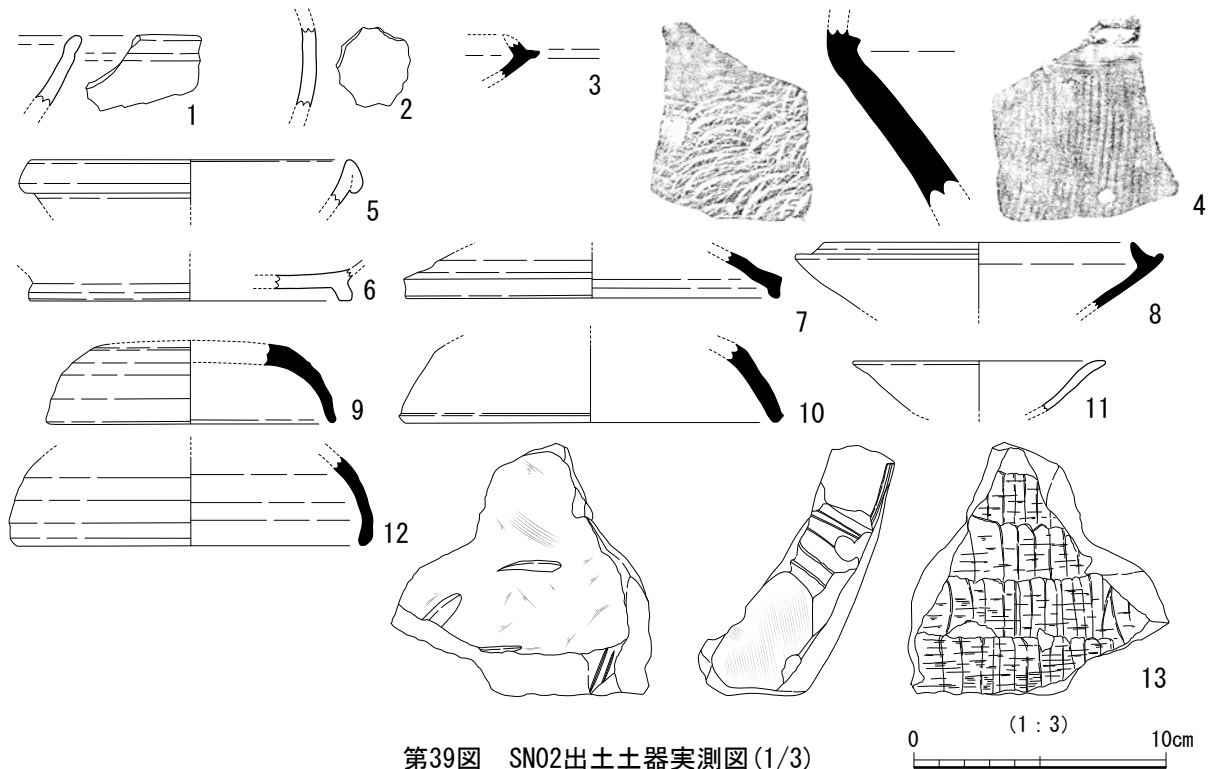
- I. 耕作土
- II. 灰青褐色 (107R5/2) シルト~礫砂 0.1~0.5mの層を非常に多く、0.5~1mの層まれに含む 礫化礫状層
- III. 灰黄褐色~相灰色 (107R4/2~4/1) 礫砂~シルト 0.1~1mの黄色ブロック、1~2cmの層を非ばらに、細砂ブロックごくまれに含む
- IV. 灰青褐色 (107R4/2) 礫砂~シルト 0.1~1mの黄色ブロック多く含む 礫化礫状層
- V. 灰青褐色 (107R4/2) シルト~礫砂
- VI. 黒褐色 (107R5/2) 細砂~礫砂 1~5mの層を非常に多く、1m以下の黄色ブロックを多く含む 下面のSN02を埋没させる VI' は上部が灰青褐色を呈し層を含まない
- VII. 灰青褐色 (107R5/2) シルト~礫砂 上部が礫状を呈する 旧耕作土 礫化礫状層 細砂ブロックまれに含む
- VIII. 相灰色 (107R5/1) シルト~礫砂 礫化礫状層 Ⅳ層より色相暗く、やや粘質 (粘質土ブロックを含む?)
- IX. 相灰色 (107R5/1~5/1) 細砂~礫砂 礫砂まじりて階状に細砂~細砂ブロックを含む 礫化礫状層 自然流路埋土
- X. 灰青褐色 (107R5/2) シルト~礫砂 層~細砂ブロック、2~5cmの層を富み、礫化礫やマンガンが沈着する 河川堤防か
- XI. 黒色 (S.572/1) 粘土~シルト 層~細砂多く、2~3cmの層を非ばらに含む しまり非常に強い A・B区VI層相当層か

第38図 SN02平、断面図 C区南壁土層断面図 (1/80)

① SN02出土遺物について

出土遺物は畝間の畦からと畝の中からの出土がある。器種は古代土師器坏、埴、白磁メンコ、須恵器坏身、蓋、甕、白磁碗等が出土した。

1は土師器埴か坏の口縁部片である。2は白磁メンコである。3は須恵器坏身口縁部片で6世紀後半である。4は須恵器甕頸部～胴部片である。内面は同心円、外面は格子叩きを施す。5は白磁玉縁口縁の碗である。11世紀後半～12世紀前半頃であろう。6は土師器高台付坏である。焼成はやや軟質である。7は須恵器蓋口縁部片である。8は須恵器坏身口縁部である。6世紀後半頃である。9、10、12は須恵器蓋で口縁部片である。11は白磁碗口縁部である。13は滑石製石鍋底部～胴部片である。胴部は縦方向に削り痕が残る再加工品である。



第39図 SN02出土土器実測図(1/3)



図版95 SN02出土遺物

第17表 SN02出土土器観察表

番号	器種	時代	口径 cm	器高 ()は推定値	底径	色調		胎土	焼成	備考
						内面	外面			
1	土師器碗、杯	中世		3.0+		7.5YR 7/3 にぶい橙	7.5YR 7/3 にぶい橙	雲母、キメ細かい粒子	良好	口縁部片
2	白磁器(メンコ)	中世				56Y 8/1 灰白	56Y 8/1 灰白		良好	破片
3	須恵器坏身	古墳時代後期				N5/ 灰			良好	口縁~受部
4	須恵器壺	古墳				N6/ 灰			良好	頸部
5	白磁碗	古代~中世	(13.6)	1.8+		7.5Y 7/1 灰白			良好	口縁部片 玉縁
6	土師器坏	中世		1.2+	(12.8)	5YR 7/8 橙			不良	高台部片
7	須恵器坏蓋	古代	(14.8)	1.8+		2.5Y 5/1 黄灰	2.5Y 6/1 黄灰		良好	
8	須恵器坏身	古墳時代後期	(12.2)	2.6+		10YR 7/1 灰白	2.5Y 7/1 灰白		良好	
9	須恵器蓋?	古墳時代後期	(11.2)	3.1+		N 3/ 暗灰	N 6/ 灰		良好	口縁部片
10	須恵器蓋?	古墳時代後期	(14.8)	3.1+		N5/ 灰			良好	口縁部片
11	白磁碗	中世	(10.0)	2.0+		5Y 6/1 灰			良好	口縁部片
12	須恵器蓋?	古墳時代後期	(13.8)	3.4+		N 4/ 灰	N5/ 灰		良好	口縁部片

第18表 SN02出土石器観察表(長さ、幅、厚さmm、重さg)

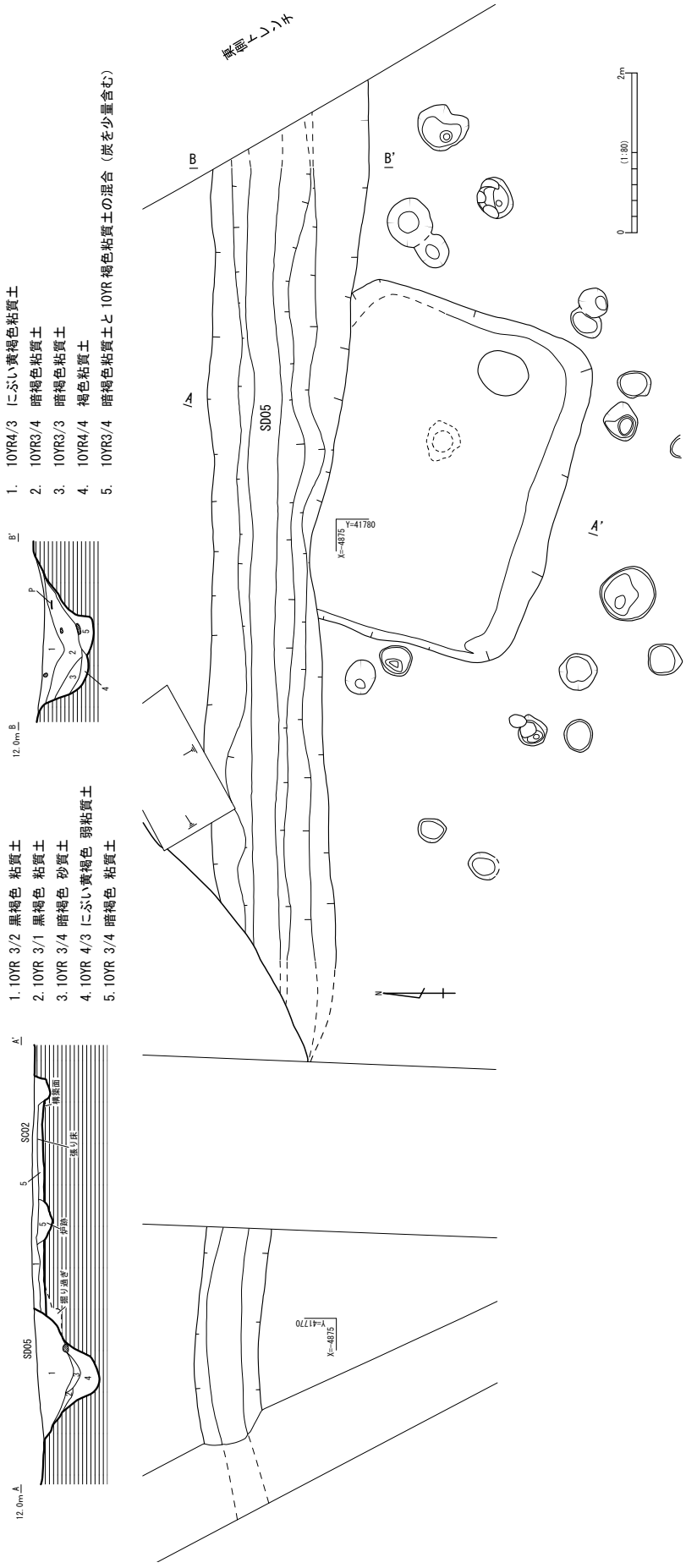
番号	器種	時代	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	備考
13	石鎧	中世	99.0	103.0	51.0	505.0	滑石(タルク)	底部 体部片

(6) SD05について

SD05はB区の北側、SC02を切って構築された直線的な溝である。溝の幅は1.2~1.95m、深さ0.62~0.78mを測る。D区SD04へと続く溝である。溝の断面形状は逆台形を呈する。

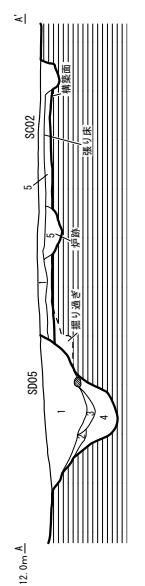
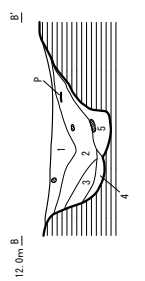


図版96 SD05完掘状況



- 1. 10YR 3/2 黒褐色 粘質土
- 2. 10YR 3/1 黒褐色 粘質土
- 3. 10YR 3/4 暗褐色 砂質土
- 4. 10YR 4/3 にぶい黄褐色 弱粘質土
- 5. 10YR 3/4 暗褐色 粘質土

- 1. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土
- 2. 10YR3/4 暗褐色粘質土
- 3. 10YR3/3 暗褐色粘質土
- 4. 10YR4/4 褐色粘質土
- 5. 10YR3/4 暗褐色粘質土と10YR 褐色粘質土の混合（炭を少量含む）



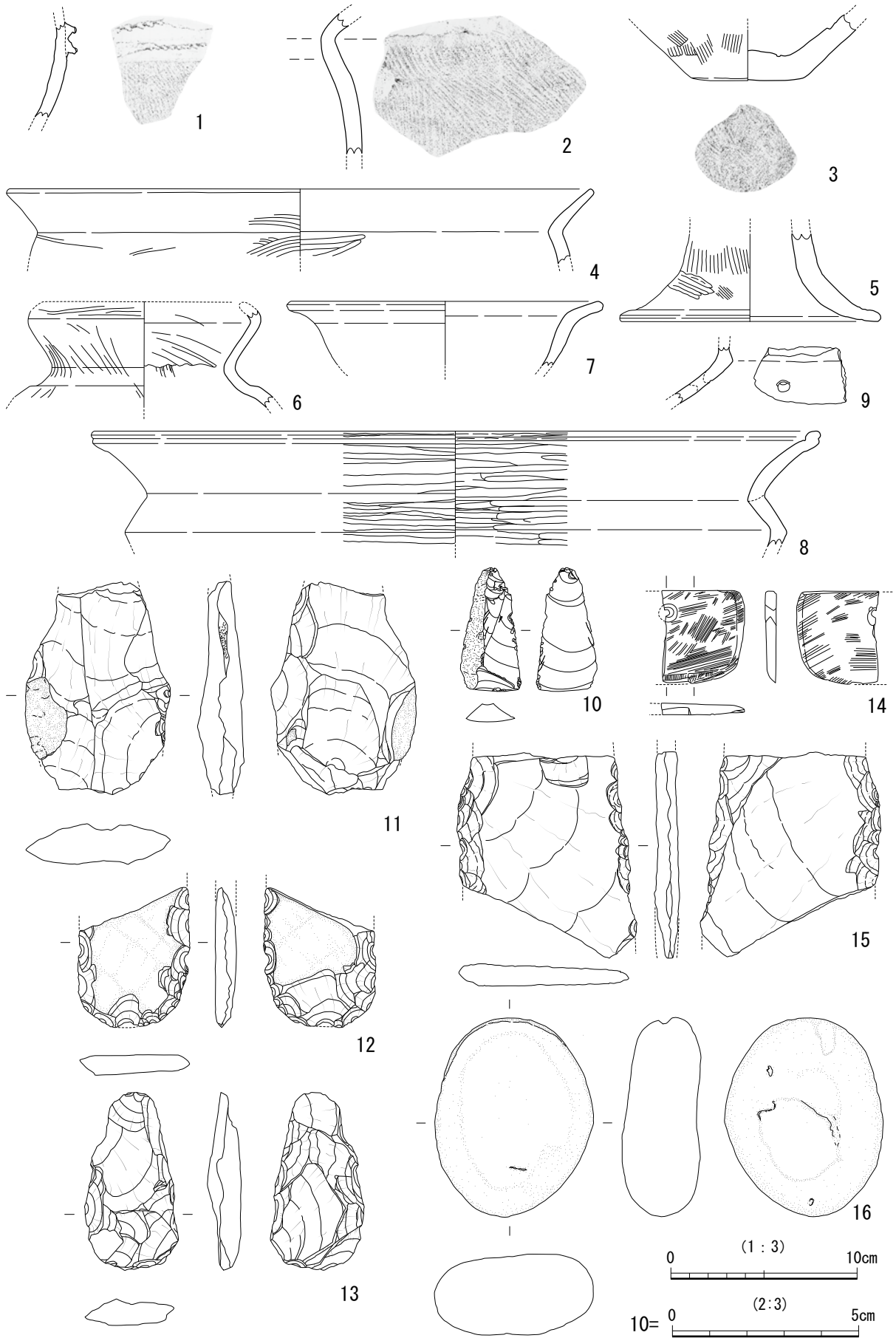
第40図 SD05遺構平、断面図(1/80)

① SD05出土遺物について

遺物は床面及び覆土からの出土である。SC02を切って構築された直線的な溝である。1は弥生後期の壺胴部片である。2条の刻目三角突帯を有す。2は弥生土器甕頸部～胴部片である。内、外面はハケ目調整を行う。3は甕底部片である。底部がやや凸レンズ状に膨らむ状況から後期前半頃であろう。4は甕口縁部片で、くの字形口縁を呈する。後期前半頃の所産か。5は高坏脚部片である。6は複合口縁壺の口縁部～頸部片である。口縁端部は欠損している。外面は縦方向にハケ目調整を行い丹塗りしている。7は鉢？の口縁部～頸部片である。8、9は縄文晩期の浅鉢である。8は黒色磨研土器の口縁部～体部片で丁寧な仕上げである。9は体部片で孔が1箇所確認できる。10は黒曜石の剥片である。11から13は打製石斧で12は1/2が欠損する。12は刃部先端が一部欠損する。両側面先端を刃状に加工している。11は安山岩、12、13は凝灰岩である。14は石包丁で2/3程が欠損する。穿孔の一部が残る。石材は安山岩である。15は扁平打製石斧で両端が欠損する。両側先端を加工し刃部を作る。石材は安山岩である。16は拳大の円礫である。両面が磨かれており、先端の一部が線状に窪むことから石錘とも考えられる。



図版97 SD05出土遺物



第41図 SD05出土遺物実測図(1/3)(2/3)

第19表 SD05出土土器観察表

番号	器種	時代	口径 cm	器高 ()は推定値	色調		胎土	焼成	備考
					内面	外面			
1	弥生壺	弥生後期			5YR 6/6 橙	7.5YR 7/4 にぶい橙	角閃石、石英、赤色粒子	良好	胴部 2発刻目突帯
2	弥生壺	弥生後期			5YR 6/6 橙	7.5YR 6/6 橙	石英、雲母、角閃石	良好	頸部～胴部
3	弥生壺	弥生後期前半		3.5+	(6.0)	10YR 7/4 にぶい黄橙	10YR 7/3 にぶい黄橙	良好	底部
4	弥生壺	弥生後期前～中頃	(31.0)	4.0+		7.5YR 6/4 にぶい橙	10YR 7/3 にぶい黄橙	良好	口縁
5	弥生高坏	弥生後期		4.6+	(13.7)	7.5YR 6/4 にぶい橙	7.5YR 5/4 にぶい橙	良好	胴部
6	弥生複合口縁壺	弥生後期			2.5YR 5/6 明赤褐	10YR 8/4 浅黄橙	石英、黒い砂粒を含む	良好	丹塗り 口縁部
7	弥生鉢?	(16.6)	3.4+		10YR 7/3 にぶい黄橙	10YR 7/4 にぶい黄橙	黒い砂粒と石英・雲母を含む	不良	口縁部
8	縄文浅鉢	(38.8)	6.2+		10YR 4/2 灰黄褐		角閃石	良好	黒色磨研土器
9	縄文浅鉢	縄文晩期			2.5YR 5/6 明赤褐	10YR 3/2 黒褐		良好	孔あり

第20表 SD05出土土器観察表(長さ、幅、厚さmm、重さg)

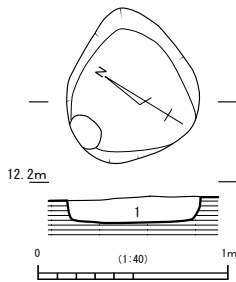
番号	器種	時代	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	備考
10	剥片	縄文	33.0	16.0	6.5	2.48	黒曜石	正面に自然面、裏面に主要剥離が残る
11	打製石斧	縄文	114.0+	78.0+	25.0+	215.0+	安山岩	未製品?
12	打製石斧?	縄文	74.0+	60.0+	11.0+	65.0+	凝灰岩	
13	打製石斧	縄文	95.0	50.0	18.0+	76.8	凝灰岩	未製品?
14	石包丁	弥生	49.0+	44.0+	6.0+	23.67+	安山岩	片刃 穿孔部は上下それぞれから開ける
15	扁平打製石斧	縄文	110+	96.0+	13.0+	160.0+	安山岩	
16	石鏝? 磨石?	縄文	106.0	85.0	43.0	545.0	安山岩	

(7) SK01～20について

A、B区を中心に19基(SK15は欠番)を検出した。土坑から遺物が出土した遺構はSK16を除いて全てから出土した。この中で実測可能な遺物が出土した遺構はSK08、10、14、20の4基だけである。平面プランは円形、楕円形が中心で、規模は長軸0.50～1.00m、短軸0.34～1.00m、深さは0.10～0.60m程である。

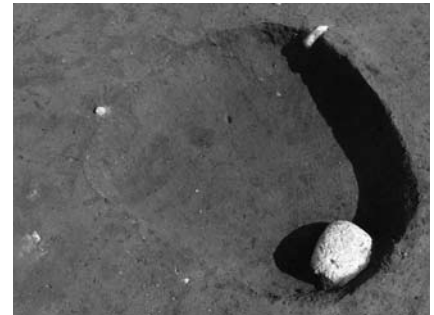
① SK01

A区からの検出である。長軸0.82m、短軸0.72m、深さ0.14mで楕円形を呈する平面プランである。遺物は弥生土器小片が出土した。



第42図 SK01実測図(1/40)

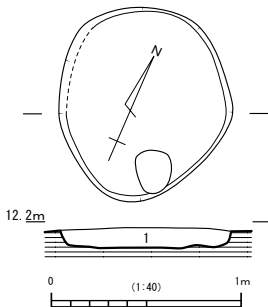
1. 褐灰～灰黄褐色弱粘質土(10YR4/1～5/2, シルト微砂)
細～粗砂まれに含む



図版98 SK01完掘状況

② SK02

A区からの検出である。長軸1.02m、短軸0.92m、深さ0.10mで円形を呈する平面プランである。遺物は弥生土器小片が出土した。なお中心部は一部掘りすぎである。



第43図 SK02実測図(1/40)

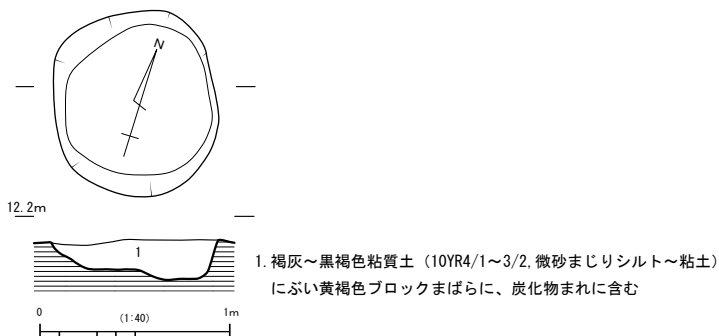
1. 黒褐色粘質土(Y3/2, シルト～粘土)
焼土、炭化物まれに含む
にぶい黄褐色土ブロックまばらに含む



図版99 SK02完掘状況

③ SK03

A区からの検出である。長軸0.98m、短軸0.96m、深さ0.16mで円形を呈する平面プランである。遺物は縄文土器小片、弥生土器小片が出土した。



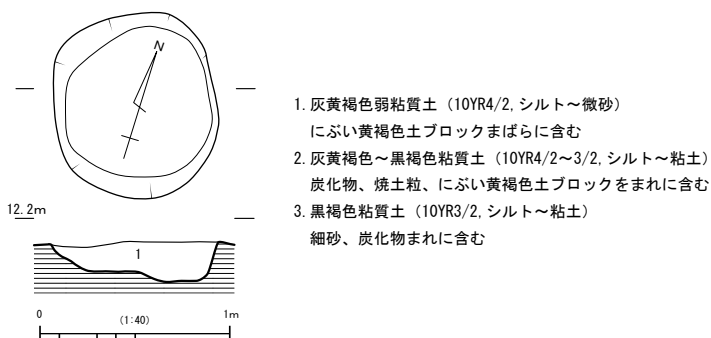
第44図 SK03実測図(1/40)



図版100 SK03完掘状況

④ SK04

A区からの検出である。長軸0.88m、短軸0.86m、深さ0.32mで円形を呈する平面プランである。遺物は弥生土器小片が出土した。



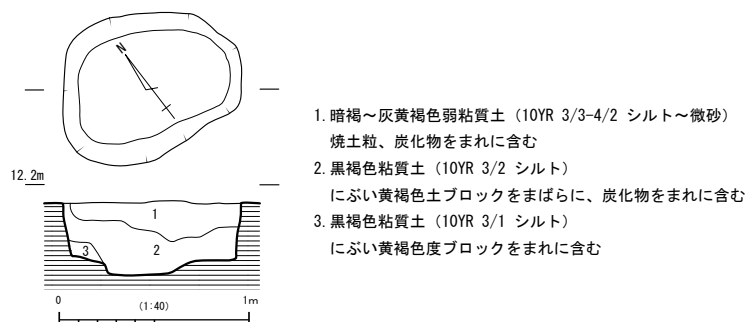
第45図 SK04実測図(1/40)



図版101 SK04完掘状況

⑤ SK05

A区からの検出である。長軸1.00m、短軸0.76m、深さ0.38mで楕円形を呈する平面プランである。遺物は弥生土器小片が出土した。



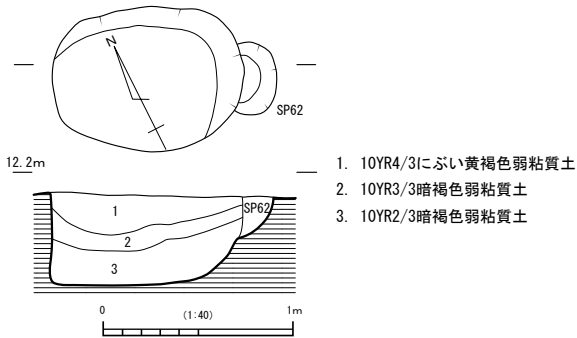
第46図 SK05実測図(1/40)



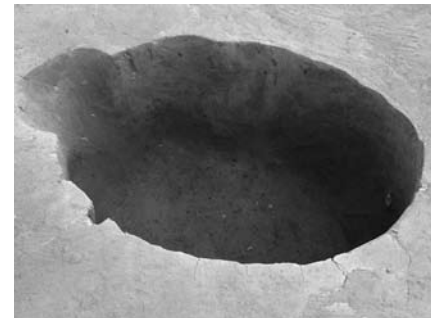
図版102 SK05完掘状況

⑥ SK06

B区からの検出である。長軸1.00m、短軸0.76m、深さ0.48mで楕円形を呈する平面プランである。SP62を切っている。



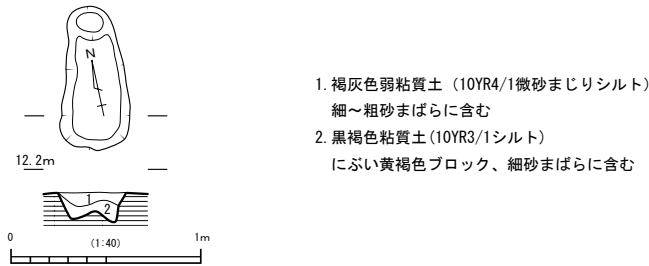
第47図 SK06実測図(1/40)



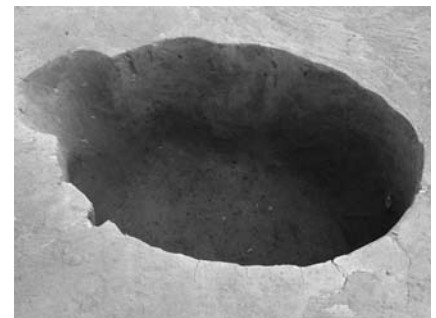
図版103 SK06完掘状況

⑦ SK07

B区からの検出である。長軸0.76m、短軸0.34m、深さ0.10mで楕円形を呈する平面プランである。遺物は弥生土器小片が出土した。



第48図 SK07実測図(1/40)



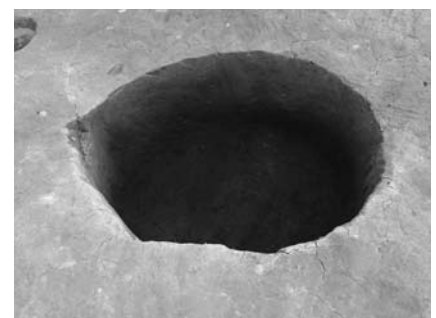
図版104 SK07完掘状況

⑧ SK08

B区からの検出である。長軸1.00m、短軸0.82m、深さ0.50mで楕円形を呈する平面プランである。出土遺物は覆土からの出土で、1はリボン状突起片で縄文時代晩期の所産であろう。



第50図 SK08出土土器実測図(1/3)



図版105 SK08完掘状況

1. 10YR4/3にぶい黄褐色弱粘質土
2. 10YR3/3暗褐色弱粘質土
3. 10YR2/2黒褐色弱粘質土

第49図 SK08実測図(1/40)



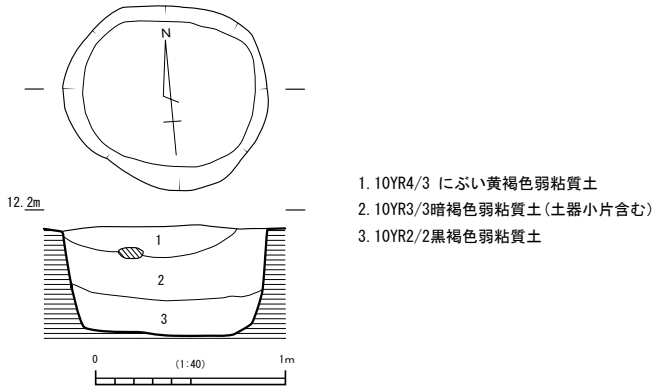
図版106 SK08出土土器

第21表 SK08出土土器観察表

番号	器種	時代	口径 cm	器高 ()は推定値	底径	色調		胎土	焼成	備考
						内面	外面			
1	深鉢?	縄文晩期				7.5YR 5/4 にぶい橙	7.5YR 5/4 にぶい橙		良好	リボン状突起

⑨ SK09

B区からの検出である。長軸1.08m、短軸0.96m、深さ0.58mで楕円形を呈する平面プランである。遺物は弥生土器小片が出土した。



- 1. 10YR4/3 にぶい黄褐色弱粘質土
- 2. 10YR3/3暗褐色弱粘質土(土器小片含む)
- 3. 10YR2/2黒褐色弱粘質土

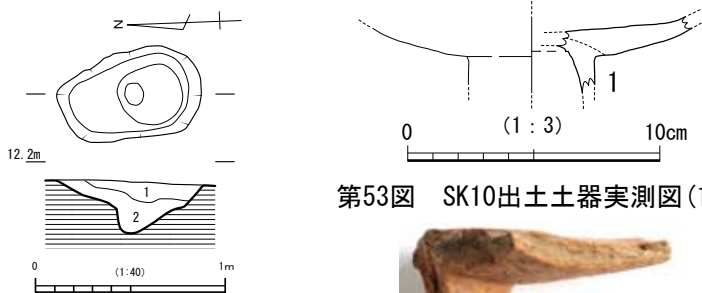


図版107 SK09完掘状況

第51図 SK09実測図(1/40)

⑩ SK10

B区からの検出である。長軸0.74m、短軸0.44m、深さ0.18mで楕円形を呈する平面プランである。遺物は覆土から弥生土器高坏片が出土した。1は高坏坏部片から脚部の一部である。坏部から脚部外面に丹塗りが一部残る。弥生時代後期前半頃であろう。

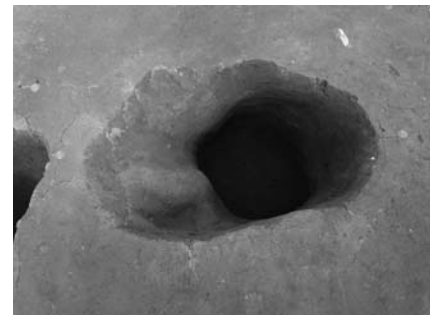


第53図 SK10出土土器実測図(1/3)

- 1. 10YR3/3 暗褐色弱粘質土
- 2. 10YR2/2黒褐色粘質土(炭少量含む)



図版109 SK10出土土器



図版108 SK10完掘状況

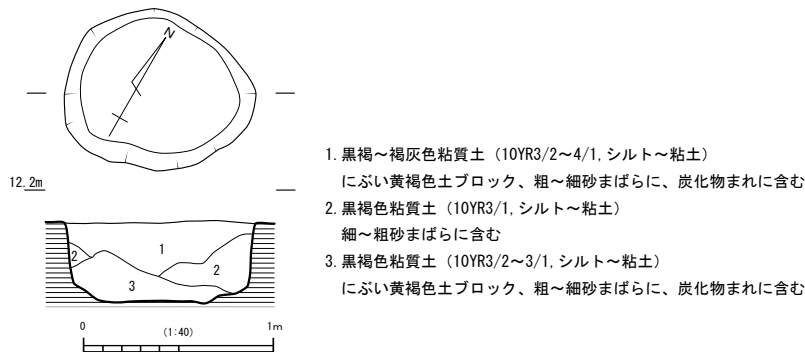
第52図 SK10実測図(1/40)

第22表 SK10出土土器観察表

番号	器種	時代	口径		口径	色調		胎土	焼成	備考
			cm	()は推定値		内面	外面			
1	高坏	弥生後期前半				橙色 7.5Y 6/6	橙色 7.5Y 6/6	細粒を含む	やや軟質	丹塗り

⑪ SK11

B区からの検出である。長軸1.02m、短軸0.84m、深さ0.42mで楕円形を呈する平面プランである。遺物は弥生土器小片が出土した。



- 1. 黒褐～褐灰色粘質土 (10YR3/2~4/1, シルト～粘土) にぶい黄褐色土ブロック、粗～細砂まばらに、炭化物まれに含む
- 2. 黒褐色粘質土 (10YR3/1, シルト～粘土) 細～粗砂まばらに含む
- 3. 黒褐色粘質土 (10YR3/2~3/1, シルト～粘土) にぶい黄褐色土ブロック、粗～細砂まばらに、炭化物まれに含む

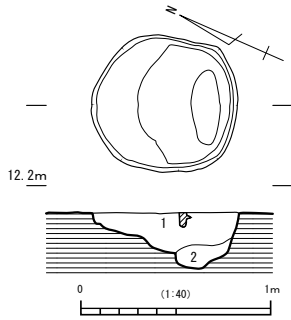


図版110 SK11完掘状況

第54図 SK11実測図(1/40)

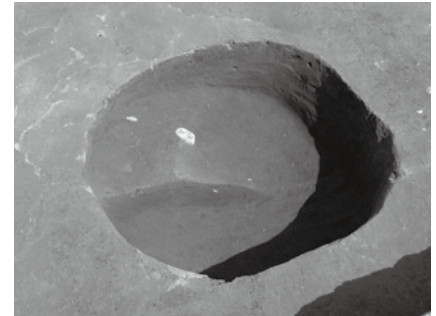
⑫ SK12

B区からの検出である。長軸0.78m、短軸0.72m、深さ0.30mで楕円形を呈する平面プランである。遺物は黒曜石剥片、土師器片が出土した。



1. 黒褐色粘質土 (10YR3/2, シルト)
細~粗砂、にぶい黄褐色土ブロック、炭化物まれに含む
2. 黒褐色粘質土 (10YR3/1-2/2, 粘土~シルト)
にぶい黄褐色土ブロックまれに含む

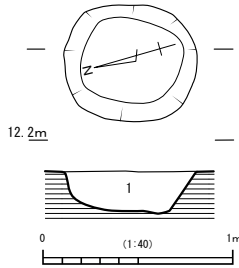
第55図 SK12実測図(1/40)



図版111 SK12完掘状況

⑬ SK13

B区からの検出である。長軸0.68m、短軸0.64m、深さ0.20mで楕円形を呈する平面プランである。遺物は弥生土器小片が出土した。



1. 黒褐色粘質土 (10YR2/2, シルト~粘土)
細~粗砂、にぶい黄褐色土ブロックまばらに含む

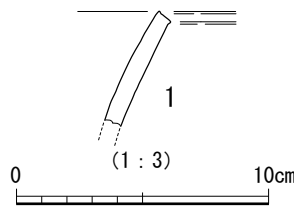
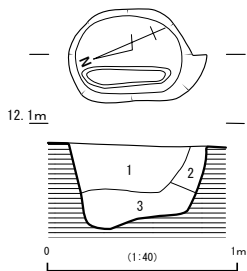
第56図 SK13実測図(1/40)



図版112 SK13完掘状況

⑭ SK14

B区からの検出である。長軸0.74m、短軸0.48m、深さ0.38mで楕円形を呈する平面プランである。遺物は粗製土器浅鉢、黒曜石剥片、縄文土器小片が出土した。1は粗製土器浅鉢口縁部で滑石混入、焼成は良好である。全体的に丁寧な作りである。縄文時代晩期の土器である。



第58図 SK14出土土器実測図(1/3)

1. 黒褐色弱粘質土 (10YR2/3, シルト~微砂)
細~粗砂、にぶい黄褐色~橙色粒(焼土?)多く含む
2. 黒褐色粘質土 (10YR2/2, シルト~粘土)
にぶい黄褐色土ブロックまばらに含む
3. 暗褐色弱粘質土 (10YR3/3, シルト~微砂)
細砂まばらに含む

第57図 SK14実測図(1/40)



図版114 SK14出土土器



図版113 SK14完掘状況

第23表 SK14出土土器観察表

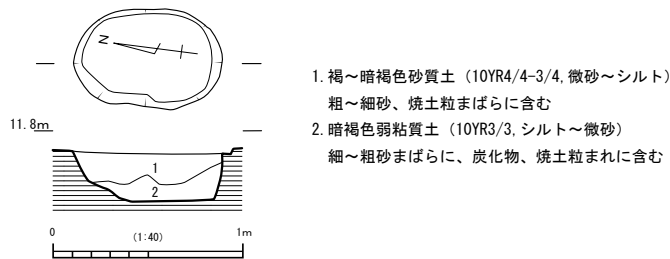
番号	器種	時代	口径 cm	器高 ()は推定値	底径	色調		胎土	焼成	備考
						内面	外面			
1	粗製浅鉢	縄文晩期	4.5+			10YR 3/4 暗褐色	10YR 3/4 暗褐色	砂粒を含む	良好	

⑮ SK15

欠番

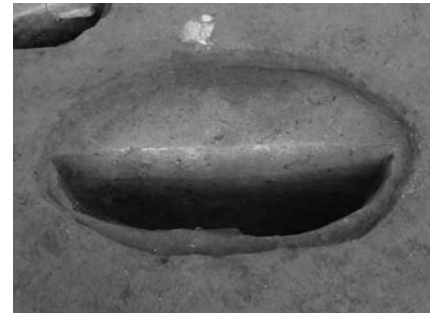
⑯ SK16

B区からの検出である。長軸0.80m、短軸0.52m、深さ0.24mで楕円形を呈する平面プランである。遺物は出土しなかった。



第59図 SK16実測図(1/40)

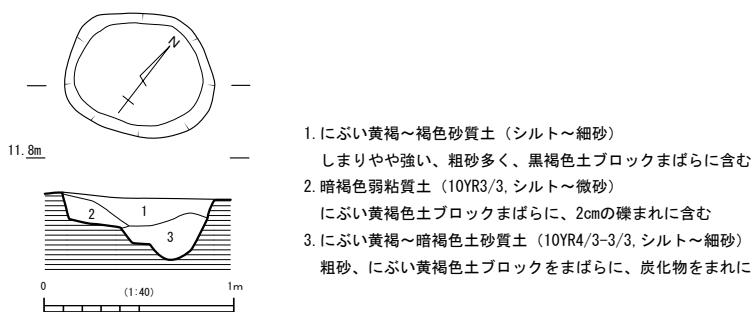
1. 褐～暗褐色砂質土 (10YR4/4-3/4, 微砂～シルト)
粗～細砂、焼土粒まばらに含む
2. 暗褐色弱粘質土 (10YR3/3, シルト～微砂)
細～粗砂まばらに、炭化物、焼土粒まれに含む



図版115 SK16半截状況

⑰ SK17

B区からの検出である。長軸0.80m、短軸0.64m、深さ0.24mで楕円形を呈する平面プランである。遺物は弥生土器片が出土した。



第60図 SK17実測図(1/40)

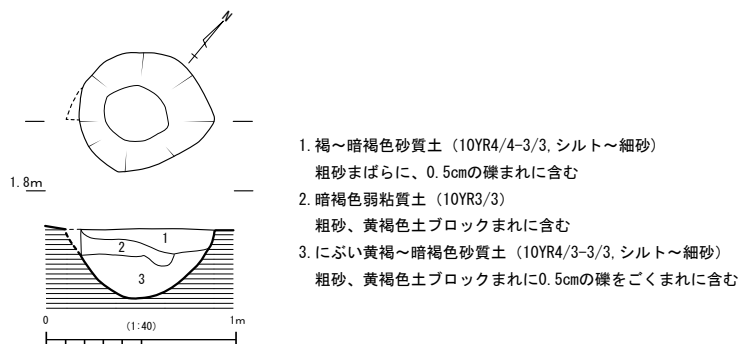
1. にぶい黄褐～褐色砂質土 (シルト～細砂)
しまりやや強い、粗砂多く、黒褐色土ブロックまばらに含む
2. 暗褐色弱粘質土 (10YR3/3, シルト～微砂)
にぶい黄褐色土ブロックまばらに、2cmの礫まれに含む
3. にぶい黄褐～暗褐色土砂質土 (10YR4/3-3/3, シルト～細砂)
粗砂、にぶい黄褐色土ブロックをまばらに、炭化物をまれに含む



図版116 SK17半截状況

⑱ SK18

B区からの検出である。長軸0.70m、短軸0.62m、深さ0.36mで楕円形を呈する平面プランである。遺物は使用痕のある剥片が出土した。



第61図 SK18実測図(1/40)

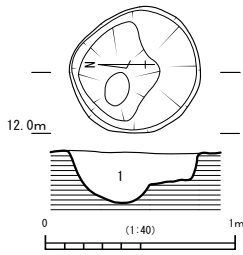
1. 褐～暗褐色砂質土 (10YR4/4-3/3, シルト～細砂)
粗砂まばらに、0.5cmの礫まれに含む
2. 暗褐色弱粘質土 (10YR3/3)
粗砂、黄褐色土ブロックまれに含む
3. にぶい黄褐～暗褐色砂質土 (10YR4/3-3/3, シルト～細砂)
粗砂、黄褐色土ブロックまれに0.5cmの礫をこくまれに含む



図版117 SK18半截状況

①9 SK19

B区からの検出である。長軸0.70m、短軸0.66m、深さ0.26mで円形を呈する平面プランである。遺物は弥生土器片が出土した。



1. 10YR3/4暗褐色粘質土 10YR4/5褐色粘質土の混合土

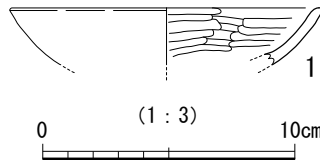
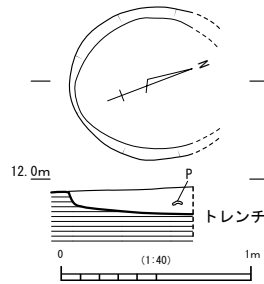
第62図 SK19実測図(1/40)



図版118 SK19完掘状況

②0 SK20

B区からの検出である。長軸0.82mの楕円形を呈する土坑である。遺物は覆土から出土である。1は黒色土器A類の埴口縁部片である。内面は丁寧に細かく磨かれている。古代から中世初頃の土器であろう。



第64図 SK20出土土器実測図



図版119 SK20出土土器

1. 黒褐色粘質土 (10YR2/2-3/2シルト)
細砂、焼土ブロックまれに炭化物まばらに含む

第63図 SK20実測図(1/40)

第24表 SK20出土土器観察表

番号	器種	時代	口径	器高	底径	色調		胎土	焼成	備考
			cm	()は推定値	内面	外面				
1	土師器埴	古代~中世	(12.0)	2.2+		10YR 4/1 褐灰	7.5Y 2/1 黒	雲母交じり	良好	口縁 黒色土器A類

第25表 土坑一覧表(m)

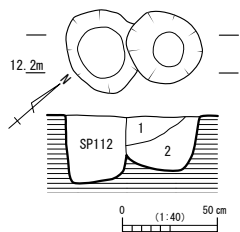
遺構番号	調査区	グリッド	層位	長軸	短軸	深さ	形状	備考
SK001	A区	9048	Ⅲ-Ⅱ層	0.82	0.72	0.14	楕円形	弥生土器片
SK002	A区	9078	Ⅲ-Ⅱ層	1.02	0.92	0.10	円形	弥生土器片
SK003	A区	9080	Ⅲ-Ⅱ層	0.98	0.96	0.16	円形	縄文・弥生土器片
SK004	A区	9078	Ⅲ-Ⅱ層	0.88	0.86	0.32	円形	弥生土器片
SK005	A区	9078	Ⅲ-Ⅱ層	1.00	0.76	0.38	楕円形	弥生土器片
SK006	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	1.00	0.76	0.48	楕円形	SP62を切っている
SK007	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.76	0.34	0.10	楕円形	弥生土器片
SK008	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	1.00	0.82	0.50	楕円形	リボン状突起深鉢
SK009	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	1.08	0.96	0.58	楕円形	弥生土器片
SK010	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.74	0.44	0.18	楕円形	高坏丹塗り
SK011	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	1.02	0.84	0.42	楕円形	弥生土器小片
SK012	B区	8876	Ⅲ-Ⅱ層	0.78	0.72	0.30	楕円形	黒曜石剥片 土師器片
SK013	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.68	0.64	0.20	楕円形	弥生土器小片
SK014	B区	8876	Ⅲ-Ⅱ層	0.74	0.48	0.38	楕円形	粗製土器浅鉢 黒曜石剥片 縄文小片
SK015	欠番							欠番
SK016	B区	8878	Ⅳ層下	0.80	0.52	0.24	楕円形	出土遺物なし
SK017	B区	8878	Ⅳ層下	0.80	0.64	0.24	楕円形	弥生土器片
SK018	B区	8878	Ⅳ層下	0.70	0.62	0.36	楕円形	UF片
SK019	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.70	0.66	0.26	円形	弥生土器片
SK020	B区	8678	Ⅲ-Ⅱ層	0.82	0.68	0.14	楕円形	土師器埴口縁部

(8) SP001～256について

柱穴は256基を検出した。いずれの柱穴も並ばない。柱穴の覆土からは縄文土器片、弥生土器片、土師器片、黒曜石チップ片が出土した。実測できる遺物が出土した柱穴はSP123、124、156、157、158、159、255の7基である。またSP006、011、014は柱穴間隔が約2.10mである。しかしながらこの柱穴に直行する柱穴は確認できなかった。その他は小片のため図示できなかったため、10基を報告しその他は観察表で対応する。

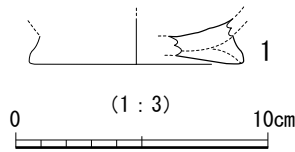
① SP111

B区、第三-II層から検出した柱穴で形状は円形を呈する。SP112を切っており黒曜石片、縄文土器鉢底部片、弥生土器小片が出土した。1は縄文時代晩期の鉢の底部片で雲母、結晶変岩、長石を含む。



- 1. 10YR2/1 黒褐色弱粘質土 (土器細片、橙色小ブロック少量含む)
- 2. 10YR3/3 暗褐色弱粘質土

第65図 SP111実測図(1/40)



第66図 SP111出土土器実測図(1/3)



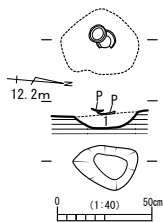
図版120 SP111出土土器

第26表 SP111出土土器観察表

番号	器種	時代	口径 cm	器高 ()は推定値	底径 (8.5)	色調		胎土	焼成	備考
						内面	外面			
1	鉢	縄文晩期				7.5YR 6/4 に近い橙	10YR 7/3 に近い黄橙	砂粒をやや多く含む	良好	底部片 雲母 結晶変岩 長石含む

② SP123

B区、第三-I層から検出した柱穴で形状は楕円形で南北方向にやや広がる。覆土上面から土師器カワラケが2点(1、2)出土した。時期は古代末～中世にかけての土器で完形である。その他この柱穴の周辺から6点の土師器カワラケ、坏が出土した。1、2、4～7は土師器カワラケである。1、2は重ねた状態で出土した。いずれも回転ヘラ削りで11世紀代の所産か。4～7は同じく回転ヘラ削りで11世紀中頃～12世紀前半頃の所産である。3と8は坏である。

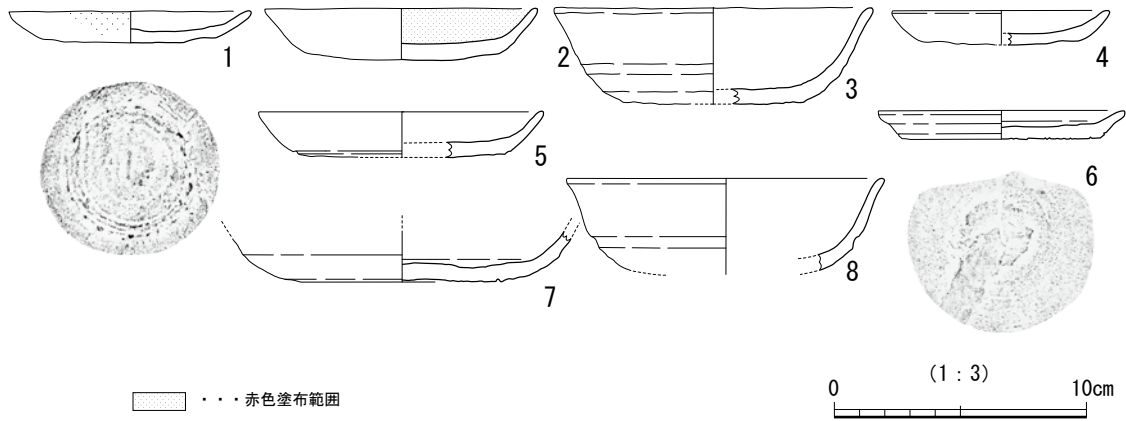


- 1. 灰黄褐～黒褐色弱粘質土 (10YR4/2、シルト微砂)
褐灰色粘質土ブロックをまばらに含む
細砂まれに含む

第67図 SP123実測図(1/40)



図版121 SP123出土土器



1, 2はSP123から出土、3～8はSP123周辺から出土

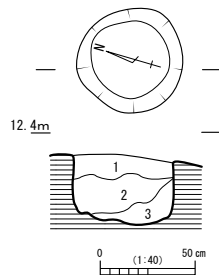
第68図 SP123出土土器実測図(1/3)

第27表 SP123出土土器観察表

番号	器種	時代	口径 cm	器高 ()は推定値	底径	色調		胎土	焼成	備考
						内面	外面			
1	土師器カワラケ	古代末～中世	9.4	1.2	5.6	2.5Y 8/1 灰白色	2.5Y 8/1 灰白色	小砂粒を含む	良好	回転ヘラ削り 3-1層 SP123から出土
2	土師器カワラケ	古代末～中世	10.8	2.0	7.7	10YR 5/4 にぶい黄褐色	10YR 5/4 にぶい黄褐色	小砂粒をやや多く含む	良好	回転ヘラ削り 3-1層 内面に朱を塗る SP123から出土
3	土師器杯	古代末～中世	(12.6)	3.8	(7.0)	2.5Y 8/2 灰白色	2.5Y 8/2 灰白色	小砂粒を含む	良好	回転ヘラ削り 3-1層 SP123周辺からの出土
4	土師器カワラケ	古代末～中世	(8.6)	1.3	(6.0)	10YR 2/2 黒褐色	10YR 2/2 黒褐色	小砂粒を含む	良好	回転ヘラ削り 3-1層 SP123周辺からの出土
5	土師器カワラケ	古代末～中世	(11.2)	1.8+	(8.2)	2.5Y 7/1 灰白色	2.5Y 8/3 淡黄色	多くの砂粒を含む、粗い	粗い	回転ヘラ削り 3-1層 SP123周辺からの出土
6	土師器カワラケ	古代末～中世	9.8	1.1	7.9	7.5YR 7/4 にぶい橙	7.5YR 7/4 にぶい橙	長石、石英、角閃石	良好	回転ヘラ削り 3-1層 丹塗り? SP123周辺からの出土
7	土師器カワラケ	古代末～中世		2.0+	(8.0)	7.5YR 8/6 浅黄橙	7.5YR 5/1 褐灰	長石、石英、角閃石	良好	回転ヘラ削り 3-1層 外面丹塗り SP123周辺からの出土
8	土師器杯	古代末～中世	(12.5)	3.6+		10YR 7/3 にぶい黄橙	10YR 7/4 にぶい黄橙	角閃石、雲母、長石	良好	口縁 SP123周辺からの出土

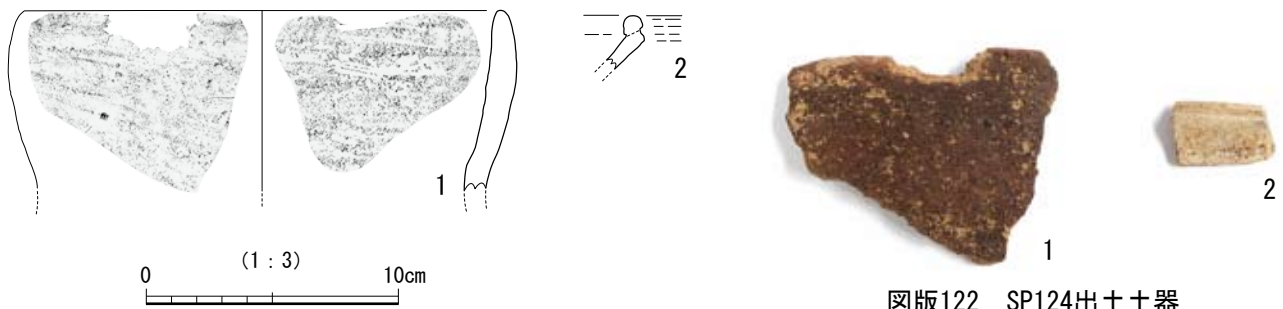
③ SP124

B区、第三-I層から検出した柱穴で形状は円形である。覆土は3層に分かれる。1は縄文時代晩期の粗製の深鉢で口縁部～胴部にかけての破片である。2は縄文時代晩期の精製土器浅鉢口縁部片である。



1. 黒褐色粘質土 (10YR3/1～3/2、シルト～粘土)
炭化物、細～粗砂と多く、焼土粒0.5～5cmの灰黄褐色土ブロックまばらに含む
2. 黒色弱粘質土 (10YR2/1、微砂まじりシルト～粘土)
炭化物、焼土粒、細～粗砂含む
3. 黒褐色粘質土 (10YR3/2、シルト～粘土)
0.5～2cmのにぶい黄褐色土ブロック、炭化物まばらに含む

第69図 SP124実測図(1/40)



図版122 SP124出土土器

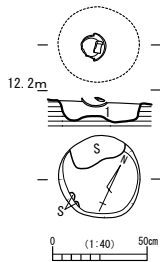
第70図 SP124出土土器実測図(1/3)

第28表 SP124出土土器観察表

番号	器種	時代	口径 cm	器高 ()は推定値	底径	色調		胎土	焼成	備考
						内面	外面			
1	縄文深鉢	縄文晩期	(19.0)	7.1+		10YR 5/4 にぶい黄褐色	10YR 2/3 黒褐色	砂粒を多く含む、粗い	軟質	
2	縄文浅鉢	縄文晩期		2.1+		10YR 5/4 にぶい黄褐色	10YR 5/4 にぶい黄褐色	細粒を含む	良好	

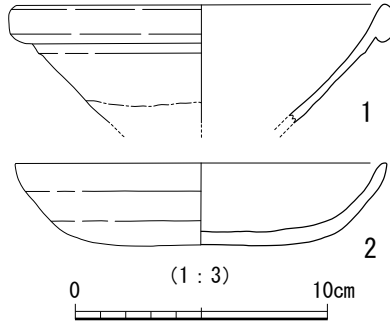
④ SP156

B区、第Ⅲ-I層から検出した柱穴で形状は円形である。土坑とする方が妥当であったが柱穴と注記したためそのまま進めた。1は玉縁口縁の白磁碗である。2は土師器皿で回転糸切り痕を残す。いずれも12世紀末頃であろう。



1. 黒褐色弱粘質土 (10YR2/2~3/2、シルト~微砂
粗~細砂多く、炭化物・焼土ブロックまばらに含む
玉縁口縁の白磁を伴う

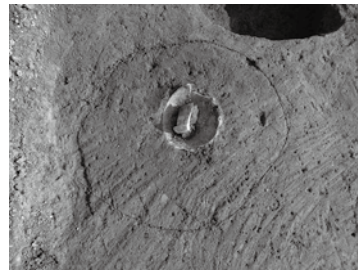
第71図 SP156実測図(1/40)



第72図 SP156出土土器実測図(1/3)



図版123 SP156出土土器



図版124 SP156遺物検出状況



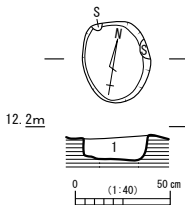
図版125 SP156半截状況

第29表 SP156出土土器観察表

番号	器種	時代	口径 cm	器高 ()は推定値	底径	色調		胎土	焼成	備考
						内面	外面			
1	白磁碗	12c末	(14.6)	4.7+		5Y 7/1 灰白	5Y 7/1 灰白	細砂粒を含む	良好	3-1層
2	土師器皿	12c末	(14.7)	3.2	(9.8)	2.5Y 8/2 灰白色	2.5Y 8/2 灰白色	砂粒を少量含む	数質	糸切り? 3-1層

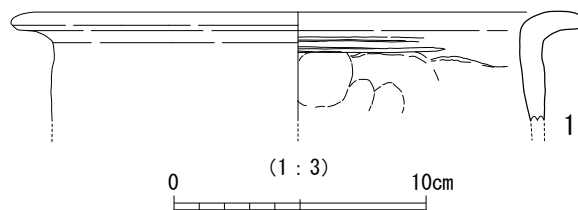
⑤ SP157

B区、第Ⅲ-I層から検出した柱穴で形状は楕円形である。深さ0.10mと浅い。出土遺物は覆土から弥生土器口縁部片、縄文土器小片が出土した。1は弥生土器甕の口縁部~胴部の一部である。内面に指圧痕が残る。後期初頭頃であろう。



1. 黒褐色粘質土 (10YR3/1~3/2シルト)
層上部に細砂含む

第73図 SP157実測図(1/40)



第74図 SP157出土土器実測図(1/3)



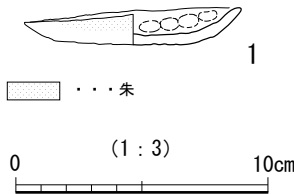
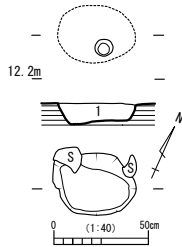
図版126 SP157出土土器

第30表 SP157出土土器観察表

番号	器種	時代	口径 cm	器高 ()は推定値	底径	色調		胎土	焼成	備考
						内面	外面			
1	弥生土器甕	弥生後期初頭頃	(19.7)	4.3+		7.5YR 6/4 に近い橙	7.5YR 5/6 明褐色	多くの小粒を含み粗い	やや軟質	口縁

⑥ SP158

B区、第Ⅲ-I層から検出した柱穴で形状は楕円形である。この柱穴も長軸0.8m程ある事から土坑とする方が妥当であったが柱穴として進めた。柱穴の深さは0.18mと浅い。出土遺物は土師器カワラケではぼ完形、弥生土器小片が出土した。1は土師器カワラケで、回転ヘラ削り、やや雑な作りである。口縁部内外に朱塗り跡が残る。11世紀前半頃の所産か。



第76図 SP158出土土器実測図(1/3)

図版127 SP158出土土器

1. 黒褐色弱粘質土 (10YR3/2-2/2 シルト-微砂)
粗～細砂多く、炭化物まれに含む。
土師器、小皿を伴う。

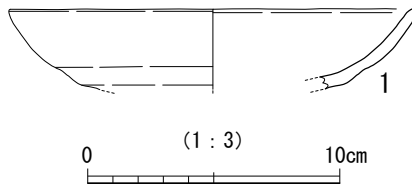
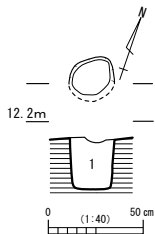
第75図 SP158実測図(1/40)

第31表 SP158出土土器観察表

番号	器種	時代	口径 cm	器高 ()は推定値	底径	色調		胎土	焼成	備考
						内面	外面			
1	土師器カワラケ	11c前半頃	9.5	1.6	5.3	2.5Y 8/2 灰白色	2.5Y 8/2 灰白色	小砂粒を含む	良好	完形 口縁内外に丹塗りあり

⑦ SP159

B区、第Ⅲ-I層から検出した柱穴で形状は楕円形である。直径は0.22m程で、深さは0.26mを測る。出土遺物は土師器片、縄文土器片が出土した。1は土師器杯の口縁部である。丁寧な作りでナゲ調整を施す。古墳時代後期頃か。



第78図 SP159出土土器実測図(1/3)

図版128 SP159出土土器

1. 黒褐色粘質土 (10YR3/2、シルト)
粗～細砂まばらに含む

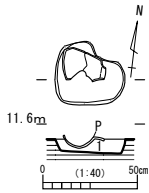
第77図 SP159実測図(1/40)

第32表 SP159出土土器観察表

番号	器種	時代	口径 cm	器高 ()は推定値	底径	色調		胎土	焼成	備考
						内面	外面			
1	土師器杯	古墳後期?	(16.0)	3.2+		7.5YR 7/4 にぶい橙色	7.5YR 7/4 にぶい橙色	やや大きな砂粒を含む	良好	口縁部

⑦ SP255

B区、第Ⅲ-I層から検出した柱穴で形状は不整形を呈する。長軸0.72m、短軸0.68mを測ることから土坑として取り扱うべきであるが柱穴として進めた。覆土上面から擬無文土器の甕である。平底の底部からやや内湾気味に立ち上がり、口縁部直下で僅かに段を有し、口縁部はやや外反気味に開く。弥生時代中期末頃か。

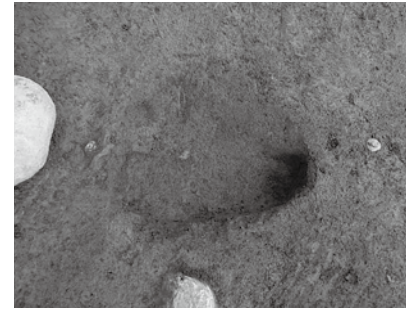


1. 黒褐色粘質土 (10YR3/2-2/3、粘土-シルト)
- 灰色粘土ブロックごくまれに含む
- 弥生土器を伴う
- 3層中からの掘り込みが造成により削平されたものとおもわれる

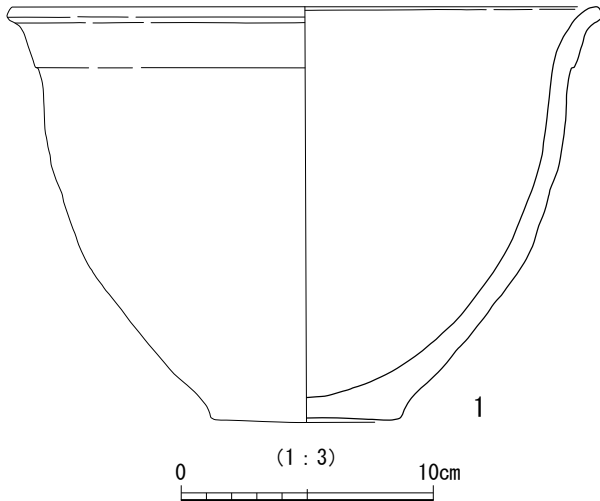
第79図 SP255実測図(1/40)



図版129 SP255遺物検出状況



図版130 SP255完掘状況



第80図 SP255出土土器実測図(1/3)



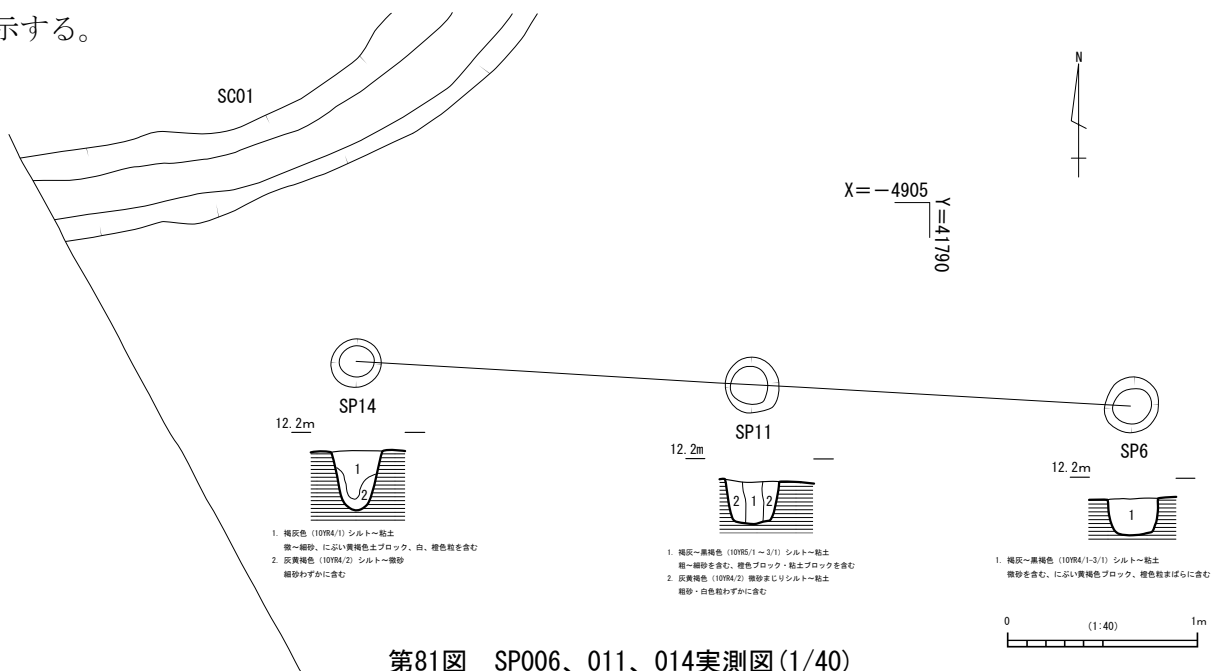
図版131 SP255出土土器

第33表 SP255出土土器観察表

番号	器種	時代	口径 器高 底径			色調		胎土	焼成	備考
			cm	()は推定値		内面	外面			
1	壺	弥生中期末?	(23.1)	16.5	(7.6)	5YR 6/6 橙	2.5YR 5/6 弱赤褐	赤色が強い、砂粒が目立つ	良好	擬無文土器の要素が入る

⑨ SP006、011、014

柱穴列で2間を検出した。柱穴間の芯々間は2.10mで、柱穴の形状は円形で直径は0.26~0.28m、深さ0.30mを測る。しかしながら直行する柱穴が見当たらないため建物にはならない。ピット列として図示する。



第81図 SP006、011、014実測図(1/40)

第34-1表 柱六一覧表 (m)

遺構番号	調査区	グリッド	層位	長軸	短軸	深さ	形状	備考
SP001	A区	9078	Ⅲ-Ⅱ層	0.30	0.30	0.30	円形	石器片
SP002	A区	9078	Ⅲ-Ⅱ層	0.30	0.26	0.10	円形	
SP003	A区	9078	Ⅲ-Ⅱ層	0.50	0.36	0.14	楕円形	
SP004	A区	9078	Ⅲ-Ⅱ層	0.38	0.32	0.18	円形	
SP005	A区	9078	Ⅲ-Ⅱ層	0.40	0.38	0.14	円形	
SP006	A区	9078	Ⅲ-Ⅱ層	0.30	0.28	0.20	円形	ピット列
SP007	A区	9078	Ⅲ-Ⅱ層	0.44	0.32	0.08	円形	
SP008	A区	9078	Ⅲ-Ⅱ層	0.54	0.54	0.30	円形	黒曜石片
SP009	A区	9078	Ⅲ-Ⅱ層	0.24	0.18+	0.08	円形	P10から切られている
SP010	A区	9078	Ⅲ-Ⅱ層	0.34	0.30	0.18	円形	P9を切る 須恵器小片
SP011	A区	9078	Ⅲ-Ⅱ層	0.30	0.30	0.22	円形	ピット列
SP012	A区	9078	Ⅲ-Ⅱ層	0.30	0.30	0.16	円形	縄文小片
SP013	A区	9078	Ⅲ-Ⅱ層	0.40	0.28	0.22	楕円形	
SP014	A区	9078	Ⅲ-Ⅱ層	0.26	0.26	0.30	円形	ピット列
SP015	A区	9078	Ⅲ-Ⅱ層	0.28	0.26	0.16	円形	黒曜石片
SP016	A区	9078	Ⅲ-Ⅱ層	0.42	0.40	0.38	円形	縄文小片
SP017	A区	9078	Ⅲ-Ⅱ層	0.40	0.37	0.10	楕円形	弥生・土師器 小片
SP018	A区	9078	Ⅲ-Ⅱ層	0.26	0.24	0.10	楕円形	
SP019	A区	9078	Ⅲ-Ⅱ層	0.44	0.34	0.32	楕円形	弥生小片
SP020	A区	9078	Ⅲ-Ⅱ層	0.36	0.36	0.30	不整形	
SP021	A区	9078	Ⅲ-Ⅱ層	0.48	0.48	0.18	不整形	黒曜石片 弥生小片
SP022	A区	9078	Ⅲ-Ⅱ層	0.34	0.34	0.24	やや不整形	弥生小片
SP023	A区	9078	Ⅲ-Ⅱ層	0.30	0.28	0.34	円形	
SP024	A区	9078	Ⅲ-Ⅱ層	0.30	0.28	0.50	円形	
SP025	A区	9078	Ⅲ-Ⅱ層	0.50	0.44	0.22	楕円形	弥生小片 黒曜石片
SP026	A区	9078	Ⅲ-Ⅱ層	0.34	0.30	0.12	円形	
SP027	A区	9280	Ⅲ-Ⅱ層	0.52	0.42	0.12	楕円形	UF片
SP028	A区	9280	Ⅲ-Ⅱ層	0.46	0.40	0.22	楕円形	弥生小片
SP029	A区	9280	Ⅲ-Ⅱ層	0.30	0.26	0.12	円形	
SP030	A区	9280	Ⅲ-Ⅱ層	0.38	0.32	0.26	円形	弥生小片
SP031	A区	9080	Ⅲ-Ⅱ層			0.30		弥生小片
SP032	A区	9078	Ⅲ-Ⅱ層	0.42	0.40	0.18	円形	
SP033	A区	9078	Ⅲ-Ⅱ層	0.38	0.30	0.10	楕円形	
SP034	A区	9078	Ⅲ-Ⅱ層	0.32	0.2+	0.26	円形	P21に切られる
SP035	A区	9078	Ⅲ-Ⅱ層	0.38	0.36	0.12+	円形	
SP036	A区	9078	Ⅲ-Ⅱ層	0.32	0.30	0.48	円形	柱痕あり 弥生小片
SP037	A区	9078	Ⅲ-Ⅱ層	0.28	0.26	0.10	円形	弥生小片
SP038	A区	9078	Ⅲ-Ⅱ層	0.22	0.20+	0.30	円形	P17,19に切られる。断面図なし 弥生小片
SP039	A区	9078	Ⅲ-Ⅱ層	0.40	0.36	0.32	円形	
SP040	A区	9078	Ⅲ-Ⅱ層	0.34	0.32	0.34	円形	弥生小片
SP041	A区	9078	Ⅲ-Ⅱ層	0.26	0.20	0.08	円形	
SP042	A区	9078	Ⅲ-Ⅱ層	0.32	0.30	0.16	円形	須恵小片
SP043	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.36	0.30	0.18	円形	
SP044	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.26	0.22	0.12	円形	
SP045	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.30	0.28	0.10	円形	
SP046	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.24	0.22	0.12	円形	
SP047	A区	9041.275362	Ⅲ-Ⅱ層	0.32	0.44	0.24	円形	石器片
SP048	A区	9039.703361	Ⅲ-Ⅱ層	0.32	0.46	0.24	円形	
SP049	A区	9038.13136	Ⅲ-Ⅱ層	0.32	0.48	0.24	楕円形	
SP050	A区	9036.559359	Ⅲ-Ⅱ層	0.32	0.51	0.24	円形	
SP051	A区	9034.987357	Ⅲ-Ⅱ層	0.32	0.53	0.24	円形	
SP052	A区	9033.415356	Ⅲ-Ⅱ層	0.31	0.55	0.25	円形	ピット列
SP053	A区	9031.843355	Ⅲ-Ⅱ層	0.31	0.57	0.25	円形	
SP054	A区	9030.271354	Ⅲ-Ⅱ層	0.31	0.59	0.25	円形	黒曜石片
SP055	A区	9028.699352	Ⅲ-Ⅱ層	0.31	0.19+	0.25	円形	P11から切られている
SP056	A区	9027.127351	Ⅲ-Ⅱ層	0.31	0.37	0.25	円形	P10を切る 須恵器小片
SP057	A区	9025.55535	Ⅲ-Ⅱ層	0.31	0.37	0.25	円形	ピット列
SP058	A区	9023.983349	Ⅲ-Ⅱ層	0.31	0.37	0.26	円形	縄文小片
SP059	A区	9022.411348	Ⅲ-Ⅱ層	0.30	0.37	0.26	楕円形	
SP060	A区	9020.839346	Ⅲ-Ⅱ層	0.30	0.38	0.26	円形	ピット列
SP061	A区	9019.267345	Ⅲ-Ⅱ層	0.30	0.38	0.26	円形	黒曜石片
SP062	A区	9017.695344	Ⅲ-Ⅱ層	0.30	0.38	0.26	円形	縄文小片
SP064	欠番							欠番
SP064	欠番							欠番
SP065	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.66	0.36	0.14	楕円形	弥生小片
SP066	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.32	0.30	0.22	円形	
SP067	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.22	0.22	0.10	円形	
SP068	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.48	0.4+	0.38	楕円形	P41.71と切り合い 弥生小片
SP069	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.34	0.30	0.14	円形	
SP070	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.40	0.40	0.42	円形	弥生小片
SP071	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.32	0.30	0.26	円形	P47.68と切り合い
SP072	B区	8878	Ⅳ層上	0.36	0.28	0.14	楕円形	P73を切っている 弥生小片
SP073	B区	8878	Ⅳ層上	0.36	0.32+	0.26	円形	p72に切られている 黒曜石片
SP074	B区	8878	Ⅳ層上	0.38	0.26	0.22	楕円形	
SP075	B区	8878	Ⅳ層上	0.28	0.22	0.24	楕円形	
SP076	B区	8878	Ⅳ層上	0.42	0.34+	0.16	円形	
SP077	B区	8878	Ⅳ層上	0.44	0.28	0.24	楕円形	弥生小片
SP078	B区	8878	Ⅳ層上	0.40	0.22+	0.30	円形(推定)	
SP079	A区	9078	Ⅳ層下	0.28	0.28	0.12	円形	
SP080	A区	9078	Ⅳ層下	0.26	0.24	0.20	円形	
SP081	B区	8878	Ⅳ層下	0.42	0.40	0.16	円形	
SP082	A区	9078	Ⅳ層下	0.40	0.3+	0.28	円形	P8から切られている
SP083	B区	8878	Ⅳ層下	0.28	0.28	0.12+	円形	
SP084	B区	8876.8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.38	0.36	0.28	円形	弥生小片
SP085	B区	8876.8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.36	0.34	0.18+	楕円形	

第34-2表 柱穴一覧表 (m)

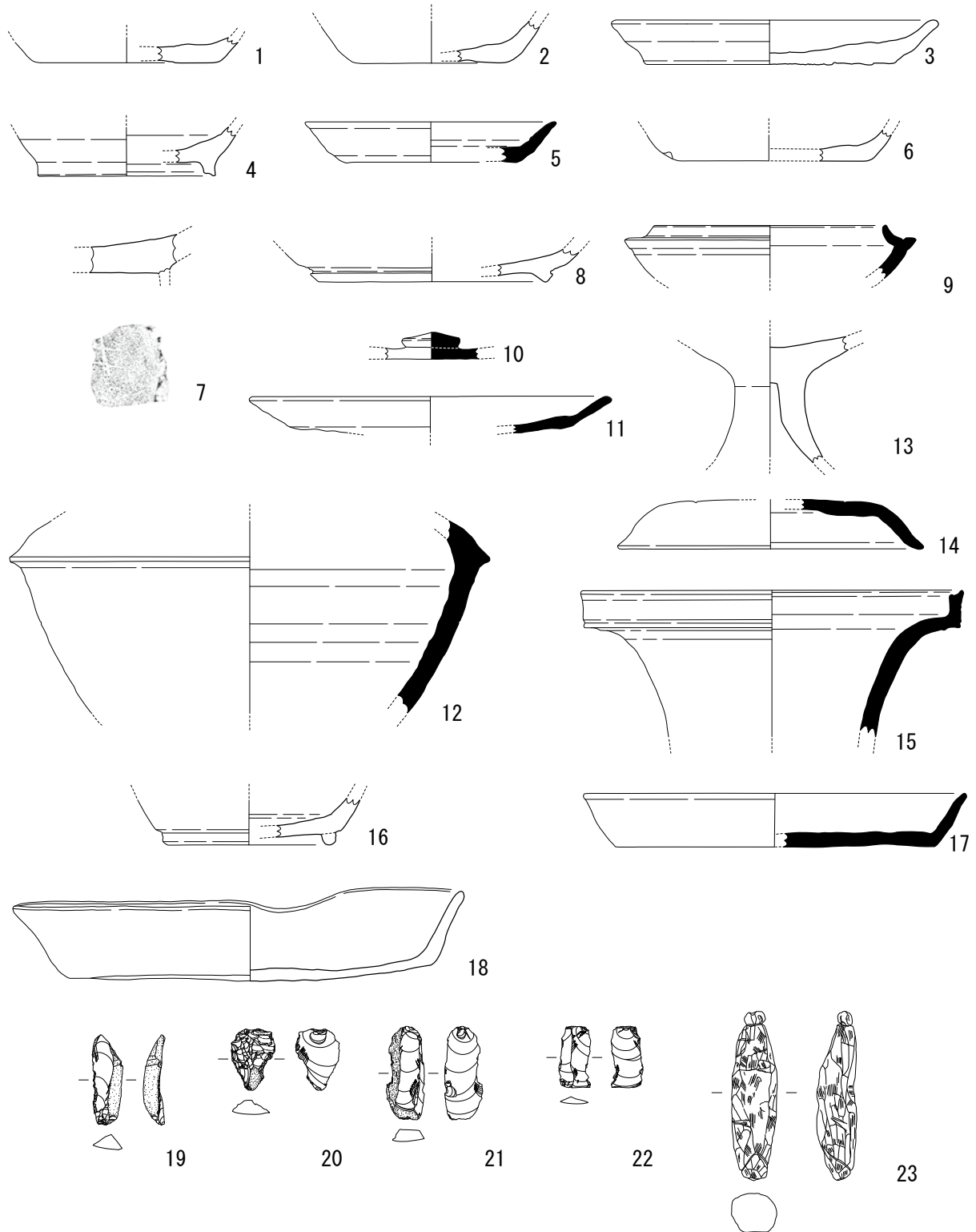
遺構番号	調査区	グリッド	層位	長軸	短軸	深さ	形状	備考
SP086	B区	8876.8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.48	0.40	0.30	楕円形	縄文~弥生 小片
SP087	B区	8876.8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.60	0.44	0.38	楕円形	
SP088	B区	8876.8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.50	0.42	0.40	楕円形	黒曜石片 弥生片
SP089	B区	8876.8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.58	0.58	0.30	円形	弥生小片 石器
SP090	B区	8876.8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.54	0.44	0.30	不整形	弥生小片
SP091	B区	8876	Ⅲ-Ⅱ層	0.56	0.44	0.32	楕円形	
SP092	B区	8876	Ⅲ-Ⅱ層	0.40	0.40	0.26	楕円形	
SP093	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.64	0.32	0.28+	楕円形	弥生 土師器 古代 小片
SP094	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.50	0.44	0.36	楕円形	
SP095	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.48	0.36	0.28	楕円形	弥生・土師小片 一部丹塗り
SP096	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.62	0.44	0.32	楕円形	弥生小片 須恵小片
SP097	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.36	0.24	0.14	楕円形	
SP098	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.50	0.42	0.38	楕円形	
SP099	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.48	0.42	0.34	円形	
SP100	B区	8878	Ⅳ層上	0.30	0.28	0.24	円形	誤って記録前に前掘 弥生小片
SP101	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.54	0.32	0.20	楕円形	弥生小片
SP102	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層			0.20	楕円形	P101と切り合い 弥生小片
SP103	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.46	0.44	0.32	円形	弥生小片
SP104	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.40	0.38	0.22	やや楕円形	
SP105	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.80	0.40	0.32	楕円形	弥生小片
SP106	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.44	0.28	0.30	円形	黒曜片
SP107	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.42	0.40	0.30	円形	弥生小片
SP108	B区	8876	Ⅲ-Ⅱ層	0.36	0.34	0.24+	円形	須恵多 弥生 古墳~古代
SP109	B区	8878.8876	Ⅲ-Ⅱ層	0.52	0.30	0.16	円形	半分が調査区外に所在
SP110	B区	8876	Ⅲ-Ⅱ層	0.36	0.32	0.30	円形	黒曜石 弥生小片
SP111	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.40	0.38	0.28	円形	P111がP112を切っている 縄文の鉢底部片 黒曜片 弥生小片
SP112	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.44	0.32+	0.36	円形	黒曜石片 弥生小片
SP113	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.72	0.52	0.24	楕円形	
SP114	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.34	0.30	0.10	円形	
SP115	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.40	0.30	0.32	楕円形	黒曜石剥片
SP116	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.54	0.46	0.18	楕円形	
SP117	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.52	0.44	0.30	楕円形	縄文小片 弥生小片
SP118	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.58	0.50	0.50	楕円形	
SP119	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.44	0.44	0.26	円形	
SP120	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.58	0.48	0.38	円形	P121を切っている 弥生小片
SP121	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.44	0.34+	0.40	円形	P121から切られている
SP122	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.60	0.48	0.16	楕円形	縄文・弥生・古墳 小片
SP123	B区	8876	Ⅲ-Ⅰ層	0.70	0.46	0.16+	楕円形	土師器カワラケ皿小片
SP124	B区	8876	Ⅲ-Ⅰ層	0.56	0.56	0.36	円形	縄文晩期深鉢、浅鉢 黒曜片 土師片
SP125	B区	8876	Ⅲ-Ⅰ層	0.66	0.54	0.32	楕円形	縄文片 黒曜石剥片 土師片
SP126	B区	8878	Ⅲ-Ⅰ層	0.34	0.26	0.20	楕円形	
SP127	B区	8878	Ⅲ-Ⅰ層	0.38	0.36	0.24	不整形	
SP128	B区	8876	Ⅲ-Ⅰ層	0.38	0.26	0.24	楕円形	
SP129	B区	8876	Ⅲ-Ⅰ層	0.46	0.34	0.16	楕円形	
SP130	B区	8878	Ⅳ層下	0.24	0.18	0.18	楕円形	
SP131	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.40	0.36	0.28+	楕円形	黒曜石片 弥生・土師小片
SP132	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.24	0.22	0.12	円形	
SP133	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.28	0.12+	0.14	円形	
SP134	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.36	0.30	0.06	円形	須恵小片
SP135	B区	8876	Ⅲ-Ⅱ層	0.28	0.26	0.22+	円形	
SP136	B区	8876	Ⅲ-Ⅱ層	0.26	0.24	0.08	円形	
SP137	B区	8876	Ⅲ-Ⅱ層	0.26	0.24	0.14	円形	土師片
SP138	B区	8876	Ⅲ-Ⅱ層	0.40	0.38	0.26	円形	黒曜石片
SP139	B区	8876	Ⅲ-Ⅱ層	0.36	0.30	0.32+	不整形	弥生片 土師器片
SP140	B区	8876	Ⅲ-Ⅱ層	0.36	0.34	0.28+	楕円形	弥生片
SP141	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.44	0.18	0.16	楕円形	黒曜石片 弥生片
SP142	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.42	0.36	0.30+	楕円形	弥生 小片
SP143	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.28	0.26	0.22	円形	
SP144	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.40	0.34	0.08	円形	黒曜石剥片 弥生片
SP145	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.38	0.36	0.22	楕円形	
SP146	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.46	0.4+	0.28	楕円形	黒曜石剥片 土師片
SP147	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.24	0.22	0.06	円形	
SP148	B区	8876	Ⅲ-Ⅱ層	0.56	0.36	0.32	楕円形	
SP149	B区	8876	Ⅲ-Ⅱ層	0.40	0.38	0.24	円形	
SP150	B区	8876	Ⅲ-Ⅱ層	0.20	0.20	0.14	円形	
SP151	B区	8876	Ⅲ-Ⅱ層	0.24	0.24	0.10	円形	
SP152	B区	8876	Ⅲ-Ⅱ層	0.30	0.24	0.10	楕円形	弥生片
SP153	B区	8876	Ⅲ-Ⅱ層	0.34	0.22+	0.32	楕円形	
SP154	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.30	0.26	0.36	楕円形	
SP155	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.50	0.42	0.18	楕円形	縄文小片
SP156	B区	8878	Ⅲ-Ⅰ層	0.86	0.86	0.20	円形	土師器、白磁碗 土師片 中世磁器片
SP157	B区	8878	Ⅲ-Ⅰ層	0.42	0.34	0.10	楕円形	土師器甕 縄文小片
SP158	B区	8878	Ⅲ-Ⅰ層	0.80	0.66	0.18	楕円形	土師器皿 弥生小片
SP159	B区	8878	Ⅲ-Ⅰ層	0.24	0.22	0.26	楕円形	土師器坏 縄文片 土師片
SP160	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.3+	0.28	0.12	楕円形	P148から切られている
SP161	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.50	0.48	0.20	楕円形	黒曜石片
SP162	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.36+	0.34	0.20	楕円形	縄文小片
SP163	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.40	0.40	0.24	円形	黒曜石片
SP164	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.32	0.26	0.18	楕円形	黒曜石片 縄文
SP165	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.34	0.32	0.10	円形	
SP166	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.40	0.36	0.40	円形	弥生小片
SP167	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.38	0.32	0.18	楕円形	弥生小片
SP168	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.36	0.34	0.18	楕円形	
SP169	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.40	0.36	0.22	円形	
SP170	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.60	0.50	0.28	楕円形	土師片

第34-3表 柱六一覧表(m)

遺構番号	調査区	グリッド	層位	長軸	短軸	深さ	形状	備考
SP171	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.32	0.28	0.14	楕円形	
SP172	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.44	0.38	0.28	楕円形	
SP173	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.36	0.36	0.18	楕円形	
SP174	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.30	0.30	0.08	円形	弥生片
SP175	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.50	0.44	0.32	楕円形	
SP176	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.44	0.40	0.28	楕円形	弥生片
SP177	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.28	0.28	0.20	楕円形	
SP178	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.46	0.44	0.34	楕円形	
SP179	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.46	0.44	0.32	不整形	弥生片
SP180	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.32	0.30	0.16	楕円形	
SP181	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.66	0.44	0.30	楕円形	黒曜片 弥生小片
SP182	B区	8878	Ⅳ層下	0.38	0.36	0.22	円形	
SP183	B区	8878	Ⅳ層下	0.38	0.34	0.12	楕円形	弥生小片
SP184	B区	8878	Ⅳ層下	0.35	0.30	0.24	楕円形	
SP185	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.28	0.28	0.16	円形	
SP186	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.58	0.38	0.18	楕円形	縄文片
SP187	B区	8876	Ⅳ層下	0.70	0.60	0.20	楕円形	
SP188	B区	8878	Ⅳ層下	0.54	0.46	0.24	楕円形	黒曜石片 縄文小片
SP189	B区	8878	Ⅳ層下	0.44	0.40	0.10	不整形	弥生小片
SP190	B区	8878	Ⅳ層下	0.42	0.34	0.14	楕円形	黒曜石片
SP191	B区	8878	Ⅳ層下	0.42	0.36	0.26	楕円形	黒曜石片 弥生
SP192	B区	8878	Ⅳ層下	0.34	0.32	0.24	楕円形	
SP193	B区	8878	Ⅳ層下	0.38	0.36	0.18	楕円形	陶片
SP194	B区	8878	Ⅳ層下	0.44	0.34	0.18	楕円形	弥生小片
SP195	B区	8878	Ⅳ層下	0.60	0.54	0.18	円形	
SP196	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.42	0.38	0.20	円形	
SP197	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.36	0.34	0.18	円形	P198を切っている 黒曜石片
SP198	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.20	0.18+	0.18	楕円形	
SP199	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.34	0.32	0.14	楕円形	
SP200	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.40	0.2+	0.22	楕円形	黒曜石片
SP201	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.38	0.2+	0.24	楕円形	
SP202	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.38	0.24	0.22	楕円形	
SP203	B区	8878	Ⅲ-Ⅰ層	0.46	0.24	0.40	不整形	
SP204	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.32	0.24	0.10	楕円形	
SP205	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.32	0.24	0.08	楕円形	
SP206	B区	8878	Ⅲ-Ⅰ層	0.60	0.48	0.20	楕円形	弥生片
SP207	B区	8876	Ⅳ層下	0.40	0.32	0.18	楕円形	
SP208	B区	8876	Ⅳ層下	0.34	0.28	0.14	楕円形	
SP209	B区	8876	Ⅳ層下	0.30	0.28	0.22	円形	
SP210	B区	8876	Ⅲ-Ⅱ層	0.32	0.30	0.20	円形	
SP211	B区	8876	Ⅲ-Ⅱ層	0.48	0.28	0.14	円形	
SP212	B区	8876	Ⅳ層下	0.36	0.30	0.18	楕円形	
SP213	B区	8876	Ⅳ層下	0.40	0.34	0.14	楕円形	
SP214	B区	8876	Ⅳ層下	0.28	0.28	0.16	円形	
SP215	B区	8878	Ⅳ層下	0.54	0.48	0.28	楕円形	
SP216	B区	8878	Ⅳ層下	0.28	0.22	0.10	楕円形	
SP217	B区	8878	Ⅳ層下	0.30	0.28	0.18	円形	
SP218	B区	8878	Ⅳ層下	0.58	0.52	0.25	円形	
SP219	B区	8878	Ⅳ層下	0.24	0.24	0.10	円形	
SP220	B区	8878	Ⅳ層下	0.22	0.20	0.10	円形	
SP221	B区	8878	Ⅳ層下	0.34	0.30	0.22	楕円形	
SP222	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.40	0.32	0.20	楕円形	
SP223	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.34	0.30	0.10	楕円形	
SP224	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.42	0.36	0.18	楕円形	黒曜石片
SP225	B区	8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.34	0.34	0.18	楕円形	黒曜石片
SP226	B区	8676	Ⅲ-Ⅱ層	0.44	0.36	0.26	楕円形	黒曜石片 縄文小片
SP227	B区	8676	Ⅲ-Ⅱ層	0.40	0.38	0.34	円形	弥生小片
SP228	B区	8676	Ⅲ-Ⅱ層	0.40	0.38	0.20	楕円形	黒曜石片
SP229	B区	8678	Ⅲ-Ⅱ層	0.54	0.46	0.40	楕円形	
SP230	B区	8678	Ⅲ-Ⅱ層	0.48	0.44	0.24	楕円形	縄文小片 磁器片
SP231	B区	8678	Ⅲ-Ⅱ層	0.42	0.32	0.24	楕円形	黒曜石片
SP232	B区	8678	Ⅲ-Ⅱ層	0.38	0.36	0.26	円形	P233を切る 縄文小片 弥生小片
SP233	B区	8678	Ⅲ-Ⅱ層	0.38	0.26+	0.38	楕円形	P232から切られる
SP234	B区	8678	Ⅲ-Ⅱ層	0.52	0.44	0.44	楕円形	縄文片
SP235	B区	8678	Ⅲ-Ⅱ層	0.60	0.50	0.18	不整形	黒曜石片 縄文小片
SP236	B区	8678	Ⅲ-Ⅱ層	0.56	0.54	0.30	円形	P237を切る
SP237	B区	8678	Ⅲ-Ⅱ層	0.40+	0.36	0.14	円形	P236から切られる 黒曜石片 縄文片 弥生片
SP238	B区	8676	Ⅲ-Ⅱ層	0.46	0.46	0.18	円形	黒曜石片
SP239	B区	8676	Ⅳ層下	0.34	0.28	0.60	楕円形	
SP240	B区	8678	V層上	0.30	0.28	0.10	楕円形	
SP241	B区	8678	V層上	0.38	0.34	0.24	円形	
SP242	B区	8676	V層上	0.26	0.24	0.21	円形	
SP243	B区	8678	V層上	0.28	0.24	0.10	楕円形	
SP244	B区	8678	V層上	0.50	0.32	0.10	楕円形	
SP245	B区	8678	V層上	0.30	0.30	0.30	円形	
SP246	B区	8678	V層上	0.38	0.34	0.14	不整形	縄文片
SP247		欠番						欠番
SP248	B区	8676	Ⅲ-Ⅱ層	0.56	0.56	0.24	円形	
SP249	B区	8676	Ⅲ-Ⅱ層	0.56	0.44+	0.18	楕円形	縄文片
SP250	B区	8676 他	Ⅲ-Ⅱ層	0.46	0.38	0.36	円形	8678. 8876. 8878
SP251	B区	8678. 8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.46	0.36	0.26	楕円形	弥生後期壺
SP252	B区	8876	Ⅲ-Ⅱ層	0.74	0.5+	0.36	楕円形	
SP253	B区	8678	Ⅲ-Ⅱ層	0.44	0.26+	0.28	楕円形	
SP254	B区	8678. 8878	Ⅲ-Ⅱ層	0.74	0.46	0.18	円形	
SP255	B区	8676	Ⅲ-Ⅰ層	0.72	0.68	0.14	不整形	壺(弥生中期末)
SP256	B区	8678	Ⅲ-Ⅱ層?	0.32	0.2+	0.21	楕円形	

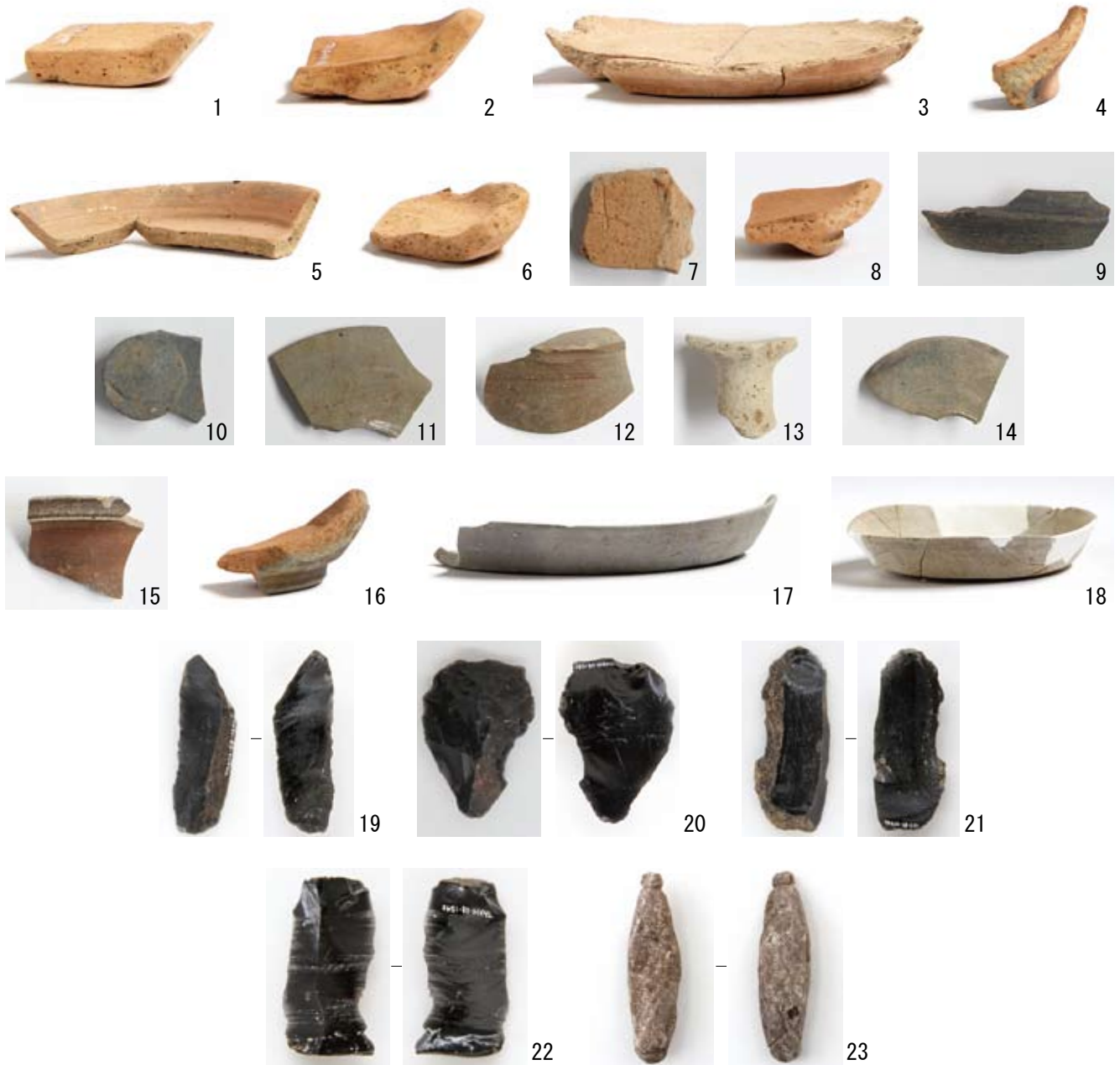
(9) NR01～NR03について

NR01はB区北側からD区に、NR02、NR03はC区に所在する。いずれも南東から北西に流れている。NR01は縄文時代～中世頃までの遺物が、NR02は弥生時代～中世、NR03は縄文時代～中世頃の遺物が出土した。個別遺物の内容は観察表に記した。



第82図 NR01出土遺物実測図(1/3)

0 (1:3) 10cm



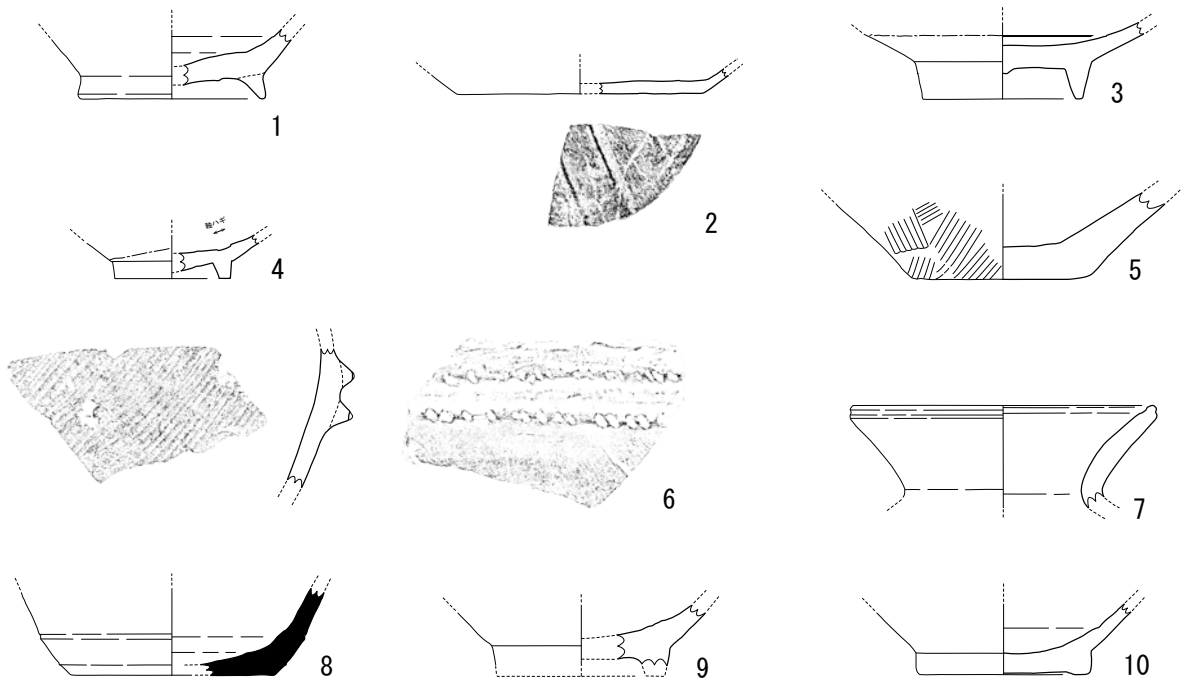
図版132 NR01出土遺物

第35表 NR01出土土器観察表

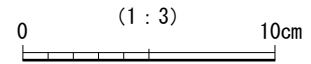
番号	器種	時代	口径 cm	器高 ()は推定値	底径	色調		胎土	焼成	備考
						内面	外面			
1	カワラケ?碗	中世 初期			(9.0)	7.5YR 7/6 橙	7.5YR 7/6 橙	赤色粒子、雲母を含む	良好	底部
2	土師皿(カワラケ?)	中世 初期	2.0+	(7.4)	7.5YR 6/6 橙	5YR 6/6 橙	5YR 6/6 橙	赤色粒子を含む	良好	底部
3	土師皿(大型)	中世	15.7	12.2	7.5YR 7/4 にぶい橙	7.5YR 7/4 にぶい橙	7.5YR 7/4 にぶい橙	赤色粒子、雲母、細砂粒	不良	口縁部欠損 底部へラ切り
4	土師器高台付埴	中世?	2.4+	(8.6)	5YR 7/6	2.5YR 7/6 橙	2.5YR 7/6 橙		良好	
5	須恵器坏身	古代	(12.4)	1.9	(8.6)	2.5YR 6/6 橙	2.5YR 6/6 橙	細かい	良好	口縁~底部 還元されていない
6	土師器皿	中世	1.5+	(9.2)	5YR 7/6 橙	5YR 7/6 橙	5YR 7/6 橙		不良	
7	弥生釜	弥生				5YR 7/4 にぶい橙	7.5YR 7/4 にぶい橙	赤色粒子、白色粒子	不良	底部へラ記号 線刻あり
8	土師器高台付埴	中世	(11.2)	1.6+		5YR 7/6 橙	5YR 6/6 橙	雲母、白色粒子、石英	良好	
9	須恵器坏身	古墳後期	(11.4)	2.6+		N 4/0 灰	N4/0 灰		良好	口縁 6c末
10	須恵器蓋	古墳				N 5/0 灰	N 5/0 灰		良好	つまみ部(鳥帽子形) つまみ径 2.9cm
11	須恵器高坏	古墳	(17.6)	1.8+		10Y 7/1 灰白	10Y 7/1 灰白		良好	坏部
12	須恵器蓋	古代				5Y 7/1 灰白	10YR 5/2 灰黄褐		良好	突帯付 底部
13	須恵器高坏	古墳				5Y 8/1 灰白	5Y 8/1 灰白		不良	脚部 軟質
14	須恵器坏蓋	古墳	(15.0)	2.4+		7.5Y 5/1 灰	7.5Y 6/1 灰		良好	
15	須恵器蓋	古墳	(18.8)	7.2+		2.5Y 5/6 明赤褐	2.5Y 6/2 灰黄		良好	口~頸部
16	土師器高台付埴	古代	2.3+	(8.0)	5YR 5/2 灰褐	5YR 7/6 橙	5YR 7/6 橙	白色粒子、雲母	良好	底部
17	須恵器皿	古代	(19.0)	2.6	(15.8)	N8/1 灰白	N8/1 灰白		良好	
18	土師器皿	中世	21.6	4.5	17.6	2.5Y 8/2 灰白	2.5Y 8/2 灰白		良好	※実測後接合につき実測図要確認

第36表 NR01出土土器観察表(長さ、幅、厚さmm、重さg)

番号	器種	時代	長さ	幅	厚さ	重量	材質	備考
19	剥片	縄文	44.5	15.2	10.5	4.7	黒曜石	正面に自然面、裏面に主要剥離面が残る 左右両側縁に剥離痕有り
20	UF	縄文	30.5	22.0	7.5	3.7	黒曜石	正面側縁部に微細線刻有り パテナが観察される
21	剥片	縄文	46.0	18.5	7.5	6.0		正面に自然面、裏面に主要剥離面が残る
22	剥片	縄文	30.5	16.0	6.0	1.9		打面に自然面、裏面に主要剥離面が残る
23	石製器物?	古代~中世	83.0	22.0	20.0	45.0	滑石	



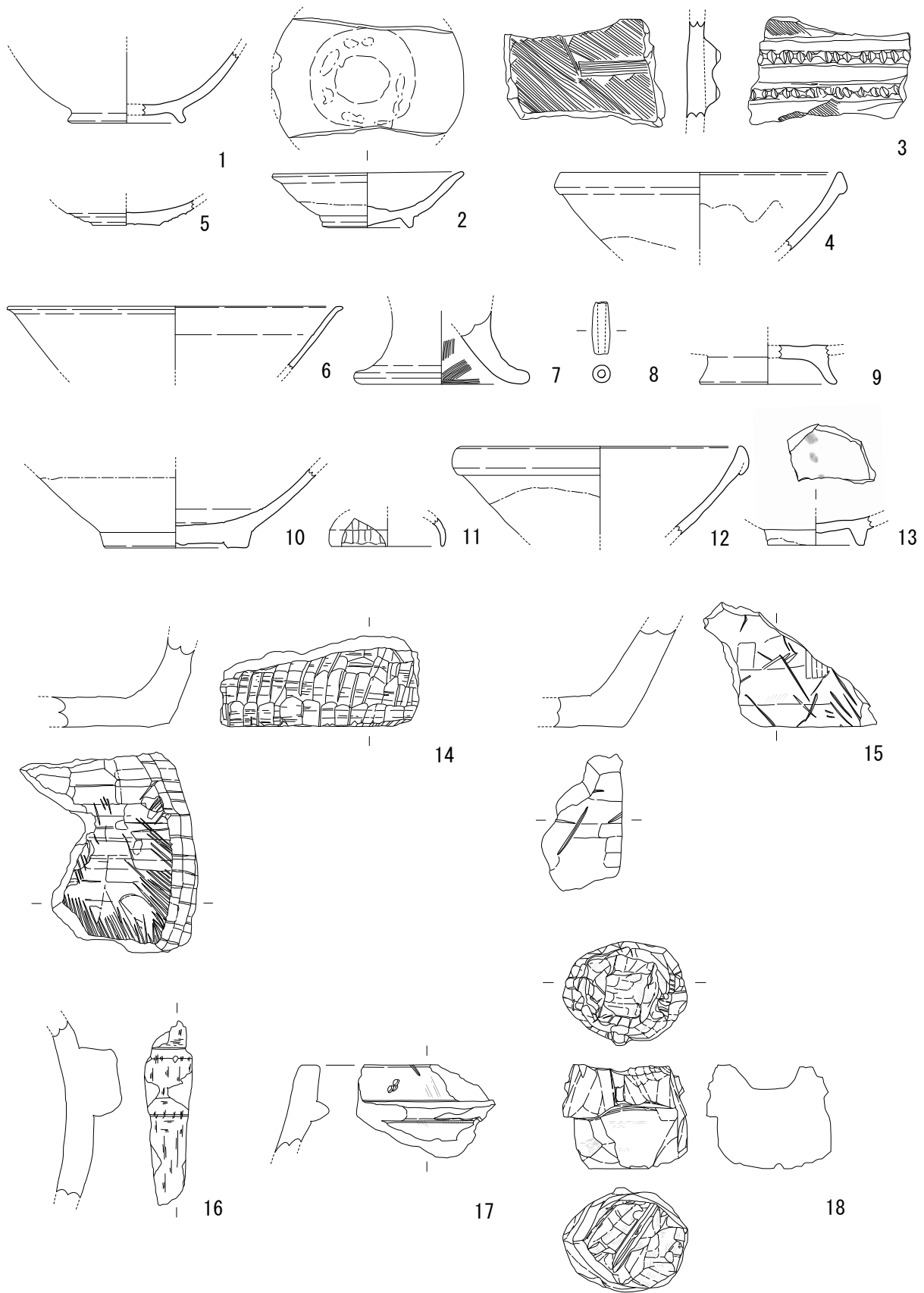
第83図 NR02出土土器実測図(1/3)



図版133 NR02出土土器

第37表 NR02 出土土器観察表

番号	器種	時代	口径 cm	器高 ()は推定値	底径 ()は推定値	色調		胎土	焼成	備考
						内面	外面			
1	土師器高台付埴	古代~中世	2.7+	(7.2)	7.5YR 7/6 橙	7.5YR 5/8 明褐			良好	底部
2	土師器灯明皿	古代~中世	1.0+	(9.6)	5YR 7/2 明褐灰	5YR 7/2 明褐灰			良好	煤付着あり
3	箕野白磁碗	古代	3.0+	(6.3)	5Y 7/2 灰白	2.5Y 7/2 灰黄			良好	口縁
4	箕野白磁皿	中世	1.7+	(4.6)	7.5Y 6/2 灰オリーブ	7.5Y 6/2 灰オリーブ			良好	底部 蛇ノ目刺ぎ
5	弥生壺	弥生後期	3.4+	7.2	10YR 8/4 浅黄橙	10YR 8/4 浅黄橙	長石、角閃石		良好	底部
6	弥生壺	弥生後期	3.4+	7.2	5YR 6/8 橙	7.5YR 3/1 黄褐	石英、雲母、黒い砂流		不良	胴部 二条貼付 刻目突帯
7	弥生丸底壺	弥生後期	(11.9)	4.0+	5YR 3/3 暗赤褐	10YR 4/1 褐灰	白色粒子、長石		不良	口縁
8	須恵器坏	古墳	3.4+	(8.0)	N 7/0 灰白	N 7/0 灰白			良好	底部
9	青磁碗	中世			2.5Y 6/4 にぶい黄	2.5Y 6/4 にぶい黄			良好	底部 越州窯
10	白磁碗	古代	2.8+	6.6	2.5Y 7/2 浅黄	5Y 7/2 灰白			良好	底部



0 (1 : 3) 10cm

第84図 NR03出土遺物実測図 (1/3)



図版134 NR03出土遺物

第38表 NR03出土土器観察表

番号	器種	時代	口径 cm	器高 ()は推定値	底径	色調		胎土	焼成	備考	
						内面	外面				
1	土師器高台付埴	古代~中世		3.7+	(5.9)		10YR 3/1 黒褐	10YR 3/1 黒褐		良好	
2	真白磁碗	中世	9.9	2.9	4.2	5Y 6/2 灰オリーブ	5Y 6/2 灰オリーブ			不良	1/2残存
3	弥生壺	弥生後期				7.5YR 6/6 橙	10YR 7/3にふい黄橙			不良	二条突帯 同一ID 3点※内外面の色調でなく2点の色
4	白磁碗	中世	(14.7)	4.0+		5Y 6/2 灰オリーブ	5Y 6/2 灰オリーブ			良好	口縁
5	白磁碗	中世		1.3+	3.5	5Y 8/1 灰白	5Y 7/2 灰白			良好	底部
6	白磁碗	中世	(17.4)	3.3+		5Y 8/2 灰白	5Y 8/2 灰白			良好	口縁
7	弥生台付壺	弥生後期		3.8+	(8.4)	5YR 6/8 橙	5YR 7/6 橙	角閃石、雲母		良好	底部
8	土師質土鉢	中世				5YR 6/8 橙	5YR 7/6 橙			良好	完形 長さ:2.7cm 幅:0.95cm 孔:0.4cm
9	土師器高台付埴	中世			(7.0)	7.5YR 7/4 にふい橙	7.5YR 7/6 橙	角閃石、長石、石英		不良	高台
10	白磁碗	中世		4.1+	7.4	2.5Y 7/2 浅黄	5Y 7/2 灰白			良好	胴部~底部
11	青白磁谷子	中世	(5.8)	1.5+		5G 7/1 明緑灰	5G 7/1 明緑灰			良好	口縁
12	白磁碗	中世	(14.6)	4.6+		5Y 7/2 灰白	5Y 7/2 灰白			良好	口縁~胴部
13	真白陶器碗?	中世		1.5+	(5.0)	10Y 8/1 灰白	10YR 7/2 にふい黄橙			良好	高台部 明染付

第39表 NR03出土石器観察表(長さ、幅、厚さmm、重さg)

番号	器種	時代	長さ	幅	厚さ	重量	材質	備考
14	石鍋底部	中世				355.0+	緑色石	器高 47.0+mm
15	石鍋底部	中世				210.0+	滑石	外面にはノミ痕が残っている 全体に他方向からのケズリ痕が見られる 器高: 65.0+mm
16	石鍋片	古代~中世				75.0+	滑石(タルク)	縦耳部
17	石鍋	中世				85.0+	滑石	口縁部 ツバ付 器高: 47.0+mm
18	石鍋	中世	54.0	65.0	54.0	255.0	滑石	転用品 バレン型? 受部内面に凹み

第Ⅳ章 自然科学分析

第1節 植物珪酸体分析

I. 竹松遺跡における植物珪酸体分析(その1)

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 (SiO_2) が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている (杉山, 2000, 杉山, 2009)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である (藤原・杉山, 1984)。

2. 試料

分析試料は、水田耕作土とされる土層から採取されたNo. 1 (SN 1-1) とNo. 2 (SN 3-4)、畝状遺構 (畑作の耕作土?) とされる土層から採取されたNo. 3 (SN 2-No. 1)、包含層から採取されたNo. 4 (Ⅲ層①-上)、No. 5 (Ⅲ層①-下)、No. 6 (Ⅲ層②-上)、No. 7 (Ⅲ層②-下) の計7点である。試料採取箇所を分析結果図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法 (藤原, 1976) を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約1gに対し直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加 (0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法 (550℃・6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W・42KHz・10分間) による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重 (1.0と仮定) と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重) をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる (杉山, 2000)。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4. 分析結果

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

イネ、ヨシ属、シバ属型、キビ族型、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）、ウシクサ族B（大型）

[イネ科-タケ亜科]

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、マダケ属型（マダケ属、ホウライチク属）、未分類等

[イネ科-その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

[樹木]

ブナ科（シイ属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）、アワブキ科、その他

5. 考察

(1) 稲作跡の検討

稲作跡（水田跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山, 2000）。なお、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

1) No.1・No.2

水田耕作土とされる土層から採取されたNo.1（SN 1-1）とNo.2（SN 3-4）について分析を行った。その結果、両試料からイネが検出された。密度は4,200個/gおよび3,900個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

2) No.3

畝状遺構（畑作の耕作土？）とされる土層から採取されたNo.3（SN 2-No.1）について分析を行った。その結果、イネが検出されたが、密度は800個/gと低い値である。畑稲作（陸稲栽培）の場合は、連作障害や地力の低下を避けるために輪作を行ったり休閑期間をおく必要があるため、イネの密度は水田跡と比較してかなり低くなり、1,000~2,000個/g程度である場合が多い（杉山, 2000）。これらのことから、土層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

3) No.4~No.7

包含層から採取されたNo.4（Ⅲ層①-上）、No.5（Ⅲ層①-下）、No.6（Ⅲ層②-上）、No.7（Ⅲ層②-下）について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。このうち、No.4とNo.6では

密度が4,800個/gおよび3,800個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

No.5とNo.7では、密度が1,400個/gおよび2,700個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

(2) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、キビ属型（キビが含まれる）、ジュズダマ属型（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属（シコクビエが含まれる）、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがあるが、これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかった。

イネ科栽培植物の中には検討が不十分なものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畑作物は分析の対象外となっている。

(3) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群の検出状況と、そこから推定される植生・環境について検討を行った。

1) No.1・No.2

水田耕作土とされる土層から採取されたNo.1（SN 1-1）とNo.2（SN 3-4）では、イネ科ではヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族A、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型などが検出されたが、いずれも比較的少量である。樹木ではブナ科（シイ属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）などが認められた。おもな分類群の推定生産量によると、イネが優勢となっている。

以上のことから、各層の堆積当時は、ヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられ、そこを利用して水田稲作が行われていたと推定される。また、周辺の比較的乾燥したところにはススキ属やチガヤ属、メダケ属（メダケ節やネザサ節）などが生育し、遺跡周辺にはシイ属、クスノキ科、イスノキ属などの樹木（照葉樹）が分布していたと推定される。

2) No.3

畝状遺構（畑作の耕作土？）とされる土層から採取されたNo.3（SN 2-No.1）では、イネ科はほとんど検出されなかった。樹木ではマンサク科（イスノキ属）が多く検出され、アワブキ科なども認められた。

以上のことから、畝状遺構とされる土層の堆積当時は、イスノキ属などの樹木（照葉樹）が多く生育していたと考えられ、イネ科草本類はあまり見られなかったと推定される。

3) No.4～No.7

包含層から採取されたNo.4 (Ⅲ層①-上)、No.5 (Ⅲ層①-下)、No.6 (Ⅲ層②-上)、No.7 (Ⅲ層②-下)では、イネ科ではヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族A、メダケ節型、ネザサ節型などが検出されたが、いずれも比較的少量である。樹木ではブナ科(シイ属)、クスノキ科、マンサク科(イスノキ属)などが認められた。おもな分類群の推定生産量によると、おおむねイネが優勢となっている。

以上のことから、各層の堆積当時は、ヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられ、そこを利用して水田稲作が行われていたと推定される。また、周辺の比較的乾燥したところにはススキ属やチガヤ属、メダケ属(メダケ節やネザサ節)などが生育し、遺跡周辺にはシイ属、クスノキ科、イスノキ属などの樹木(照葉樹)が分布していたと推定される。

6. まとめ

植物珪酸体(プラント・オパール)分析の結果、水田耕作土とされる土層から採取された試料では、イネが比較的多く検出され、同層で稲作が行われていたことが分析的に検証された。また、包含層から採取された試料でも、イネが比較的多く検出され、調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が認められた。

水田耕作土とされる土層や包含層の堆積当時は、おおむねヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられ、そこを利用して水田稲作が行われていたと推定される。また、周辺の比較的乾燥したところにはススキ属やチガヤ属、メダケ属(メダケ節やネザサ節)などが生育し、遺跡周辺にはシイ属、クスノキ科、イスノキ属などの樹木(照葉樹)が分布していたと推定される。

文献

- 杉山真二・藤原宏志(1986)機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定—古環境推定の基礎資料として—。考古学と自然科学, 19, p. 69-84.
- 杉山真二(1999)植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史。第四紀研究, 38(2), p. 109-123.
- 杉山真二(2000)植物珪酸体(プラント・オパール)。考古学と植物学。同成社, p. 189-213.
- 杉山真二(2009)植物珪酸体と古生態。人と植物の関わりあい④。大地と森の中で—縄文時代の古生態系—。縄文の考古学Ⅲ。小杉康ほか編。同成社, p. 105-114.
- 藤原宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法—。考古学と自然科学, 9, p. 15-29.
- 藤原宏志・杉山真二(1984)プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オパール分析による水田址の探査—。考古学と自然科学, 17, p. 73-85.

II. 竹松遺跡における花粉分析

1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの有機質遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2. 試料

分析試料は、植物珪酸体分析に用いられたものと同一の計7点である。

3. 方法

花粉の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から1 cm³を秤量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加えて15分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 5) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す
- 6) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 7) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。イネ属については、中村（1974，1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

4. 結果

(1) 分類群

検出された分類群は、樹木花粉3、樹木花粉と草本花粉を含むもの1、草本花粉8、シダ植物胞子2形態の計14である。分析結果を表2に示す。花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示しているが、いずれの試料も花粉数が100個未満であった。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

クリ、シイ属ーマテバシイ属、コナラ属コナラ亜属、

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科ーイラクサ科

[草本花粉]

イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、アカザ科ーヒユ科、アブラナ科、セリ亜科、タンポポ亜科、ヨモギ属

[シダ植物孢子]

単条溝孢子、三条溝孢子

(2) 花粉群集の特徴 (表2)

No.2 ではイネ科、アブラナ科など、No.4 ではシイ属ーマテバシイ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科など、No.5 ではコナラ属コナラ亜属、イネ科など、No.6 ではクリ、カヤツリグサ科などが検出されたが、いずれもわずかである。その他の試料では、花粉は検出されなかった。

5. 花粉分析から推定される植生と環境

花粉分析の結果、No.1、No.3、No.7 では花粉が検出されず、その他の試料でも花粉がほとんど検出されないことから、植生や環境の推定は困難である。なお、包含層から採取されたNo.4 (Ⅲ層①-上) では、わずかながらイネ属型が認められることから、調査地点もしくはその周辺で稲作が行われていた可能性が示唆される。

花粉が検出されない原因としては、1) 乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたこと、2) 土層の堆積速度が速かったこと、3) 水流や粒径による淘汰・選別を受けたことなどが考えられる。

文献

金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p. 248-262.

島倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.

中村純 (1967) 花粉分析. 古今書院, p. 82-110.

中村純 (1974) イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として. 第四紀研究, 13, p. 187-193.

中村純 (1977) 稲作とイネ花粉. 考古学と自然科学, 第10号, p. 21-30.

中村純 (1980) 日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.

表1 竹松遺跡における植物珪酸体分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群	学名	地点・試料 TAK201408						
		1	2	3	4	5	6	7
イネ科	Gramineae							
イネ	<i>Oryza sativa</i>	42	39	6	48	14	38	27
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	6	7		7	7	6	13
シバ属型	<i>Zoysia</i> type		7					
キビ族型	Panicaceae type						6	
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	18	26		27	7	6	
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	30	72		75	41	19	13
ウシクサ族B	Andropogoneae B type						6	
タケ亜科	Bambusoideae							
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	6	20		7	7	19	7
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	42	33		75	34	19	40
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	6	7				6	
マダケ属型	<i>Phyllostachys</i>	6	7					
未分類等	Others	24	13		14	14	26	20
その他のイネ科	Others							
表皮毛起源	Husk hair origin	18	26		21	14	13	7
棒状珪酸体	Rod-shaped	95	124	13	82	62	141	20
未分類等	Others	173	216	26	240	199	148	121
樹木起源	Arboreal							
ブナ科(シイ属)	<i>Castanopsis</i>	6	7		27	14	13	7
クスノキ科	Lauraceae	24	13		41	62	19	34
マンサク科(イスノキ属)	<i>Distylium</i>	36	72	225	41	62	77	27
アワブキ科	Sabiaceae	6		6			6	
その他	Others	48	65	52	62	69	51	54
植物珪酸体総数	Total	583	752	328	768	604	622	391

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m²・cm) : 試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イネ	<i>Oryza sativa</i>	1.22	1.15	0.19	1.41	0.40	1.13	0.79
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	0.38	0.41		0.43	0.43	0.40	0.85
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.22	0.32		0.34	0.09	0.08	
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	0.07	0.23		0.08	0.08	0.22	0.08
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	0.20	0.16		0.36	0.16	0.09	0.19
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	0.04	0.05				0.05	

タケ亜科の比率 (%)

メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	22	52		18	33	61	29
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	64	36		82	67	25	71
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	14	11				13	
メダケ率	Medake ratio	86	89		100	100	87	100

表2 竹松遺跡における花粉分析結果

分類群		TAK201408						
学名	和名	1	2	3	4	5	6	7
Arboreal pollen	樹木花粉							
<i>Castanea crenata</i>	クリ						1	
<i>Castanopsis-Pasania</i>	シイ属-マテバシイ属				1			
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属					2		
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉							
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科				1			
Nonarboreal pollen	草本花粉							
Gramineae	イネ科		1		2	2		
<i>Oryza type</i>	イネ属型				1			
Cyperaceae	カヤツリグサ科				1		1	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科						1	
Cruciferae	アブラナ科		2					
Apioidae	セリ亜科					1		
Lactuoidae	タンポポ亜科					1		
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属						1	
Fern spore	シダ植物胞子							
Monolate type spore	単条溝胞子		4		2		2	
Trilate type spore	三条溝胞子				3	1		
Arboreal pollen	樹木花粉	0	0	0	1	0	1	0
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	0	0	0	0	0	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	0	3	0	4	3	2	0
Total pollen	花粉総数	0	0	0	4	1	1	0
Pollen frequencies of 1cm ³	試料1cm ³ 中の花粉密度		2.0		6.3	4.8	2.4	0.0
			×10		×10	×10	×10	
Unknown pollen	未同定花粉	1	0	0	1	2	1	0
Fern spore	シダ植物胞子	0	4	0	2	1	2	0
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Stone cell	石細胞	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal・woods fragments	微細炭化物・微細木片	(+)	(+)	<(+) >	(+)	(+)	(+)	(+)

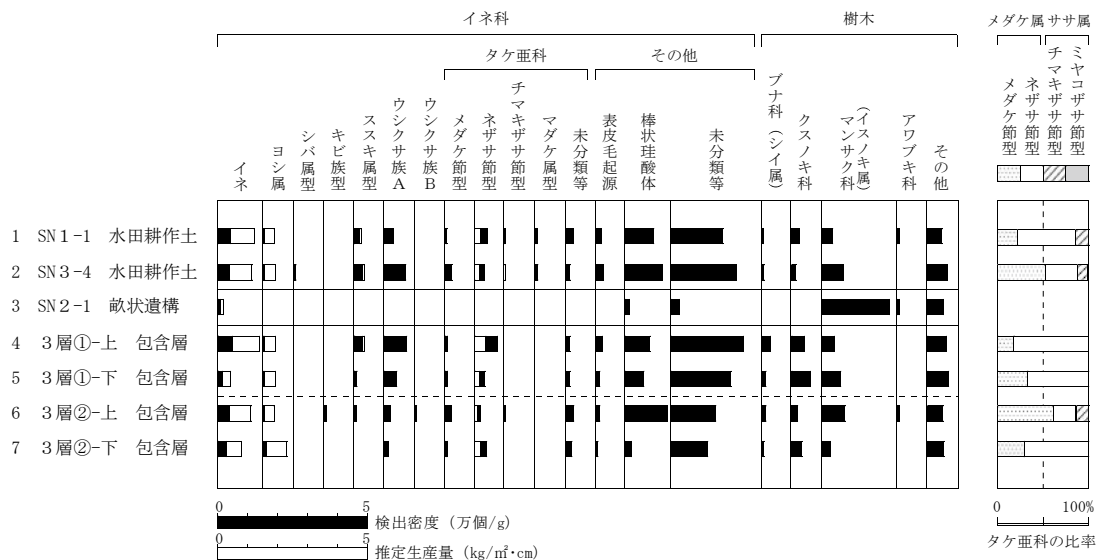
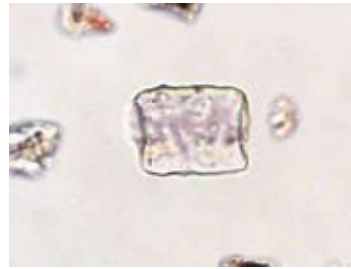


図1 竹松遺跡TAK201408における植物珪酸体分析結果

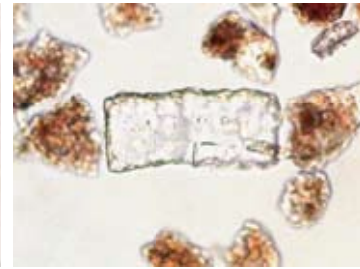
竹松遺跡の植物珪酸体（プラント・オパール）



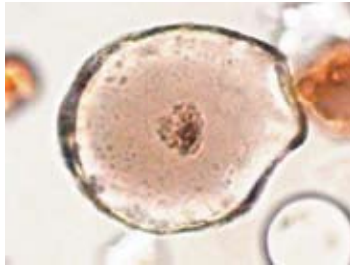
イネ
No. 7



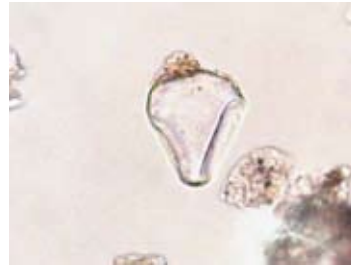
イネ（側面）
No. 1



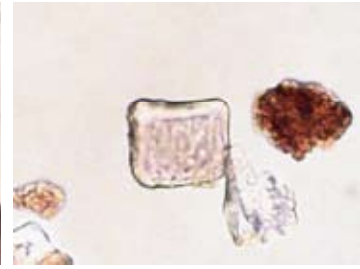
キビ族型
No. 6



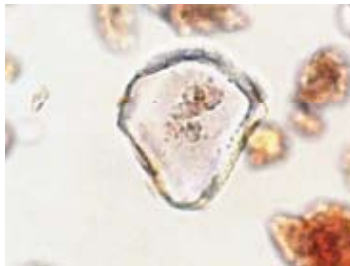
ヨシ属
No. 2



ススキ属型
No. 1



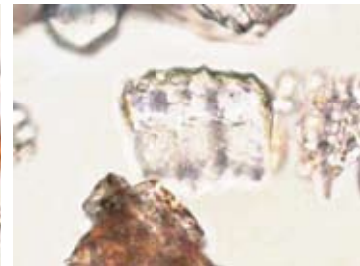
ウシクサ族A
No. 6



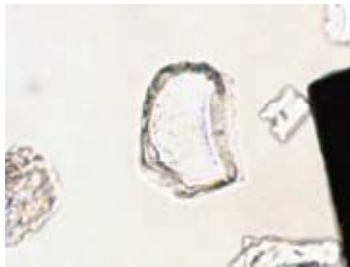
ウシクサ族B
No. 6



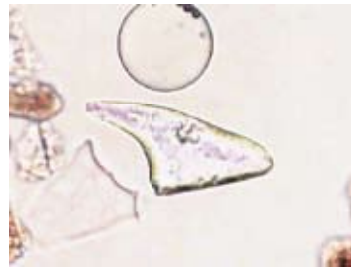
メダケ節型
No. 2



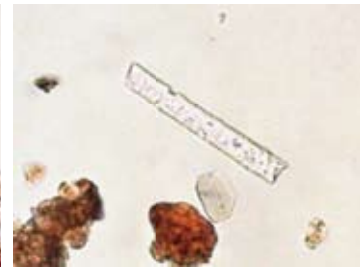
ネザサ節型
No. 2



チマキザサ節型
No. 1



表皮毛起源
No. 1



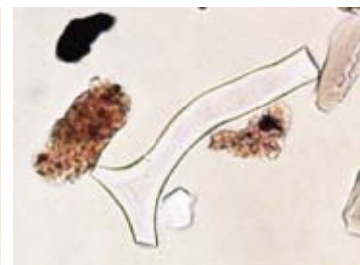
棒状珪酸体
No. 6



ブナ科（シイ属）
No. 6



クスノキ科
No. 6



マンサク科（イスノキ属）
No. 4

— 50 μm

III. 竹松遺跡における植物珪酸体分析(その2)

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 (SiO_2) が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている (杉山, 2000, 2009)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である (藤原・杉山, 1984)。

2. 試料

分析試料は、C区水田層 (1面目:中世末~近世、2面目:中世末頃) から採取された計4点である。試料採取箇所を分析結果図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法 (藤原, 1976) を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を 105°C で24時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約1gに対し直径約 $40\mu\text{m}$ のガラスビーズを約0.02g添加 (0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法 ($550^{\circ}\text{C}\cdot 6$ 時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 ($300\text{W}\cdot 42\text{KHz}\cdot 10$ 分間) による分散
- 5) 沈底法による $20\mu\text{m}$ 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重 (1.0と仮定) と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重) をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる (杉山, 2000)。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4. 分析結果

(1) 分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表2および図2に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

イネ、シバ属型、キビ族型、ススキ属型 (おもにススキ属)、ウシクサ族A (チガヤ属など)

[イネ科ータケ亜科]

ネザサ節型 (おもにメダケ属ネザサ節)、チマキザサ節型 (ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など)、ミヤコザサ節型 (ササ属ミヤコザサ節など)、未分類等

[イネ科ーその他]

表皮毛起源、棒状珪酸体 (おもに結合組織細胞由来)、未分類等

[樹木]

ブナ科 (シイ属)、クスノキ科、マンサク科 (イスノキ属)、アワブキ科、その他

5. 考察

(1) 稲作跡の検討

稲作跡 (水田跡) の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体 (プラント・オパール) が試料 1 gあたり 5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している (杉山, 2000)。なお、密度が 3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を 3,000個/gとして検討を行った。

C区の水田層 1 面目では、SN-1-2とSN-1-5について分析を行った。その結果、両試料からイネが検出された。このうち、前者では密度が 12,800個/gとかなり高い値であり、後者でも 8,600個/gと高い値である。したがって、同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

水田層 2 面目では、SN-3-1とSN-3-2について分析を行った。その結果、両試料からイネが検出された。密度は、前者では 6,500個/g、後者では 5,800個/gといずれも高い値である。したがって、同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

(2) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型 (ヒエが含まれる)、エノコログサ属型 (アワが含まれる)、キビ属型 (キビが含まれる)、ジユズダマ属型 (ハトムギが含まれる)、オヒシバ属 (シコクビエが含まれる)、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがあるが、これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかった。

イネ科栽培植物の中には検討が不十分なものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畑作物は分析の対象外となっている。

(3) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群では、イネ科ではキビ族型、ススキ属型、ウシクサ族A、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型などが検出されたが、いずれも少量である。樹木ではマンサク科 (イスノキ属) が比較的多く検出され、ブナ科 (シイ属)、クスノキ科、アワブキ科なども認められた。おもな分類群の推定生産量によると、各試料ともイネが優勢となっている。

以上の結果から、各層準の堆積当時は、管理の行き届いた集約的な稲作が行われていたと考えられ、

イネ科の野草や雑草はあまり見られなかったと推定される。また、遺跡周辺にはイスノキ属、シイ属、クスノキ科などの樹木（照葉樹）が分布していたと考えられる。

6. まとめ

植物珪酸体分析の結果、C区水田層（1面目、2面目）の試料ではイネが多量に検出され、各水田層で稲作が行われていたことが分析的に検証された。各層準の堆積当時は、管理の行き届いた集約的な稲作が行われており、イネ科の野草や雑草はあまり見られなかったと考えられる。また、遺跡周辺にはイスノキ属、シイ属、クスノキ科などの樹木（照葉樹）が分布していたと推定される。

文献

- 杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－. 考古学と自然科学, 19, p. 69-84.
- 杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史. 第四紀研究, 38(2), p. 109-123.
- 杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）. 考古学と植物学. 同成社, p. 189-213.
- 杉山真二（2009）植物珪酸体と古生態. 人と植物の関わりあい④. 大地と森の中で－縄文時代の古生態系－. 縄文の考古学Ⅲ. 小杉康ほか編. 同成社, p. 105-114.
- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－. 考古学と自然科学, 9, p. 15-29.
- 藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－. 考古学と自然科学, 17, p. 73-85.

表2 竹松遺跡における植物珪酸体分析結果
 検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群	学名	地点・試料 C区水田層			
		1-2	1-5	3-1	3-2
イネ科	Gramineae				
イネ	<i>Oryza sativa</i>	128	86	65	58
シバ属型	<i>Zoysia</i> type				6
キビ族型	Paniceae type	14	7	7	6
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	21	22	7	19
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	28	29	15	13
タケ亜科	Bambusoideae				
ネザサ節型	<i>Pleiolabtus</i> sect. <i>Nezasa</i>	35	29	15	13
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	7	7	7	6
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	7	22	7	6
未分類等	Others	50	22	7	13
その他のイネ科	Others				
表皮毛起源	Husk hair origin	21	14	29	6
棒状珪酸体	Rod-shaped	50	72	51	32
未分類等	Others	28	50	44	58
樹木起源	Arboreal				
ブナ科(シイ属)	<i>Castanopsis</i>	7	7	7	13
クスノキ科	Lauraceae	14	22	7	13
マンサク科(イスノキ属)	<i>Distylium</i>	113	144	44	148
アワブキ科	Sabiaceae	7	7		6
その他	Others	50	36	44	84
植物珪酸体総数	Total	581	576	356	503

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m²・cm) : 試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イネ	<i>Oryza sativa</i>	3.75	2.54	1.92	1.71
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.26	0.27	0.09	0.24
ネザサ節型	<i>Pleiolabtus</i> sect. <i>Nezasa</i>	0.17	0.14	0.07	0.06
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	0.05	0.05	0.05	0.05
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	0.02	0.06	0.02	0.02

タケ亜科の比率 (%)

ネザサ節型	<i>Pleiolabtus</i> sect. <i>Nezasa</i>	70	54	48	48
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	22	21	37	37
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	9	25	15	15
メダケ率	Medake ratio	70	54	48	48

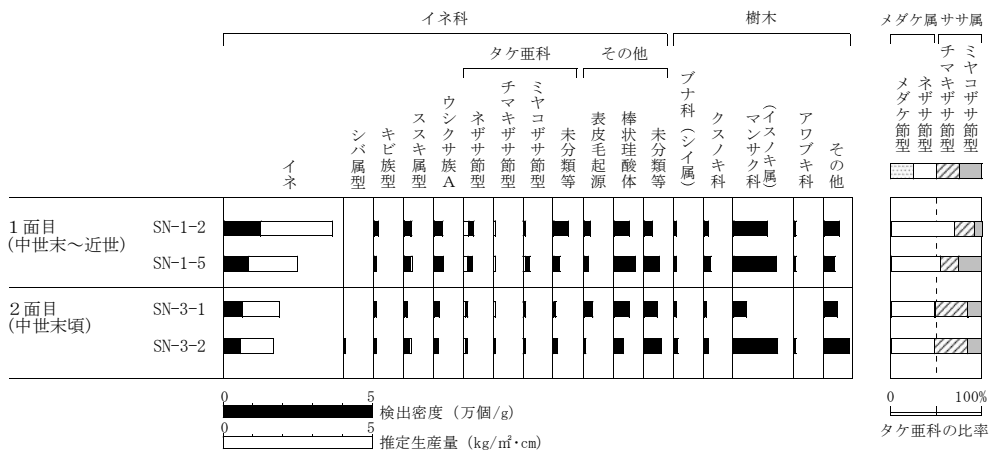
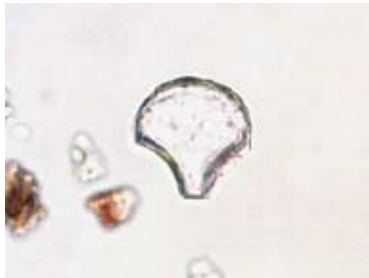


図2 竹松遺跡: C区水田層における植物珪酸体分析結果

竹松遺跡の植物珪酸体 (プラント・オパール)



イネ
SN-1-2



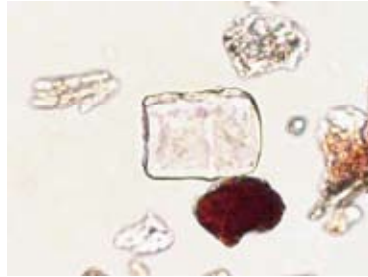
イネ
SN-1-2



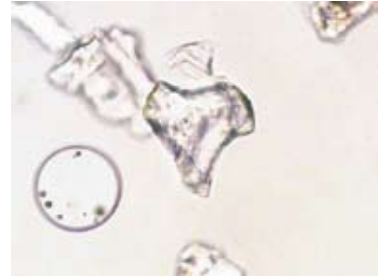
イネ (側面)
SN-1-5



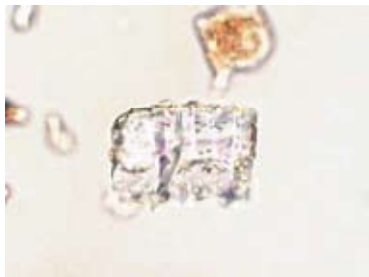
キビ族型
SN-1-2



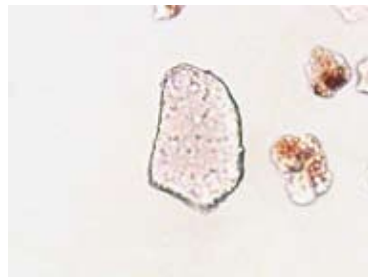
ススキ属型
SN-1-5



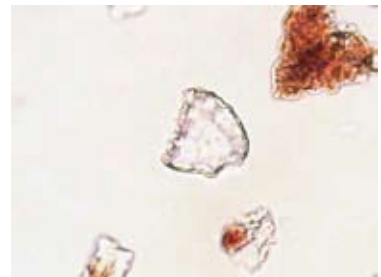
シバ属型
SN-3-2



ネザサ節型
SN-1-5



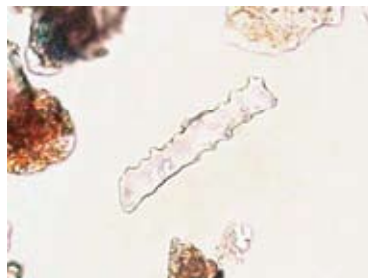
チマキザサ節型
SN-1-2



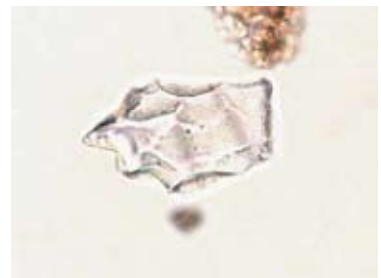
ミヤコザサ節型
SN-1-5



表皮毛起源
SN-3-2



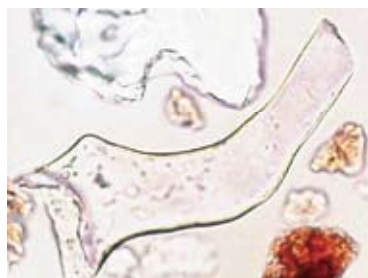
棒状珪酸体
SN-1-2



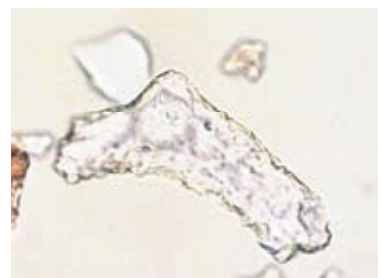
ブナ科 (シイ属)
SN-3-2



クスノキ科
SN-1-5



マンサク科 (イスノキ属)
SN-1-5



アワブキ科
SN-1-2

50 μm

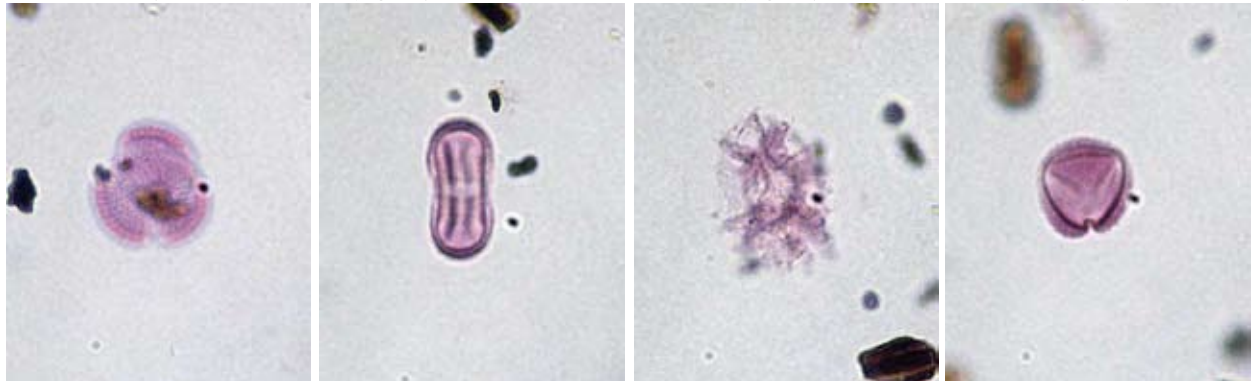
竹松遺跡の花粉



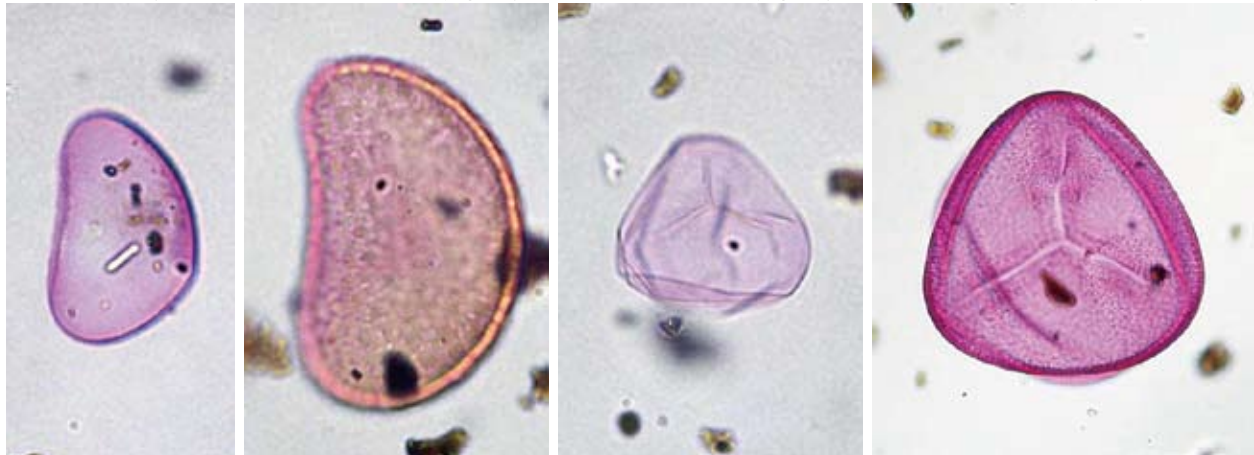
1 クリ No.6 (3層②-上) 2 シイ属-マテバシイ属 No.4 (3層①-上) 3 コナラ属コナラ亜属 No.5 (3層①-下) 4 クワ科-イラクサ科 No.6 (3層②-上)



5 イネ科 No.2 (SN3-4) 6 イネ属型 No.4 (3層①-上) 7 カヤツリグサ科 No.4 (3層①-上) 8 アカザ科-ヒユ科 No.6 (3層②-上)



9 アブラナ科 No.2 (SN3-4) 10 セリ亜科 No.5 (3層①-下) 11 タンポポ科 No.5 (3層①-下) 12 ヨモギ属 No.6 (3層②-上)



13 シダ植物 単条溝胞子 No.2 (SN3-4) 14 シダ植物単条溝胞子 No.6 (3層②-上) 15 シダ植物三条溝胞子 No.6 (3層②-上) 16 シダ植物三条溝胞子 No.5 (3層①-下)

1-15 — 10 μm, 16 — 10 μm

第2節 ガラス小玉分析

竹松遺跡出土ガラス玉の科学的調査

長崎県埋蔵文化財センター

鮫島葵・片多雅樹

1. はじめに

竹松遺跡（遺跡調査番号:201408）より出土したガラス玉181点に関して、科学的調査をおこなった。長崎県埋蔵文化財センターに導入されている微小部蛍光X線分析装置（エネルギー分散型）を用いてガラス玉の材質分析を、デジタル顕微鏡と実体顕微鏡写真撮影装置を用いて細部の観察をおこなった。ここでは資料の分析結果について記す。

2. 研究略史

日本における古代ガラスの自然科学的研究は、大正時代から開始されており、古谷清氏による研究が最も古く、1912年に「本邦上代硝子に関する新研究」と題し、『考古学雑誌』に研究成果を発表している（古谷1912）。昭和初期に中尾萬三氏は「東洋古代の硝子と釉薬」の中で、中国の古代の文献からソーダ石灰ガラスの原料や製法について発表した（中尾1931-a, b）。その後、山崎一雄氏によりガラスの自然科学的研究は大きく発展し、研究は著書である『古文化財の科学』にまとめられた（山崎1986）。近年は肥塚隆保氏や田村朋美氏により古代ガラスの分類がなされており、各時代によって出現するガラスの種類が異なることが解明されてきている（肥塚1997, 1999、肥塚ほか2010）。また、着色剤の成分などにより製作地を推定する研究もある（田村2016）。

3. 古代のガラス

弥生時代後期から古墳時代にかけて日本で流通したインドパシフィックビーズ(Indo-Pacific Monochrome Drawn Glass Beads、以下IPB)という一群がある。

IPBは①引き伸ばし法、②直径6mm以下、③単色である、という特徴があり、B.C 3世紀からA.D 3世紀にかけてインドのアリカメドゥ遺跡で主に生産され、分布域は東南アジアから南アジアであった。日本国内では、カリガラスが先行して流入し、後から遅れて高アルミナソーダ石灰ガラスに移行していく。

カリガラスは二酸化珪素(SiO₂)と酸化カリウム(K₂O)が主成分とする二成分系のガラスであり、酸化マグネシウム(MgO)と酸化カルシウム(CaO)の含有率により2つのグループに分けられる。1つは酸化アルミニウムの含有量が酸化カルシウムよりも多く、銅イオンによる着色で淡青色を呈しているものである。ベトナム中部から中国南部を中心に分布する傾向にある。もう1つは酸化カルシウムの含有量が酸化アルミニウムよりも多く、コバルトイオンによる着色で紺色を呈している。また、Co(コバルト)の不純物としてMn(マンガン)も少量検出される特徴がある。南アジアから東アジアにかけて分布する傾向にある。

高アルミナソーダ石灰ガラスは、出現期により酸化アルミニウム(Al₂O₃)や酸化チタン(TiO)の含有率が異なる傾向にある。様々な色調がみられ、黄緑色は銅イオンとSn(錫)とPb(鉛)による人工黄色顔料である錫酸鉛により着色され、赤褐色不透明のものはムチサラ(mutisalah)とよばれ、あまり着色には用いない銅コロイド技法による着色を施された。

このIPBは貿易によってもたらされたものであったため、かつては「貿易風によるビーズ」とよばれていた。

今回扱う竹松遺跡のガラス製品が、いつの時代に、どのような製作技法で作られ、どのような入手ルートを辿り、出土したのかを解明すべく、自然科学的調査をおこなった。

表1 古代ガラスの種類と出現時期の変遷(肥塚ほか2010改変)

古代ガラスの種類	弥生前期	中期	後期	古墳前半	中期	後期
(1) 鉛珪酸塩ガラス						
①鉛ガラス(PbO-SiO ₂)						◇
②鉛バリウムガラス(PbO-BaO-SiO ₂)						◇
(2) アルカリ珪酸塩ガラス						
①カリガラス(K ₂ O-SiO ₂)						
②ソーダ石灰ガラス						
I:ナトロンガラス(Na ₂ O-CaO-SiO ₂)				◇	◇	
II:植物灰ガラス(Na ₂ O-CaO-SiO ₂)						◇
III:高アルミナソーダ石灰ガラス(Na ₂ O-Al ₂ O ₃ -CaO-SiO ₂)				◇	◇	◇

4. 分析方法

蛍光X線分析法は、資料の非破壊測定ができるため、文化財の材質調査をおこなう際に広く利用されている方法である。分析する対象にX線を照射すると、各元素により異なる強度を有する特性X線(=蛍光X線)が発生し、その強度を調べることにより、対象に含まれる元素の種類と含有量を調べることができる。元素の種類を調べる方法を定性分析、含有量を調べる方法を定量分析という。

検出した蛍光X線は、スペクトル図により表される(図1)。縦軸が蛍光X線のカウント数(CPS:count per second)、横軸が検出した蛍光X線のエネルギー強度(keV)となり、このエネルギー強度が各元素によって異なる。

今回使用したエネルギー分散型蛍光X線分析装置(EDX:Energy Dispersive X-ray Spectrometer)は、資料と検出器との距離が近く、小さいエネルギーのX線で分析が可能であるため、X線照射により変色をおこす可能性のあるガラス資料の分析に適している。また、分析面はある程度の凹凸であれば、調整を施さずに分析することができるため、形状を保ったままでなければならない文化財の分析に適している。

装置の仕様は次のとおり。EDAX社製:EAGLE III XXL。上面照射式で、照射径は0.3mmΦ。Rh(ロジウム)

ム)管球、半導体検出器(SDD検出器)で検出器の冷却に液体窒素を要する。分析条件は、管電圧40kV、管電流は300~480 μ A、真空雰囲気測定時間は100秒で分析をおこなった。

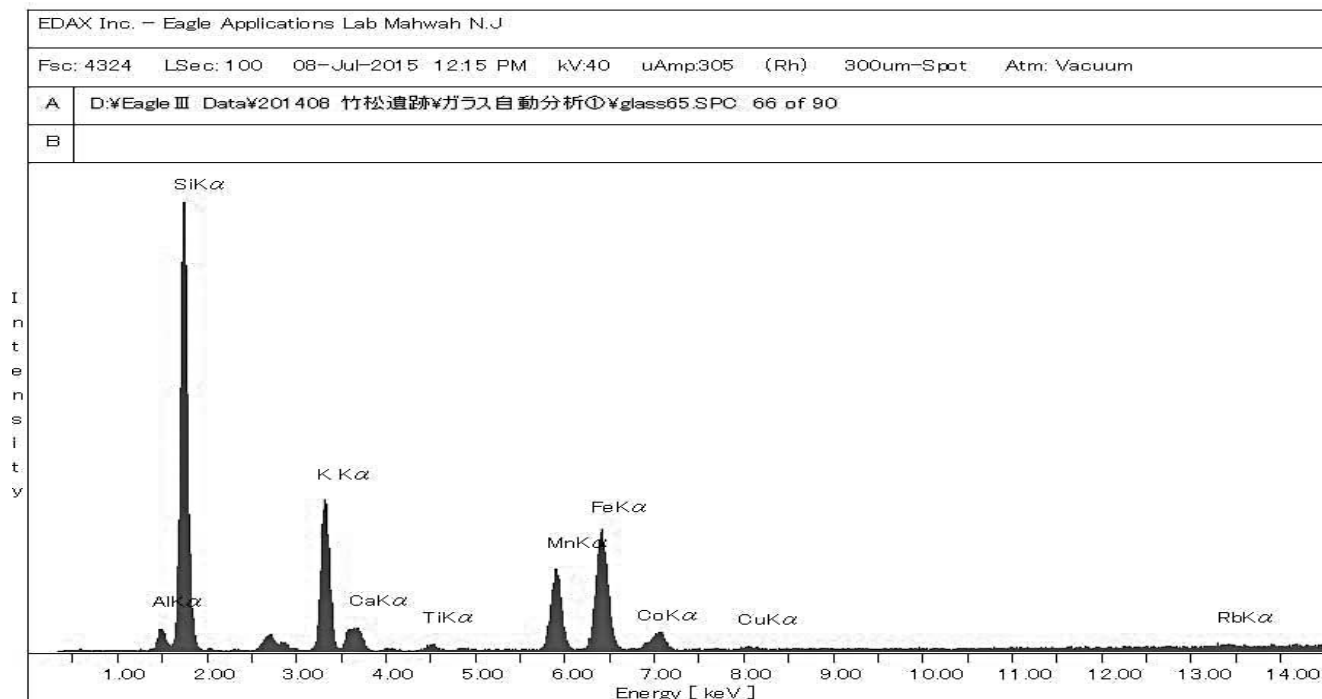


図1 竹松遺跡出土ガラス玉分析スペクトル図の一例

5. 分析結果

分析の結果、今回調査した資料はカリガラスであることがわかり、その中でも大きく2つのまとまりに分かれる結果となった。1つは紺色を呈しており、Mn(マンガン)を含むまとまりである。おそらく着色剤として含有されたものと思われる。Mnは消色剤としても使用される例や、マンガンイオンによって紫色に発色する例、もあるが、今回の調査した資料に紫色を呈するものはみられなかった。また、Coの不純物という例もあるが、今回調査した資料は意図的に混入したものと思われる。そのほか、着色剤としてはCo とFe(鉄)で、Cu(銅)は少量、もしくは検出されていない個体もみられた。もう1つは淡青色を呈しており、Pb(鉛)を含むまとまりで、微量であるため鉛ガラスではないが、不純物ではなく意図的に含有したと思われる。また、着色剤はCu とFe、微量ではあるがCoが検出された。

ここでは、分析方法および調査結果を記し、考察は本文に譲る。

参考・引用文献

- 古谷 清1912「本邦上代硝子に関する新研究」『考古学雑誌』第2巻・3巻
- 中尾萬三1931-a「東洋古代の硝子と釉」其の一『考古学雑誌』第21巻4号
- 中尾萬三1931-b「東洋古代の硝子と釉」其の二『考古学雑誌』第21巻5号
- 山崎一雄1986『古文化財の科学』思文閣

肥塚隆保1997『日本で出土した古代ガラスの歴史の変遷に関する科学的研究』東京芸術大学博士学位論文

肥塚隆保1999『光学的解析法による古代ガラスの加工法等に関する研究』平成9・10年度科学研究補助金基盤研究 研究成果報告書

肥塚隆保・田村朋美・大賀克彦2010「材質とその歴史の変遷」『月刊文化財』第566号 文化庁文化財部監修

田村朋美2013『東アジアにおけるインド・パシフィックビーズの材質と流通に関する科学的研究』科学研究費助成事業(科学研究費補助金) 研究成果報告書

田村朋美2016『ガラス玉類の考古科学的研究』『飛鳥資料館研究図録第19冊 飛鳥寺跡出土遺物の研究』独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 飛鳥資料館

第3節 原の辻遺跡出土ガラス製品の成分分析

長崎県埋蔵文化財センター 片多雅樹

1. はじめに

原の辻遺跡からは、これまでに4,000点以上のガラス製品が出土している。その内訳は、小玉、大玉、管玉、勾玉、トンボ玉と多岐にわたるが、そのほとんどはガラス小玉である。平成25年6月には53件の計3,954点が国の重要文化財に指定されている。長崎県埋蔵文化財センターではこれらのガラス製品の一部に関して、成分分析を実施している。ここではその分析結果について報告する。

2. 資料

分析した資料はガラス小玉29個、ガラス管玉3個、トンボ玉1個の計33個である。原の辻遺跡の南西部に位置する2箇所(大川地区・大原地区)および、北部に位置する不條地区から出土した資料で、大原墓域の甕棺墓から出土したトンボ玉は弥生中期初頭の所産とされている。

3. 蛍光X線分析

古代ガラスは融材によって鉛珪酸塩ガラスとアルカリ珪酸塩ガラスとに大別される。さらに鉛珪酸塩ガラスは①鉛ガラスと②鉛バリウムガラスに、アルカリ珪酸塩ガラスは③カリガラスと④ソーダ石灰ガラスとに分けられる。このような古代ガラスの分類は成分分析により判別でき、各時代によって出現するガラスの種類が異なることが解明されてきている(肥塚ほか2010)。

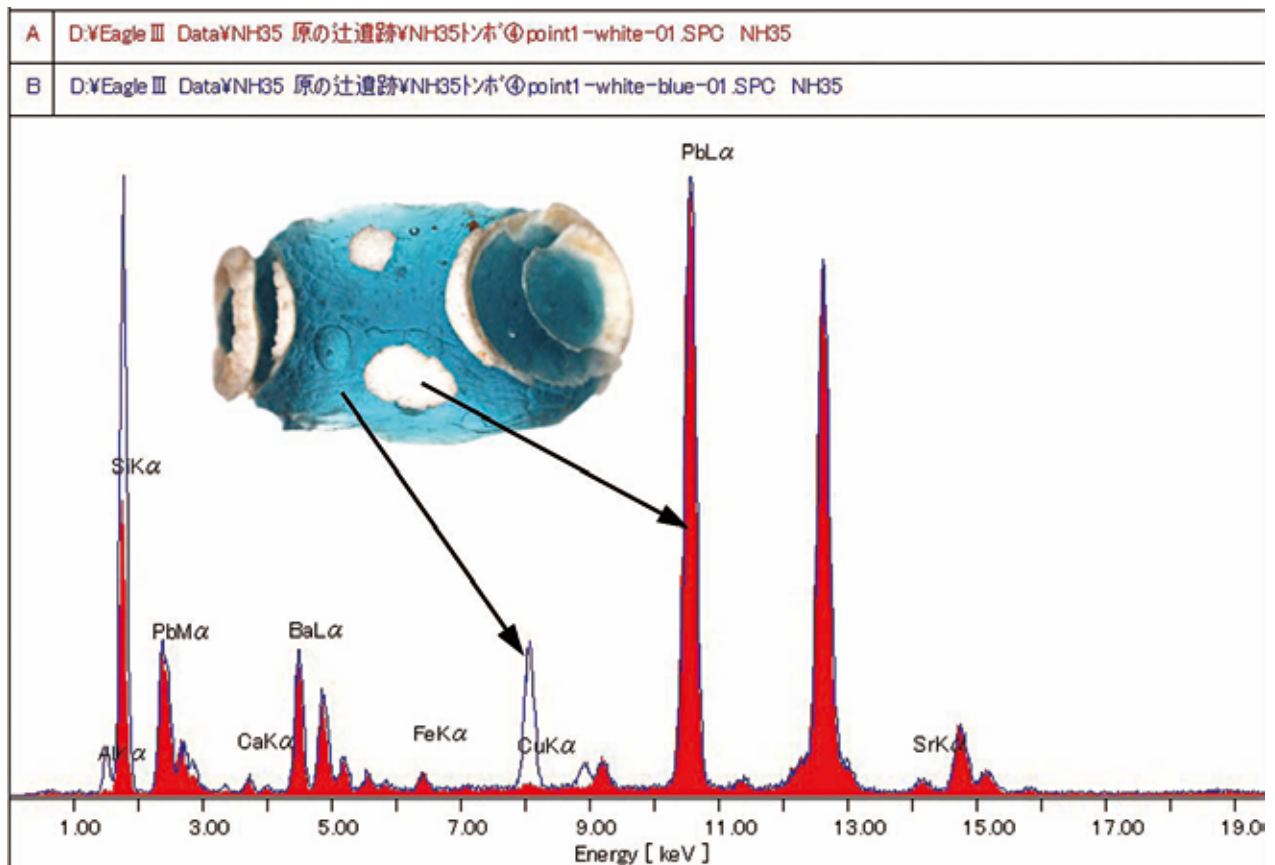
蛍光X線分析法は、資料にX線を照射することで、資料表面から発生する特性X線(=蛍光X線)の強度を調べることにより、対象に含まれる元素の種類と含有量を調べることができる。今回使用したエネルギー分散型蛍光X線分析装置の仕様は次のとおり。EDAX社製:EAGLE III XXL。上面照射式で、照射径は0.3mmΦ。Rh(ロジウム)管球、半導体検出器(SDD検出器)で検出器の冷却に液体窒素を要する。分析条件は、管電圧40kV、管電流は300~480μA、真空雰囲気(真空中)で測定時間は100秒で分析をおこなった。

4. 分析結果

分析の結果、ガラス小玉に関してはすべて「カリガラス」であることが分かった。ガラスの主成分であるケイ素と共にカリウムを多く含んでいる。また着色成分としてマンガンや鉄、コバルト、銅を検出した。

大原墓域の甕棺墓から出土したトンボ玉は青を基調としたガラス玉に白色のガラスで文様を施している。この青色部と白色部の成分分析を行ったところ、ガラスの主成分であるケイ素のほかに鉛 (Pb) とバリウム (Ba) が検出されたことから「鉛バリウムガラス」であることが分かり、青色部のみ銅 (Cu) を検出したことから、青の着色成分が銅であることが分かった (図1)。

カリガラス、鉛バリウムガラスいずれも弥生時代に盛行したガラスとして知られている。



第1図 原の辻遺跡出土トンボ玉の分析スペクトル

参考・引用文献

長崎県教育委員会1977『原の辻遺跡 (II)』長崎県文化財調査報告書第31集

長崎県教育委員会1978『原の辻遺跡 (III)』長崎県文化財調査報告書第37集

原の辻遺跡調査事務所2007『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第35集

肥塚隆保・田村朋美・大賀克彦2010『材質とその歴史の変遷』『月刊文化財』第566号 文化庁文化財部監修

松見裕二2013『原の辻遺跡』壱岐市文化財調査報告書第20集

片多雅樹2016「原の辻遺跡出土遺物の保存処理」『原の辻遺跡総集編II』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第18集

片多雅樹2017「長崎県壱岐市・原の辻遺跡出土ガラス製品の蛍光X線分析」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要第7号』長崎県埋蔵文化財センター

第4節 ガラス製品の分析についてまとめ

ガラス製品がはじめて日本に出現する時期は弥生時代前期末～中期初頭頃の北部九州である。この時期の遺跡は福岡県吉武高木遺跡、佐賀県東山田一本杉遺跡、長崎県原の辻遺跡大原地区などである。出現期のガラス製品は分析結果に恵まれていない状況にあると言う(肥塚隆保 田村朋美 大賀克彦)。こうした中で長崎県原の辻遺跡大原地区を含む、3箇所から出土したガラス製品の分析を実施した。南西部に位置する2箇所の墓域(大川地区・大原地区)および、北部に位置する不條地区である。大原地区のK2(甕棺墓)から出土したトンボ玉は大原Ⅱa期(弥生時代中期初頭)に属すると考えられる。このトンボ玉の蛍光X線分析から鉛バリウムガラスであることが判明した。しかしながらK43(甕棺)大原Ⅰb期(弥生時代前期後半)から出土した紺色のガラス小玉1点は、直径2.5mmと小さいが国内において最古段階の時期に属するものである。残念ではあるが分析は実施していない。

今回竹松遺跡201408調査区SC01(張り出し住居、弥生時代後期前半～中頃)から出土したガラス小玉181個は分析結果から全てカリガラスであること、またガラス内の気泡の状況から引き伸ばし技法で製作されたことが確認された。181個のガラス小玉は全て舶載されたもので直径が6mm以下の典型的なインドパシフィックビーズである。内訳は2mm台が50個、3mm台が93個、4mm台が27個、5mm台が3個である。また紺色、淡青色も直径3mm台で厚さ2mm台が最も多い。これらのガラス小玉の色調は紺色と淡青色で、紺色の着色剤はコバルト、淡青色の着色剤は銅であると考えられる。こうしたカリガラスはどこから舶載され、生産地はどこなのかを考える場合、着色剤として使用されたコバルト原料の不純物として多量のMnO(酸化マンガン)を伴うことが手掛かりとなるという(田村朋美2015)。

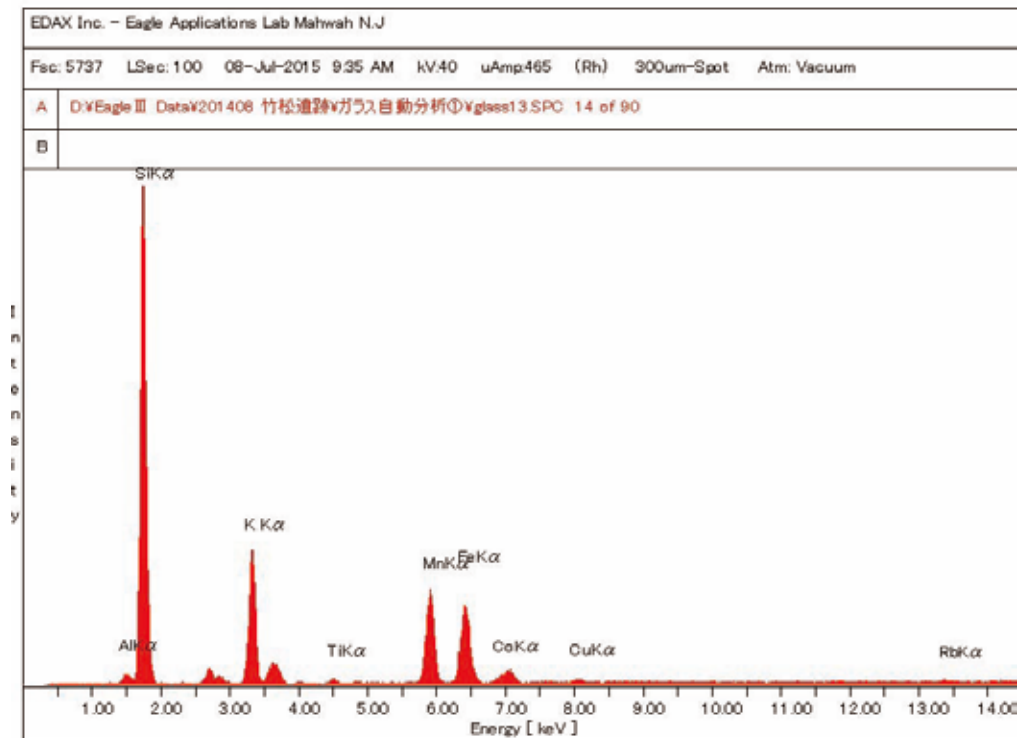
そこで181個の内179個を蛍光X線分析にかけた。主な分析スペクトルを見ていくと、紺色のガラス小玉についてはMn(マンガン)、Fe(鉄)が多く、Co(コバルト)の値がやや少ないものが多いが見られる。また淡青色についてはFe(鉄)の値が多いものが目立つ。いずれの着色剤にもFe(鉄)の含有が目立つ。

紺色のガラス小玉に含まれるマンガンの含有量が多く見られることから考えて田村氏が指摘しているように、インドパシフィックビーズの生産遺跡の中で最も古いと考えられている南インドの**アリカメドゥ遺跡**においてカリガラスの出土が多いことから南インドで生産された可能性が高いと考えられる。こうしたガラス小玉が弥生時代前期末～中期初頭に、青銅器が舶載される同時期に北部九州に流入したと考えられる。

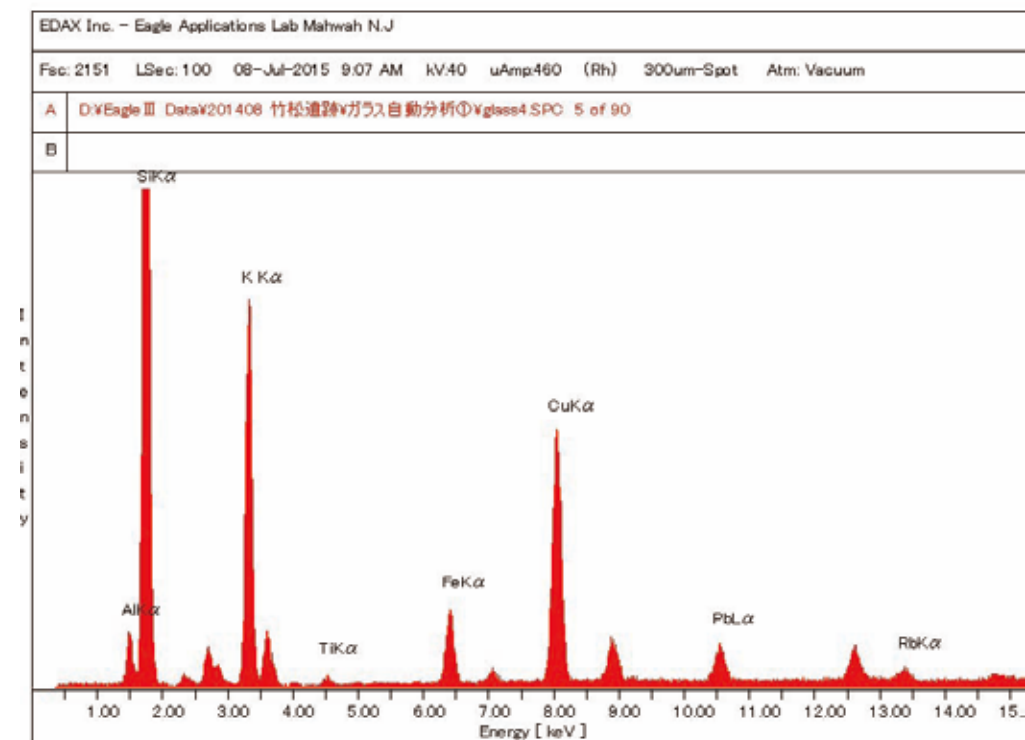


参考・引用文献 原の辻遺跡調査事務所2007『原の辻遺跡』
原の辻遺跡調査事務所調査報告書第35

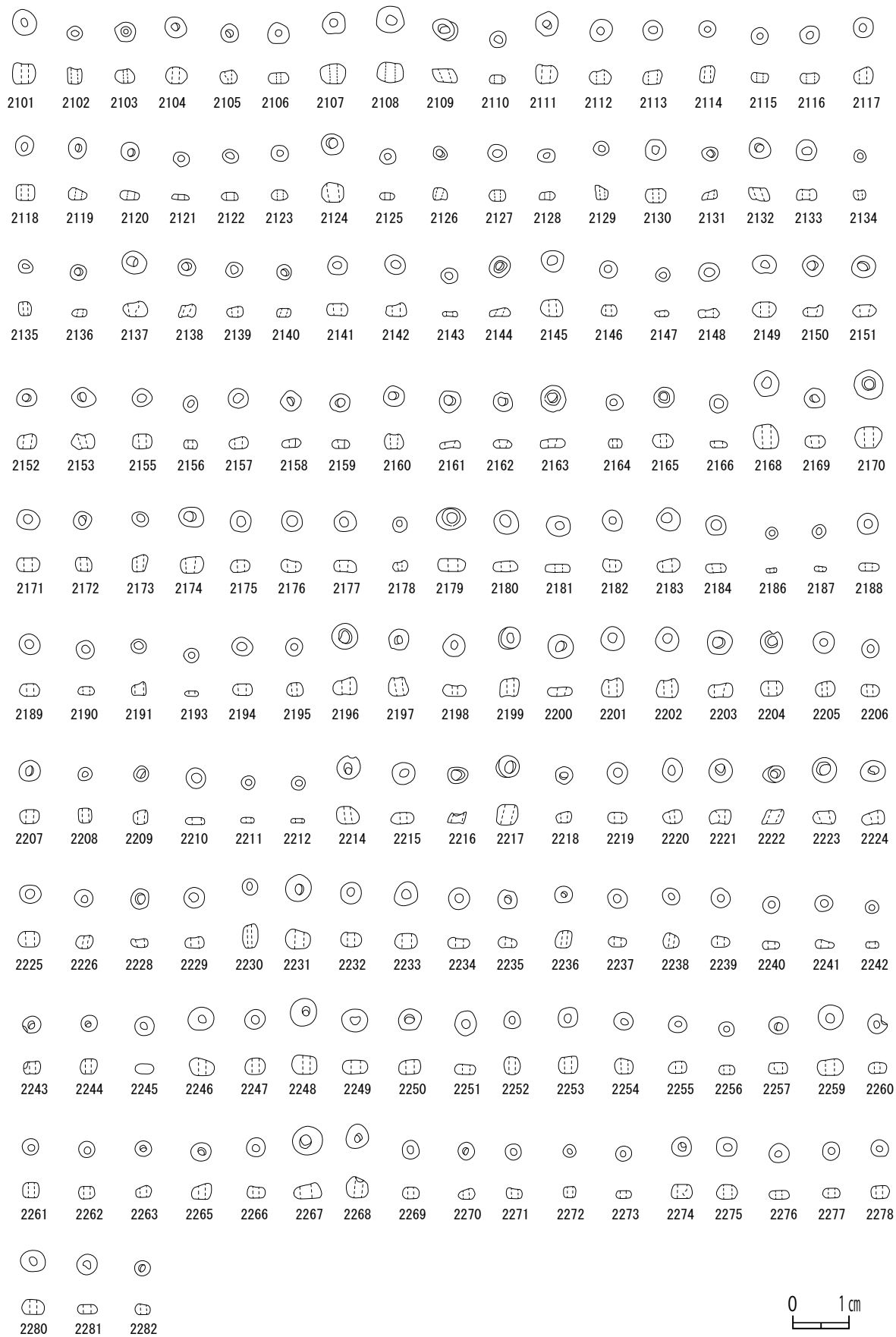
図版 135 原の辻遺跡大原地区 K2(甕棺墓)出土トンボ玉顕微鏡写真



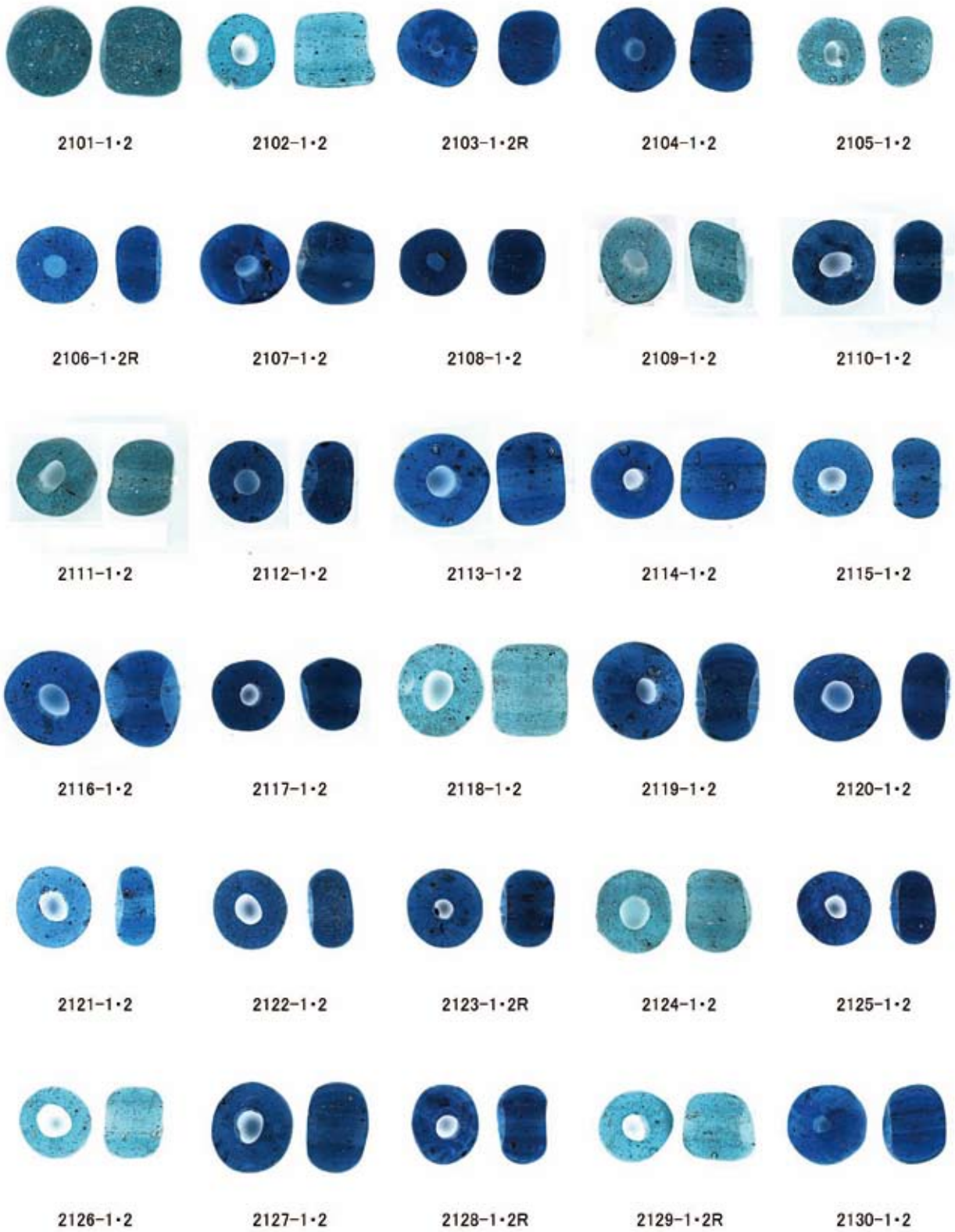
第 85 図 2114 紺色スペクトル図



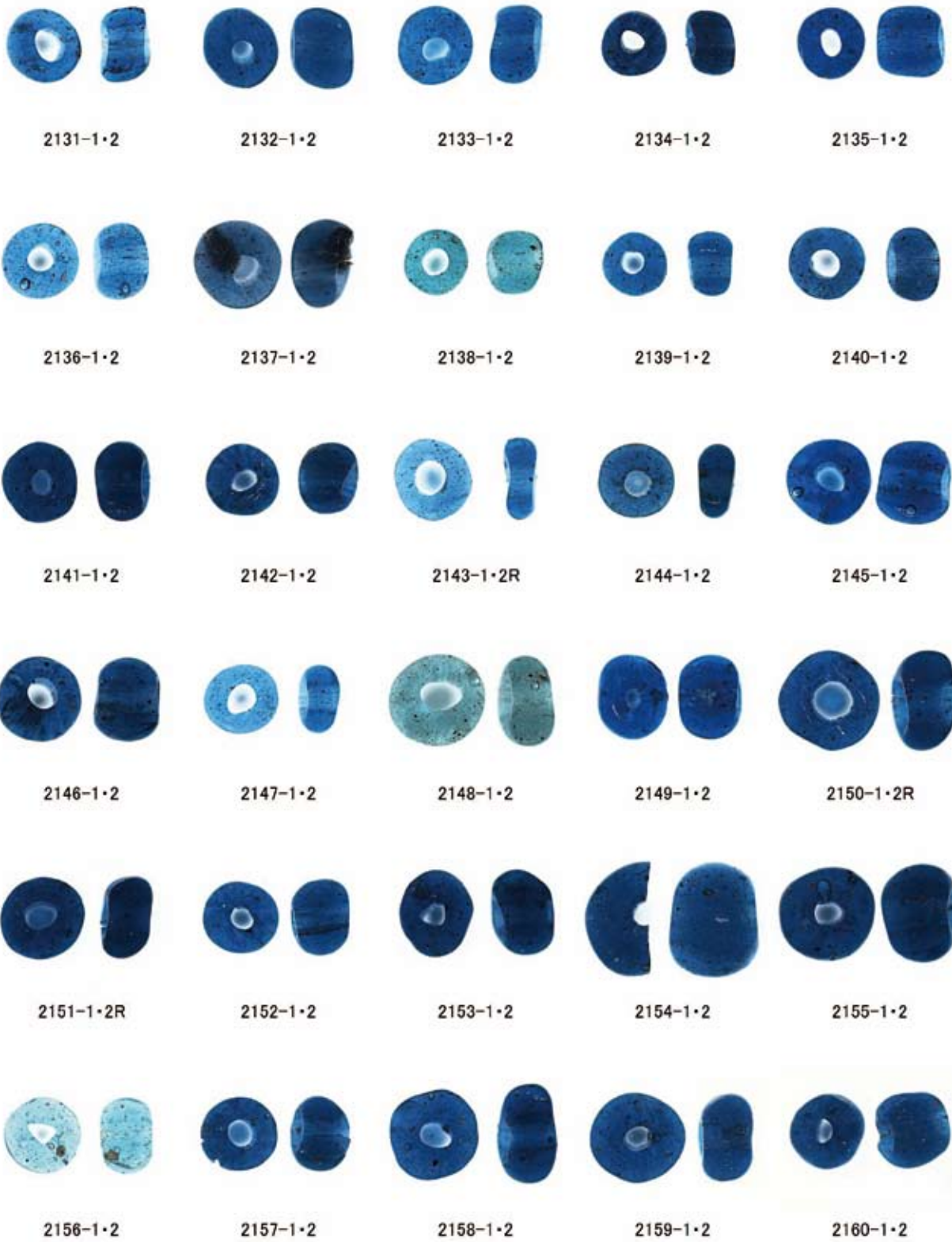
第 86 図 2105 淡青色スペクトル図



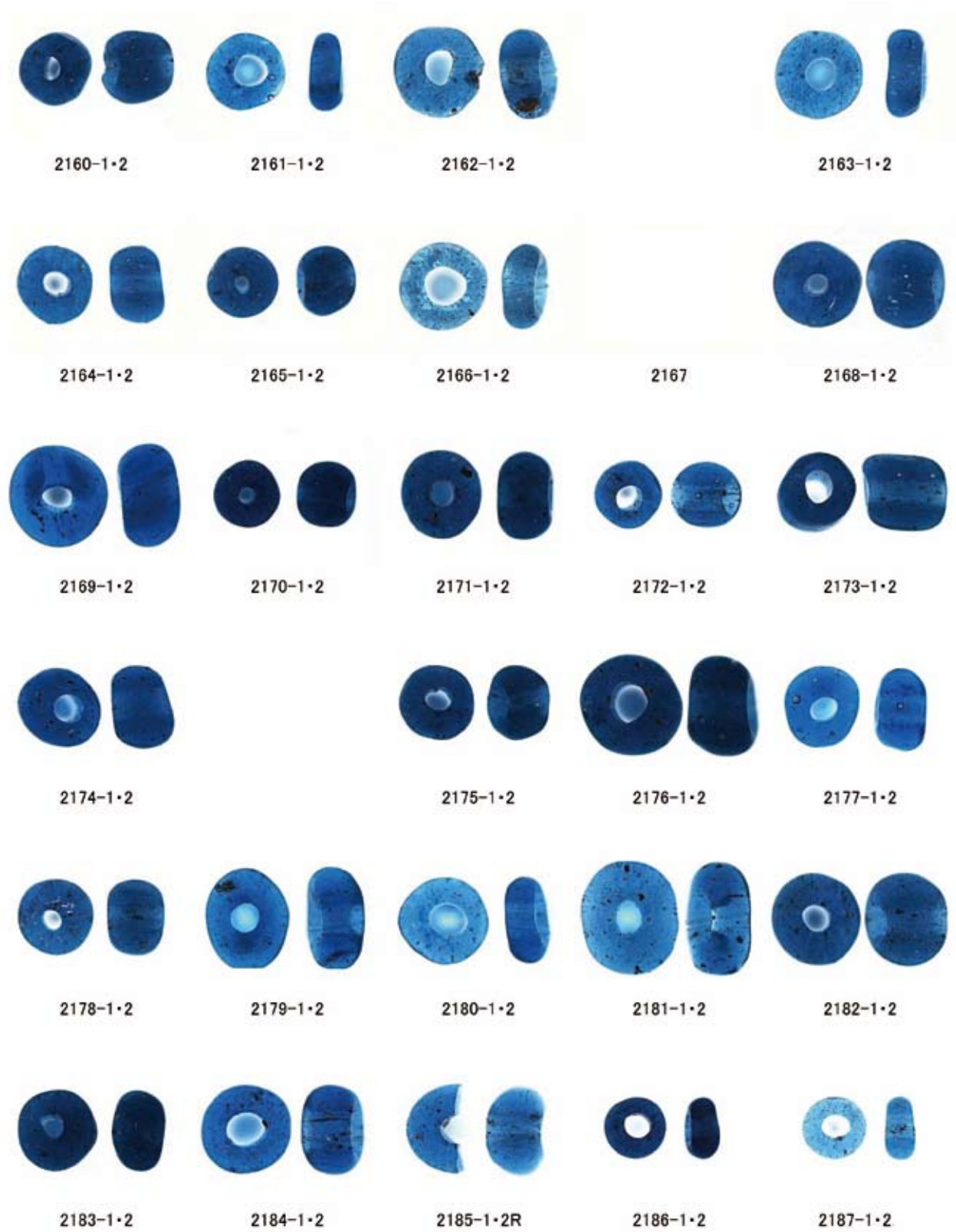
第 87 図 ガラス小玉実測図 (1/1)



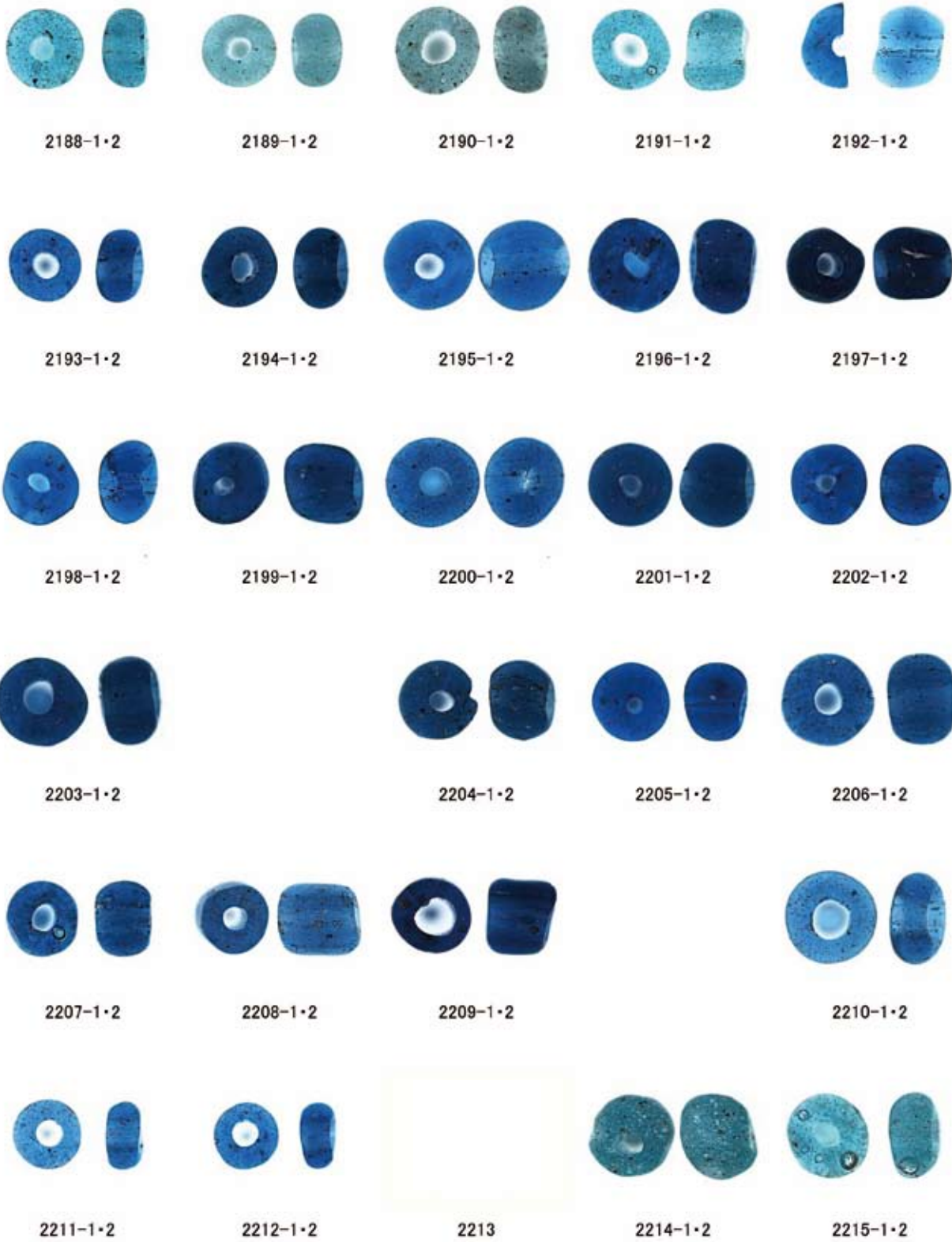
図版 136-1 顕微鏡写真 (倍率 20 倍)



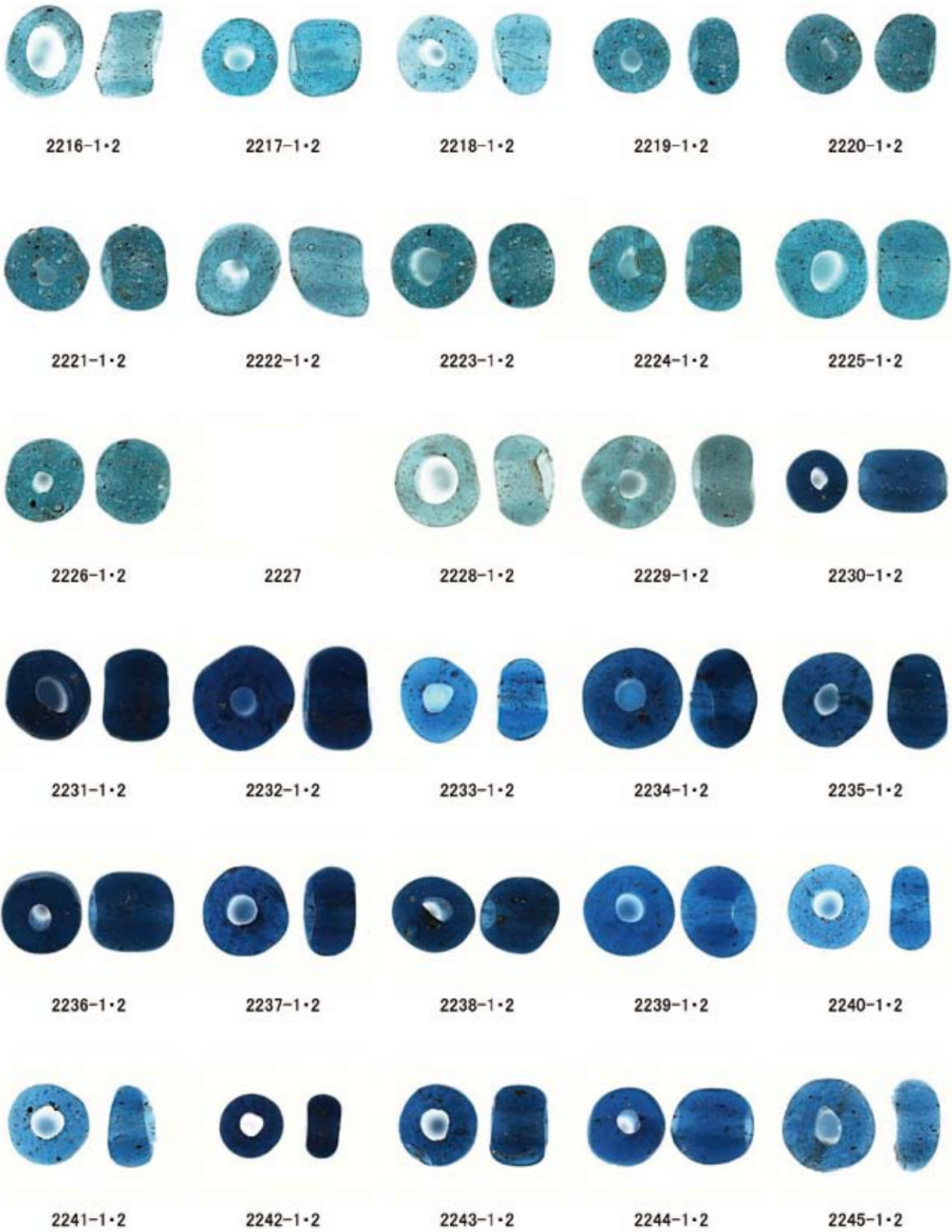
図版 136-2 顕微鏡写真 (倍率 20 倍)



図版 136-3 顕微鏡写真 (倍率 20 倍)



図版 136-4 顕微鏡写真 (倍率 20 倍)

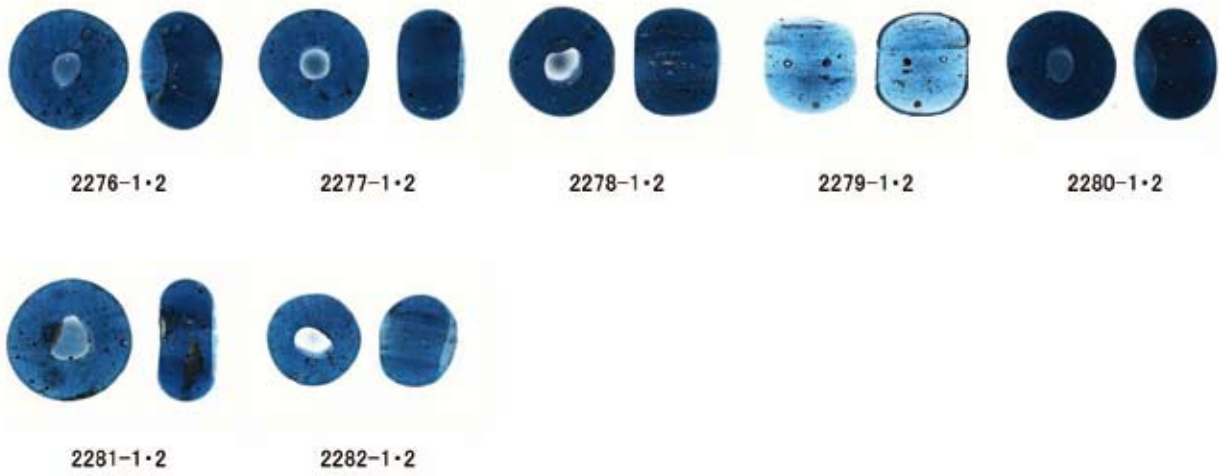


図版 136-5 顕微鏡写真 (倍率 20 倍)



図版 136-6 顕微鏡写真 (倍率 20 倍)

TAK201408 × 20



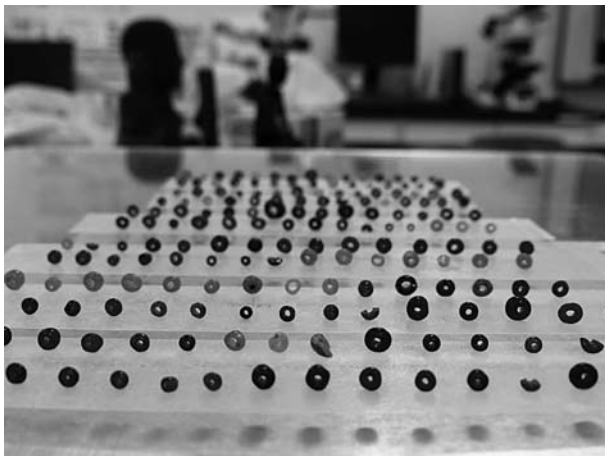
図版 136-7 顕微鏡写真（倍率 20 倍）



図版 137 ガラス小玉分析作業風景 (1)



図版 138 ガラス小玉分析作業風景 (2)

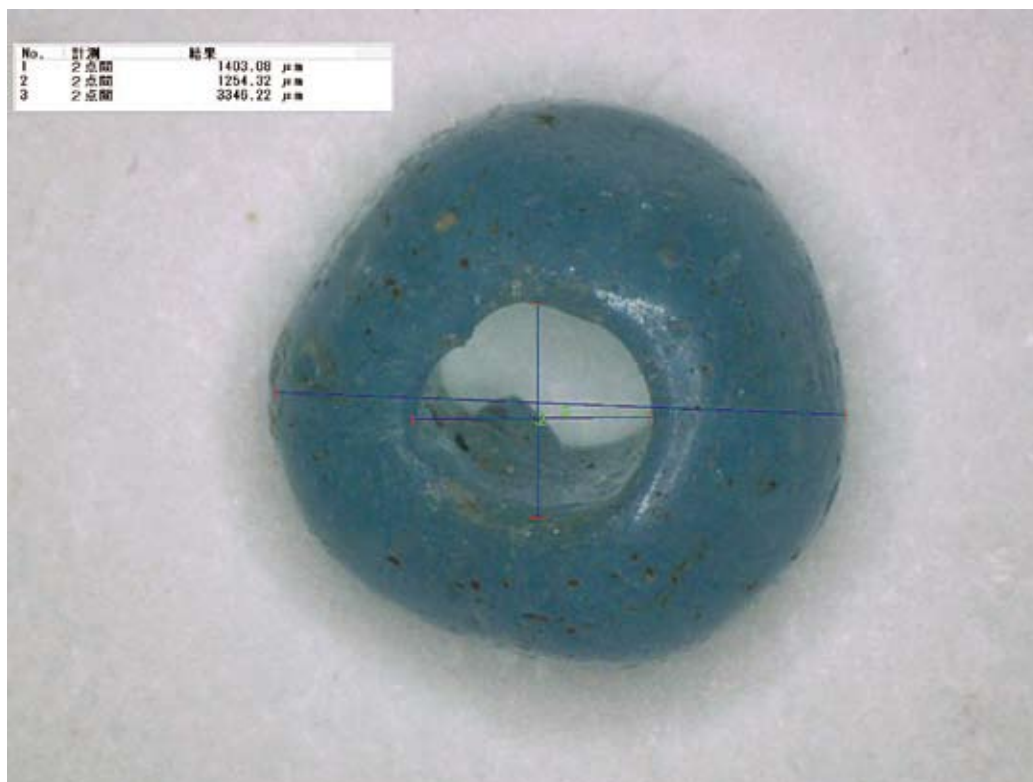


図版 139 ガラス小玉分析作業風景 (3)

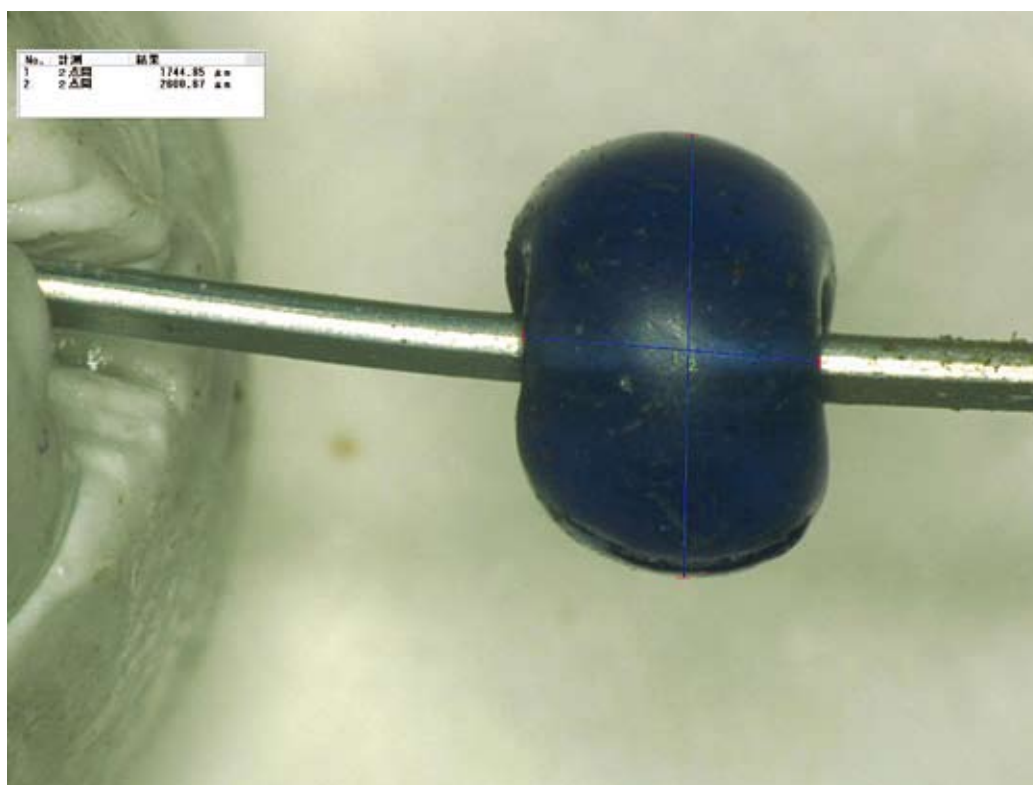


図版 140 ガラス小玉分析作業風景 (4)

ガラス小玉の測定はデジタルマイクロスコープ及びデジタルノギスを使用した。平面写真の数字の2は内径、3は外径、断面写真の1は厚さ、2は直径である。



図版 141 ガラス小玉 2105



図版 142 ガラス小玉 2282

第 40-1 表 ガラス小玉測定一覧表

番号	色調	内径①	内径②	外径①	外径②	厚①	厚②	直径	備考
2101	淡青	1.337	1.202	4.432		3.752		4.241	
2102	淡青	1.166	1.016	2.754		2.588		2.681	
2103	紺	0.706	0.709	3.880		2.544		3.903	
2104	紺	1.055	1.041	4.008		2.933		3.936	
2105	淡青	1.403	1.254	3.346		2.446		3.434	
2106	紺	1.163	1.101	3.913		1.954		3.731	
2107	紺	1.550	1.460	4.610	4.100	3.760		4.670	半割れ
2108	紺	1.504	1.339	5.087		3.475		5.138	
2109	淡青	1.634	1.432	3.469		2.554		3.524	成型時斜めに切断
2110	紺	1.424	1.075	3.050		1.621		3.079	
2111	淡青	1.566	1.219	3.873		2.863		3.707	
2112	紺	1.251	1.265	3.983		1.696	2.300	3.923	
2113	紺	1.191	1.309	3.369		2.198	2.600	3.255	
2114	紺	0.878		2.879		3.042		2.938	正円に近い
2115	紺	1.060	1.007	2.779		1.749		2.822	
2116	紺	1.384	1.062	3.468		1.913		3.375	
2117	紺	1.043	1.096	3.472		2.331	3.100	3.424	
2118	淡青	1.132	1.483	3.377	3.120	2.718		3.153	
2119	紺	1.002	1.029	3.228	3.540	1.544	2.322	3.593	成型時斜めに切断
2120	紺	1.179	1.182	3.202		1.413	1.700	3.178	
2121	紺	1.232	1.010	2.935	2.682	1.213		2.717	
2122	紺	0.914	1.156	2.664	2.891	1.417		2.708	
2123	紺	0.793	0.735	2.863		1.712		2.849	
2124	淡青	1.669	1.491	4.098	3.675	2.716		3.688	
2125	紺	0.911	0.727	2.708		1.324		2.781	
2126	淡青	1.305	1.146	2.618		1.994		2.601	
2127	紺	1.312	1.064	3.291		2.026		3.176	
2128	紺	0.840	0.856	2.875	2.421	1.605		2.557	
2129	淡青	1.076	0.887	2.498		2.009	2.620	2.560	
2130	紺	0.807	0.792	3.802		2.616		3.760	
2131	紺	1.148	1.068	2.768	2.449	1.332	1.789	2.721	
2132	紺	1.190	1.058	3.480		2.676		3.438	
2133	紺	1.350	1.108	3.654		1.898		3.752	
2134	紺	0.867	0.793	2.259		1.499		2.298	
2135	紺	0.999	0.686	2.522		2.337		2.440	
2136	紺	0.991	0.967	2.701		1.765		2.691	
2137	紺	1.458	1.383	4.235	4.039	2.013	2.690	4.084	
2138	淡青	1.265	1.214	3.208	2.913	2.089	2.451	3.152	
2139	紺	1.117	1.114	2.987		1.799	2.219	3.018	
2140	紺	1.062	1.099	2.719		1.500		2.642	
2141	紺	1.196	0.959	3.783	3.503	2.240		3.572	
2142	紺	1.241	0.935	3.482	3.550	1.949	2.471	3.442	
2143	紺	1.277	1.106	2.900	2.659	0.903	1.270	2.807	
2144	紺	1.368	1.281	3.628		1.403	1.823	3.676	
2145	紺	1.434	1.058	4.019		3.192		3.990	
2146	紺	1.125	0.980	3.054		2.051		3.000	
2147	紺	1.184	0.937	2.654		1.055		2.520	
2148	淡青	1.552	1.094	3.422	3.262	1.451	1.890	3.484	
2149	紺	0.859	0.644	4.023	3.311	2.764		3.480	
2150	紺	1.510	1.526	3.703		1.577	2.040	3.598	
2151	紺	1.618	1.227	4.157		2.003		3.813	
2152	紺	1.221	0.964	3.638		2.455		3.446	
2153	紺	1.224	1.102	3.447		2.435		3.949	
2154	紺								半欠のため測定不能
2155	紺	1.041	0.914	3.515		2.474		3.332	
2156	淡青	1.095	0.628	2.736		1.826		2.695	
2157	紺	1.454	1.296	3.629		1.898	2.280	3.489	
2158	紺	1.247	0.972	3.558		1.662		3.255	

第 40-2 表 ガラス小玉測定一覧表

番号	色調	内径①	内径②	外径①	外径②	厚①	厚②	直径	備考
2159	紺	1.035	0.840	3.406		1.742		3.188	
2160	紺	1.629	1.142	3.642		2.870		3.413	
2161	紺	1.753	1.632	3.882		1.297	1.763	3.834	
2162	紺	1.393	1.075	3.369		1.484		3.382	
2163	紺	1.621	1.509	4.515		1.764		4.603	
2164	紺	0.964	0.846	2.903		1.788		2.849	
2165	紺	1.167	0.950	3.472		2.387		3.592	
2166	紺	1.540	1.446	3.273		1.201		3.253	
2167	欠								欠損のため測定不能
2168	紺	1.238	1.352	4.442		3.347		4.384	
2169	紺	1.406	1.065	3.780		2.094		3.615	
2170	紺	1.384	1.347	5.149		3.812		5.100	
2171	紺	1.259		4.314	3.905	2.558		4.083	
2172	紺	1.301	1.253	3.236		2.624		3.212	
2173	紺	1.193	0.982	2.587		2.847	3.110	2.860	
2174	紺	1.437	1.363	4.109		2.392	3.016	3.785	
2175	紺	1.315	1.090	3.640		2.131		3.838	
2176	紺	1.462	1.322	3.769		2.148	2.630	3.649	
2177	紺	1.415	1.177	4.085	3.723	2.133		4.064	
2178	紺	0.801	0.684	2.820		1.772	2.230	2.788	
2179	紺	1.481	1.480	5.341	4.327	2.204		4.359	
2180	紺	2.006	1.671	4.668	4.455	1.892		4.498	
2181	紺	1.232	0.942	4.435	3.699	1.473		3.848	
2182	紺	1.150	1.030	3.636	3.424	2.421		3.512	
2183	紺	1.335	1.126	4.201		1.965	2.683	4.220	
2184	紺	1.448	1.412	3.381		1.781		3.304	
2185	紺								半欠のため測定不能
2186	紺	0.984	0.934	2.219		0.999		2.303	
2187	紺	1.058	0.863	2.333		0.972		2.283	
2188	淡青	1.256	1.261	3.830		1.830		3.797	
2189	淡青	1.335	1.285	3.466		2.139		3.567	
2190	淡青	1.379	1.438	3.120		1.406		3.002	
2191	淡青	1.446	1.341	2.879		1.922	2.410	2.833	
2192	紺								半欠のため測定不能
2193	紺	1.025	0.977	2.606		1.277		2.560	
2194	紺	1.563	1.415	3.827	3.371	2.200		3.556	
2195	紺	1.049	0.943	3.192		2.718		3.187	正円に近い
2196	紺	1.601	1.134	4.659		2.784	3.290	4.679	
2197	紺	1.657	1.362	3.937	3.855	3.281		3.802	
2198	紺	1.300	0.976	4.223	3.806	2.147		4.115	
2199	紺	1.252	1.054	3.788		3.235	3.600	3.823	
2200	紺	1.609	1.476	4.703		1.731		4.488	
2201	紺	1.317	1.240	4.208		3.158	3.390	4.206	
2202	紺	1.176	0.980	4.033		3.137	小2.83大3.12	4.019	
2203	紺	1.891	1.605	4.647	4.321	2.508	2.991	4.619	
2204	紺	1.632	1.393	4.022		2.879		3.985	
2205	紺	0.779		3.646		2.533	2.954	3.712	正円に近い
2206	紺	1.147	1.076	3.242		2.280		3.320	
2207	紺	1.442	1.182	3.630		2.615		3.660	
2208	紺	0.855	0.862	2.518		2.727		2.516	
2209	紺	1.480	1.338	2.839		2.412		2.899	
2210	紺	1.440	1.434	3.282		1.353		3.300	
2211	紺	1.029	1.009	2.448		1.128		2.476	
2212	紺	0.970	0.964	2.377		1.011		2.392	
2213	欠								割れており計測不能
2214	淡青	1.514	1.259	4.163	3.898	3.042		4.110	
2215	淡青	1.438	1.095	4.055	3.804	2.013		3.881	

第 40-3 表 ガラス小玉測定一覧表

番号	色調	内径①	内径②	外径①	外径②	厚①	厚②	直径	備考
2216	淡青	2.101	1.550	3.143	2.687	1.299	2.046	3.081	
2217	淡青	1.549	1.509	3.887	3.478	2.996	3.271	3.771	上, 下の径が異なる
2218	淡青	1.049	1.033	3.052	2.866	1.663	2.247	2.947	
2219	淡青	1.341	1.174	3.670		2.200		3.715	正円に近い
2220	淡青	1.290	1.030	3.915	3.677	2.287	2.703	3.727	
2221	淡青	1.613	1.251	4.049		2.710		4.022	正円に近い
2222	淡青	1.262	1.262	2.852		2.632		2.891	
2223	淡青	1.896	1.667	4.108		2.375	2.724	4.141	正円に近い
2224	淡青	1.584	1.153	4.179	3.740	2.380	2.812	3.852	
2225	淡青	1.618	1.443	3.665	3.361	2.376		3.638	
2226	淡青	0.777	0.742	3.099	2.814	2.350		2.859	
2227	欠								残欠のため計測不能
2228	淡青	1.722	1.601	3.309	2.949	1.624	1.952	3.129	
2229	淡青	1.173	1.052	3.424		1.786	2.241	3.405	
2230	紺	1.234	0.884	2.972		3.758	4.270	2.954	正円, 立面は橢型
2231	紺	2.032	1.646	4.345	4.034	2.705	3.237	4.191	割れている 要接合
2232	紺	1.161	0.980	3.800	3.522	2.089	2.640	3.712	
2233	紺	1.685	1.465	4.057	3.640	2.226	2.540	4.058	
2234	紺	1.166		3.723	3.629	1.681	1.860	3.736	孔断面は正円に近い 外径4.02mm
2235	紺	1.299	0.999	3.484	3.275	2.064		3.232	
2236	紺	0.921	0.785	2.897		2.715	3.010	2.929	
2237	紺	1.197	1.206	3.098	3.460	1.799	1.970	3.253	正円に近い
2238	紺	1.076	0.906	2.908	2.750	2.063	2.697	2.699	外径最大3.20mm
2239	紺	1.110		3.333		1.684	2.082	3.273	孔断面は正円に近い
2240	紺	1.177		3.050	2.923	1.526		2.967	孔断面は正円に近い
2241	紺	1.263		2.930		1.135	1.536	2.945	孔断面は正円に近い
2242	紺	0.872	0.860	2.348	2.259	1.266		2.258	
2243	紺	1.232	1.085	2.942	2.917	1.872	2.220	2.949	
2244	紺	0.871	0.876	2.721	2.732	2.491		2.777	
2245	紺	1.915	1.496	3.814		2.054		3.851	外径・直径が4mm以内 半分に割れている(要接合)
2246	紺	1.197	1.028	4.451	3.966	2.590	3.285	4.021	
2247	紺	1.114		3.571	3.416	2.594	2.880	3.420	孔断面は正円に近い
2248	紺	1.328	1.370	4.902	4.743	3.115	3.692	4.847	
2249	紺	1.600	1.240	4.562	4.027	2.250	2.420	4.249	
2250	紺	1.707	1.332	4.110	4.030	2.109	2.708	3.993	
2251	紺	1.401	1.312	4.322	3.744	1.580	1.960	4.063	
2252	紺	1.050	0.888	3.121	3.147	2.963		3.164	
2253	紺	1.219	1.165	3.818		2.702	3.174	3.749	正円に近い
2254	紺	1.136	1.005	3.189	3.134	2.371	2.820	3.109	
2255	紺	1.041	0.970	3.099	3.026	1.800	2.147	3.212	最大外径3.44mm 厚み③2.35mm
2256	紺	1.069	0.966	2.723	2.506	1.469	1.770	2.607	
2257	淡青	1.493	1.443	3.369	3.286	1.932		3.254	
2258	石								石製(勾玉or白玉か?) 半欠のため測定不能
2259	紺	1.776	1.488	4.316	4.172	2.510	2.834	4.346	外径(最大)4.70mm
2260	淡青	1.271	1.027	3.318	3.255	1.798	2.130	3.177	1/6欠
2261	紺	0.971	0.909	2.733	3.050	2.533	2.840	2.846	正円に近い
2262	紺	0.990	0.903	2.850	2.746	2.083	2.280	2.847	
2263	紺	1.116	1.159	2.837	2.685	1.742	2.050	2.752	厚み③3.01mm 外径②2.18mm
2264	紺								半欠のため測定不能
2265	淡青	1.468	1.166	3.217	3.027	2.545	2.810	3.055	外径③3.53mm
2266	淡青	1.350	1.194	3.227		1.654	2.024	3.162	正円に近い
2267	紺	2.070	1.947	5.235	5.013	2.004	2.924	5.097	
2268	紺	1.280	1.095	4.019	3.808	2.554	3.621	3.581	厚み③3.84mm 外径③4.40mm
2269	紺	1.124	0.993	3.224	3.000	1.775	2.050	3.203	

第 40-4 表 ガラス小玉測定一覧表

番号	色調	内径①	内径②	外径①	外径②	厚①	厚②	直径	備考
2270	紺	0.922	0.909	2.907		1.587	2.067	2.999	正円
2271	紺	0.958	0.923	2.544	2.578	1.549	2.000	2.682	
2272	紺	0.910	0.791	2.173	2.129	1.874	2.140	2.139	
2273	紺	0.906	0.856	2.779	2.604	1.365	1.608	2.801	
2274	紺	1.301	1.196	3.450	3.279	2.470		3.294	
2275	紺	1.399	1.208	3.726	3.662	2.318	2.770	3.561	
2276	紺	1.070	0.782	3.419	3.289	1.574		3.305	
2277	紺	0.956	0.895	3.119	3.118	1.729		3.129	
2278	紺	1.146	1.016	2.998	2.843	2.293	2.540	2.983	
2279	淡青								半欠のため測定不能
2280	紺	1.376	1.040	4.188	3.932	2.440		4.103	最大外径 4.53mm
2281	紺	1.238	1.086	3.462		1.458	1.726	3.381	正円に近い
2282	紺	1.079	0.819	2.646		1.744	2.070	2.600	正円に近い

九州大学附属図書館付設教材開発センター谷澤亜里学術研究員による指導風景



図版 143 指導風景 (1)



図版 144 指導風景 (2)

九州大学附属図書館付設教材開発センター谷澤亜里学術研究員による指導風景



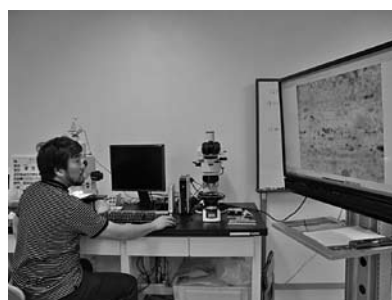
図版 145 分析作業風景 (1)



図版 146 分析作業風景 (2)



図版 147 分析作業風景 (3)



図版 148 分析作業風景 (4)



図版 149 分析作業風景 (5)



図版 150 分析作業風景 (6)

第 41 表 淡青色直径別一覧表

(直径2mm台) 厚さ①1mm台

番号	色調	内径①	内径②	外径①	外径②	厚①	厚②	直径	備考
2126	淡青	1.305	1.146	2.618		1.994		2.601	
2156	淡青	1.095	0.628	2.736		1.826		2.695	
2191	淡青	1.446	1.341	2.879		1.922		2.833	
2218	淡青	1.049	1.033	3.052	2.866	1.663	2.247	2.947	

(直径2mm台) 厚さ①2mm台

番号	色調	内径①	内径②	外径①	外径②	厚①	厚②	直径	備考
2102	淡青	1.166	1.016	2.754		2.588		2.681	
2129	淡青	1.076	0.887	2.498		2.009		2.560	
2222	淡青	1.262	1.262	2.852		2.632		2.891	
2226	淡青	0.777	0.742	3.099	2.814	2.350		2.859	

(直径3mm台) 厚さ①1mm台

番号	色調	内径①	内径②	外径①	外径②	厚①	厚②	直径	備考
2148	淡青	1.552	1.094	3.422	3.262	1.451		3.484	
2188	淡青	1.256	1.261	3.830		1.830		3.797	
2190	淡青	1.379	1.438	3.120		1.406		3.002	
2216	淡青	2.101	1.550	3.143	2.687	1.299	2.046	3.081	
2228	淡青	1.722	1.601	3.309	2.949	1.624	1.952	3.129	
2229	淡青	1.173	1.052	3.424		1.786	2.241	3.405	
2257	淡青	1.493	1.443	3.369	3.286	1.932		3.254	
2260	淡青	1.271	1.027	3.318	3.255	1.798		3.177	1/6欠
2266	淡青	1.350	1.194	3.227		1.654	2.024	3.162	正円に近い

(直径3mm台) 厚さ①2mm台

番号	色調	内径①	内径②	外径①	外径②	厚①	厚②	直径	備考
2105	淡青	1.403	1.254	3.346		2.446		3.434	
2109	淡青	1.634	1.432	3.469		2.554		3.524	成型時斜めに切断
2111	淡青	1.566	1.219	3.873		2.863		3.707	
2118	淡青	1.132	1.483	3.377	3.120	2.718		3.153	
2124	淡青	1.669	1.491	4.098	3.675	2.716		3.688	
2138	淡青	1.265	1.214	3.208	2.913	2.089	2.451	3.152	
2189	淡青	1.335	1.285	3.466		2.139		3.567	
2215	淡青	1.438	1.095	4.055	3.804	2.013		3.881	
2217	淡青	1.549	1.509	3.887	3.478	2.996	3.271	3.771	上, 下の径が異なる
2219	淡青	1.341	1.174	3.670		2.200		3.715	正円に近い
2220	淡青	1.290	1.030	3.915	3.677	2.287	2.703	3.727	
2224	淡青	1.584	1.153	4.179	3.740	2.380	2.812	3.852	
2225	淡青	1.618	1.443	3.665	3.361	2.376		3.638	
2265	淡青	1.468	1.166	3.217	3.027	2.545		3.055	

(直径4mm台) 厚さ①2mm台

番号	色調	内径①	内径②	外径①	外径②	厚①	厚②	直径	備考
2221	淡青	1.613	1.251	4.049		2.710		4.022	正円に近い
2223	淡青	1.896	1.667	4.108		2.375	2.724	4.141	正円に近い

(直径4mm台) 厚さ①3mm台

番号	色調	内径①	内径②	外径①	外径②	厚①	厚②	直径	備考
2101	淡青	1.337	1.202	4.432		3.752		4.241	
2214	淡青	1.514	1.259	4.163	3.898	3.042		4.110	

(半欠のため測定不能)

番号	色調	内径①	内径②	外径①	外径②	厚①	厚②	直径	備考
2279	淡青								半欠のため測定不能

第 42-1 表 紺色直径別一覧表

(直径2mm台) 厚さ①0mm以下

番号	色調	内径①	内径②	外径①	外径②	厚①	厚②	直径	備考
2143	紺	1.277	1.106	2.900	2.659	0.903		2.807	
2186	紺	0.984	0.934	2.219		0.999		2.303	
2187	紺	1.058	0.863	2.333		0.972		2.283	

(直径2mm台) 厚さ①1mm台

番号	色調	内径①	内径②	外径①	外径②	厚①	厚②	直径	備考
2115	紺	1.060	1.007	2.779		1.749		2.822	
2121	紺	1.232	1.010	2.935	2.682	1.213		2.717	
2122	紺	0.914	1.156	2.664	2.891	1.417		2.708	
2123	紺	0.793	0.735	2.863		1.712		2.849	
2125	紺	0.911	0.727	2.708		1.324		2.781	
2128	紺	0.840	0.856	2.875	2.421	1.605		2.557	
2131	紺	1.148	1.068	2.768	2.449	1.332	1.789	2.721	
2134	紺	0.867	0.793	2.259		1.499		2.298	
2136	紺	0.991	0.967	2.701		1.765		2.691	
2140	紺	1.062	1.099	2.719		1.500		2.642	
2147	紺	1.184	0.937	2.654		1.055		2.520	
2164	紺	0.964	0.846	2.903		1.788		2.849	
2178	紺	0.801	0.684	2.820		1.772		2.788	
2193	紺	1.025	0.977	2.606		1.277		2.560	
2211	紺	1.029	1.009	2.448		1.128		2.476	
2212	紺	0.970	0.964	2.377		1.011		2.392	
2240	紺	1.177		3.050	2.923	1.526		2.967	孔断面は正円に近い
2241	紺	1.263		2.930		1.135	1.536	2.945	孔断面は正円に近い
2242	紺	0.872	0.860	2.348	2.259	1.266		2.258	
2243	紺	1.232	1.085	2.942	2.917	1.872		2.949	
2256	紺	1.069	0.966	2.723	2.506	1.469		2.607	
2263	紺	1.116	1.159	2.837	2.685	1.742	2.050	2.752	
2270	紺	0.922	0.909	2.907		1.587	2.067	2.999	正円
2271	紺	0.958	0.923	2.544	2.578	1.549	2.000	2.682	
2272	紺	0.910	0.791	2.173	2.129	1.874		2.139	
2273	紺	0.906	0.856	2.779	2.604	1.365	1.608	2.801	
2282	紺	1.079	0.819	2.646		1.744		2.600	正円に近い

(直径2mm台) 厚さ①2mm台

番号	色調	内径①	内径②	外径①	外径②	厚①	厚②	直径	備考
2135	紺	0.999	0.686	2.522		2.337		2.440	
2173	紺	1.193	0.982	2.587		2.847		2.860	
2208	紺	0.855	0.862	2.518		2.727		2.516	
2209	紺	1.480	1.338	2.839		2.412		2.899	
2236	紺	0.921	0.785	2.897		2.715		2.929	
2238	紺	1.076	0.906	2.908	2.750	2.063	2.697	2.699	
2244	紺	0.871	0.876	2.721	2.732	2.491		2.777	
2261	紺	0.971	0.909	2.733		2.533		2.846	正円に近い
2262	紺	0.990	0.903	2.850	2.746	2.083		2.847	
2278	紺	1.146	1.016	2.998	2.843	2.293		2.983	

(直径2mm台) 厚さ①3mm台

番号	色調	内径①	内径②	外径①	外径②	厚①	厚②	直径	備考
2114	紺	0.878		2.879		3.042		2.938	正円に近い
2230	紺	1.234	0.884	2.972		3.758	4.270	2.954	正円, 立面は橢型

(直径3mm台) 厚さ①1mm台

番号	色調	内径①	内径②	外径①	外径②	厚①	厚②	直径	備考
2106	紺	1.163	1.101	3.913		1.954		3.731	
2110	紺	1.424	1.075	3.050		1.621		3.079	
2112	紺	1.251	1.265	3.983		1.696		3.923	
2116	紺	1.384	1.062	3.468		1.913		3.375	
2119	紺	1.002	1.029	3.228	3.540	1.544	2.322	3.593	成型時斜めに切断
2120	紺	1.179	1.182	3.202		1.413		3.178	
2133	紺	1.350	1.108	3.654		1.898		3.752	
2139	紺	1.117	1.114	2.987		1.799	2.219	3.018	
2142	紺	1.241	0.935	3.482	3.550	1.949	2.471	3.442	
2144	紺	1.368	1.281	3.628		1.403	1.823	3.676	
2150	紺	1.510	1.526	3.703		1.577		3.598	
2157	紺	1.454	1.296	3.629		1.898	2.280	3.489	
2158	紺	1.247	0.972	3.558		1.662		3.255	
2159	紺	1.035	0.840	3.406		1.742		3.188	
2161	紺	1.753	1.632	3.882		1.297	1.763	3.834	
2162	紺	1.393	1.075	3.369		1.484		3.382	

第 42-2 表 紺色直径別一覧表

(直径3mm台) 厚さ①1mm台

番号	色調	内径①	内径②	外径①	外径②	厚①	厚②	直径	備考
2166	紺	1.540	1.446	3.273		1.201		3.253	
2181	紺	1.232	0.942	4.435	3.699	1.473		3.848	
2184	紺	1.448	1.412	3.381		1.781		3.304	
2210	紺	1.440	1.434	3.282		1.353		3.300	
2234	紺	1.166		3.723	3.629	1.681		3.736	孔断面は正円に近い
2237	紺	1.197	1.206	3.098		1.799		3.253	正円に近い
2239	紺	1.110		3.333		1.684	2.082	3.273	孔断面は正円に近い
2255	紺	1.041	0.970	3.099	3.026	1.800	2.147	3.212	
2269	紺	1.124	0.993	3.224	3.000	1.775		3.203	
2276	紺	1.070	0.782	3.419	3.289	1.574		3.305	
2277	紺	0.956	0.895	3.119	3.118	1.729		3.129	
2281	紺	1.238	1.086	3.462		1.458	1.726	3.381	正円に近い

(直径3mm台) 厚さ①2mm台

番号	色調	内径①	内径②	外径①	外径②	厚①	厚②	直径	備考
2103	紺	0.706	0.709	3.880		2.544		3.903	
2104	紺	1.055	1.041	4.008		2.933		3.936	
2113	紺	1.191	1.309	3.369		2.198		3.255	
2117	紺	1.043	1.096	3.472		2.331		3.424	
2127	紺	1.312	1.064	3.291		2.026		3.176	
2130	紺	0.807	0.792	3.802		2.616		3.760	
2132	紺	1.190	1.058	3.480		2.676		3.438	
2141	紺	1.196	0.959	3.783	3.503	2.240		3.572	
2146	紺	1.125	0.980	3.054		2.051		3.000	
2149	紺	0.859	0.644	4.023	3.311	2.764		3.480	
2151	紺	1.618	1.227	4.157		2.003		3.813	
2152	紺	1.221	0.964	3.638		2.455		3.446	
2153	紺	1.224	1.102	3.447		2.435		3.949	
2155	紺	1.041	0.914	3.515		2.474		3.332	
2160	紺	1.629	1.142	3.642		2.870		3.413	
2165	紺	1.167	0.950	3.472		2.387		3.592	
2169	紺	1.406	1.065	3.780		2.094		3.615	
2172	紺	1.301	1.253	3.236		2.624		3.212	
2174	紺	1.437	1.363	4.109		2.392	3.016	3.785	
2175	紺	1.315	1.090	3.640		2.131		3.838	
2176	紺	1.462	1.322	3.769		2.148		3.649	
2182	紺	1.150	1.030	3.636	3.424	2.421		3.512	
2194	紺	1.563	1.415	3.827	3.371	2.200		3.556	
2195	紺	1.049	0.943	3.192		2.718		3.187	正円に近い
2204	紺	1.632	1.393	4.022		2.879		3.985	
2205	紺	0.779		3.646		2.533	2.954	3.712	正円に近い
2206	紺	1.147	1.076	3.242		2.280		3.320	
2207	紺	1.442	1.182	3.630		2.615		3.660	
2232	紺	1.161	0.980	3.800	3.522	2.089		3.712	
2235	紺	1.299	0.999	3.484	3.275	2.064		3.232	
2245	紺	1.915	1.496	3.814		2.054		3.851	外径・直径が4mm以内 半分に割れている(要接合)
2247	紺	1.114		3.571	3.416	2.594		3.420	孔断面は正円に近い
2250	紺	1.707	1.332	4.110	4.030	2.109	2.708	3.993	
2252	紺	1.050	0.888	3.121	3.147	2.963		3.164	
2253	紺	1.219	1.165	3.818		2.702	3.174	3.749	正円に近い
2254	紺	1.136	1.005	3.189	3.134	2.371	2.820	3.109	
2268	紺	1.280	1.095	4.019	3.808	2.554	3.621	3.581	
2274	紺	1.301	1.196	3.450	3.279	2.470		3.294	
2275	紺	1.399	1.208	3.726	3.662	2.318		3.561	

(直径3mm台) 厚さ①3mm台

番号	色調	内径①	内径②	外径①	外径②	厚①	厚②	直径	備考
2145	紺	1.434	1.058	4.019		3.192		3.990	
2197	紺	1.657	1.362	3.937	3.855	3.281		3.802	
2199	紺	1.252	1.054	3.788		3.235	3.600	3.823	

第 42-3 表 紺色直径別一覧表

(直径4mm台) 厚さ①1mm台

番号	色調	内径①	内径②	外径①	外径②	厚①	厚②	直径	備考
2163	紺	1.621	1.509	4.515		1.764		4.603	
2180	紺	2.006	1.671	4.668	4.455	1.892		4.498	
2183	紺	1.335	1.126	4.201		1.965	2.683	4.220	
2200	紺	1.609	1.476	4.703		1.731		4.488	
2251	紺	1.401	1.312	4.322	3.744	1.580		4.063	

(直径4mm台) 厚さ①2mm台

番号	色調	内径①	内径②	外径①	外径②	厚①	厚②	直径	備考
2137	紺	1.458	1.383	4.235	4.039	2.013		4.084	
2171	紺	1.259		4.314	3.905	2.558		4.083	
2177	紺	1.415	1.177	4.085	3.723	2.133		4.064	
2179	紺	1.481	1.480	5.341	4.327	2.204		4.359	
2196	紺	1.601	1.134	4.659		2.784	3.290	4.679	
2198	紺	1.300	0.976	4.223	3.806	2.147		4.115	
2203	紺	1.891	1.605	4.647	4.321	2.508	2.991	4.619	
2231	紺	2.032	1.646	4.345	4.034	2.705	3.237	4.191	
2233	紺	1.685	1.465	4.057	3.640	2.226		4.058	
2246	紺	1.197	1.028	4.451	3.966	2.590	3.285	4.021	
2249	紺	1.600	1.240	4.562	4.027	2.250		4.249	
2259	紺	1.776	1.488	4.316	4.172	2.510	2.834	4.346	
2280	紺	1.376	1.040	4.188	3.932	2.440		4.103	

(直径4mm台) 厚さ①3mm台

番号	色調	内径①	内径②	外径①	外径②	厚①	厚②	直径	備考
2107	紺	1.550	1.460	4.610	4.100	3.760		4.670	半割れ
2168	紺	1.238	1.352	4.442		3.347		4.384	
2201	紺	1.317	1.240	4.208		3.158		4.206	
2202	紺	1.176	0.980	4.033		3.137		4.019	
2248	紺	1.328	1.370	4.902	4.743	3.115	3.692	4.847	

(直径5mm台) 厚さ①2mm台

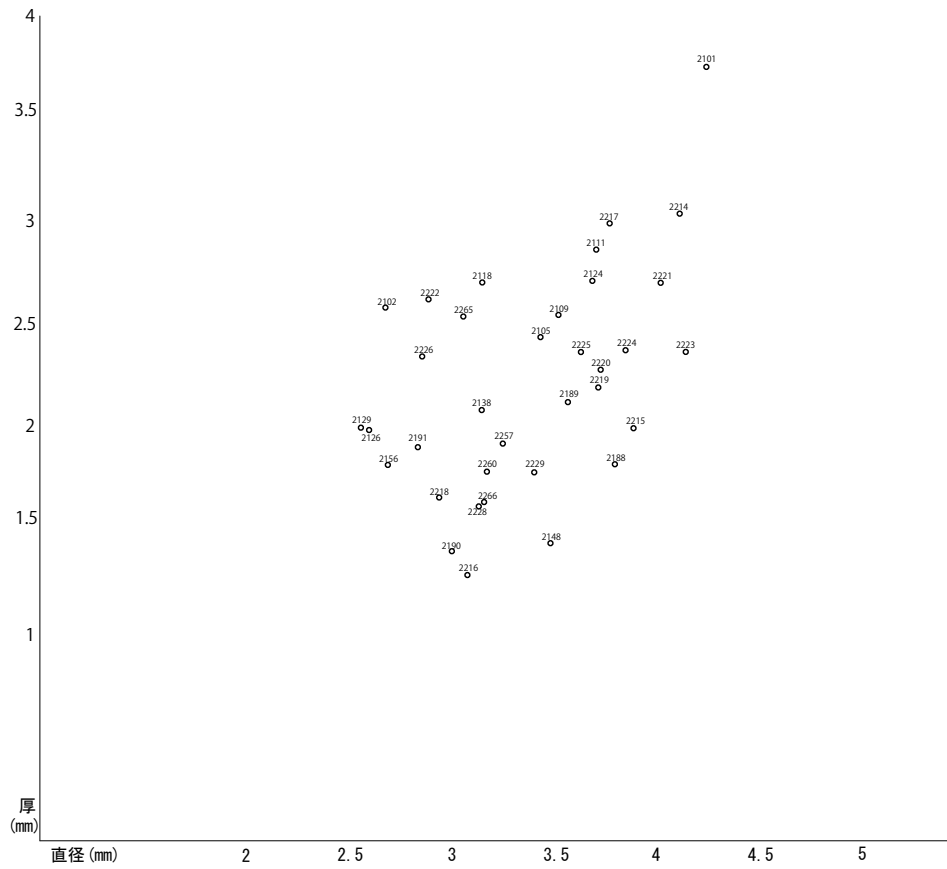
番号	色調	内径①	内径②	外径①	外径②	厚①	厚②	直径	備考
2267	紺	2.070	1.947	5.235	5.013	2.004	2.924	5.097	

(直径5mm台) 厚さ①3mm台

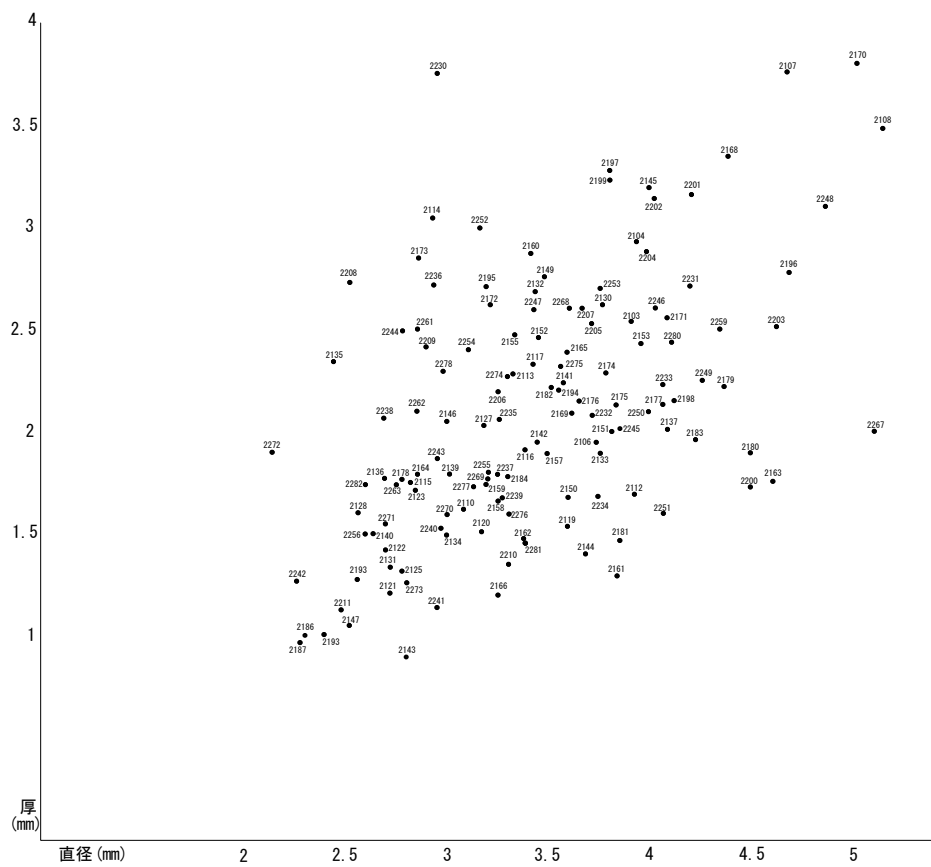
番号	色調	内径①	内径②	外径①	外径②	厚①	厚②	直径	備考
2108	紺	1.504	1.339	5.087		3.475		5.138	
2170	紺	1.384	1.347	5.149		3.812		5.100	

(半欠のため測定不能)

番号	色調	内径①	内径②	外径①	外径②	厚①	厚②	直径	備考
2154	紺								半欠のため測定不能
2185	紺								半欠のため測定不能
2192	紺								半欠のため測定不能
2264	紺								半欠のため測定不能

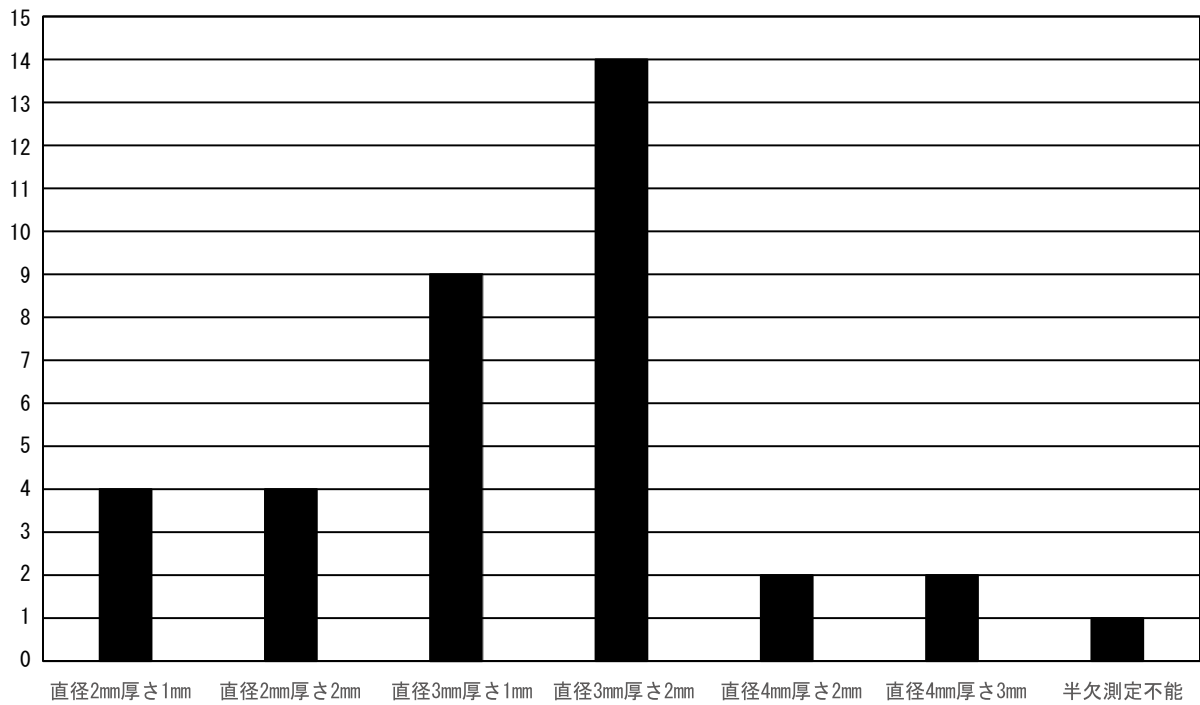


第 88 図 ガラス小玉散布図 (淡青色)



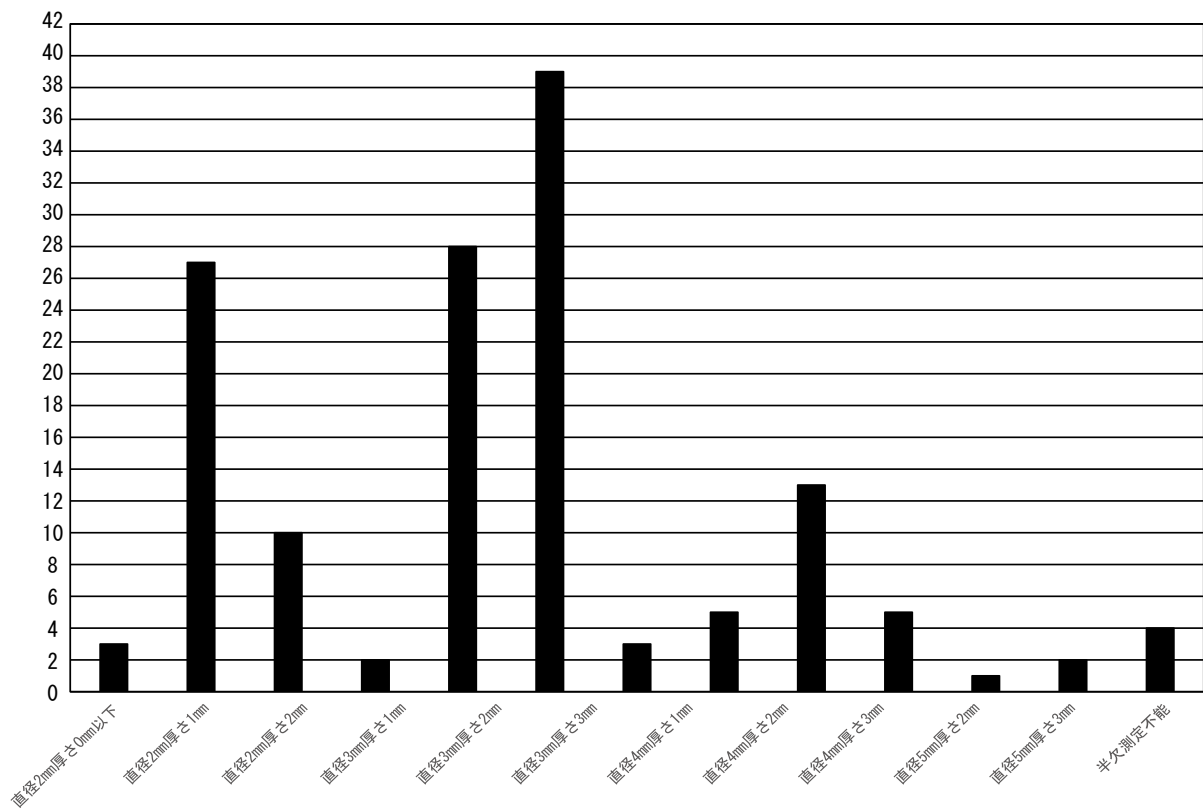
第 89 図 ガラス小玉散布図 (紺色)

個数



第 90 図 直径厚さ別グラフ（淡青色）

個数



第 91 図 直径厚さ別グラフ（紺色）

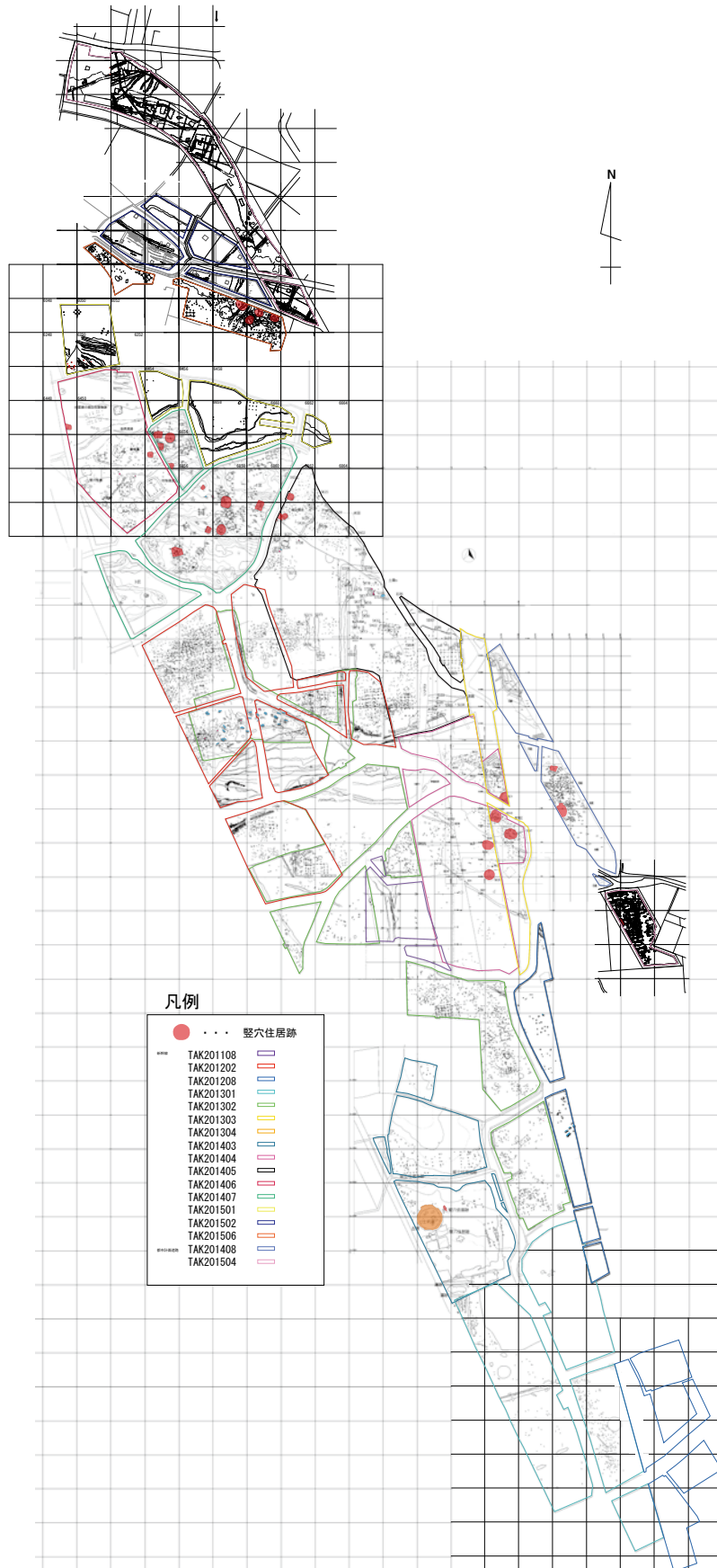
第V章 まとめ

第1節 住居跡の立地と隣接する集落

(1) 住居跡の立地と隣接する集落 -弥生時代-

竹松遺跡201408調査区から検出した竪穴住居跡はSC01とSC02の2軒である。住居跡の基本形状はSC01が円形、SC02は長方形を呈する。SC01には長方形の張り出し部が付設されている。円形部の長軸は7.3m、短軸4.78m+、張り出し部は長方形で長軸2.58m、短軸1.1m、深さ0.16～0.21mを測る。SC02は長軸4.3m、短軸2.9m+を測る。2軒は出土遺物から弥生時代後期前半～中頃に位置付けられれば同時期に存在したものと考えられる。出土遺物はSC01からガラス小玉181個、鉄製釣針、台付甕片等が出土した。いずれの住居跡も土器の出土状況から廃絶住居と考えられる。また隣接する201303、201404調査区から5軒の竪穴住居跡が検出された。いずれも弥生時代後期前半から中頃に位置付けられる円形及び楕円形の住居跡で、201303調査区の3軒の竪穴住居跡からガラス小玉が出土している。201303調査区SC01から1個、201303調査区SC123から17個、細線式獣帯鏡片(後漢鏡)1点、201303調査区SC124から10個である。竪穴住居跡が構築された場所は東側の標高12.0mの平坦部に201408調査区SC01、SC02の2軒が、西側の標高11.0mの平坦部に201303調査区、201404調査区の5軒が構築されている。この住居跡に伴う1間×1間の倉庫2棟が隣接地に構築されている。この5軒の竪穴住居跡と201408調査区の2軒の竪穴住居跡は20～30m程の距離にある。但しこの20～30m間は工事対象外であるため調査対象外になった場所である。そのため住居跡等の遺構が存在する可能性を秘めている。この7軒の竪穴住居跡は出土遺物から考えて同時期に存在したことがうかがえる。この7軒をグルーピングすると2～3軒を1単位とし、3～4単位程の集団が存在した可能性が考えられる。さらにこの集団はガラス小玉、鏡片を所有できる階層である。

今回調査した竹松遺跡は南北1,130m、東西110mの範囲を有す。この範囲内に最初の集落が形成されるのは北西部やや南側で、弥生時代中期末頃の竪穴住居跡2軒が構築される。後期前半から中央部東側で7軒、同じく後期前半から北西部で18軒の竪穴住居跡が確認される。住居跡の構築がない西側は墓域として専有される。西側に展開する墓域は箱式石棺21基、甕棺3基、土坑墓4基、石蓋土坑墓4基、土坑9基の総数39基の集団墓域である。この内2～3基は主軸が同一方向で、並行に構築されているが、全体的な墳墓の構築状況は規則性に欠ける。また出土遺物も5号、8号箱式石棺墓からガラス小玉、17号箱式石棺墓から管玉1点が出土したのみで墓内からの遺物出土は極めて少ない。こうしたことから西側に展開する墳墓群は集団墓的な様相を呈してはいるが、2～3基については階層差を感じさせる構築が行われている状況である。中央部東側の201303調査区SC01、201303調査区SC123、細線式獣帯鏡片(後漢鏡)1点、201303調査区SC124、今回調査をした201408調査区SC01の4軒については住居跡の規模が長軸8m弱の大形であること、出土遺物も細線式獣帯鏡片(後漢鏡)、ガラス小玉を所有していることから考えて集落内における一般成員の住居とは考えられず、小地域共同体の首長層的な様相を想定させる。(TAK2013関係の調査報告書は未報告のため詳細については本報告を待ちたい)



第 92 図 竹松遺跡遺構配置図

(2) 張り出し住居について

張り出し住居とは円形、方形等の住居に1～2、4箇所程の正方形、長方形、台形の張り出し部(突出部)を有する住居跡である。この住居跡は九州から三重県まで分布している。山本和子氏によれば「最古の張り出し住居は弥生時代前期前半～中頃に福岡県太宰府市「前田遺跡」で1軒出現する。中期前半に三重県「弐ノ坪遺跡」、「平田遺跡」で各1軒が検出されている。中期後半では岡山県北部、兵庫県西部を中心に拡散し、後期前半には兵庫、香川、徳島、愛媛で構築され、後半には兵庫から香川、徳島両県にその中心が移り、庄内期には張り出し住居は終息する。」

こうした状況の中、長崎県内でも張り出し住居が確認されている。弥生時代後期前半～中頃に位置付けられる雲仙市「佃遺跡」87区SB-1住居跡、南島原市「高原(たこら)遺跡」1区1号住居跡、「竹松遺跡」201408調査区SC01住居跡である。いずれも平面プランは円形で長方形の張り出し部を有す帆立貝形を呈した住居跡である。規模は雲仙市「佃遺跡」87区SB-1長軸14.5m、短軸約13.0m。「高原遺跡」1区1号住居跡長軸10.4m短軸約10.3m。「竹松遺跡」201408調査区SC01は張り出し部までを含め長軸8.4m、短軸4.78m+を測る。いずれも大型の住居跡であることがわかる。

九州内で張り出し住居跡が確認されている遺跡は、福岡県豊前市「鬼木四反田遺跡」(弥生時代中期末～後期初頭頃)、「久路土下川辺遺跡・久路土日中遺跡」、築上町「安武・深田遺跡」(弥生時代中期末頃)、上毛町「上唐原久保畑遺跡」、北九州市小倉南区「峠遺跡」(弥生時代後期前半)、「長野野登遺跡」第2地点C区2号住居跡、G区5号住居跡(弥生時代中期後半～後期前半)等で検出されている。大分県大分市「守岡遺跡」Ⅱ4号住居(後期前半から終末頃)、日田市「宇土遺跡」11号住居(後期前半から終末頃)。竹田市「西藺遺跡」5号住居(後期中頃)、豊後大野市「舞田原遺跡」(中期中頃～後半)、中津市「諫山遺跡」(弥生時代後期前半頃)、熊本県阿蘇市「小野原遺跡群」SB161弥生後期前半、「下扇原遺跡」1区SB1、7、11住居跡などが確認されている。また「小野原遺跡群」SB161からはベンガラがコンテナ1箱分発見されている。鹿児島県鹿屋市「王子遺跡」から中期後半から後期前半頃の張り出し住居が検出されている。

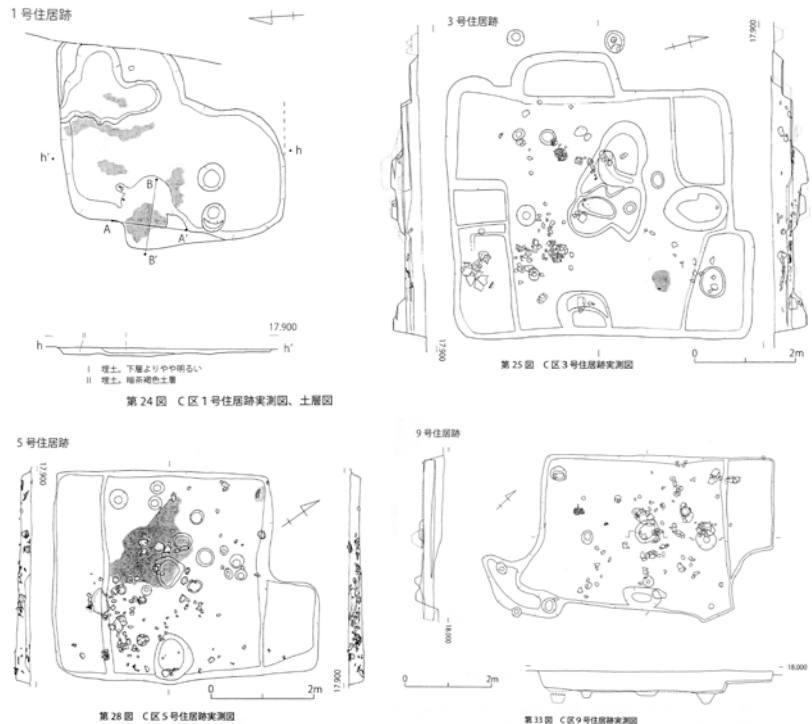
九州内で今のところ最も古い張り出し住居は弥生時代前期前半～中頃に福岡県太宰府市「前田遺跡」で1軒が出現する。しかし後続する張り出し住居は周辺域には構築されていない。その後中期末頃に豊前地域、豊後大野地域、鹿児島県鹿屋地域に構築され九州南岸まで到達している。その後、後期前半から福岡県北九州市小倉南区、大分県中津市、大分市、日田市、竹田市、熊本県阿蘇市、長崎県大村市、雲仙市、南島原市周辺域に拡散する様相が見られ終末期には終焉する。

住居跡の形状は円形、方形及び楕円形に長方形、正方形、台形等の張り出し部が1～4箇所程付設される。弥生時代を通じてこの形状はあまり変わらない。こうした住居跡の形状は岡山北部、兵庫西部、徳島、香川、愛媛、高知に認められる。弥生時代中期後半に岡山北部、兵庫西部で確認されその後兵庫県東、北部に展開する。後期後半には播磨、摂津、讃岐、阿波の4国に集中する(山本和子2001)。こうした状況から東部瀬戸内地域は中期後半頃に出現し、九州では中期末頃に出現する状況をつかむことができる。

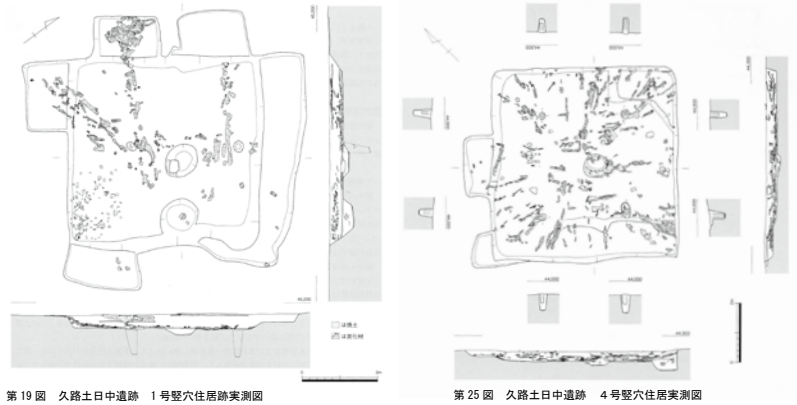
この時期の土器の動向を見ると瀬戸内系土器が九州東北部周防灘沿岸域から東南部日向灘沿岸域、薩摩、大隅半島沿岸域に展開する。西谷彰氏によれば、中期後半に西部瀬戸内系土器の壺、

高坏の出土が九州東南部地域に顕著になり、後期前半には東部瀬戸内系土器の出土が北部九州に顕著になる。こうしたことから2つのまとまりがある事を明らかにした(西谷2005)。また梅木謙一氏は南部九州の瀬戸内系土器を土器A(搬入土器)、土器B(模倣土器)、土器C(折衷土器)に分類し検討した結果、中期後葉～後期初頭は搬入土器が主体で、後期前葉～中葉には模倣土器が主体を成し、搬入土器は伊予からが中心で、中部瀬戸内の備讃地域がそれに続くことを明らかにした(梅木2004)。こうした瀬戸内系土器の時間的・空間的な様相を日向灘沿岸域から薩摩、大隅地域を中心に整理し、その動態との関連性を竪穴住居跡も含め積極的に行った河野祐次氏は次の画期を設定した。1期(中期中頃～末葉)、2期(後期初頭～中葉)、3期(後期後～末葉)である。1期は瀬戸内系土器の搬入がピークとなる。2期は搬入土器が減少し、3期には搬入土器は見られなくなる。器種は全時期を通じて貯蔵具・食膳具である。こうした状況は張り出し住居が豊前から鹿児島県鹿屋市王子遺跡まで展開することと重複する。西谷彰氏の言う後期前半には東部瀬戸内系土器の出土が北部九州に顕著になる。この時期に張り出し住居が北九州市小倉南区、中津市、大分市、日田市、竹田市、阿蘇市、長崎県大村市、雲仙市、南島原市周辺域に拡散する様相は瀬戸内系土器の搬入と連動している。竹松遺跡においても201405調査区の包含層及び201406調査区の竪穴住居跡炉跡から弥生時代後期

福岡県上毛町 上唐原久保畑遺跡(弥生時代後期)



第 93 図 上唐原久保畑遺跡張り出し住居跡



第 19 図 久路土日中遺跡 1号竪穴住居跡実測図

第 25 図 久路土日中遺跡 4号竪穴住居跡実測図



第 4 図 久路土下川辺遺跡 1号竪穴住居跡実測図

久路土下川辺遺跡

福岡県豊前市

久路土日中遺跡久路土下川辺遺跡
(弥生時代中期末～後期前半)

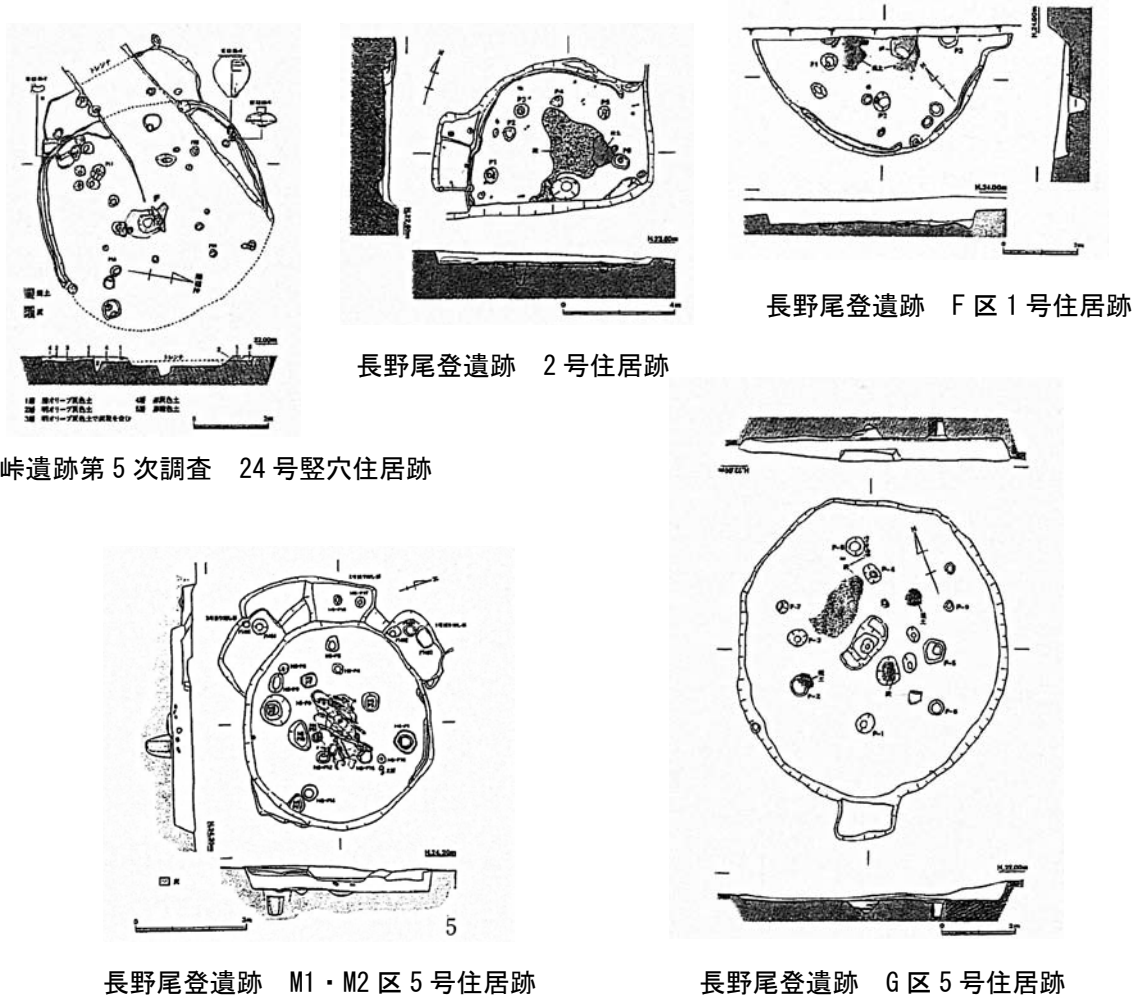
第 94 図 久路土日中遺跡
久路土下川辺遺跡
張り出し住居跡

縮尺不統一

初頭の瀬戸内系と思われる土器片が出土している。

ところで張り出し部の機能については「入り口」、「朱の工房」(菅原1990)、「貯蔵空間」(甲斐1992)、「物置のような機能をもつ屋内施設」(山本2001)との意見がある。この中で菅原康夫氏が指摘する「朱の工房」については、熊本県阿蘇市「小野原遺跡群」SB161でベンガラが床面からコンテナ1箱分検出されている。SB161は長方形の張り出し部が3箇所確認されている。こうした状況から考えて「朱の工房」になる可能性は高い。張り出し部を伴う住居跡は、張り出し部が1~4箇所と様々でその形状は長方形、正方形、台形がほとんどで円形は存在しない。その機能については1箇所の場合は「出入口」と考えられるが、3、4箇所張り出し部がある場合は山本氏の言う「物置のような機能をもつ屋内施設」と考えられるのかもしれない。

福岡県北九州市 峠遺跡第5次調査 24号竪穴住居跡(弥生時代後期前半) 長野尾登遺跡 2号、F区1号住居跡(弥生時代中期末~後期初頭) 長野尾登遺跡 M1・M2区5号住居(弥生時代後期初頭~前半頃) 長野尾登遺跡 G区5号住居跡(弥生時代中期末)

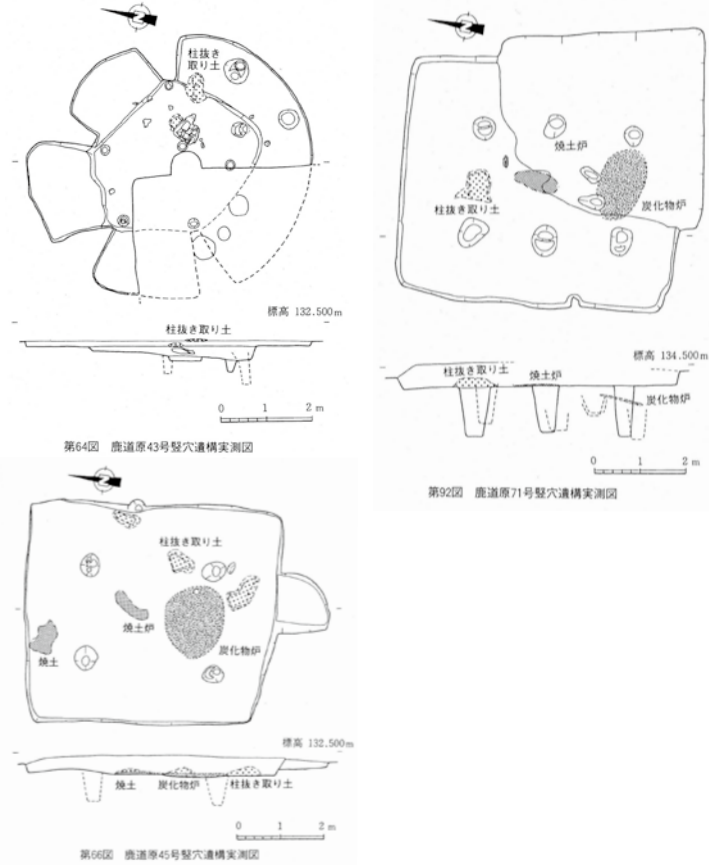


第95図 峠遺跡、長野尾登遺跡張り出し住居跡

柴尾 俊介 『竪穴住居に見る瀬戸内系要素』先史・考古学論究VI 熊本大学考古学研究室 2014 から引用した。

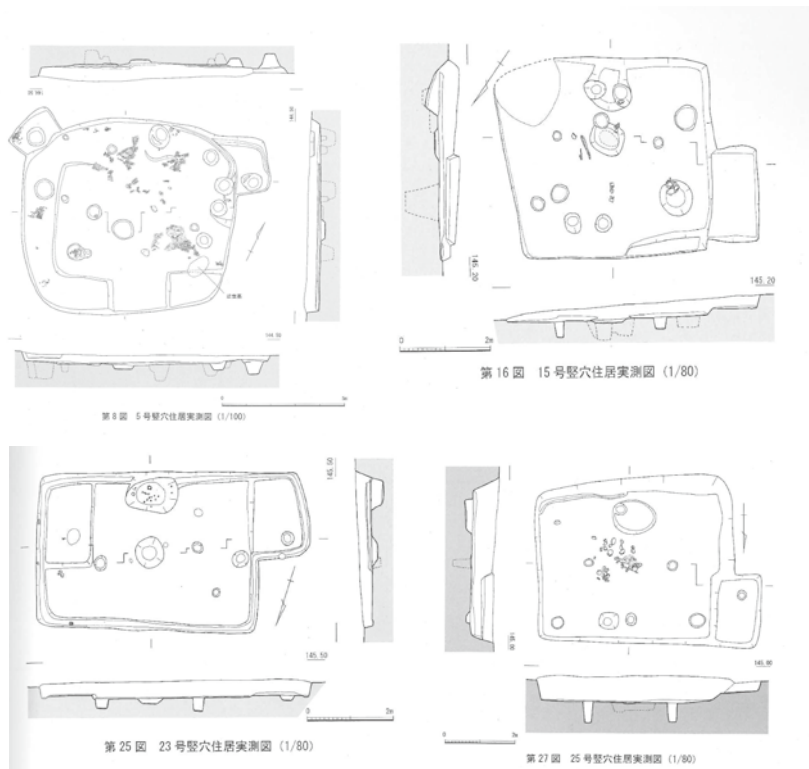
縮尺不統一

大分県豊後大野市（旧千歳村）鹿道原遺跡（弥生時代後期）



第 96 図 鹿道原遺跡張り出し住居跡

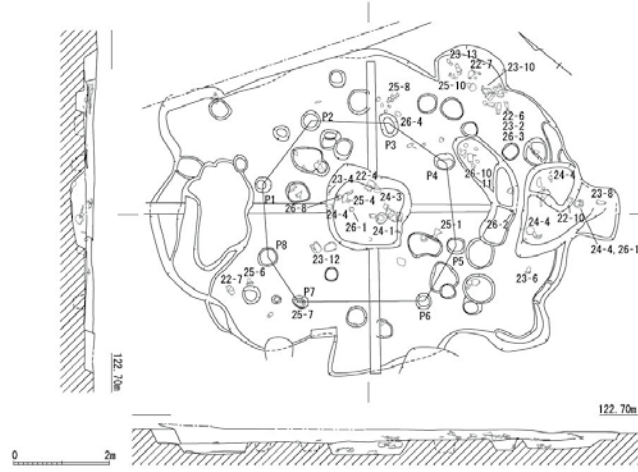
大分県日田市 祇園原遺跡（弥生時代後期前半）



第 97 図 祇園原遺跡張り出し住居跡

縮尺不統一

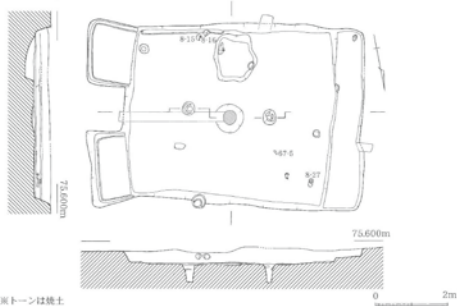
大分県日田市 求来里Ⅲ遺跡（小西遺跡）（弥生時代後期中頃）



第21図 14号竪穴住居跡実測図

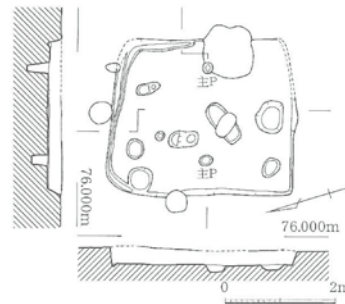
第98図 求来里Ⅲ遺跡張り出し住居跡

大分県日田市 高原遺跡（弥生時代後期前半～中頃）

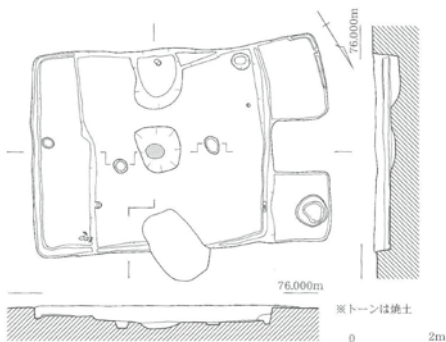


※トーンは焼土

第7図 3号竪穴住居跡実測図

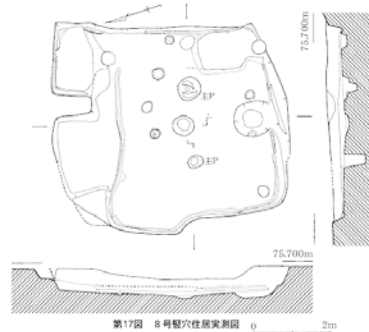


第13図 6号竪穴住居跡実測図

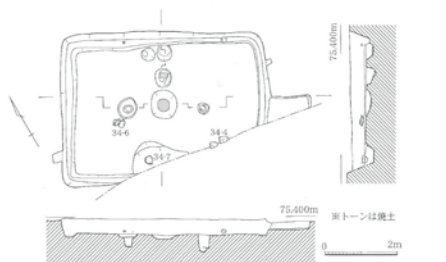


※トーンは焼土

第15図 7号竪穴住居跡実測図 (1/80)

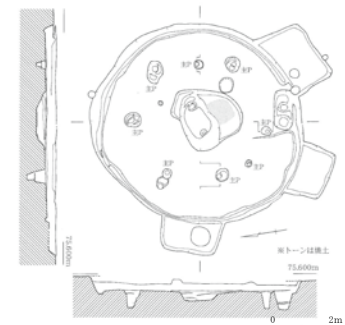


第17図 8号竪穴住居跡実測図



※トーンは焼土

第33図 18号竪穴住居跡実測図



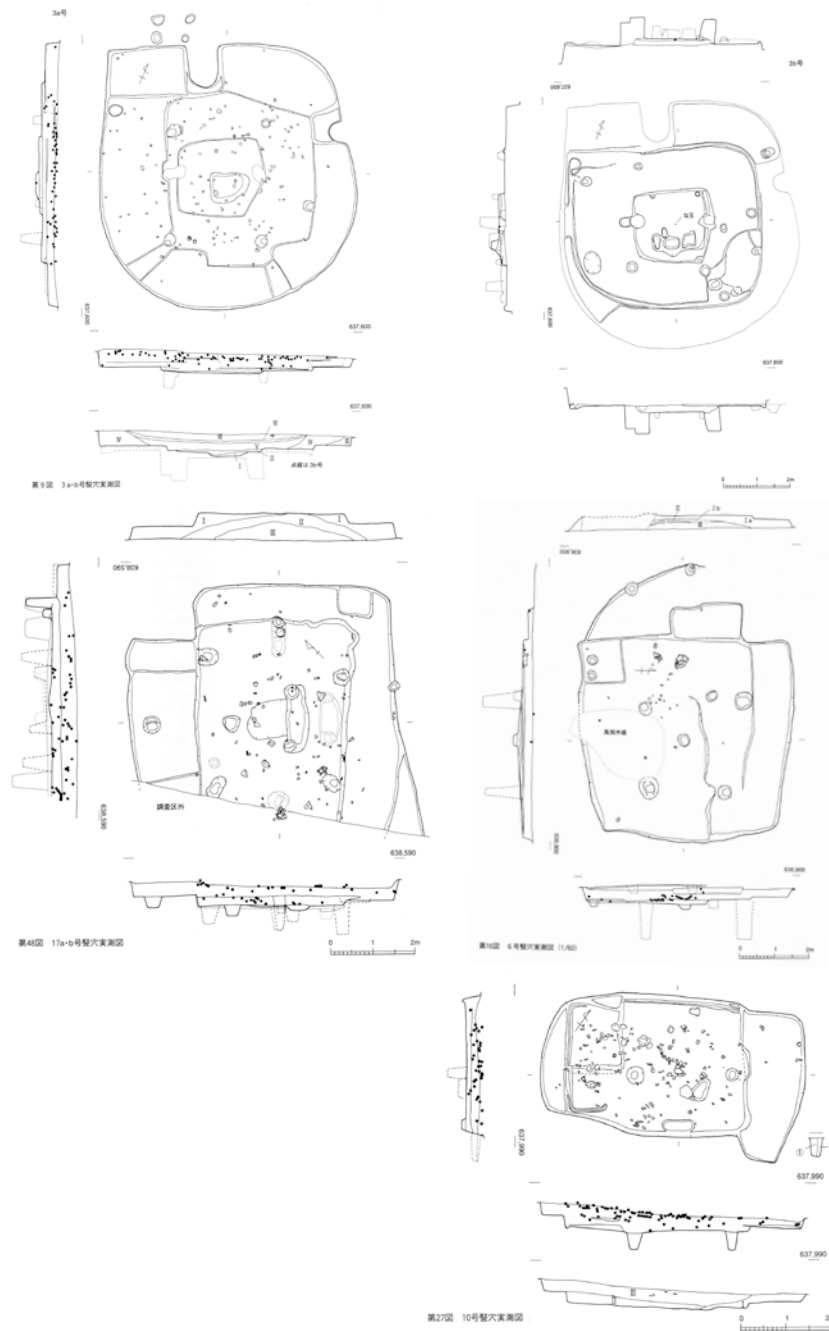
※トーンは焼土

第34図 19号竪穴住居跡実測図 (1/80)

第99図 高野遺跡張り出し住居跡

縮尺不統一

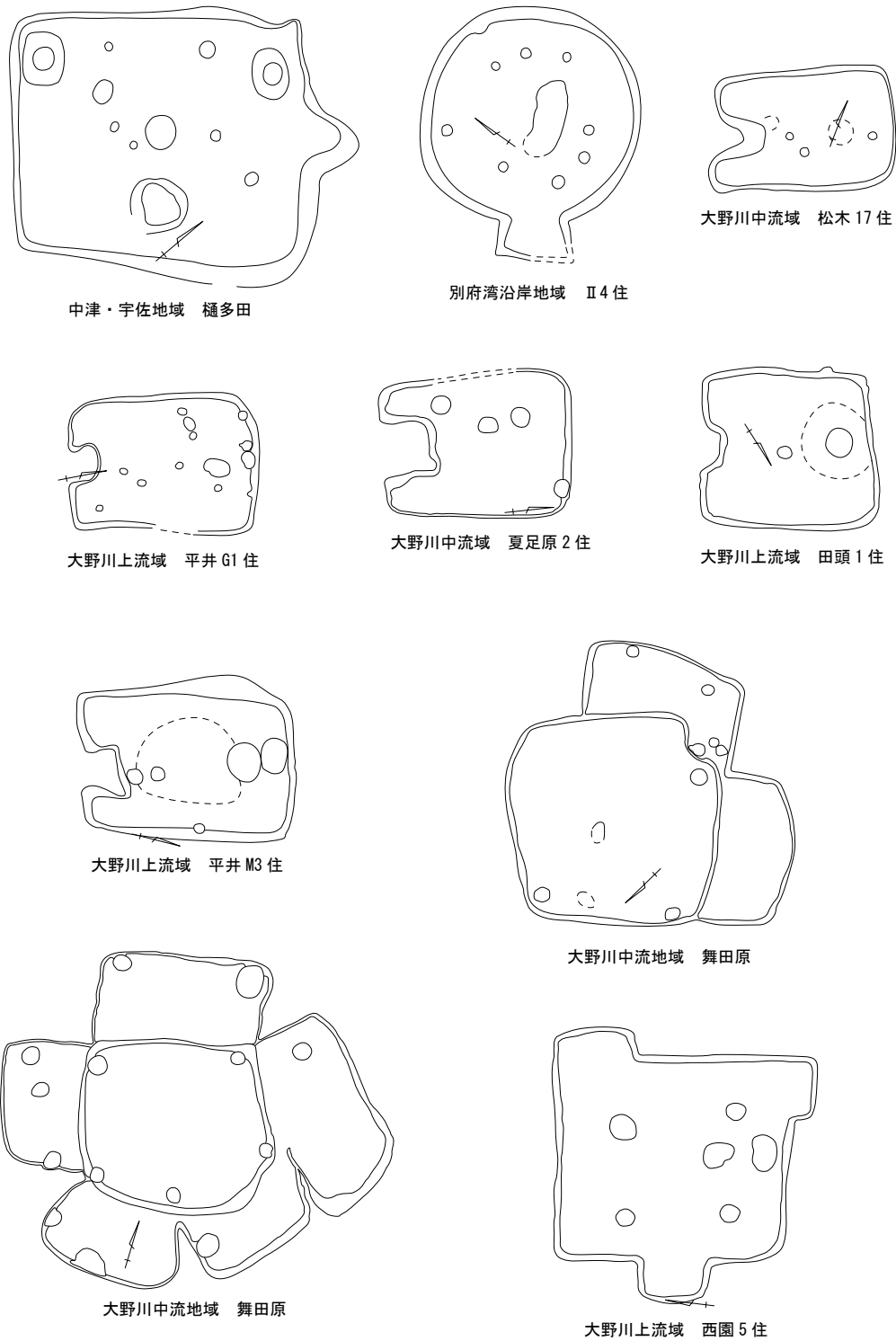
大分県竹田市 脇遺跡（弥生時代中期後半～後期前半）



100 図 脇遺跡張り出し住居跡

縮尺不統一

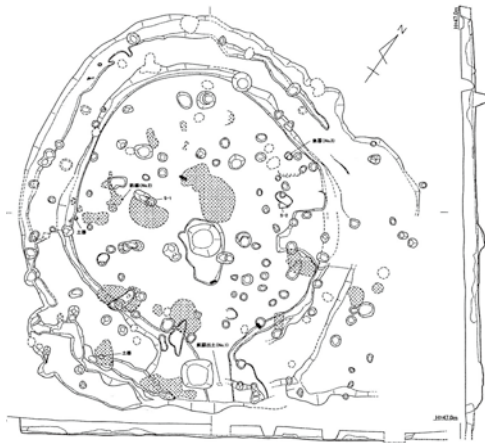
樋多田遺跡（中期中頭～前半） 守岡遺跡（後期後半～終末） 松木遺跡（後期初頭～前半） 平井遺跡（後期中頃） 夏足原遺跡（後期中頃） 田頭遺跡（後期中頃） 舞田原遺跡（中期中頃～中期後半） 西園遺跡（中期中頃）



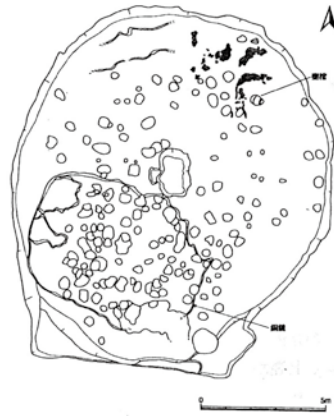
第101図 大分県内の張り出し住居跡

長崎県南島原市 高原遺跡（弥生時代後期）

長崎県雲仙市 佃遺跡（弥生時代中期後半～後期前半）

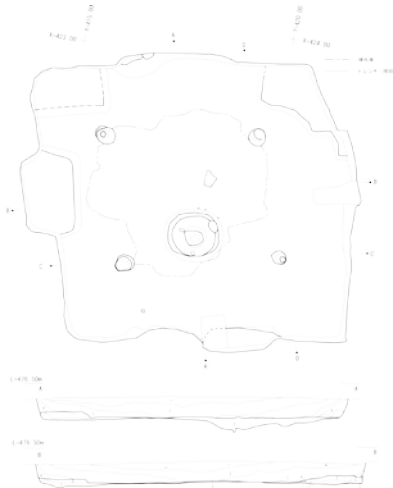


第 102 図 高原遺跡 1 区 1 号張り出し住居跡

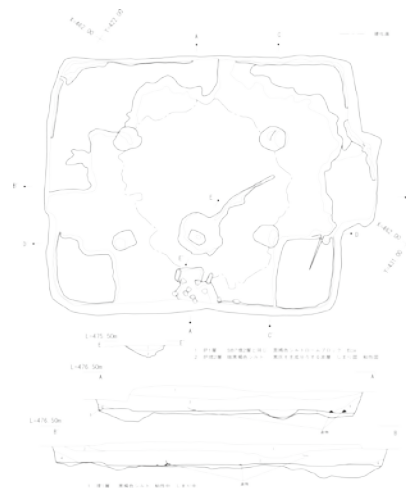


第 103 図 佃遺跡 87 区 SB-1 張り出し住居跡

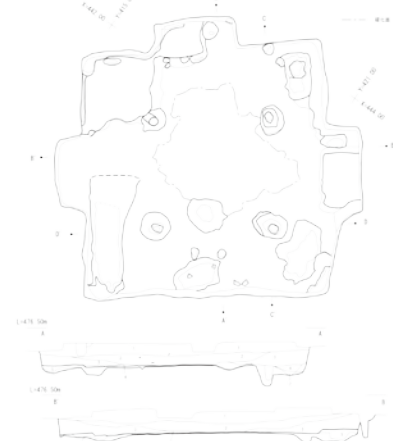
熊本県阿蘇市 小野原遺跡群（弥生時代後期前半～中頃）



SB1



SB7



SB11

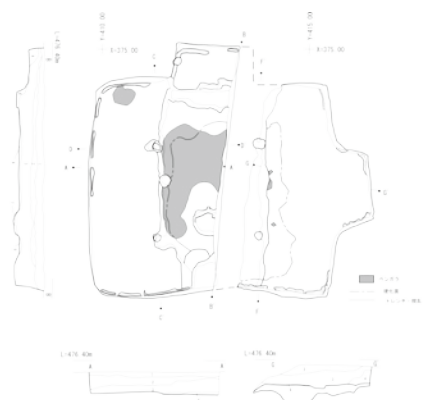


SB56

第 104-1 図 小野原遺跡群張り出し住居跡

縮尺不統一

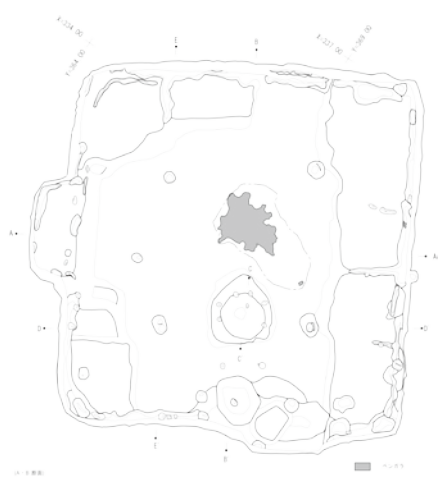
熊本県阿蘇市 小野原遺跡群



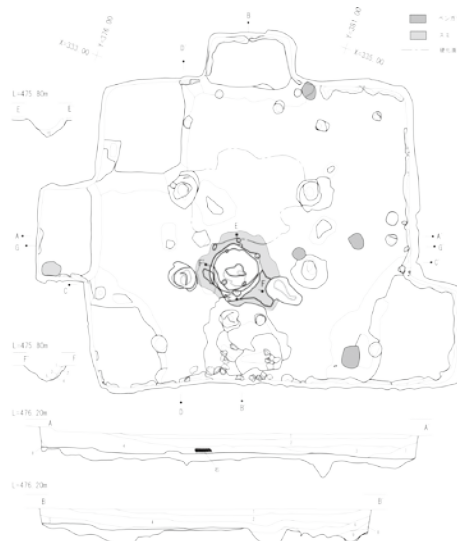
SB82



SB86



SB152

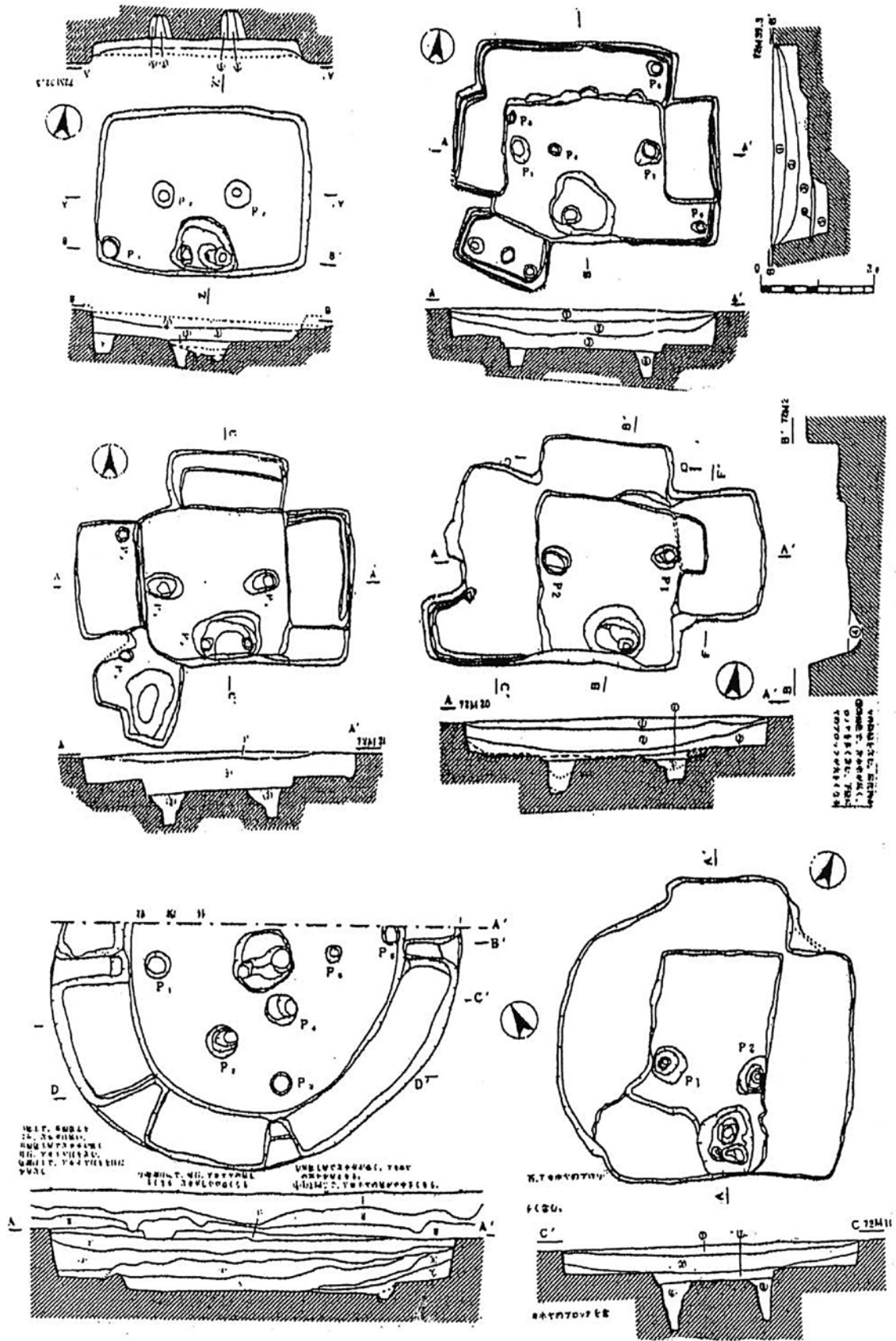


SB161

第 104-2 図 小野原遺跡群張り出し住居跡

縮尺不統一

鹿児島県鹿屋市 王子遺跡（弥生時代中期～後期初頭）



第 105 図 王子遺跡張り出し住居跡

縮尺不統一

(3) 住居跡出土のガラス小玉について

竹松遺跡において住居跡からガラス小玉が出土する事は201303調査区など2013年度の竹松遺跡の調査段階で確認されていた。201303調査区のSC123では17個を数え最も多い。住居跡の存続時期は出土遺物から弥生後期前半から後半頃と考えられる。

こうした状況を踏まえ201408調査区のSC01からもガラス小玉が出土する可能性は充分考えられた。そこで次の掘削方法でガラス小玉の有無を確認することにした。

掘削方法は、住居跡の平面プランから長軸の土層ベルトを南北方向に長軸をとり、円形部分で長軸ベルトに直行する土層ベルトを東西方向に設定し短軸とした（十字形）。これを基準に掘削を行うこととし、北西から時計回りに①～④と付し、埋土、貼床、堀方、張り出し部、住居内遺構(SK、SP、周溝)に分けガラス小玉及び土器等の取り上げを行った。埋土は全て採取し後日ふるいにかけることにした。床面までの掘削は数回に分けて行った(第15図)。

その結果はSC01からガラス小玉181個が出土した。完形等は173個、破損等は8個である。蛍光X線分析の結果から全てカリガラスであることが判明した。またガラス小玉の肉眼観察から「気泡や不純物が、孔と平行方向に引き伸ばされた状態」等から引き伸ばし技法で製作されたガラス小玉であることが指摘された(谷澤、片多)。

今回出土したガラス小玉の色調は淡青色と紺色の2色で、最大径は2～5mmの範疇に収まる(第42-1、2表)。内訳は2mm台が50個、3mm台が93個、4mm台が27個、5mm台が3個である。全てが6mm以下であること。単色であること。引き伸ばし技法であることから考えてインド・パシフィックビーズである。

ところで住居跡からガラス小玉が出土する事例は全国的に知られている。都道府県で概観すると、福岡、佐賀、長崎、大分、熊本、宮崎、鹿児島、山口、鳥取、広島、岡山、香川、愛媛、高知、兵庫、大阪、京都、和歌山、愛知、静岡、神奈川、長野、千葉、埼玉、茨木、栃木、群馬、宮城で確認されている(藤田等1994)。これらの地域では一軒の住居跡からガラス小玉が1～28個程、多いもので60個程が出土している。100個以上の出土は福岡、長崎、熊本で確認されている。福岡県筑紫野市「以来尺遺跡」144号C住居跡ではガラス小玉189個のほか、栗玉7個、ガラス製管玉2個等が、浮羽市吉井町「吉井中学校遺跡第1地点」15号竪穴住居跡からはガラス小玉から165個、小郡市「三国の鼻遺跡」73号住居跡から106個、熊本県「小野原遺跡群」SB161から343個が出土した。小野原遺跡群SB161例は2016年現在で一軒の住居跡からのガラス小玉出土数は全国最多を数える。

小野原遺跡群SB161のガラス小玉の出土状況は埋土1から4個、埋土2から97個、埋土3から234個、土坑及び柱穴、炉等から8個である。ガラス小玉の最大径は2mm～6mmの範疇に収まる。内訳は2mm台が60個、3mm台が175個、4mm台が68個、5mm台が5個、6mm台が1個である(宮崎、谷澤2010)。住居跡の平面プランは正方形で南北6.4m×東西7.0m、深さ0.5mを測り、住居の3辺に2m×1m程の張り出し部を有する。また張り出し部の床面ではベンガラのかげが5箇所確認された。張り出し部を有する住居跡であることは竹松遺跡201408SC01と同類である。

今のところガラス小玉が多量に出土している地域は北部九州(福岡、長崎、熊本)に限定される。いずれも弥生時代後期前半以降である。

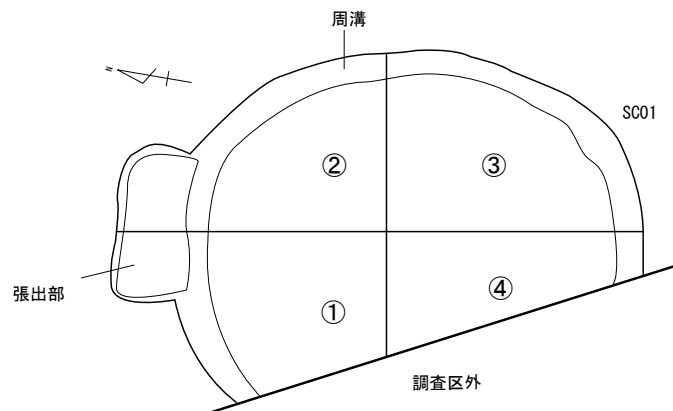
各地域の住居跡からの出土の状況は床面直上、住居内土坑、炉、覆土で、住居内の特定エリア

からの出土ではなく、住居内全体から出土する様相を示す。今回調査した竹松遺跡201408SC01もまたガラス小玉が出土した場所は、出土個数一覧表（第43表）からわかるように特定のエリアからではなく住居跡全体からの出土である。この中で注目するのは掘方から出土していることである。竪穴住居を構築する際、掘方段階でガラス小玉23個がすでに埋蔵されていたことである。

また住居跡内の土器等は破片が多く散発的に出土する状況から考えて竹松遺跡201408SC01は廃絶住居の様相を呈する。ガラス小玉の出土は埋土、貼床上面、柱穴、屋内土坑、周溝から出土している。こうした出土状況から考えて廃絶時にガラス小玉を「まく」行為を行ったと理解できるのではないだろうか。ガラス小玉は装飾品であり威信財である。こうした威信財を構築時、廃絶時に「まく」という行為は祭祀の様相を呈する、鎮物(しづめもの)として行ったものなのか。地鎮祭で行われている行為の中で、古くは石やガラス玉、人形(ひとがた)、鏡、模造の矛や剣などが鎮物として収められた例からして、同様の行為と考えるのは早計だろうか。住居跡からガラス小玉が出土する例は九州から東北宮城県まで存在する。しかしながら、ガラス小玉の出土状況についての詳細な資料は今のところ少ない。弥生時代、古墳時代の住居跡から出土するガラス小玉の出土状況の資料を蓄積し歴史的な位置付けを行うことが今後の課題であろう。

第43表 SC01ガラス小玉出土場所個数一覧

番号	出土箇所	出土数	淡青色	紺色
埋土	①区画	51	6	45
	②区画	20	5	15
	③区画	44	16	28
	④区画	8	2	6
	張出部	1	0	1
貼床	①区画	2	1	1
	②区画	2	0	2
	③区画	5	0	5
	④区画	6	1	5
	張出部	1	1	0
掘方	①区画	6	0	6
	②区画	11	0	11
	③区画	1	0	1
	④区画	4	1	3
	張出部	1	0	1
住居内遺構	SP3	2	1	1
	SK2	1	0	1
	SK3	2	2	0
	周溝	2	0	2
不明		11	0	11
合計		181	36	145



第15図 ガラス小玉採取方法（略図）

※不明の11点は土のう袋に黒マジックで書いていた出土地が消えたためである。

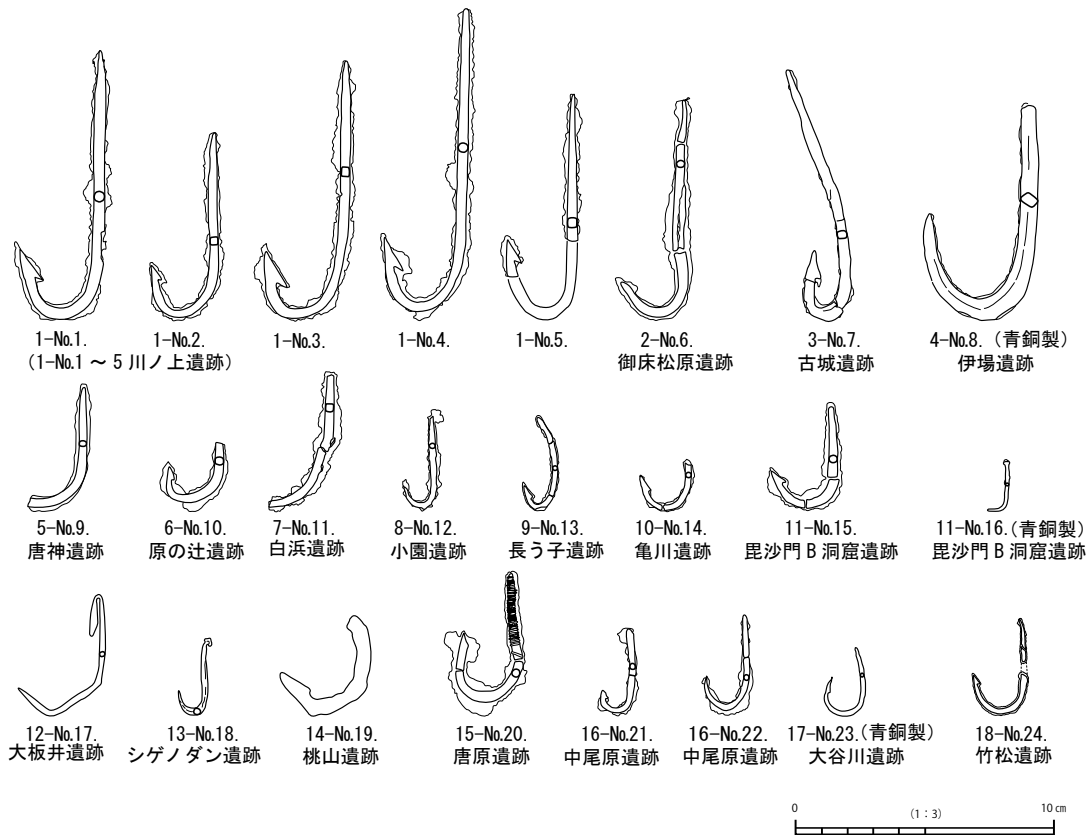
(4) 弥生鉄製釣針(青銅製を含む)について

鉄製釣針については渡辺誠氏、川越哲志氏の先行研究に沿って進める。竹松遺跡201408調査区SC01(張り出し住居)からは鉄製の釣針が出土した。張り出し部で軸部片、床面で腰部片が確認されているが同一品である。釣針は軸部の一部が欠損している。法量は復元高3.7cm、幅2.05cm、直径0.42cm、断面形状は角形である。針部先端は尖り、鋸(あぐ)は内側にある。形状は「し」の字状の単式釣針である。渡辺誠氏の形態分類に当てはめるとIb類である。

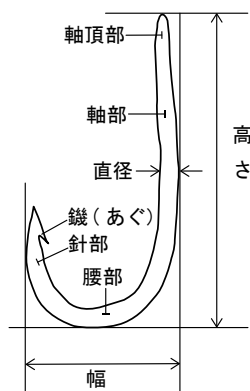
弥生時代の鉄製釣針は2000年段階で全国22遺跡から28点の出土がある。この中で最も古い釣り針は福岡県小郡市「大板井遺跡」6号祭祀土坑床面からの出土で中期中葉頃が考えられている。高さ

5.7cm、幅3.7cm、直径2.5mmを測る。針部先端は尖り鋸はない。10cm程の細長い鉄棒を折り曲げて作製したもので全体的に稚拙な造りである。

その他の釣針は後期前半～終末(一部古墳時代前半)までのものである。2014年段階で竹松遺跡の1点を加え23遺跡、30点を数える(この内実測図掲載は24点)。30点のうち青銅製釣針が4点出土している。釣針の分布は九州から神奈川県までの海岸近くの遺跡に多く出土している。しかし長野県大町市「古城遺跡」、大分県竹田市「小園遺跡」は標高715m～486m程の山岳盆地に位置する遺跡である。遺跡の立地場所から勘案して内水面での漁労が想定できる。



第 106 図 弥生時代釣針一覧 (1/3)



第 107 図 釣針の部位名称



図版 151 竹松遺跡 (TAK201408 調査区)
SC01 出土鉄製釣針のレントゲン写真



図版 152 SC01 出土
鉄製釣針

※ 1～11、15～17は『考古資料ソフテックス写真集第15集』名古屋大学文学部考古学研究室(2000.3)より、弥生時代(主に後期)出土遺物を再トレースした。12～14は『弥生時代の鉄器文化』川越哲志著(雄山閣出版)より再トレースした。

第44表 弥生時代釣針一覧表

遺跡番号	遺物番号	遺跡名	所在地	出土数	サイズ	時代	形態	高さ	幅	直径	断面形	備考
1	No1	川ノ上遺跡	福岡県みやこ町(旧豊津町)	5点	超大型	後期	I b	10.5	3.2	0.4	丸形	完形
1	No2	川ノ上遺跡	福岡県みやこ町(旧豊津町)		超大型	後期	I b	7.1	2.6	0.3	角形	完形
1	No3	川ノ上遺跡	福岡県みやこ町(旧豊津町)		超大型	後期	I b	9.8	3.2	0.4	角形	完形
1	No4	川ノ上遺跡	福岡県みやこ町(旧豊津町)		超大型	後期	I b	11.5	2.9	0.4	丸形	完形
1	No5	川ノ上遺跡	福岡県みやこ町(旧豊津町)		超大型	後期	I b	(8.5)	(2.7)	(0.35)	角形	復元高
2	No6	御床松原遺跡	福岡県糸島市(旧志摩町)	1点	超大型	終末	I a	7.3	1.5	0.3~0.4	長方形	完形
3	No7	古城遺跡	長野県大町市	1点	超大型	後期	I b	9.5	1.8	0.4	角形	完形
4	No8	伊場遺跡	静岡県浜松市	1点	超大型	後期前半	I a	8.1	4.4	0.8	角形	青銅製
5	No9	唐神貝塚	長崎県壱岐市	1点	大型	後期	I ?	5.4	(2.2)	0.3	丸形	針部欠
6	No10	原ノ辻遺跡	長崎県壱岐市	1点	大型?	後期(終末?)	I b	(2.3)	2.1	0.3	丸形	軸頂部欠
7	No11	白浜貝塚	三重県鳥羽市	1点	大型?	後期	I ?	(4.9)	(1.9)	0.3	角形	軸部破片
8	No12	小園遺跡	大分県竹田市	1点	中型	後期	I a	3.5	1.2	0.2	丸形	完形
9	No13	長う子遺跡	広島県広島市	1点	中型	後期	I b	3.6	1.0	0.15	方形	完形
10	No14	亀川遺跡	和歌山県南海市	1点	中型?	弥生	I b	(1.8)	2.0	0.2	角形	軸頂部欠
11	No15	里沙門B洞窟遺跡	神奈川県三浦市	2点	中型	後期	I b	3.9	2.7	0.4	丸形	完形
11	No16	里沙門B洞窟遺跡	神奈川県三浦市		小型	後期	I a	1.9	0.9	0.1	角形	完形 青銅製
12	No17	大板井遺跡	福岡県小郡市	1点	大型	中期中葉	I a	5.7	3.7	0.25	方形	祭祀土坑床面から出土
13	No18	シゲノダン遺跡	長崎県対馬市	1点	大型	後期初頭~前半	I d	6.0	2.5	0.5~0.75	長方形	軸部、針部欠
14	No19	桃山遺跡	岡山県真庭市	1点	小型?	終末~古墳初	I b					鏝なし針部のみ約3.5cmが遺存
15	No20	唐原遺跡	福岡県福岡市	1点	大型	終末~古墳初	I a	5.1	2.6	0.4	丸形	完形
16	No21	中尾原遺跡	宮崎県延岡市	2点	小型	終末~古墳初	I b	3.2	1.75	0.2	丸形	完形
16	No22	中尾原遺跡	宮崎県延岡市		小型	終末~古墳初	I b	3.6	1.8	0.2	丸形	完形 青銅製
17	No23	大谷川遺跡	和歌山県和歌山市	1点	小型	弥生~古墳	I b	2.6	1.5	0.2	丸形	完形
18	No24	竹松遺跡	長崎県大村市	1点	中型	後期前半~中頃	I b	(3.7)	2.05	0.42	角形	軸部一部欠損
19		上能野貝塚	鹿児島県種子島西之表市	1点	?	後期~古墳	I b					軸頂部欠損 実測図掲載なし
20		会下山遺跡	兵庫県芦屋市	1点	?	後期						実測図掲載なし
21		福荷台地D地点遺跡	神奈川県藤沢市	2点	?	弥生						実測図掲載なし
22		広田貝塚	鹿児島県南種子島町	1点	?	前期~古墳						実測図掲載なし
23		博労町遺跡	大阪府大阪市中央区	1点	?	弥生						実測図掲載なし 青銅製

(法量はcm)

渡辺 誠氏の『鉄製釣針の研究』、川越哲志氏の『弥生時代の鉄器文化』から弥生時代の釣針だけを掲載した。

サイズ、形態、高さ、幅、断面形態等は渡辺誠氏の『鉄製釣針の研究』に準拠した。

渡辺 誠『鉄製釣針の研究』考古資料ソフテックス写真集 第15集 2000年 名古屋大学文学部考古学研究室

(5) 長崎県内の水田について

竹松遺跡で水田遺構が確認されたため県内の水田遺構を概観しまとめたい。

長崎県内の水田遺構は5遺跡で確認されている。1. 佐世保市「四反田遺跡」、2. 壱岐市「原の辻遺跡」、3. 大村市「石走遺跡」、4. 「竹松遺跡」、5. 平戸市「里田原遺跡」である。以下概要を説明する。

1. 「四反田遺跡」は佐世保市下本山町に所在し、平成2年~4年まで3回にわたり発掘調査を実施している。水田は河川の氾濫で水田面(耕作土)が削平され水田底面が残ったものである。水路(1号溝)は北東~南西に直線的に構築され最大幅1.3m(平均1m)、深さ0.3m、断面U字形を呈する。土堤(溝畔)は検出されていないが水田面とともに削平されたものであろう。水田の形状は正方形、長方形、台形等で画一的ではない。水口は検出されていないが小畦畔が狭まった場所が数箇所あることからその痕跡と考えられている。水路から出土した土器から弥生時代中期初頭の水田である(第108図)。

2. 「原の辻遺跡」は壱岐市石田町池田仲触に所在する。平成8年~14年までの調査で弥生時代から古代までの水田跡が検出されている。特に平成12年度に調査された水田の残りが良いためこの資料を扱う。水田跡は2枚検出し、形状は長方形である。畦畔は北東~南西に延びる幅0.7m、長さ4.5mを検出している。畦畔は粘土で構築されており、5、6号溝(水路)に伴う土堤(溝畔)である。この芯材である木片は水田内に散乱した状況で検出されている。畦畔や土堤(溝畔)には杭列が一部検出されているが板状木材を使用している。一部の板状木材は田下駄の板片である(第108図)。

3. 「石走遺跡」は大村市皆同町に所在する。平成26年に河川拡幅工事に伴い実施した調査で古

墳から中世にかけての水路3条、木杭列(KR2、KR3)2列及び水田が検出されている。2条の水路MZS4(新)、MZS6(旧)は切り合い関係を示す。木杭列KR2、KR3は北東から南東方向にほぼ並行に構築されている。並行間距離は15mと長く、その間に小畦畔の構築の可能性を示唆している。また木杭列KR2、KR3は僅かに隆起する箇所は認められたものの畦畔とは認定しがたいものであったと調査担当者は消極的であるが杭列の内、縦杭列の配置、それに伴う横木等の検出状況からみて畦畔であろう。水田の存続時期は古墳時代から中近世にかけて生産活動が行われた様相を示している(第108図)。

4. 「竹松遺跡」は大村市竹松町1042番1他に所在する。中世末から近世の水田を5調査区(TAK201405、TAK201406、TAK201408、TAK201502、TAK201504)で検出した。以下概要を説明する。

TAK201405調査区では北東側で僅かな面積ではあるが、水田面2枚、水路、畦畔を検出した。水田面の形状は調査区外に広がっているため定かではないが長方形?であろうか。水路西側は土堤(溝畔)を構築しているが東側は調査区の境界であるため判然としない。幅1.3m、長さは23m+での字状に曲がり、芯材は拳大からやや大きめの礫を使用している。水路の北端は1m程の巨大な石で水を堰き止め流れを東側に変え一段低い水田に水を供給するように構築されている。水田の時期は近世頃である(第109図)。

TAK201406調査区では南(②区)で概ね東西方向に2本の畦畔を検出した。芯材に自然礫を使用しそれを粘土で覆った構造をとる。第Ⅱ層下層より畦の隆起が確認された。この畦畔周辺、特に調査区南端側に粘質土が広がる。畦畔からは同安窯系青磁碗が出土しており、12世紀後半以降に耕作を行っていたと考えられる(第110図)。

TAK201408調査区では水路2条(SD01、02)、土堤(溝畔)、畦畔(東西3本、南北1本)、第1水田面7枚、第2水田面4枚を検出した。水田面では足跡(人、牛)も検出した。水路はSD01、02とも並行して構築されておりSD02が氾濫により埋没し、その後SD01が構築された。土堤(溝畔)、畦畔ともに芯材は石で人頭大、拳大等の円礫で構築されている。水田の耕作土は弱粘質土で砂層を含む。水田の形状は長方形、台形、不整形等で統一性にかける。出土遺物は中世末から近世の陶磁器であることから水田の生産時期もこの時期にあると考える(第110図)。

TAK201502調査区ではA、B、C、Dの調査区を設定した。水田面の可能性を検出した調査区はA、D区で調査区Aは3面?、Dは2面?を検出した。B調査区は石列、C調査区は遺構が存在しなかった。遺物の出土は各水田面に弥生~14世紀の遺物が混入している(第111図)。

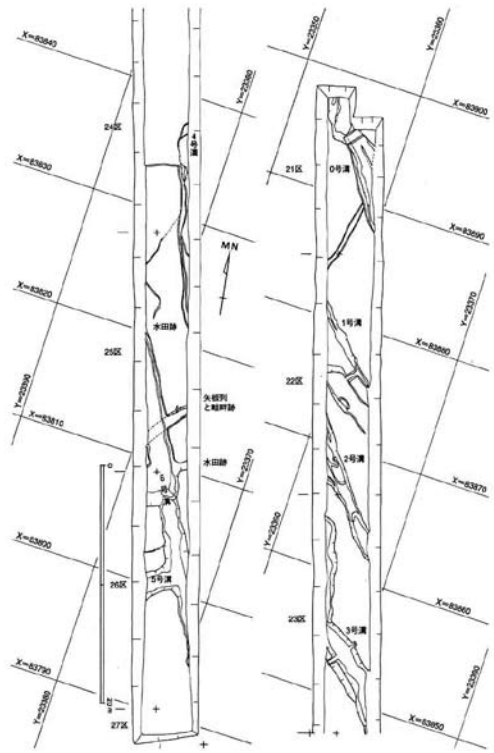
TAK201504調査区ではA、B調査区に分かれる。水田跡はA調査区で検出した。南北方向の畦畔約9m、東西方向の畦畔約10m、幅50cm、高さ10cmを確認した。畦畔の周囲には、東西25m、南北15mの範囲で粘土層が確認でき、水田畦畔に伴う耕作土及び床土と考えられる。土層断面の観察では、旧河道堆積物である砂質土の上に、厚さ5~10cmほど粘土を貼った状況を確認できた。水田検出面では、見込みに蛇ノ目釉剥ぎが残る肥前陶磁が出土しており、18世紀以降の水田と考えられる。なお、南北に延びる水田畦畔の南側は、現代の水田に伴う石垣が起点となっており、現在の石垣や水田区画の一部は、この時期以降に整備されたものが含まれると考えられる(第111図)。

SD12は、A1~A2にかけて長さ40mに渡って検出した遺構で、北東から南西方向に延びる(第4図)。溝の南側は人頭大の礫を3~4段積み上げた裏込めを伴う石垣であるが、北側は素掘りである。ま

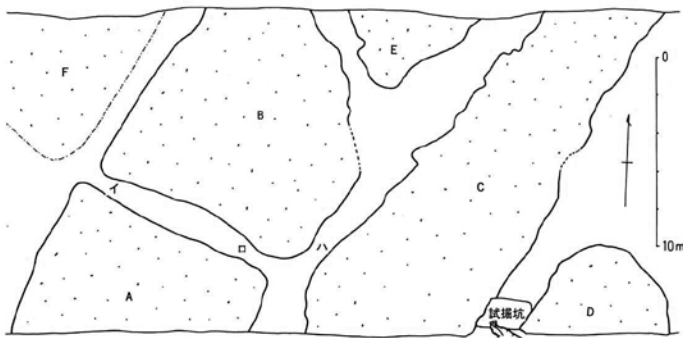
た、西側では溝の北側の立ち上がりが後世の削平により失われている。幅は5mほどで、東側では2mおきに短冊状に石積みで区画している状況を確認した。区画内の床面には粘土が堆積し、その上には拳大の礫が密に詰まっている。時期は出土遺物から18世紀以降と推測される。SD12の東側では、郡川からの氾濫によるとみられる北東から南西方向の自然流路の痕跡が複数確認でき、SD12は何らかの排水施設の一部と考えられる。SD33は、A4区で長さ25mにわたって検出した遺構で、砂礫層を掘り込んで南東から北西方向に延びる。最大幅4m、深さ0.6mの規模である。特徴は北側の掘肩が垂直に立ち上がる点にある。また、立ち上がり周辺の床面からは、矢板の痕跡とみられる小ピットや幅狭の溝状遺構を確認した。水田遺構に伴う水路の可能性を考えたが、水田畦畔や耕作土と考えられる粘質土は周辺では確認できなかった。溝内からは、玉縁口縁の白磁を主体に、わずかに鎬蓮弁文の青磁も含むことから、13世紀頃の溝状遺構と推測される。

5. 「里田原遺跡」は平戸市田平町里免に所在する。田平町里免(さとめん)は東西1km、南北800m程の盆地で周囲は30m程の低丘陵からなる。現在圃場整備事業で平坦な水田地帯になっているが以前は海岸方向になだらかに傾斜していたという。昭和47年に第1次調査が開始され平成24年までに第55次調査を完了している。平成4年に実施した第28次、第29次調査で良好な水田遺構が発見された。遺構は畦畔、水田面、水口、堰を検出した。出土遺物から弥生時代前期後半頃(板付Ⅱ式)が考えられている。水田の形状は判然としないが、杭列から判断して長方形を呈するものと考えられる。堰は幅9.5mの河川に縦杭と横木を組み合わせ、更に人頭大の円礫を芯材として構築されている。幅は1.6m程である。この盆地内には過去の調査から小河川が数本流れており弥生時代中期段階では角材を使用した水門が構築されている。第28次、第29次調査の報告書は未報告であるため詳細は本報告を待ちたい(第109図)。

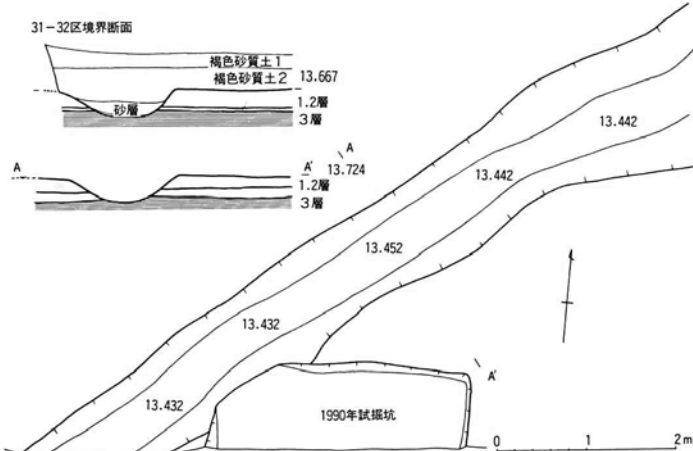
以上県内の水田跡を概観してきたが、県内は平地を有する面積が少なく、水稻栽培が積極的な生産活動へと発展しなかった。その中で県内最古の水田遺構は前期後半の「里田原遺跡」である(2016年段階)。里田原遺跡の場合以前の調査から板付Ⅰ式の範疇に入る土器片が包含層から出土していることが知られている(第26次調査)。こうしたことから更に遡る時期の水田跡が確認される可能性がある。その後の里田原遺跡は条里跡が確認できる。時代は定かではないが周辺から出土した瓦、土器から古代末頃と想定されている。里田原遺跡が存在する盆地は今日まで稲作生産を行っている。また発掘調査で水田跡が確認されていない諫早市、雲仙市(旧高来郡)は古代において条里が確認されている。諫早市田井原条里、小野条里、里名条里、雲仙市山田・守山条里、伊古条里、神代条里、土黒条里である。しかしながら弥生時代、古墳時代の水田跡は今のところ確認されていない。この地域は銅剣、中細銅矛を保有する集団の存在、その後本土部最大の前方後円墳守山大塚古墳を築造する首長の存在等を考えると、この地域の生産基盤の一つは水田生産があるものと考えられる。こうしたことから考えて弥生、古墳時代の水田跡は必ず存在するものと思われる。今後の発掘調査に期待するものである。



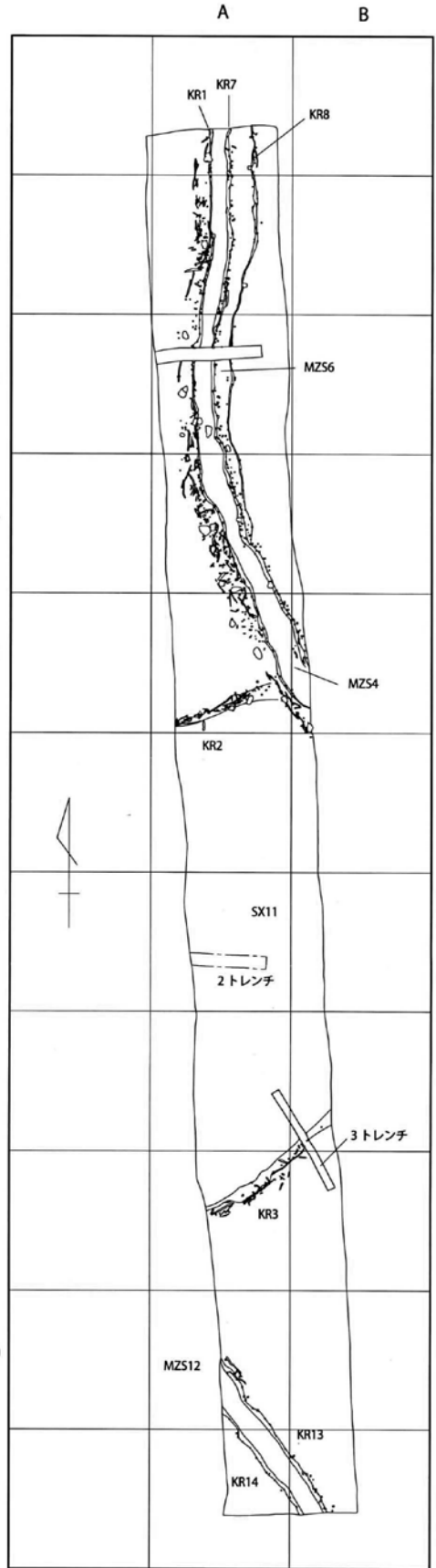
原の辻遺跡 (23集、2001年)



四反田遺跡 (水田、畦畔)

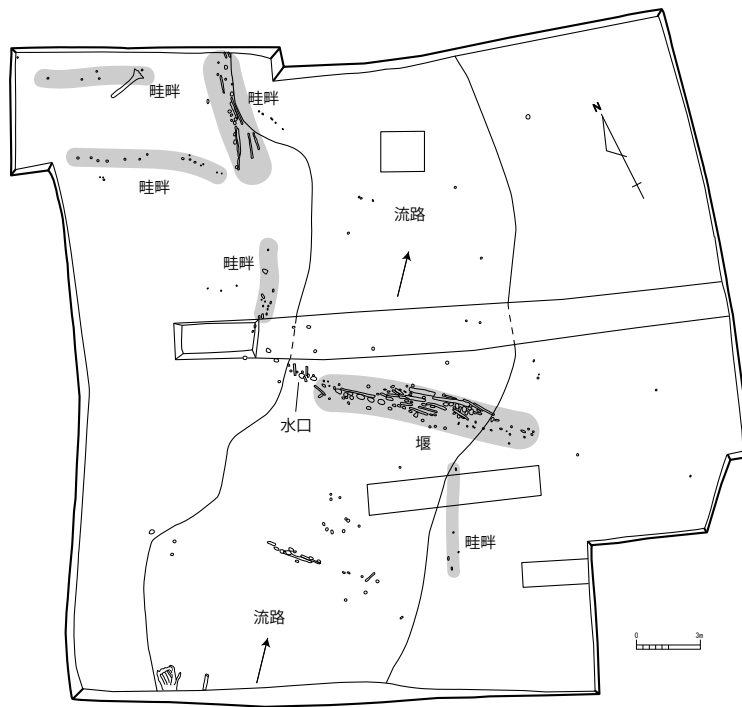


四反田遺跡 (水路)



石走遺跡

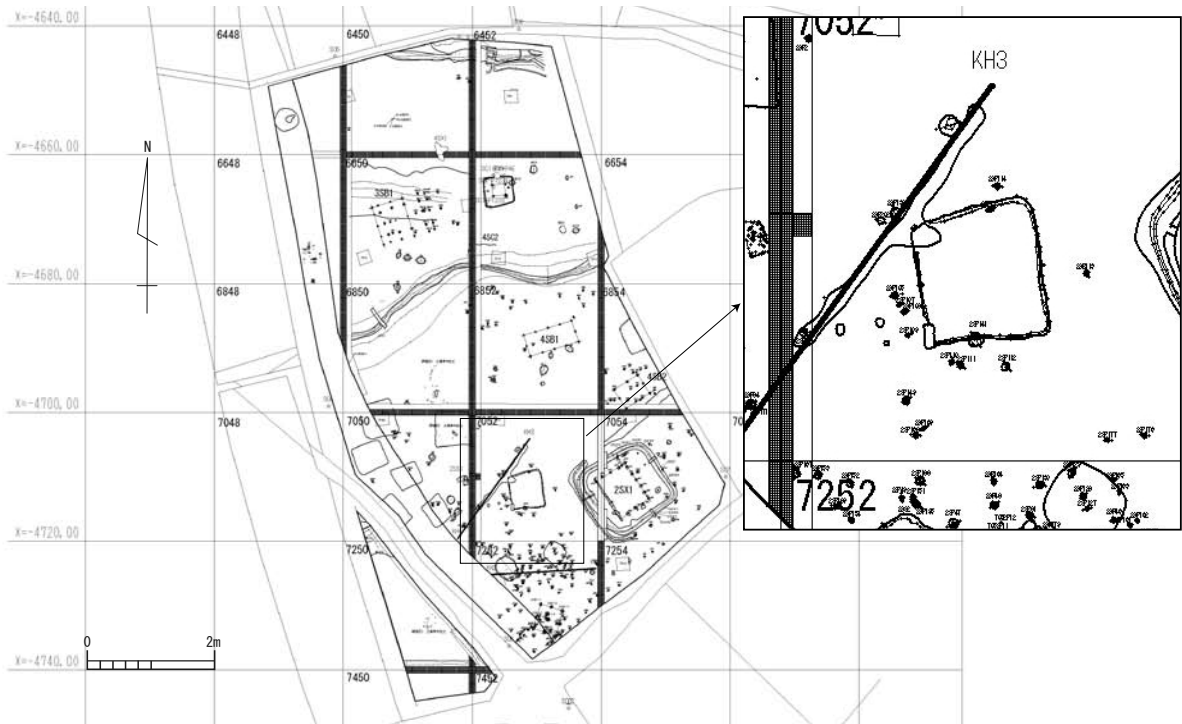
第108図 水田遺構平面図その1(原の辻、四反田、石走遺跡)



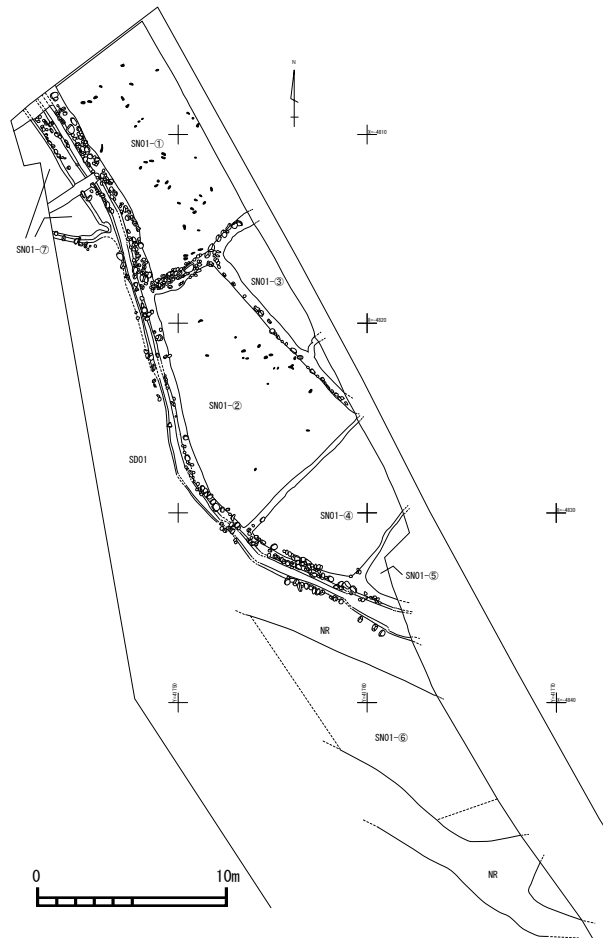
里田原遺跡（第28次・第29次調査）



第109図 水田遺構平面図その2（里田原、竹松遺跡）

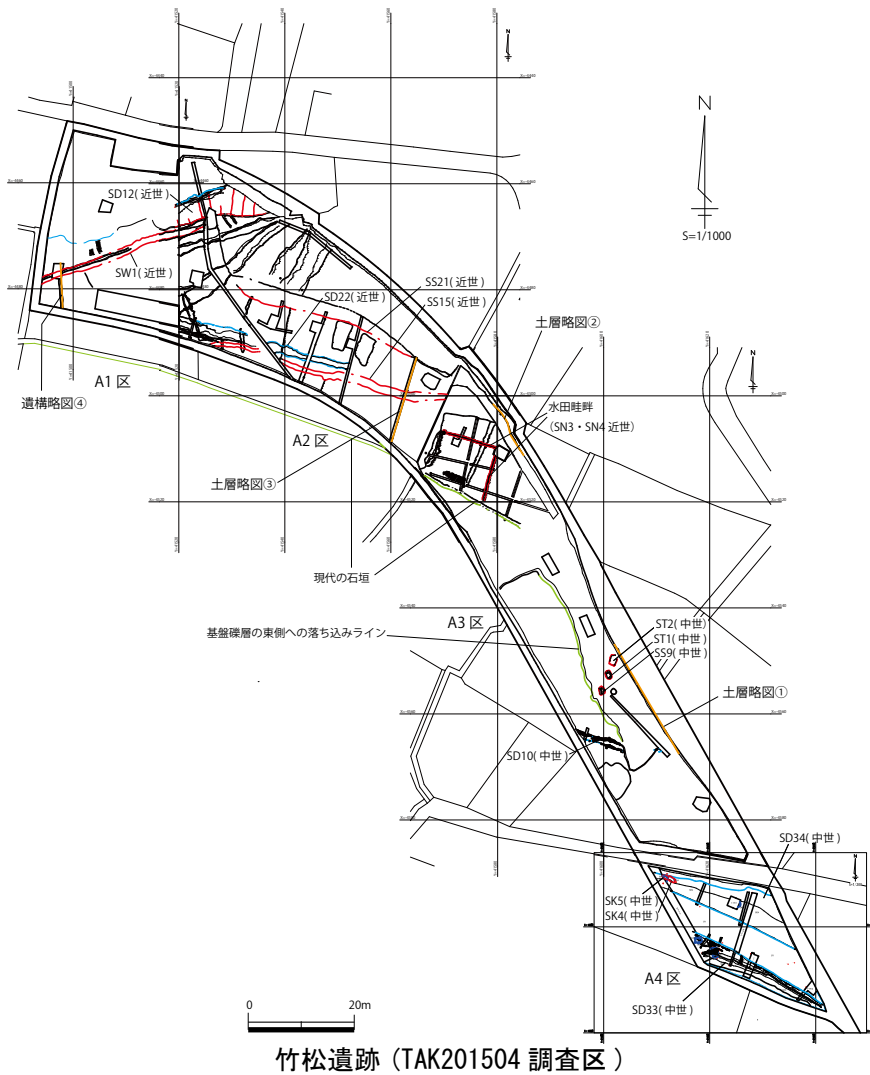
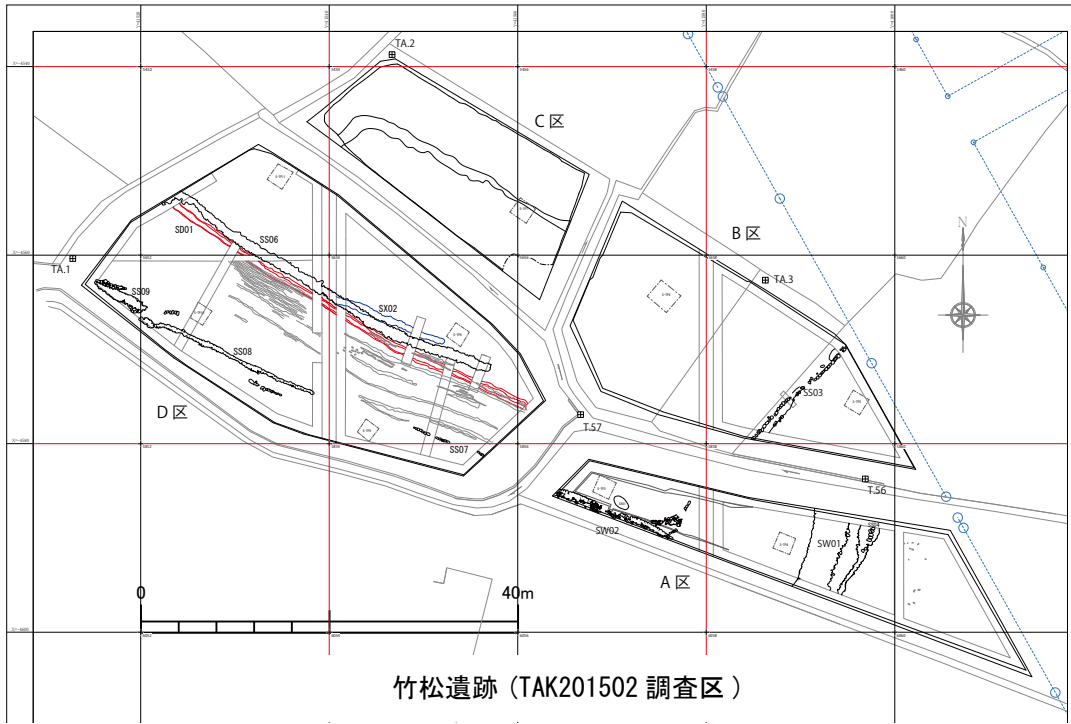


竹松遺跡 (TAK201406 調査区)



竹松遺跡 (TAK201408 調査区)

第 110 図 水田遺構平面図その 3(竹松遺跡)



第111図 水田遺構平面図その4(竹松遺跡)

引用・参考文献

張り出し住居跡関係引用・参考文献

- 清水 宗昭 栗田 勝弘 城戸 誠編1985『舞田原遺跡』大分県犬飼町教育委員会
1989『大分県史』先史Ⅱ
- 甲斐 昭光1992「竪穴住居について」山田清朝・甲斐昭光・高瀬一嘉編『川除・藤ノ木遺跡』兵庫県教育委員会
- 山村 信榮編1998『前田遺跡第7次・宮ノ本遺跡第9次』大宰府市文化財調査報告書第39集 大宰府市教育委員会
- 山本 和子 2001「弥生時代の張り出し住居考」『ひょうご考古』第7号 兵庫考古研究会
- 栗田 勝弘 清水 宗昭編2001『鹿道原遺跡』千歳村文化財調査報告書第Ⅶ集 大分県千歳村教育委員会
- 柳田 康雄 2002『九州弥生時代の研究』学生社
- 櫛浦 幸徳編2003『脇遺跡』久住町文化財調査報告書第16集 久住町教育委員会
- 梅木 謙一2004「四国・南九州間における凹線文土器の交流」『西南四国-九州間の交流に関する考古学的研究』課題番号14510428b平成14年度～平成15年度科学研究費補助金（基礎研究（C）（1））下條信行
- 西谷 彰2005「弥生時代における土器の長距離移動」『待兼山考古学論集』都出比呂志先生退任記念 大阪大学考古学研究室
- 棚田 昭仁 坂梨 祐子編2005『鬼木四反田遺跡（遺構編）・鳥越今井野遺跡』川原田遺跡群Ⅳ 豊前市文化財調査報告書第20集 豊前市教育委員会
- 棚田 昭仁 坂梨 祐子編2006『鬼木四反田遺跡（遺構編）・鳥越今井野遺跡』川原田遺跡群Ⅴ 豊前市文化財調査報告書第21集 豊前市教育委員会 若杉 竜太編2006『高野遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第65集 日田市教育委員会
- 田川 肇 高野 晋司他 2007『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第35集 長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所
- 行時 桂子編2007『祇園原遺跡Ⅱ』（遺構編）日田市埋蔵文化財調査報告書第81集 日田市教育委員会
- 土居 和幸 行時 志郎 今田 秀樹編2007『葛原遺跡Ⅲ』日田市埋蔵文化財調査報告書第79集 日田市教育委員会
- 辻田 直人 2008『佃遺跡』雲仙市文化財調査報告書（概報）第4集
- 荒井 孝廣編2009『宇土遺跡（A・B地点）・長尾遺跡・北尾鶴遺跡』竹田市教育委員会
- 若杉 竜太編2009『求来里の遺跡Ⅱ』日田市埋蔵文化財調査報告書第89集 日田市教育委員会
- 若杉 竜太編2010『求来里の遺跡Ⅲ・小西遺跡の調査』日田市埋蔵文化財調査報告書第91集 日田市教育委員会
- 末永 浩一 佐藤 信 塩濱 浩之編2009『下唐原伊柳遺跡Ⅱ（遺物編） 下唐原石堂遺跡 下唐原桑野遺跡』上毛町文化財調査報告書第9集

ガラス小玉関係引用・参考文献

- 藤田 等 1994『弥生時代ガラスの研究』株式会社名著出版
- 中間 研志 吉村 靖徳編 1998『貝元遺跡Ⅰ』九州自動車筑紫野IC建設に伴う筑紫野市所在弥生・古墳時代大集落の発掘調査報告 福岡県教育委員会
- 中間 研志 小池 史哲 吉村 靖徳他編 1999『貝元遺跡Ⅱ』九州自動車筑紫野IC建設に伴う筑紫野市所在弥生・古墳時代大集落の発掘調査報告 福岡県教育委員会
- 角南 聡一郎 2001『旧練兵場遺跡』「Ⅵ. 付論 住居跡出土ガラス小玉の意義」善通寺市宮西仙遊町住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘報告書
- 井 英明 2004「福岡県下における玉類を出土する竪穴式住居跡の研究的予察」専修考古学第10号
- 谷澤 亜里 2010「小野原遺跡群出土のガラス製品」熊本県文化財調査報告第257集 黒川広域基幹河川改修事業に伴う埋蔵文化財調査報告第分冊抜粋

宮崎 敬士編 2010『小野原遺跡群』熊本県文化財調査報告第257集 黒川広域基幹河川改修事業に伴う埋蔵文化財調査報告
熊本県教育委員会

『月刊文化財』 特集古代ガラスと考古科学 平成22年11月号

松村 恵司 2010『日本の古代ガラス』

肥塚 隆保 2010『古代ガラスの科学』

肥塚 隆保 田村 朋美 大賀 克彦 2010『材質とその歴史的変遷』

大賀 克彦 2010「日本列島におけるガラスおよびガラス玉生産の成立と展開」

谷澤 亜里 2011「弥生時代後期におけるガラス小玉の流通-北部九州地域を中心に-」九州考古学第86号

西田 泰民 2014『日本海ガラスロード』平成25年越後国域確定1300年記念事業記録集

田村 朋美 2015「引き伸ばし法によるガラス小玉の系譜と伝播」物質文化95

釣針引用・参考文献

川越 哲志1993『弥生時代の鉄器文化』雄山閣出版

渡辺 誠 2000『鉄製釣針の研究』考古資料ソフテックス写真集 第15集 名古屋大学文学部考古学研究室

水田関係引用・参考文献

安楽 勉 高野 晋司 藤田 和裕 田川 肇他編1982『里田原遺跡』田平町文化財調査報告書第1集 田平町教育委員会

藤田 和裕 伴 耕一朗他編1985『里田原遺跡』田平町文化財調査報告書第2集 田平町教育委員会

正林 護 村川 逸朗編1988『里田原遺跡』田平町文化財調査報告書第3集 田平町教育委員会

安楽 勉 高野 晋司 藤田 和裕 田川 肇他編1992『里田原遺跡』田平町文化財調査報告書第5集 田平町教育委員会

久村 貞男編1994『四反田遺跡』平成5年度佐世保市埋蔵文化財発掘調査報告書 佐世保市教育委員会

町田 利幸 馬場 聖美編1996『里田原遺跡』田平町文化財調査報告書第7集 田平町教育委員会

村川 逸朗 藤村 誠編2001『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第23集 長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所

馬場 聖美編2001『里田原遺跡』田平町文化財調査報告書第8集 田平町教育委員会

馬場 聖美編2003『里田原遺跡』田平町文化財調査報告書第9集 田平町教育委員会

渡邊 隆行編2011『塚原遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第97集 日田市教育委員会

報告書抄録

ふりがな	たけまついせき							
書名	竹松遺跡							
副書名	都市計画道路池田沖田線街路改築工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	Ⅱ							
シリーズ名	長崎県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第214集							
編著者名	山梨千晶 片多雅樹 鮫島葵 中川潤次							
編集機関	長崎県教育委員会							
所在地	〒850-8570 長崎県長崎市江戸町2番13号 TEL095-824-1111							
発行年月	西暦2017年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ′ / ″	東経 ° / ′ / ″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たけまついせき 竹松遺跡	ながさきけん 長崎県 おおむらし 大村市 たけまつまち 竹松町 1042番1他	42205	086	32° 57′ 23″	129° 56′ 45″	20140701～ 20150114	2,900	都市計画道 路
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
竹松遺跡	遺物包含地	<ul style="list-style-type: none"> ・縄文 ・弥生 ・中世 ・近世 	弥生住居跡2軒 水田2面(中、近世) 水路2条(中、近世) 畦畔(中、近世) 畝状遺構4条(近世) 溝(弥生、中、近世)	<ul style="list-style-type: none"> ・縄文土器 ・弥生土器 ・土師器 ・瓦質土器 ・貿易陶磁器 ・各時代の石器 ・ガラス小玉181個 ・鉄製釣針(弥生) 		張り出し住居跡か ら181個のガラス小 玉、鉄製釣針が出土 した。		

長崎県文化財調査報告書第 214 集
都市計画道路池田沖田線街路改築工事に伴う埋蔵文化財調査
報告書

竹 松 遺 跡

平成 29 年 3 月発行

発行者 長 崎 県 教 育 委 員 会

〒850-8570 長崎市江戸町 2 番 13 号

TEL 095-824-1111(代表)

印刷所 オムロプリント株式会社

〒856-0016 長崎県大村市原町 84-3

TEL 0957-54-7000 FAX 0957-54-9588